箱庭での学園生活

ロサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
箱庭での学園生活

【Ｎコード】
Ｎ５４６８Ｒ

【作者名】
ロサ

【あらすじ】
箱庭学園に通う「鳴神　礼」はごく普通であるが、何かが異常である。ただ「世界は美しくもつまらないものである」と考えている彼に目をつけて、いろんな人が彼に近寄ってくる。彼は普通？もしくは異常？そんなお話し。

プロロ～グ　始まりの生徒総会（前書き）

始めてみましたためだかボックス！
頑張っていきます！

プロロ～グ　始まりの生徒総会

箱庭学園。
俺こと「鳴神（なるかみ）　礼（れい）」の通っている学園の名前。
広大な敷地面積を誇り、ありとあらゆるスポーツ施設が完備されているなどの贅沢な学校だ。
そして、クラスが特殊。なんと一学年に付き、一組から十三組まで存在しているマンモス校だ。
一から九組までが普通（ノーマル）、十から十二組までは特待（スペシャル）、そして十三組という最後のクラスは異常（アブノーマル）。
ちなみに俺は普通ね。所属一年一組。
こんな説明をしている暇があるから授業中？と今の俺の時間を考えている人ははずれ。
正解は生徒総会中。新しく生徒会長になった人物のための集まりだ。
で、新しく生徒会長になった奴がこう言いやがった。

『世界は平凡か？未来は退屈か？現実は適当か？安心しろ。それでも、生きることは劇的だ！』
『そんなわけで、本日よりこの私が貴様達の生徒会長だ。学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至るまで、悩みごとがあれば迷わず目安箱に投書するがよい』
『２４時間３６５日、私は誰からの相談でも受け付ける！！』

……なんだこれ？
生徒会長「黒神めだか」は全校生徒に啖呵を切った。
と、言うか……、これって挨拶なのか？
普通なら『～するので頑張ります！』じゃないの？俺の常識が間違っているだけなのかもしれない。良く分からないが。

こうして、俺の学園生活はいろんな意味で始まった。

第一箱　友人は苦労人

生徒総会が終わり、クラスに戻るとさっきの生徒会長が噂になっていた。

「あ、礼く～ん！」
「不知火。どうした？」

こいつは「不知火　半袖」。俺の友人の一人だ。

「あの生徒会長について意見を聞いてみたくて」
「・・・すごい馬鹿なのか、ただの天才なのか」
「そりゃそうか～♪」

なにが面白いのだろうか？クルクル回って机に突っ伏している男の席に向かっていく。

「しっかしあのお嬢様、全校生徒を前によくあんな啖呵を切れるもんだよね～」
「人前に立つのが慣れてるんだろ？」
「カッ、ありゃあ人前に立つのが慣れているんじゃねーよ。人の上に立つのに慣れてんだ！」
「善吉、起きてたのか」
「寝付けなくてよ」

こいつは「人吉　善吉」。不知火と同じで俺の友人だ。

「でもすごいよね～、まさかの支持率９８％！」
「ま、俺もあのお嬢様に清き一票を投じたがな」

「あたしも～！」

不知火が俺と同じように頷いてくる。

「そういや不知火、生徒会長の説明が出来るとか言ってなかったか？」

「興味があるんだ。いいよ！教えてあげよう！」

不知火による説明が始まった。善吉も俺と同じで耳を傾けている。

「全国模試では常に上位をキープ！偏差値は常識知らずの９０を記録し！手にした賞状やトロフィーは数知れず！スポーツにおいてもあらゆる記録を総なめ状態！実家は世界経済を担う冗談みたいなお金持ち！」

「善吉、マジか？」

「マジだ」

「すげえな」

ここまでとは思っていなかった。

だが不知火の演説はまだ終わらない。

「全長２６３．０メートル、高度６万フィートをマッハ２で飛行！インテル入ってる！」

「「いや、途中から人類じゃなくなってる」」

まさかそこまで言われるとは、予想外だ。

「で、人吉はどーすんの？」

「あ？」

「お嬢様が当選したって事はとーぜん人吉も生徒会に入るわけ？」
「カッ！なわけねーだろ！これ以上アイツに振り回されてたまるかっての！」

善吉が立ち上がる。そして、人差し指をビシッと俺たちに向けた。
・・・後ろにいる存在に気がつかずに。

「俺は絶対！生徒会には入らない！！」
「「・・・・・・・・・・・・」」
「ん？どうした「まぁそうつれないことを言うものではないぞ善吉よ」ハッ！！」

・・・さようなら善吉。

そして、善吉の悲鳴がクラスに響いた。

「あれ？人吉の奴どこ行った？」
「やぁ日向君」
「アイツなら怖い生徒会長様に連れて行かれたよ」
「・・・そーいやなんか選挙活動も手伝ってたみたいだけど、人吉と例の新会長ってどういう関係何だ？」
「あーーーー、いわゆるひとつの幼なじみって奴ですよ。ま、あたしに言わせりゃただの腐れ縁なんだけどね♪」

・・・善吉の身が心配になってきたなぁ。

「鳴神、人吉の奴どうなると思う？」
「・・・生徒会入りするんじゃない？」
率直な感想はコレだよね、やっぱり。
「そういえばね～礼くん」
「なんだ？不知火」
机の上で寝転がって俺に話しかけてきた。
自由だなおい。
「さっそく目安箱に投書があったみたいだよ」
「へぇ・・・なんか面白そうだな」
「嘘だね～。ホントは興味なんてこれっぽっちもないくせに～♪」
「そんなことはないさ」
そう、興味は無い。
「・・・ま、嘘だけど」
「ふふ、うそつき～♪嘘ついたから私に何かおごれ～」
「パフェでいいか？」
「うん！たのしみだな～！」
・・・食べ切ったら1万円のパフェだ。
いっぱい食べてもらうとしよう。
そして、何故か剣道場のほうからも悲鳴が聞こえてきた。

第二箱　俺は面倒くさがり？その通りだ。

翌日、善吉はボロボロだった。

「何をしたらそこまでなるんだ？」
「しごかれた」
「人吉って頭悪いよね。なんで毎回毎回お嬢様のシゴキに付き合ってるんだよ」
「うるせえ」

・・・ホント、何をしたらここまでボロボロになるんだろ？

「先行くわ」
「礼くんじゃ～ね～！」
「おう、先行っててくれ」

皿を返却し、帰ろうとしたところで誰かが呟く声を聞いた。

『めでたくなってもらわなきゃ困るんだよ』という声を。

で、放課後！
途中の描写はずっと授業の内容なので省かせてもらいます！
Πとか√とかを説明すんのは面倒くさい！
まぁ、特筆することといえば・・・数学教師のカツラが俺の目によって発見されたことだ。

「それはどうでも良くて！・・・剣道場、だったか？」

「あ、本当に興味がわいたんだ、礼くん」
「ああ、行ってみる」
「じゃ～ね～」

行ってみた。
そこには日向君の木刀を奪おうとする善吉の姿があった。

「・・・なんだ？これ」
「鳴神ぃ！てめーもこいつの仲間か！？」
「あ？・・・なるほど、そういうことか」

善吉はここにいる剣道部員のために無刀取りをしてみたところか。
で、そこに俺が入ってきたために俺のほうにその怒りの矛先が向いた、と
・・・面倒だ。こんなことなら興味を持たなければ良かった。

「てめーも邪魔するんだよなぁ！？さっさとくたばっちまえぇ！！」
「礼！！逃げろおおおお！！」

日向君が俺に向かって木刀を振り下ろした。

面倒だ。何もかもが面倒くさい。

・・・ああ、こいつ、スゴクウルサイ。
・・・ツブシタクナル。

「（ゾクッ）あ？」
「ジャマダ」

日向の顔面を俺の拳が捉えた。

「ごふあああああ！！」

そして、カスは剣道場の端まで飛んでいった。

「れ、い・・・？」
「あ？どうした善吉」
「お前、そんなに強かったのか！？」
「お前ほどじゃねえよ」

・・・あ、日向の奴逃げやがった。

「追っかけるか」
「お、おい！礼！？」

あの野郎はこの手で懲らしめるとしよう。

・・・追いついた。追いついたんだけど・・・

「む、お前は鳴神同級生ではないか」

「・・・生徒会長か」

一番出会いたくない人に会ってしまった。

「な、鳴神！助けてくれ」

「ヤダ。お前、俺に切りかかってきたじゃん。本来なら斬り捨て御免のところを拳一つで許してやったんだ」

「何？善吉がやったのではないのか？」

・・・会長の興味を惹いてしまったようだ。

「・・・日向、とりあえず受けとけって」

「丁寧にお断りします！！」

「させるわけが無いだろう？」

「ぎゃあああああああああああ！！」

・・・なんだろう、すこし同情した。

「・・・そして鳴神同級生。感謝する」

「あ？いらねえよ。善吉にでもしてやるんだな。俺のは正当防衛だ」

「それでも、ありがとう」

「・・・おう。じゃあな」

そこで、俺は生徒会長さんと別れた。

で、数日後。

「鳴神同級生！お前も生徒会に入らないか！？」

「丁重にお断りさせていただく！！」

「そうつれないことを言うものではないぞ！！」
「ぜ、善吉！助けろ！！」
「ゴメン、無理」
「この裏切り者おおおおおおおおおおおおおお！！」

・・・色々と波乱万丈だよ。

生徒会長からは毎日入れとラブコールをもらうようになった。

善吉は結局生徒会に入った。

気になる剣道部は、なんと日向が指導を務めるようになった。

めでたしめでたし？

「お前が入ればもっとめでたいぞっ！」
「地の文を読みかつ俺を巻き込むんじゃねえええええええええ！！」

毎日が鬼ごっこの生活が続きそうだ。

第三箱　陸上部の悩み1

・・・鬼ごっこが始まり一週間が経過した。
俺は生徒会室にいる。
簡単な話、捕まった。鬼に。

で、今現在。
目安箱に投書した陸上部の有明先輩から話を聞いている。

「遠慮いらんし構えるな。私は誰の相談でも受け付ける」
「（なんでこいつは先輩に対しても偉そうなんだろう・・・）」
「（なんでこいつは上級生に対しても敬語を使わないんだろう・・・）」
「（なんで黒い服のコは下にジャージなんて着ているんだろう・・・）」

・・・はっ!?いかんいかん!

「それで?相談というのは?」
「あ、はい。このことなの」

机の上に置かれるのはボロボロに切り裂かれたスパイクと、脅迫状の用に書かれている紙。
内容は『陸上部をやめろ』・・・ありきたりだな。

「・・・酷いな」
「私、今度の大会で短距離走の代表に選ばれて、二年生で代表に選ばれるなんて滅多に無いことだからすごく嬉しかったんだけど、三日前にスパイクがこんな風にされて・・・」

「・・・犯人に心当たりは？」
「わかんない」

・・・仕方ない、手を打っておくか。
えっと・・・不知火は・・・お、あった。
こっちの相談はこいつ等に任せておくか。

電話を終えると、有明先輩が泣き叫ぶように訴えていた。

「第一、あたしこんなことをしたかもしれない人たちと一緒に練習なんか出来ないよ！みんな怪しくて！誰も信じられなくて！不安で不安で・・・夜も眠れないんだよ！？」

・・・もういいや。手は打った。
先輩が出て行ったのと同時に俺も出て行こうとする。
あとはこいつ等に任せるか。

「まあ待て鳴神同級生」
「ぐおっぷ！！」

いきなり後ろ襟を捕まれ引っ張られた。

「何しやがる！！」
「これは由々しき問題だ。今日中に犯人を見つけようではないか！！」
「・・・え？なんで俺まで」
「こういうことを一緒に行うことにより連帯感が生まれるだろう？」
「いやいやいや！それはお前だけ！！」

最近突っ込んでいる回数が多い気がするのは間違いなくこいつのせいだ。

「それに、もう犯人の特徴なら分かっている」
「・・・あ？」
「犯人は『陸上部女子』で『陸上暦はそれなりに長く』『短距離走を専門』とし『有明二年生と同種のシューズを愛用』『左きき』で『文車新聞を購読』し『２３区に住んでいる』誰かだ」

・・・なんだその単語の羅列は？

「・・・はぁ？なんだそりゃ？」

善吉も分かっていないようだ。

「ふ、私を甘く見るなよ鳴神同級生！貴様の声など全て聞いておったわ！」

「・・・あ、マジで？」

「どういうことなんだ？礼？」

「生徒会長が言った単語は、犯人を特定する単語だ」

「・・・はぁ！？」

「スパイク、切り口、脅迫状に使っている切抜き・・・これらから全て推理したんだろ？」

「（・・・推理力がありすぎて気持ち悪い！！）」

善吉の気持ちは痛いほど分かる。俺もそこまでは分からなかった。

・・・嘘だけど。

「ちなみに鳴神同級生も分かっていたぞ？」

「なんだと！？」

「・・・なんでわかったんだ？」

「ふっ、電話の内容だ！私の言った単語を電話の相手に全て話していたのは分かっている！」

「「お前は聖徳太子か！？」」

こいつ、よくあの話を聞きながら俺の電話の内容を聞き取れたもんだ。

「他人の努力を否定する行為、頑張る人間の足を引っ張る行為、私

はそういう行為が大嫌いだ！」

・・・アイツの持っている紅茶から泡が出てる。
紅茶の温度が上がっているのか？何それ怖い。

「私は怒っているぞ善吉、鳴神同級生！目安箱の投書に基づき生徒会を執行する！！」

あ、もしかして俺って、また巻き込まれた？

第四箱　陸上部の悩み2

現在グラウンドでございます。

「陸上部所属三年九組諫早先輩。有明先輩と同じ短距離を専門とするアスリートで利き腕は左。同じスパイクを履いているのは見てのとーり！お住まいは２３地区で3年前から文車新聞を購読中ーーーだってさ♪」

「・・・」

「ナイスだ不知火。今度何かおごってやろう」

「礼君さっすが～！焼肉ね♪」

「任せろ」

食べ放題に連れて行ってやるぜ。

「いつも思うんだが、不知火、お前どっからそういうの調べてくんの？」

「あひゃひゃ。人吉が正義側のキャラでいたいならそれは知らないほうがいいね♪」

「むぅ・・・」

どういう理屈ですか不知火さん・・・

「ちなみにあの諫早先輩、有明先輩が代表に選ばれたせいでレギュラー落ちしてます♪」

「！！」

「ま、特定は早かったな」

「ああ。三年が二年に抜かれちゃ屈辱だろうし、犯人はほとんど彼女で間違いねーだろ」

三人で頷く。

「しかしな善吉よ」

「！！」

「どっから出てきたんだお前は」

黒神が善吉の上からひょいと現れた。

「実質的な証拠はまだ何も無いのだ。ほとんどという言葉の意味は絶対ではない。状況証拠だけで他人を悪人と決め付けるのはよくないな」

「・・・上から目線の性善説もいーけどさ、物的証拠なんて集めようがねーだろ。俺ら警察じゃねーんだから」

「（わくわく）」

その通りだ。物的証拠なんてスパイクの指紋ぐらいしかないだろうな。

そこまでは調べられないが。

あと不知火、わくわくするんじゃありません！

「まさか本人に直接聞くわけにもいかねーし・・・ん？」

『ふぅー』
『諫早三年生、貴様が犯人か？』
『！！』
『いや、このスパイクの件なのだが・・・』

・・・何時の間に？
俺の隣でずっこける善吉と、腹を抱え笑い転げている不知火がいた。
俺？俺は壁にもたれてずるずると地面に座り込んだ。
バカだ、バカがいる！

『し、知らない！！』
『・・・？』

あ、

「「逃げた！」」
「いやまあ、そりゃ逃げるだろ・・・ってなんで不知火は礼に肩車

されてんだ!?」
「・・・え?」
「気づいてなかったのかよ!?」

あ、・・・まじで肩車してる。

「ところで善吉(キリッ!)」
「肩の上でしゃべるな。降りろ」
「いや~♪」
「で!?何だよ不知火!?」
「なんで制服の下にジャージ着てんの?ヘンだよ?」
「今聞くことか!?」
「まったくだ・・・おい、あの馬鹿、三年生に追いついてんぞ?」
「マジか!?早く行かねーと!!」

善吉が走り始めた。
・・・帰ろ。

で、不知火のおかげでまたも大食いの店から賞金を稼ぎ、俺は満足しながら翌日学園に向かうと、昨日の諫早先輩が靴箱あたりでうろうろしていた。
・・・邪魔だなぁ。

「何してるんすか？」
「ふえっ！？あ、いやその・・・」
「・・・何すか？そのスニーカー？」
「あ、これはその！」

・・・えっと、もしかして？

「それ、有明先輩のですか？」
「な！何で！？」

図星だったようだ。

「鎌をかけただけなんですけど・・・まぁいや。で？それは？」
「あ、うん・・・。ちょっと、スパイクをボロボロにしちゃって、それで新しいスパイクを入れたんだけど・・・間違って」
「・・・ドジな人だなぁ」
「う、うるさいな！」

ま、仕方ないか。

「それ、有明先輩に渡せばいいんですよね？」
「い、いいの！？お願いしちゃっても・・・？」
「はい。渡しておきますよ」
「あ、ありがとう！！」

そういうと俺にスニーカーを渡して笑顔で廊下を駆けていった。
元気な人だ。ドジだけど。

「・・・あ、先輩こけた」

本当に、ドジな人だな・・・

で、放課後。
生徒会室に行くと、生徒会長が怒っていた。
なんでも、スニーカーを盗んだからだそうだ。
・・・こいつはなんでこんなに頭が良いのに馬鹿なのだろうか？

で、諫早先輩のお願いどおり、スニーカーを有明先輩に渡し、今回の依頼は終了した。

第五箱　犬と呼べるものには限界がある1

こんにちわ、鳴神だ。
俺は今、校舎裏あたりにいる。別に果たし状だとかそういうものが届いたわけではない。善吉に頼まれたからだ。
そして、俺は善吉と不知火というパーティーを組んで目安箱の依頼をこなそうとしている。

こんなことになったわけ、回想を見てくれ。

「・・・子犬探し？」

不知火と飯を食いに行った帰りに善吉に呼び止められ、事情が説明された。
散歩中に迷ってしまったかわいそうな子犬を見つけてくれ、という依頼。
面倒くさそうだ。

「ああ、今回はめだかちゃんが出動できない。で、白羽の矢を立ててみた」
「・・・あの生徒会長が依頼をこなせないのかよ」
「ああ、動物が苦手なんだと」

まぁ面白い理由だな。

「あ、人吉～！あたしそれがいそうな場所知ってるよ？」
「お、頼むぜ不知火！」

・・・と、いうわけだ。

滅茶苦茶簡単だろ？

「でも意外だよね～あの無敵お嬢様にそんな弱点があったなんて」

「まあな。完璧超人みたいに言われてっけど、めだかちゃんにも色々あるんだよ」

「そんなもんかね」

「ここだよ～♪」

「お、着いたか！！」

・・・そこには、犬と形容しがたい動物がいた。

なんだこの威圧感は？

そして信じたくないことに、善吉の持つ犬のイラストと同じ模様だった。

「・・・不知火さん、あれは違うよ。あれは散歩中に飼い主とはぐれちゃった可愛そうな犬とかじゃねーよ（ガクガク）」

「あれはあれだよ不知火、大都会に住んでいる無責任な金持ちが飼いきれなくなって手放したワシントン条約で保護されている何かだって（ガクガク）」

俺と善吉は震えていた。色々とおかしいだろこの動物！

そんな俺たちに尻目もかけず、明るい声で説明する不知火さま。

「やだなぁ二人とも。あれはボルゾイって種類のれっきとした犬だ

って！別名ロシアンウルフハウンド！」
「「ほら！ウルフって入ってんじゃん！！」」
「嘘だろ？俺今からあいつ捕まえるの？マジで？くっそ・・・信じられねぇ。不知火、礼、お前達手伝ってくれるよな？」
「えっ！？あたしが！？なんで！？やだよ！？」
「俺も嫌だ！！」
「何でだよ！？」
「あたしは親友のあんたが酷い目に遭うのを安全圏から眺めたいだけの人間なんだから！！」
「俺はあれに勝てる気がしないから」
「不知火、お前人間じゃねえよ・・・そして礼、諦めないでくれよ・・・！」

善吉、悪い。コレは流石に死亡フラグが立っているようにしか見えないもの。
そんなことを考えていると、いきなり吠えられたかと思うと、なぜか空気がビリビリとして皮膚が少し痛いと感じてしまった。

「・・・だめだってコレ。あいつ完全にキレてんじゃん。『食い散らかすぞ人間風情が！！』みたいな感じだもの」
「いやいや、『お兄ちゃん、こっちにおいでよ！一緒に遊ぼうよ』って言ってると思うよ☆」
「俺も礼の想像どおりだと思います、はい・・・」

あれはやばいね。色々と。

「・・・じゃ、俺帰るわ」
「待て待て待て！！お願い！後生だから待ってください！」
「これは流石に俺の手に余るって・・・」
「人吉～！コレを使いな！」

そういって差し出されるのはソーセージ。
なるほど、餌付けか。

「んーん、そーじゃなくってさ。コレをおなかに仕込んでね？『ぎゃああ！内臓食われたー！・・・と見せかけて実はソーセージでした☆』ってギャグやって欲しいの☆」

俺の予想をはるかに超えていた。

「お前は俺の想像を超えた人間になるな」
「ほめてもソーセージしか出ないよ～☆キャッ／／／」
「そのギャグさあ、やった2秒後に本当に内臓食われるよな？」

善吉、死ぬなよ・・・。

「やってやるぜ！！」

善吉が一歩を踏み出し、犬に駆け寄っていく。

「うおおおおおお！！」
「があああああああああああ！！」
「ぎゃああ！内臓食われたー！・・・と見せかけて実はソーセー・・・ってマジでぎゃあああっ！！」

・・・マジでやりやがった。そして内臓を食われかけていた。

「ああステキ！ステキ！人吉君てば超ステキ☆」
「写メ撮ってやるなよ・・・そして善吉、化けて出るなよ・・・」

そして、善吉の悲鳴が学校に木霊した。

本当に、犬と呼べるかは限度があると思う今日この頃だった。

第六箱　犬と呼べるものには限界がある２（前書き）

・・・そういえば。
彼とであってそろそろ１０年以上たつのかな？
彼はまだ元気かな？
久しぶりに会いに行ってみよう。
うん、それがいい。
こんな学校より、君がいるところのほうが楽しいに決まってるしね！

「『待っててね、礼君！』『大好きな君に僕が会いに行ってあげるからね！』」

ブレザーにスカートという学生服に身を包んだ女生徒が、とても嬉しそうな表情をして、携帯電話を見つめていた。

第六箱　犬と呼べるものには限界がある2

翌日。
不知火と食い放題に向かおうとしていた俺は善吉に呼び止められた。
今度は会長さんを含め捕獲作戦に向かうそうだ。

「悪いな不知火。次の休日に食事ツアーとしようぜ」
「うん！楽しみだな～♪」

と、休日の予定を決めて善吉についていくと、そこには犬のような格好をした人がいた。

「「誰だ！？」」
「当然私だ」
「・・・お前じゃなければ良かったのに」

善吉の言うとおりである。
犬のきぐるみの頭から顔を出した黒神は自信満々な顔をしていた。

「お嬢様、つかぬことをお聞きしますが、なんですかその格好は？」
「ん？みてわからんか？」
「・・・俺は見てわかるけど拝借してどうするのか聞きたいな」
「右に同じく」

これは説明をしてもらわないと分からない。
なんとなく、分かるけどね？

「演劇部から拝借してきた。ターゲットに仲間と思ってもらう作戦だ！動物と触れ合う時はこちらから歩み寄ってやることが大切だか

らな！」

俺と不知火の時が止まった気がした。
こいつやっぱり・・・

「（・・・ねぇ人吉。このお嬢様ってひょっとしてさぁ・・・）」
「（あ、気づいた？うん。一週回って基本バカだよ）」
「（・・・なんだかなぁ）」

残念すぎる天才さんだな。
バカと天才は紙一重というが・・・ここまで体現する奴は珍しい。

ま、そんなこんなで犬のところまで到着し、リベンジとしゃれ込むのだが、今回は会長自らが行くそうだ。

「おい大丈夫かよ？」
「何がだ？」
「動物が苦手なんだろ？ここは善吉に任せておけよ」
「そうだぜめだかちゃん。これくらいは俺が責任を持つって。不知火と二人で」
「・・・・」

おわっ！すっげー嫌そうな顔！！
なんかどす黒いオーラを纏っているぞ！？

「ふんっ！いいから貴様達はそこで見ているがよい！私が何時までも過去に囚われる女ではないことを証明してくれる！」
「？なんでそんなに怒ってんだ？」

「♪」
「・・・」

なかなか速い足取りで犬に近づいていく黒神。
いたって普通の光景・・・あれ？なんだろう？冷や汗が止まらない。
善吉たちの言葉が耳に入らないぐらい緊張状態が続いている気がする。
・・・そんなことはどうでもいい。逃げ出したい。今すぐに。

「あれ？礼くんどうしたの？」
「・・・ああ不知火か。なぜか今すぐ逃げ出したい衝動に駆られてな？」
「大丈夫かよ礼？冷や汗がすごいぜ？」
「・・・ああ、もう大丈夫だ・・・ってうおおおおおお！？」
「どうし・・・うおおおおおおおお！？」
「え・・・と、これどーゆーコトなのかな、人吉君？」

何故俺たちが叫んだか。
それは簡単だ。あの凶暴を体現した犬（ウルフ）が俺たちのところに猛ダッシュで走りこみ、足元にヘッドスライディングをきめてきたからだ。
涙を流し、鼻水をたらし、震えながら。
そりゃおどろくよな？

「だからさ、めだかちゃんが動物を嫌いなんじゃなく、動物がめだかちゃんを嫌いなんだ」
「・・・それは、あいつにしたらきついだろうな」

人吉は語り始めた。

『小学一年の頃、飼育係に任命された黒神めだかではあったが、彼

女が世話しようと小屋を訪れてもウサギは穴倉から出てこようとせず。彼女が餌をやろうと池に近づいても鯉は水中深く潜ったまま出てこなかった。遠足で動物園に行ったときに、猛獣も含めた一匹の動物でさえ彼女の目の前に姿を現さなかったことは、今でも同期の語り草である』

・・・なんていう悲しさ。
動物には人格は通用しなかったのか・・・。

まぁ、そのあと、善吉が依頼主にその犬を送り届け、依頼は無事に完了したようだった。
黒神めだかは生徒会室で犬のきぐるみを着て落ち込んでいるそうだ。
・・・やれやれ。

第六箱　犬と呼べるものには限界がある２（後書き）

どうも、ロサです。
ここで、めだかボックスのほうでお知らせが。
実は・・・球磨川を女性キャラとして作りそうです。
きっかけは・・・『球磨川を女性キャラにしたら面白そうだなぁ・・・』という
考えが頭をよぎったからです。
と、いうわけでアンケートをとりたいと思います。
期限は・・・３月２６日までにします。

？　球磨川を男のまま登場させる。

？　球磨川を女のまま登場させる。

のどちらかでコメントをよろしくお願いします。
感想も待ってますからね～！

第七箱　下克上歓迎会！！

はぁ、どうも。鳴神　礼です。
齢は今年で１６です。

なんとなく、「鏡音レンの暴走」という曲にはまってしまい、この挨拶にしようと思いました。
でも暴走したい年頃なのは本当。

まぁ、あの子犬？探しが終わり、鬼ごっこ生活が続いてるわけですよ。
ええ、もう学園中を走りっぱなしです。

気が休まるのは昼食時間に善吉と不知火で雑談するときぐらいしかないと思うほど。

「疲れ気味だね～礼くん♪」
「まぁな。てか不知火、ラーメンは飲み物じゃないぞ」

ラーメンに顔を突っ込んで飲む友人に忠告する。

「あたしは一日に五リットルのラーメンを飲むって決めてるの♪」
「俺は一日に五リットルの汗をかくっていうルールがある」
「お前等のルールは色々突っ込みどころ満載だな。なぁ日向」
「・・・まぁな。てかまぁ、それぐらいしないとあの生徒会長（バケモン）に付き合いきれないんじゃないか？」
「なるほど、それはいい意見だ。さすが日向君」
「・・でも、そろそろやめといた方がいいかもな。善吉お前、噂になってるぜ。生徒会の『部活荒らし』だとよ。入る気も無いくせに

とか」
「・・・」

なぜか日向をじーっと見つめる善吉。
俺はというと、さっき買ったコッペパンを食っている。
売れ残りにしてはおいしいんだよな、これ。

「そういえば礼くんは部活に入らないよね？どうして？」

善吉が放った言葉により顔を赤らめている日向を放っておいて、俺に質問する不知火。

「あ、俺も気になってた」
「実は俺も」

不知火の言葉により復活する二人。

「・・・どうしてって言われてもな。こう『何がしたい？』って聞かれると『何も無い』って答えてしまうんだよ。それに」
「それに？」
「ここの部活動が多すぎて、何をするのかが迷う」
「なるほどね～♪つまり目標が定められないと」
「そういうことだ。まぁ、自分で作り上げるのも手なのだが」
「だが？」
「・・・生徒会長様との鬼ごっこが白熱してきて、暇が無い」
「「「・・・ああ。そりゃ無理だ（ね）（な）」」」

納得する三人。

「なら、柔道部にはいらへん？」

ちょうど会話の流れを読んで後ろから女子生徒が声をかけてきた。

「貴女は？」

「ウチは三年の鍋島猫美っていうねんけど、知らへん？」

「ああ、特待生（チームトクタイ）の。お噂はかねがね」

「いやぁ、照れるなぁ。でな？やりたいことが見つからへんのやったら、体験でもええから来てくれへんかな？」

「・・・いや、多分すぐ行くことになりますよ。な？不知火」

「そうだね～♪明日ぐらいじゃないかな？」

「・・・君、なかなか鋭いね。もっと欲しくなったわ。明日、たのしみにしとるね。そこの『部活荒らし』君も、ね」

そういうと席を立ち、帰っていく鍋島先輩。

「・・・『部活荒らし』か。そのニックネームじゃ少し弱いな」

すると、入れ違いになるようにいかつい男が現れた。

「名前を売りたいのかい？人吉クン」

「鹿屋・・・先輩」

「ちょいと面貸してくれや人吉クン。相談に乗ってほしいんだよ。なぁーに、人吉クンにとっても悪い話じゃねーと思うぜ？」

そういうと、二人はどこかへ行ってしまった。

・・・怖そうな人だったな。

「まぁいいや。俺もクラスに帰るわ」

「いいのかよ？人吉放っておいて」

「いいっていいって。あれぐらい対処できるだろうから。じゃあね

～」

さってと、クラスに帰って数学教師のカツラを観察するとしよう。

「ちくしょう。あの教師、俺が頭部にばかり注目するからって問題をずっと出しやがって・・・」

「それを答えきったお前もすごいけどな」

授業終了後、俺と日向は雑談を繰り広げていた。
不知火は用事があるようでどっか行ってしまい、一人で暇なのだ。

「そういや聞いたか？なんでも黒神めだか襲撃計画ってのがあるらしいぜ？」

「・・・そりゃ御愁傷様だな。計画を立てた奴が」

「俺もそう思うけど、そこに人吉が加わるみたいなんだよ」

「・・・へぇ、おもしろそうじゃん」

「面白いか・・・？それで、お前は今回動くのか？」

「・・・それについてだが、実は生徒会長様から招待状をいただいてな？」

「・・・は？」

日向が頭に疑問符を浮かべた。

そりゃそうか。

「なんでも、『本日、私に下克上を仕掛けてくる生徒がいるそうなので歓迎会を開こうと思う。良ければ来てくれないか？』だと」

「・・・下克上歓迎ってことか？」

「多分」

・・・わけわからん。

日向も一緒にため息ついてるし。

「あの生徒会長はバカなのか？」

「一周回って基本バカなんだと。ま、ご苦労なこった」

「で？行くのか？そのパーティーに」

「ああ。行く。ただ飯ただ飯」

「なるほどな。お前もずいぶん悪い奴だ」

日向に言われたくはない。

「んじゃ、そろそろ開催時間なので行ってくるよ」

「また明日な。良ければ料理の感想を教えてくれ」

「おっけ～」

そういって別れる俺たち。

ま、楽しければいいんじゃない？

「・・・おお！よく来てくれたぞ！鳴神同級生！！」
「またえらくこったものを作ったな、おい」

北京ダック？にケーキ。で『子供のシャンパン』などなど。
そして目立つのは『下克上歓迎！！』と書かれている看板。
・・・ホームパーティみたいになってんぞ？

「だいぶ人数がいるみたいなのでな？腕を振るってみたのだ。だが、誰も来なかった」
「・・・あら、まぁ」

そいつは残念だったな。

「善吉はどうした？」
「まだ来ていないのだ。まぁ、私に挑んでくるのだから今回は善吉の出番は無いのだがな」
「・・・ふ～ん」

善吉の奴、絶対一人で下克上に来る奴潰してるんだろうな。
えっと・・・もうすぐで5時半か。
そろそろ電話するか・・・

「む？誰にかけているのだ？鳴神同級生」
「ああ、善吉に。このままだと料理がもったいないだろ？」

「・・・確かに。あと三十分でここを閉めなくてはならないからな。延長もできると思うが」
「ま、下克上というよりは、パーティーになりそうだな」
「ううむ・・・ま、まぁ今回はそれでもよいとするか」

「おお～い、きたぞ～！」

生徒会室の扉が開いて、善吉が入ってくる。

「よく来たな善吉！ではパーティーを始めるとするか！！」
「下克上歓迎？・・・はぁ、めだかちゃん」
「いいじゃないか。善吉！時間が無いんだし始めようぜ？」
「・・・ああ。食うぞーーーーーー！」

そして、黒神めだか主催によるパーティーが始まった。

「シャンパン！？いいのかよ！？」
「子供用と書いてあるだろう？」
「シャンパンファイトするか？」
「なんだそれは？」
「シャンパンを相手にかけあうんだよ。野球とかの優勝時にやるんだ」
「楽しそうだな！やりたいぞ！！」
「だめだ！また今度！！」
「善吉したいぞ～！」
「そ、そんな目で見つめても駄目だからな！！」
「・・・じゃぁ、鳴神同級生！お前の家でやってみたいぞ！！」

「そんな無茶言うなよ・・・なぁ礼？」
「ん？別にいいぜ？今から家に来るか？」
「いいのかよっ！？」
「では行くぞ！すぐ行くぞ！」

俺の家でパーティーをすることになった。
次の話に続く。

第八箱　下克上歓迎会⇒ホームパーティ

帰宅。ただし友達を連れて。
家、というか理事長がくれたアパートの一室に到着する。

「・・・鳴神同級生、ご両親は？」
「ああ、俺一人暮らし。理事長がこの学園に入学を薦めてきた時の見返りにこの部屋をくれた」
「・・・それはまたずいぶんといい見返りだな」
「だよな。太っ腹だな」

まぁ、親は俺にその提案が出された時、とてもいい笑顔だったがな。

「じゃ、入ってくれ」
「「おじゃまします」」

部屋の中は、ソファーとテレビ、テーブルとありきたりの物が置いてあり、キッチンもごく普通。
ベランダがあり、そこに洗濯物が干せるようになっている。

「・・・普通だな」
「当たり前だろ？ほら、パーティーしようぜ」
「シャンパンファイトだな！！」
「いや、先に食べるぞ。万が一シャンパンで濡れたら味が落ちる」
「・・・仕方ないな。よし、食べよう！！」
「飲み物は・・・あったあった。炭酸でいいか？」
「「ああ」」

さて、冷蔵庫から取り出して・・・コップは三人分あるな。

「む？鳴神同級生」
「どうした？」
「この懐中時計壊れているぞ」

そういうと、キッチンまで持ってきてくれる黒神。
その手に持っているものは、俺の一番大切なものだった。

「っ！・・・いや、それでいいんだ。その時間で、正しい」
「・・・？五時半過ぎで止まっているのがいいのか？」
「ああ。・・・それでいい。それに、その時間で針が固まってしまって、動かなくなってるんだ」

そう、その時間でいい。針はその時間で固定されているのだから。

「・・・何か大切な思いいれがあるものみたいだな。すまなかった」
「いや、それは当然の反応だ。謝る必要は無い。それに、大切なものをそこにおきっぱなしにしていた俺が悪い」
「・・・ありがとう」

頭を下げる黒神。
別にいいのに。

「暗い雰囲気で行くなよ？パーティーとシャンパンファイトがあるんだからな」
「・・・ああ！そうだな！」

少し戸惑っているようだったが、すぐに理解し、笑顔になる。

「お、来た来た。じゃ、始めようぜ！」

「ああ。じゃ、パーティー開催だ」
「「おおーーー!!」」

・・・美味すぎる。
黒神は確かに万能だと聞いた。だが・・・このケーキと北京ダックはマジで美味い。
料理店で買ってきたといわれても不思議じゃないくらい美味い。

「どうやって作ったんだ?」
「ああ、店で作っているところを見てな?見よう見まねで作ったのだ」
「・・・ありえねぇ」

見ただけでここまで作れるのはおかしいだろう。
まぁ、この生徒会長さまは平気でそれをやってのけるみたいだがな。

それはそれでうらやましいものだ。
そんなこんなで、美味いものを食い終わった俺たち。

「・・・うむ。これで食べ終わったな!では・・・!」
「お待ちかねのシャンパンファイトだ」

皿を流しに入れ、部屋中にビニールシートを敷く。
で、二人に水中ゴーグルを渡し、装着させる。

「じゃ、スタートだ！黒神！シャンパンの栓を開けて善吉を狙え！」
「わかった！こうかっ！？（プッシャーーーーーーー！！）おお！！」
「シャンパンの勢い半端ねー！！ぬおおお！」
「こんな感じだ。で、シャンパンを互いにかけあう！！（プシャーーーーーー！！）」
「きゃあっ！！・・・フフっ、これは楽しいな！それ！！」
「うわっ！こっちにきた！！」
「俺も参戦だ！食らえ礼！！」
「二対一はひきょっ！あはははは！！」
「食らえめだかちゃん！！」
「なんの！！」

その日、俺達はとても楽しい放課後を過ごした。
生徒会執行部も、いい気分転換が出来たと満足げに帰っていった。

「・・・片付けるのが少し大変だ」

シャンパン（子供用）で濡れたビニールシートを回収、水で洗いベランダに干す。
そして、テレビをつけた。
ニュース番組が始まり、目に付いたのが・・・

「・・・黒神グループか。生徒会長の実家もすげぇな」

あいつのお家事情だった。

まぁ、不知火も語っていたが生徒会長（アイツ）は信じられないぐらいのお金持ちだったな。

「目立つニュースはこれぐらい・・・と。さて、風呂に入って明日の予習しねえと」

楽しい一日が終わった。

第九箱　柔道部にレッツゴー！

「鳴神同級生、昨日はありがとう。おかげで心身ともに疲れを取ることが出来た」
「それは何よりだ。で？俺はなんで十三組にいるんだ？」
「本日の午後からの授業は自習と聞いたのでな？私も暇なのだ。なので、遊び相手になってもらおうかと」
「・・・まぁ、十三組は基本登校しなくても良いからな。いいぜ？放課後まで付き合ってやるよ。で？何するんだ？」
「うむ。これなどどうだろう？」

そういって、机から人生ゲームを取り出し・・・ってちょっと待て！

「なんで人生ゲームが机の中に入ってるんだよ！？」
「こういうときのために用意していたのだ」
「用意周到だなおい。・・・でも人生ゲームなら善吉も呼んだほうが良いんじゃないか？」
「そうだな。鳴神同級生、頼む」
「お前等幼なじみじゃないのか？」
「私は携帯電話を持っていないのだ」
「・・・なるほど。わかったよ。じゃ、善吉にメールっと・・・」

・・・っと。これで良いかな？

「送信！」

送信してから４０秒後・・・

「礼ー！来たぞーー！！」

「よく来たな善吉！では始めるぞ！」
「善吉も適当に椅子持って来い」
「おうよ！」

人生ゲームスタート。

「ふむ、私がまた一位か」
「・・・黒神強すぎ」
「このゲームは現実とリンクしてんのか？」
「すげぇ、めだかちゃん、また持ち金が五十億超えてる」
「恐ろしき黄金律」

三回やって黒神は全部五十億越えという偉業を成し遂げた。

こいつは天性の資質か？

「お、でももういい時間じゃないか？」
「うむ、そうだな。生徒会室に向かう前に目安箱を見てこなければ」

そう言うと教室からダッシュで出て行った黒神。
・・・あ、俺確か柔道部に行かないと。

「善吉、俺柔道部に行くから」
「あ、昨日の鍋島先輩か。頑張ってこいよ」
「おう！」

「・・・でかいな～」
「む？鳴神同級生ではないか」
「へっ？なんでいるんだ？黒神、善吉」
「目安箱の投書でな」

ああ、それか。
昨日のことが印象に強すぎて忘れてた。
柔道部に入ると、鍋島先輩が待っていた。

「やーやーようこそいらっしゃいませ！ウチが差出人！柔道部部長の鍋島猫美でっす！本日はどーぞよろしく」
「生徒会長の黒神めだかだ。今日は出来る限りのことをさせてもらうぞ」
「うんうん。頼りにしてるで黒神ちゃん！」
・・・とりあえず、端に行っておこう。
「あ、鳴神君も来てくれたんや！ほんまありがとなー！」
「あ、いえいえ」
「あ、そやそや。その前に。なんや黒神ちゃんに挨拶したいってゆー奴がおんねん。おーい阿久根クン！」
「阿久根・・・？」
聞いたことがあるよーな、無いよーな。
すると奥の扉からロン毛のイケメンさんが現れた。
「ご無沙汰しておりますめだかさん。生徒会立ち上げの大事な時にお気をわずらわさせてはいけないと控えておりましたが、ずっとあなたに再会できる日を心待ちにしておりました」
・・・話が長くなりそうだ。
てかここまで行くのは洗脳か？
「ま、いいか。なんか部長選びみたいだし、俺端っこに行ってよー」
「逃がさんでー鳴神クン！」
「もわっぷ！！」
襟首をつかまれた。
しかもすごい勢いで引っ張られた。

で、俺は今ヘッドロックをされている状態である。

「何するんですかっ？」

「まぁ見ててみ。彼女今からウチの部の値打ちをするみたいやから」

「・・・なぜに天地魔闘の構え？」

「それはわからんけど、ナメられたもんやねー。我が栄光の柔道部も！」

「無理からぬ話ですよ。いくら専門分野って言ってもめだかさんと勝負になるのは俺かアンタくらいでしょう。後は精精ーーー」

・・・阿久根先輩何時の間に。

そして善吉は少し沈んでいる気がする。気分が。

あ、副部長って言ってた人がやられた。

「『あとは精精ーーー』なんやって？」

「・・・誰でもありませんよ。しかしさすがだなめだかさんは！中学生の頃より更に輝きを増している！」

「・・・阿久根先輩はこんなキャラなのか」

一応覚えておこう。

そうして脳内メモ中に善吉と鍋島先輩が話している。

開放された俺は、黒神が柔道部のメンバーを投げ飛ばしているのを見つめていた。

「君は・・・鳴神クンだったね」

「あ、はい」

「今日はどうしてここに？」

「鍋島先輩に体験入部してみないかと誘われまして・・・っと。そろそろ止めに入るか」

「あ、おい！危ないぞ！！」

「だいじょうぶですから～」

やさしいねぇ阿久根先輩。思った以上にいい人じゃないか。

・・・黒神が柔道部員を投げ飛ばしているところに行き、背後から肩に手を置いた。

すると、なぜか視界が上下逆になる。

「・・・・あ？」

「あ・・・・すまん」

ドオンといういい音とともに見える柔道部の天井。

そして背中に走る痛み・・・・って。

「いったーーーーーー！！」

「す、すまん！柔道部員と間違えてしまった！！」

まぁ、一応受身は取ったから大丈夫なんだけど、叩きつけられたときの衝撃が凄い。

黒神に起こしてもらうと、なぜか視界の隅で阿久根先輩と善吉がいがみ合っていた。

あ、猫島先輩が仲裁にはいったな。

「ここは柔道場だしどーや？ここは柔道で決着つけるゆーんは？阿久根クンが勝ったら生徒会に入り人吉クンが負けたら柔道部に入ってウチの柔道の後継者になる」

「鍋島先輩アンタひょっとして最初からそのつもりで投票したんですか？」

「うん！人吉クンみたいながんばり屋さんがウチはめっちゃ好きなんよ」

・・・おお、善吉にも春が訪れたか。
そう思った矢先、いつの間にか善吉が胴着を着ていて阿久根と向かい合っている
俺はというと、黒神によって柔道場の端のところまで連れてこられていた。
・・・本当に何時の間に？

「ルールは柔道部恒例の阿久根方式な！無制限十本勝負対無制限一本勝負！阿久根クンに十本取られるまでに一本でも取れたらジブンの勝ちや人吉クン！」
「フン、尻尾を巻いて逃げなかったことだけは誉めてやろう。ああ、でも虫には尻尾はなかったか」
「なんですか、逃げるってアリだったんですか？先に言ってくださいよそういうことは」
「逃げる？そんなものアリなわけがなかろうが」

たかがちょっと柔道をかじったところで、特待生（スペシャル）に勝てるわけ無いだろうに。
仕組まれてるとしか思えねー・・・。
そして黒神の意見を絶対にかんがえているんだろうな。この先輩。

「誰からの相談でも誰からの挑戦でも受け付ける。如何な内容でも如何な条件でも！如何な困難でも如何な理不尽でも享受する！それが箱庭学園生徒会執行部だ！！人吉善吉、私は貴様に負けるなとは言わん。しかし逃げることは許さんぞ」

・・・ご愁傷様善吉。
ま、奮闘を期待しよう。
あ、一本取られた。

「さっすが阿久根クン、綺麗な一本やなー。後の先取らせたら右に出るモンはおらんわ。ホンマ天才的で・・・・・つまらん柔道や」
「・・・・・どうやらずいぶんと天才がお嫌いなようだな鍋島三年生」
「うん嫌いやで、大嫌いや。黒神ちゃんも阿久根クンのこともな。才能を努力で踏みにじりたぁてウチは柔道をやっとんのよ」
「なるほどさすが柔道界の反則王は言うことが違う」
「感心するところかよ・・・」

この先輩の言うことに感心する要素が無かったのは俺だけなのか？

「ま、黒神ちゃん天才は天才同士、凡人は凡人同士でつもるやないか。ウチの柔道に阿久根クンはいらん。ジブンにやるわ。そんかし人吉クンくれや。取り替えっこしよーで」
「ふむ、ならば安心しろ鍋島三年生、天才などいない」
「・・・は？」

こんな会話をしているうちに、九本目が取られた。
後が無いぞ、善吉。

「善吉！」

おっ？黒神じきじきの渇か？

「いつ如何なる場合においても決して私は貴様に負けるなとは言わん。だから勝って！！」

最後のセリフに、何故か『きゃるーん』という擬音が、聞こえた気がした。

「貴様がいなくなったら私はすごく嫌だぞ。困るぞ。泣いちゃうぞ！」

・・・これはある意味力が抜けるな。あと黒神、キャラが違うぞ。

善吉が前に倒れそうになるがその勢いを利用して阿久根の両足を持ち上げて倒した。

双手刈りっだったか？

すると阿久根は横を向き、渋々負けを認めた。

「信じられへん。阿久根クンにホンマに勝ってしもた。いやそれより双手刈りならウチもよう使うけど人吉クンはあんなにも綺麗に・・・」

「綺麗も汚いもないし天才も凡才もいない。いるのはただの懸命な人間だけだ、私も貴様も何も変わらんよ」

・・・これが、黒神めだかのカリスマ性か。

確かに人を惹きつける魅力はありそうだな。

「じゃぁ、鳴神クンくれへん？」

「は？」

「それは駄目です。鳴神同級生は生徒会に入りますから」

「ほんなら、また阿久根君と彼を戦わせて、っていうのはどうや？」

「・・・いいでしょう」

勝手に決めんな。

全く、なんで俺がこんな面倒ごとに巻き込まれているんだ。

しかも特待生だぞ？

勝てないって。

「じゃ、はじめるでー」
「・・・流されてる俺、かっこ悪い」
「諦めるんだな。じゃ、いつでもおいで」
「・・・はぁ、じゃ行きます」

とりあえず、つかみにかかる。
まぁ、わかってた通り、一瞬で視界が上下逆になったが。
綺麗に畳に投げ落とされる。しかも気遣って受身を取りやすいように。

「・・・痛いなぁ・・・もう」
「君、やる気が無いのか？」
「商品扱いですから。ちなみに黒神の激励でも俺はやる気が出ないと思いますよ」

・・・これも鍋島先輩の考えなのだろうか？
なら効果は抜群だな。俺はもうやる気が出ないよ。

「・・・やる気が無いというのはつまらないな。あと九本、すぐに取ってやろう」
「・・・はぁ、めんどうだ」

ニ、三、四・・・・六、七、八、九。
投げられた。なかなかいい音を奏でて。

「・・・はぁ、だめだ。やる気はやっぱり出ない」
「なんで・・・息が・・・切れてないんだ・・・君は・・・！」

「そりゃ、投げられるだけですもん。受身さえ考えていれば痛くても体力はほとんど減りませんから」

さて・・・どうするかな・・・？

「礼！ここで男を見せやがれ！！じゃねぇと・・・不知火に今日のこと報告すんぞ！！」

「……やる気でたーーーーーーー！」

それはまずい。本当にまずい。

アイツのことだ。言いふらさないにしろ無茶な要求はしてくるだろう。

満漢全席を二日間とか・・・昼飯おごれだとか・・・

一瞬で金が消えてしまう！！

「・・・む、では・・・行くぞ！！」

いきなりすぎてついていけない阿久根先輩は戸惑ったように突っ込んでくる。

さて、猛進してくる勢いをうまく利用する技は・・・。

思考している間に、襟をつかまれる。

「これだな」

「な・・・にぃ！？」

相手を前に崩し、真後ろに身を捨てつつ、片足の裏を相手の腿の付け根に当てて、押し上げるように頭越しに投げる。

簡単に言えば巴投げである。

「い、一本！！」

「と、巴投げて・・・」
「・・・負けた」

ショックを受けている阿久根先輩は放っておいて・・・。

「はぁ・・・なんか疲れた」
「お疲れだったな、鳴神同級生」
「おう・・・サンキュー。じゃ、俺帰るわ」
「また明日会おう」

そういって、柔道着から制服に着替え、帰宅した。
投げられ続けたために、腰が筋肉痛になったのは言うまでも無い。

で、翌日！

「礼、ご苦労さん」
「あひゃひゃ！礼君も馬鹿になってきたのかな？」
「安心しろ。まだまだ大丈夫だ」

俺は巻き込まれているだけだから。
生徒会室のドアの前に到着。うん、何時見ても堅苦しい。

「諦めている、か。そうだといいけどね」
「何がだよ？」
「開けるぞ～」

ドアを開けた。すると、目に映ったのは。
練り上げられた肉体、服を脱ぎ捨て生まれたときの姿に後一歩（つまりパンツのみ着用）の状態で華やかなオーラを醸し出している阿久根先輩の姿があった。
その光景に、善吉はずっこけ不知火は顔を真っ赤にして黄色い声を出している。
俺？俺は……、その、なんだ。教えない。

「おや、鳴神君。腰のほうは大丈夫か？」
「な、なん、なんとか」
「そうか。本気で投げていたので心配だったのだが、杞憂で何よりだよ」
「それより！どうしてアンタがここにいるんだ！」
「君を追い出すのは諦めたが、俺はめだかさんを諦めたわけではないのでな。それに鍋島先輩からも三行半を突きつけられたのでね」

黒神、そして俺の体験入部の後、阿久根先輩は退部（クビ）を鍋島先輩に勧告されたそうだ。
黒神に最初に挑んだ副部長がこれからの柔道部を仕切る、部長より強いプリンスが部にいると、士気にかかわるかもしれないという鍋島先輩のご判断だ。
それでもまあ、阿久根先輩は『優秀』であって『天才』までは行かない。今の自分は努力によって出来ていると自分自身にそう言い聞かせていたみたいだ。ここら辺は、黒神と同じ考え方だな。
そして、鍋島先輩から阿久根先輩への言葉はというと。
『そなら、その努力と根性で惚れた女一人ものにしてみんかい！』
とのことだ。
天才ではないと主張するなら、約束を破ってでも惚れた女性を守ってみせる根性を持たんかい、という解釈でかまわないのかな？ここら辺は俺には良く分からなかった。

鍋島先輩の優しさ、と言うべきかはわからないが。少なくとも、激励であることは間違いではない。

「と、いうことで。本日付で生徒会執行部『書記』に任命されたニ年十一組、阿久根高貴（あくねこうき）だ。よろしくお願いします、先輩！」

……うん、頑張れよ。善吉。

「鳴神同級生も入れば、大分楽なのだがな」

「……生徒会長、いきなり背後に立つな」

箱庭学園生徒会執行部、現在三名。

俺は入る気がないのを覚えておいてくれ。

第十箱　部活対抗水中運動会１

あらすじ
柔道部のプリンスに九本も投げられたせいで腰に筋肉痛が走っていたよ。

うん、あらすじじゃないね、これ。後日談だよ。

まあ・・・筋肉痛も治り、快適に昼寝していた俺にダイビングをして起こす不知火。

「おい不知火！ダイビングはさすがに痛いぞ！！」
「だって肩をつついてもおきないんだも～ん♪」
「ご愁傷様、礼。それより、トビウオってなんだよ？教えろよ不知火」
「・・・・（ニヤッ）」

不知火が、肩に手を置かれた瞬間に振り払い、すごい目で善吉を睨む。

「教えてください、だろ？」
「・・・教えてください！」
「うむ、よかろう」

その後、不知火先生による競泳部のトビウオ三人について語られた。
俺は半分寝ぼけていたために聞いていない。

・・・で、放課後。
何も起きないことを祈っていたら、やっぱり生徒会長が乗り込んできた。

「さぁ行くぞ！鳴神同級生！！」
「今度は何だよ・・・」
「相談があるのだ」
「・・・お前が？俺に？」
「ああ。頼むよ」

そういうと俺を立たせ、生徒会室に連れて行った。

「で？相談って言うのは？」
「ああ。善吉から日曜日に水中運動会があるのは聞いているな？」
「確かにそれは聞いた」
「そこでの優勝商品が、部費の増加なのだが・・・私が私財を投じて面白くするというのはどう思う？」
「ふむ・・・まぁたしかに面白いが。そこにルールを加えよう」
「新しいルールか？どんなものだ？」
「生徒会執行部も参加し、『私たちよりポイントが上の部活動には私財をーーー』みたいな？」
「なるほど・・・それは確かに面白そうだ！助かったよ鳴神同級生」
「ま、帰宅部の俺にはあまり関係がないがな」
「何を言う。貴様には解説を頼みたい」
「・・・へ？俺が解説者？」
「ああ。よろしく頼むぞ」

「と、言うわけです」
「ご苦労様です鳴神クン。回想が終わったところで自己紹介をさせていただきます！放送部部長代理の阿蘇短冊と」
「一年一組の普通クラス、帰宅部の鳴神礼です」
「そして、この世に知らぬことなし！一文字流不知火ちゃんでーす！」
「「「お願いします」」」

放送室のガラス越しに、善吉の怒り声が聞こえてきたのは気のせいだろう。

「では第一種目、水中玉入れですが・・・どう思います？お二人とも」
「俺は・・・まぁ、小学生がやるような競技ですから。得意不得意はないと思うけどね」
「ま、強いてあげるならバスケ部だよね、礼君」
「どうしてバスケ部なんですか？」
「結局はカゴに玉を入れる競技だからだよ、ね？礼君」
「ああ。そういう精度であらわすなら、バスケ部がダントツだろうな」

不知火の奴、えらく真面目に解説するな。

ま、こいつは途中で面白い方向に競技を変えそうだが。

「時間です。位置について・・・よおい・・・ドン！！」

俺の掛け声とともに皆がいっせいに玉を拾いに行く。

さて・・・寝るか。

「寝ないでください！！」

「え～・・・不知火いたら事足りるだろ？」

「人吉のところになったら起こすね～♪」

「頼んだ」

さて・・・寝るか。

「いらっしゃい。礼君」
「・・・なんだ、お前か」

夢。
俺のいる場所はただの平凡な教室。
そこに、たった一人、俺の知り合いがいる。
そいつはいつも俺の座っている机に座り、俺を至近距離で見ていた。

「元気にしてるみたいだね」
「お前のおかげでな。ゆっくり過ごしてるさ」
「ククッ、そう。それは何よりだ。で？今日はどうしたんだい？」
「いや、寝たらここにいた」
「そう。相変わらずクールだね。僕に会いたくなったとかじゃないんだもの」
「・・・お前が言うか？」

俺以上にクールな奴に言われてしまった。

「僕は君の事をこんなにも夢で会うことを楽しみにしてるのに」
「まぁ待て、にじり寄るな。隅っこまで追い詰めようとするんじゃない」

席から立ち上がり、距離をとろうとするが、
魅力的すぎる顔が近づいてくる。
とてもSな笑みを浮かべて。

「ふふ、君は相変わらず押しに弱いね」
「お前のせいでな！」
「君ぐらいなんだよ？僕をまだ覚えているのは」
「忘れるかよ、俺の親友を」
「そう？それなら良かった。そろそろお目覚めみたいだね。また夜に会おう」

そう言い、手を振る親友の顔が遠のいていき、現実の不知火の声が聞こえた。

「礼くーん。善吉が走るよー」
「・・・おう」

起き上がる。
で、プールのほうを見ると・・・

善吉と阿久根先輩がいがみ合いながら走っていた。

「きゃはははは！！」
「あっはははははは！！」
「これは醜い絵だーーー！」

目覚めの一発とはこのことを指す言葉だと俺は言ってやりたかったね！

あいつら面白すぎ！一緒に息を合わせて走る競技でいがみ合うとか・・・！

だめだ！笑いすぎて腹が痛い！

・・・ん？

「競泳部の奴ら遅いな」

「仕方ないよ礼君。さすがのオールラウンダの屋久島先輩でも、種子島先輩に合わせられるのは二十五メートルがやっとだろうしね♪」

「？」

「うわ・・・一緒に泳いでるよ」

「なっ！？ほ、ほんとです！競泳部！危険とかそういうレベルじゃありません！！足をつないだまま一緒に泳いでます！」

そして、種子島先輩の説明に入る不知火。

男子水泳界、事実上最速のスイマーである種子島先輩。それにあわせられる屋久島先輩。

・・・この学園はなんでもありか。

「競泳部！全チームをごぼう抜きにし、見事一着でゴールイン！！」

「はやいな～おい。不知火、俺にもお菓子くれないか？」

「いいよ～！はい！ドーナッツ！」

「サンキュー」

競技中の生徒達に比べ、のほほんとする俺たちだった。

で、次の種目！
『ウナギつかみ取り』というよくわからん種目だ。
結果は競泳部の十三ポイント。
で、生徒会長様はスキル『動物よけ』が発動し０ポイント。
ウナギにまで避けられるとはな。

で、次が最終種目なわけだが・・・
「俺たちが決めるのか？」
「はい。お願いします」
「礼くん。何がいい？あたしはもう考えついてるけどね～」
「騎馬戦でいいだろ。ルールは・・・不知火の考えているとおりだ」
「やっぱり～？じゃ、自分よりも上位の部からハチマキを取ったらポイントが増えるでいいよね？」
「ああ。クイズ番組的救済措置最高！」
まぁ、本当の目的は違うがな。
おおっと、もうすぐ時間だ。
「じゃ、阿蘇先輩。種目を」
「はい！次の種目は・・・『水中騎馬戦』です！！」
さぁ、楽しくなりそうだ。

第十一箱　部活対抗水中運動会2

「では不知火さん、鳴神さん、ルール説明をお願いします！！」
「了解。構えずに聞いてくれ。ただの騎馬戦だ。ハチマキを奪われたり、騎馬が崩れて水中に落ちたら失格」
「たっだ～し～！今のままじゃ下位チームに望みがなさすぎなので」
「「クイズ的救済措置を考えました！」」

俺と不知火の声がかさなった。

「集めたハチマキの数ではなく質で獲得ポイントを決定！上位チームのハチマキほどポイントを高く設定します！！」

不知火の言葉にざわめく皆。

「具体的に言うと、現在一位のチームのハチマキは１６ポイント。それから二位は１５ポイントと下げていき、最下位チームのハチマキは１ポイントだ」
「なるほど。つまり上位チームほど他チームから狙われやすいということですね？」
「そういうことだ」

俺たちの説明が終わった瞬間、観客から歓声がおきた。

『カッ！最後まで盛り上げてくれるじゃねーか。さすが俺の親友達は考えることが違う！』

お？なんか善吉への好感度が上がったような？

『大好きだぜー！！不知火――――――っ！礼――――――っ！！』
「いえ～い！あたしもあたしが大好き――――――っ！」
「俺も大好きだぞー！善吉――――――――っ！！」
【（仲が良すぎて気持ち悪過ぎ・・・！）】

あ、善吉が黒神に殴られた。
お？競泳部の三人がこっちを見てるぞ？

「不知火、気づかれたみたいだぜ？」
「大丈夫だよ～☆」
「どういうことですか？」
「これはな？競泳部と生徒会をぶつけるための挑発ルールなんだよ」
「な、なんですって！？」
「ま、救済措置を上手く使えるかも見ものだがな。柔道部とか」
「は、はぁ・・・」

おっと、時間だ。
今回は俺が言うのか。

「では、位置について、よぉーーーい・・・どんっ！！」

いきなり生徒会と競泳部がぶつかった。
ん？競泳部の女子がなんか叫んでるぞ？

「不知火、わかる？」
「え～っとね。『誰がどー考えても！お金は命より大事じゃん！！』だって」
「へぇ。まぁ、正しいといえば正しいが」

あいつは間違いなく、あの黒神の手（せいとかいちょう）によって改心されるな。

「あーーーーっ！生徒会！黒神めだか！ここで突き飛ばされた！！もう駄目か！？」
「まだ、生きてるけどな」

俺が見たときに、善吉の奴が何かを投げていた。きっと・・・

「鳴神くん、それはどういう・・・っ！？おおっと！？生徒会長！水の上に立っている！！」

興奮する阿蘇先輩。まぁ、わからんこともないけどね？

「いえ、違います！あれは、ヘルパー？ヘルパーです！生徒会長！なんとヘルパーの上に立っています！！」

善吉が投げたのは自分のヘルパー。
黒神の落下地点を予測して水面に投げていた。
……おかしいな。ヘルパーの上に人は乗れたっけ？
まあそんなことは関係無しに状況は変わっていく。

「おおっ！黒神めだか跳躍――――！そのま、ま？」
「・・・は？あいつ、なんでキスしてんの？」

意味がわからないＺＥ☆
まぁいいさ。優勝はもう決まっているから。

「さて、そろそろタイムアップか」
「決着、ついたね～」
「・・・あはは」

乾いた笑みはここでは悲しいな阿蘇先輩。

「終――――了!!では、結果発表です!鳴神くん、優勝は・・・!」

「あ、俺ですか。え～、では発表します。優勝は・・・

柔道部です」

『・・・は?』

生徒会と競泳部、その他観客達が何故?という顔をしているな。

仕方ないなぁ。

「はい、その疑問の解説させていただきます。柔道部、生徒会と競

泳部がごちゃごちゃ戦っている間に、他の部のハチマキを全て奪い去りました。合計１０３ポイント分のハチマキを獲得し、ぶっちぎってトップに立ちました」

『え～～～？そんなのアリぃ・・・・・・？』

・・・こうして、部活対抗水中運動会は意外（俺は予想していました）な結果で幕を閉じた。

で、次の日！

「会計の喜界島もがな同級生だ！競泳部からのレンタルなので大切に扱うように！」

「・・・・・荒稼ぎしに来ました。無駄遣いしてたら売り飛ばしますのでそのつもりで！」

「ちなみにレンタル料は一日３２０円」

「「驚きのお値段っ！！」」

「・・・なんで俺はいるんだ？」

生徒会に会計が増えました。

俺が縄で捕縛されてこの部屋にいる疑問は解決されないままです。

第十二箱　『その後？』「あぁ、その後だな」

水中運動会から数日後、俺は不知火と帰ろうとしていると、なぜか不知火が

「ごっめ～ん！あたしなんか呼ばれた気がするから行って来るね～♪」

と、なにやら電波的なことを言い残し、どこかに行ってしまった。

「う～む、どうしようか」

不知火と食い放題に向かうつもりがドタキャンされてしまうとは・・・困った。

本当にどうしようか。

「少し良いですか？」

「良くないです」

「ま、待ちなさい！！」

「・・・？」

そこには、箱庭学園の制服とは違った服装のメガネ女子がいた。

誰だ？

「どちら様？」

「わ、私を知らないのですか！？」

「・・・うん。記憶にございません」

本当に記憶にない。せめてかかわりのある人なら良かったのに。

「この腕章を見てもですかっ！？」
「・・・風紀？ああ、風紀委員の人か。で？何の用？」
「いえ、今制服の乱れをとりあえずチェック中なのですが、生徒会長はどこにいるか知りませんか？」
「すまん、神出鬼没な奴だから。わからねえ」
「いえ、謝らないでください。・・・あ、そうだ」
「？」

なんだろう？風紀委員の女子がポンッと手を打った。

「明日、服装チェックをするので、今日みたいな格好で登校してきてくださいね」
「了解、お疲れ様～」

・・・あ、なんか嫌な視線があちらこちらから。

「・・・すいません、その視線は私のせいです」
「あ？んなわけないだろ」
「いえ、私が風紀委員だから・・・」

・・・ここの風紀委員はそんなに嫌われていたのか？

「はぁ、そんな考えでいるなよ」
「・・・え？」
「あのな？お前達はこの学校の規律を守ろうと日々努力してんだろ？それを恥じるなよ」
「！！」
「学校を良くしようとする奴が、何落ち込んでるんだよ。良いじゃねえか。胸を張ってまっすぐ自分の信条を貫けよ」

「・・・ありがとうございます！！」
「頑張れよ～」

手を振って風紀委員の子と別れる。
・・・嫌な視線が俺に集中してきたな。
さて、誘い込むか・・・

「オイテメェ、何余計なことしてくれてんだよ」
「てかお前何？あいつの友達？」

「きゃはは！ウケル！」

・・・なにこいつ等？

「おい、なんか言えよ」

「・・・誰？」

「俺達は『モッキン』コンビだぜ！！」

・・・木琴？

ふむ、ということはこの二人は・・・

「吹奏楽部の人が何の用だっ！！」

「違えーよっ！！」

「え？違うの？」

どう考えても吹奏楽部でしかつかないだろその渾名。

「てめぇ・・・！俺たちのことをしらねぇのか！？」

「・・・うん。ゴメン」

「「謝られた！？」」

他にどうしろと？

・・・あ、金属バットだ。

もう一人は・・・木製のバット？

なるほど。口頭で伝わらないことって、あるよね。

「へぇ、なかなか使い込まれてるじゃないか」

「ケケッ！これが俺たちの由来よ」

「金属バットに木製のバットで木金コンビか」

「その通りよ！でだ、お前、風紀委員と親しかったよなぁ？」

「いいや？」
「何故に否定形！？」
「だってあいつ生徒会長探してるだけだったし」
それだけで仲が良くなるものなのか？
「嘘に決まってるだろうが！お前が入院すればあいつらもおとなしくなるだろうぜ！死ねやーーーー！！」
そういいながら金属バットを振りかざしてくる男。
だから。ついつい、その、反射的に。
「・・・ふっ！！（バギィィィ！！）」
「・・・は？」
金属バットを蹴り折った。
・・・面倒くさいやつだなぁ・・・。
「とりあえず、寝てろ」
「おがふっ！？」
コメカミを蹴り、気絶させた。
ドカッ！という音はご愛嬌。
「そこの木製バット。さっさとつれて帰れよ？」
「は、はいっ！！」
そうして、木金コンビは早々に立ち去った。
まったく、バットを持っているなら『野球部』だといえばよかったのに。

危うく練習好きの知り合いのいる吹奏楽部に『サボってる人がいたよー』と乗り込みに行きかけたじゃないか。

・・・さて、何をしようか？

「自分から赴くのはなんとなく嫌だが・・・仕方ない、生徒会室に行って善吉と雑談するとしますか」

で、到着！

「失礼しま～す・・・？」

「・・・！！」

ドアを開けると・・・喜界島が善吉にキスをしようとしていた。

「・・・すまん」

「た、立ち去らなくていいから助けてくれ！！」

「・・・！！」

・・・いやいやいや、さすがにこれは、ねぇ？

「善吉、お前は喜界島がキスしようとするのを俺に止めろというのか？」

「頼むって！！」

「・・・仕方ないな。ほらっ、どきなさい」

「な、何するんだ！？」

喜界島をマウントポジション（してるほうから）解放してやった。

・・・どういういきさつからこうなったのか是非聞きたいものだ。

「君は・・・鳴神君？」

「なんだ？ちょっと待ってくれよ？ほれ、立てよ善吉」

「悪い」

善吉の左手を引っ張って起こす。

「そういえば・・・鳴神君って生徒会長とどういう関係なの？」
「鬼と逃げる人」
「鬼ごっこでもやってるの？」
「・・・ああ、ほぼ毎日な」
「ご苦労様だよな、礼も」

善吉が肩に手を置いて慰めてくる。

「へぇ・・・仲良いんだ」
「まぁ良いんじゃないか？」
「キスされたの？」
「・・・は？」
「人吉が言ってたんだけど、会長さんは親しい人にキスをするって・・・」
「・・・マジで？」
「マジマジ」

善吉が少し恥ずかしそうに頷く。
こいつもされた口か。

「いや、されてないよ」
「そうなんだ・・・」
「・・・お、会計の仕事か」
「あ、うん」

えっと・・・部費に関する陳情か。

「ここ、二百五十円おかしいぞ」
「へ？・・・あ、ホントだ」
「電卓はないのか？」

「めだかちゃんがいたから」
「インテル入ってる!?」

黒神の奴すげぇな!
不知火がいってた通り関数計算も暗算なのだろうか?

「・・・まぁ、あいつなら出来そうだから怖いな」
「実際出来るぜ?」

・・・もうすごい万能だな、黒神。

「ま、忙しそうなので帰るわ」
「おう、じゃあな~」

・・・善吉も忙しそうだし、晩飯を買って帰るとしよう。

第十三箱　制服は正しく着ましょう！

「・・・しまった！」

鳴神さん最大の不覚・・・！

昨日制服に焼肉のタレをこぼしてしまったから洗濯に出したら、予備の制服も洗濯に出していただと・・・！？

「昨日約束したばっかなのにな・・・」

・・・こうなったら役に立つ人間は・・・！

「とりあえず善吉・・・で不知火っと」

・・・善吉、出てくれなかった。

時間がない！不知火さーん！！

『もしもし？』

「不知火！！出てくれたか！！」

『どうしたの？礼君♪』

「実はな、制服を全部洗濯に出してしまって予備がないんだ！何でも良いから制服あるか？」

『何でもね？わかった～。おじいちゃんに頼んでおくから～☆すぐに届くと思うよ～』

「恩に着る！！今度鍋を食べに行こう！！」

『やったね～☆じゃね～☆』

電葉を切った。

と、同時に学園の人から制服が届いた。

「ありがとうございます！！」
「いえいえ。それでは、良い一日を」
・・・なんていい人なのだろうか！
それにしても理事長の権力すごいな。
さってと、制服は・・・・？
「これ・・・本当に学園の制服なのか？」
少し、昨日の風紀委員の服と似てるな・・・。
「まぁ、いいか」
急いでそれを着用し、学園に向かった。
「あ！貴方は昨日の・・・ってなんでその服を着てるのですか！？」
「鳴神同級生ではないか。どうしたのだその制服は？」

校門前で生徒会執行部のメンバーが捕まっていた。

「ああ、いや。昨日制服を汚してしまってな?予備も乾いてなくてさ・・・不知火に頼んだらこれが送られてきて」

「それは風紀委員会の制服ですよ!」

「なんだとっ!?」

やっぱりか!!

道理で似ているのだと。

そう考えた瞬間、チャイムが鳴った。

「昨日の言いつけ守れなくてゴメンな!」

「あ!ちょっと・・・!行っちゃった」

「・・・視線が痛い」

「ごしゅうしょうさま~☆」

「まぁそうなるわな」

授業中、教師からは怯えられる視線を、同級生からは嫌われた視線を受けた。

なぜだ？

「風紀委員はそんなに嫌われてるのか？」
「お前知らなかったのか？」
「ああ。噂に興味はないんだ。ってなわけで、不知火先生！教えてください！」
「うむうむ！よきにはからえ～」
「はは～！」
【（あの二人の仲の良さが気持ち悪い・・・！）】

てなわけで、風紀委員会のことの説明を受けた。

「『箱庭学園風紀委員会』学園治安の維持を至上目的とする遊撃部隊。理事会・職員室を始めとするあらゆる権力から開放された独立特務機関である！人呼んで学園警察！！」
「すごいんだな。風紀委員って」
「まぁ、『やりすぎ』が多くあって皆に嫌われてるけど・・・お前はそれに入ったのか？」
「いや？入ってないよ」
「じゃあどうしてその制服を着てるんだよ？」

そして、俺は昨日と今朝にあったことを説明した。

「で、不知火のおじいさんが送ってきてくれた。でもなんでこれなんだ？」
「『何でも』って言ったから～♪」
「「確信犯かっ！！」」

・・・この会話を聞き、皆が同情的な視線を送ってきた。
やめてっ！恥ずかしいから！！

後女子が「ご愁傷様」って言ってパンをくれたよ！
優しいなぁ～。

「・・・ん？善吉からメールだ。えっと何々？『生徒会室に着てくれ！大至急！！』・・・？しゃーない、行って来る」
「おう。また明日な」

ん？扉越しに高笑いが聞こえてきたぞ？

「ノックしてもしも～し」
「フッ、良くぞ見抜いた・・・今のはお前を試したのだ」
「更になんで遥かなる高みから！？」

・・・なるほど、つまり俺が取る行動は！

「お邪魔しました～」
「帰らないで！お願いだから！！」
「善吉、キャラが違うぞ？ってかなんで喜界島はスク水を制服の下に着てるんだ？」
「き、着ないと力が出なくて・・・」
「なんだよそれ・・・」

で、数分後。

「ち、力が出ない・・・」
「畜生・・・。遅いなぁ時代・・・」
「善吉はどんな格好をしてたんだ？」
「ジャージ着て制服着てた」
「・・・なるほど。で、お前は『で、デビルかっけぇ！！』と」
「ああ。そう思うだろ？」
「・・・反骨精神の塊らしくていいんじゃないか？」

まぁ好みは人それぞれだ。
俺の親友も好みが少し偏ってるしな。

『それはどういう意味だい？』
「・・・気のせいだな。うん」

何か聞こえた気がしたが気のせいだ！

「ではお邪魔しました」

・・・知らない間に解決したようだ。

「ッてそんなわけないでしょーーー！！」

おお！殴った机からドカァッ！ってすごい音が出たよ！？

それに、割れた！？

『それよりもさっきの話だよ』

「（なんで出てこれるんだ！？）」

『それは僕だからさ。ああ、安心していいよ。他の人には聞こえないから』

「（それはありがたい。ジャンプに出てくる死神と新世界の神みたいに独り言のように会話するのは気が引けたからな）」

『僕はあれほど怖くないと思うんだけど？』

「（見た目はな）」

『・・・いいさ。夜になったらきっちりと話をしようじゃないか』

・・・ある意味死刑宣告だなおい。

「着替えたくない合理的な理由があるのですか！？」

「・・・とにかく嫌だ！」

ん？なんか黒神以外が壁に手をついて落ち込んでるぞ？

「・・・あ～あ。これ処理すんの大変そうだな」

嵐の後のように廊下の窓ガラスやら壁が壊れていた。

「お、おい！お前のとこの奴がこんなにしていって「バカ！取り締まられるぞ！！」・・・！」

「あ～大丈夫大丈夫、取り締まらないからね～」

「「「「な、鳴神クン！？」」」」

「おう。だいじょーぶだから教室に入って俺がいいって言うまで出てくるなよ」

「あ、ああ」

・・・さて、これを片付けるのはめんどうだな～。

『なんなら僕が表に出てやろうか？』

「・・・荒れるからやめい」

『荒らさないよ。まぁいいや、久しぶりに使うんだね』

「おう。ま、すぐ終わるさ」

そこからは、ありえない光景だった。

ただ、ただ腕を真一文字に振っただけ。

ただそれだけの行為で、全てが元に戻った。

窓ガラスは割れていない状態に戻り、壁の破損部分は何もなかったかのようになっていた。

一部分を除いて。

「・・・よし。出てきていいよ～」
「うわっ！元に戻ってる！！」
「おう！・・・じゃ、その記憶を『零（なかったこと）』にしないと」

指を鳴らした。
すると、そこにいた人間は全てはっとしたようになり、あたりをきょろきょろと見渡していた。

「わたし・・・何してたんだろ？窓が割れてるし・・・」
「ああ、風が強すぎて窓ガラスに石が当たって割れたみたいでね。ほら、そこ」
「あ、ほんとだ・・・」
「ほら、早く下校したほうがいいよ」
「あ、うん。じゃあね！鳴神君！」
「ああ、じゃあな」

ふぅ、これでよしっと・・・。

『なかなかの演技だったね』
「まあな。・・・帰ろ」

何事もなかったかのように、礼はカバンを取り帰宅した。

次の日の朝。

「・・・てめぇ、あんなに教室中を走り回ることは今までなかったぞ」

『学校中ならあっただろう?それよりかはましじゃないか』

「その後マウントポジション決めてきやがって・・・!」

『・・・ん?校門が騒がしいね』

「話を逸らす・・・?なんだ?あれ」

目の前には・・・胸元が大きく開き、羞恥心からか顔を赤らめ震える昨日の風紀委員がいた。

・・・どうしてこんなことになったのだろうか?

「・・・まぁ、いいか」

『そうだね。僕たちには関係ない』

「そういう意味じゃないが・・・。早く教室に向かうか」

今日も箱庭学園は色々とおかしいことだらけである。

第十四箱　風紀委員会１（前書き）

さて、今回は俺の一人称じゃないことだけは言っておこう。
なぜか？それは・・・本文を見てくれればわかるさ。
俺は一人で、ゆっくりと、青空を見て寝てるから。

第十四箱　風紀委員会1

「え？雲仙委員長に届け物？音楽室に？私がですか？」
「ええ。私たちは他に用事がありまして・・・。それに近頃、あなたはたるんでいるようですからね。一度雲仙委員長の仕事振りを拝見して気を引き締めたほうがいいでしょう」
「あー、そりゃまお気遣いどうもありがとうございマス！」
「あなたも知っていると思いますが、登校義務さえも免除された特別待遇の十三組。雲仙委員長はその十三組に弱冠九歳で選抜されたモンスターチャイルド。彼の実行する正義はまさしく、風紀委員会そのものなのですから！」

うっとりしたような声と顔で語る風紀委員の一人。
鬼瀬は少し納得のいかないような顔をしながらタオルを受け取り、音楽室を目指した。

「・・・いいですね？皆さん」
『はい。呼子先輩』

さて、今話題に出た雲仙冥利はというと、音楽室に正義を執行しに来ていた。
子供なのににじみ出る気迫、またはオーラとでも言うものにより、オーケストラ部の部員は冷や汗を掻いている。

「え～今回は皆さんにちょっと、殺し合いをしてもらいまーす。・・・って違う違う違う！ダッメだなーオレって本当にダメだ！大人数を前にするとついつい殺し合いをさせたくなっちまうぜ」

不気味な笑みを浮かべたかと思うと、雲仙冥利は自分自身に言い聞かせるように自分の言葉を否定していた。

「えー、では改めまして、オーケストラ部の皆さんこーんにーちはー！僕ちゃんは風紀委員会委員長の雲仙冥利ちゃんでーす。本日は皆さんを粛清しに来ましたー。皆さんの発する騒音が公害レベルにうっせーっつう苦情（チクリ）が近隣の部活動から殺到しておりまして、ゆえに適切な処置を取らせてもらいまーっす！」

そういうと、オーケストラ部の部員達がざわめき始めた。冥利はそれを観察し、花を摘み取るような笑顔で見ている。
ただ、どういう風に花を摘み取ってやろうかしか考えていなさそうな笑顔で。
そして、一人の男が冥利の肩に手を置いた。そして、子供をあやすかのような声で説得を開始し、最後にはアメの袋をプレゼントするまで話が進んだところで、ボキンッ！という音が男の腕から聞こえ

た。

「・・・人の体に気安くさわってんじゃねーよボケ。それから風紀委員に言い訳や賄賂が通じると思ってんじゃねーぞアホが！オレが出張ってきた時点で死刑確定なんだよテメーラは！殺戮してやるから迅速に死亡しろ！！」

この言葉により、雲仙冥利の殺戮（しゅくせい）が始まった。

鬼瀬は、途中で生徒会長の黒神めだかと、不知火半袖と一緒に音楽室まで来た。

扉を開けるとそこには、死体の中に一人天に向かって仰いでいる雲仙冥利がいた。

「おっ、鬼瀬ちゃんじゃん☆タオル持って来てくれたんだ。サンキュー」

「あ、は、はいっ（え・・・なに？なんですか、これ？確かに私達風紀委員会は理事会から条件付き武装を許可されていますけど、一体何を使えばこんなことができるのですか！？）」

そう、そこには不自然なほど丸い穴が開いていた。コントラバス、机、ティンパニーにギター。それら全てに不自然な穴がぽっかりと開いていた。

「ったくオレは本当にダメだなー。返り血まみれなんていつものことなのに、いっつもタオル忘れちゃうんだよなー。で、なに、黒神めだか？なんでテメーがここにいるわけ？」

そこまで雲仙冥利言うと、黒神が説明し始めた。
目安箱にオーケストラ部に対しての投書があったので解決しに来た、と。
風紀委員会と仕事がかぶっていた。
そして、平和的解決をもくろんでいた黒神めだかに対し、雲仙は言い放った。

「甘えんだよ！話してわかるか！事情なんか知るか！！ルールを破った奴が罰を受けるのは当たり前だろーが！それをなあなあにボカしちまったら、事情さえあれば許してもらえるっつっておんなじことを繰り返すに決まってんだろーがよ！！やりすぎなければ正義じゃねぇ！それがオレのポリシーだ！！」

そこまで言うと、鬼瀬にも反応があった。しかし、それは賛同し、否定するような反応。
否定場所はやはり『やりすぎ』という点なのだろう。

「不正を正すことがオレ達の唯一の目的だ。暴力も武装もただの手段にすぎねえ。勿論黒神！テメーと敵対するつもりもテメー率いる生徒会執行部と敵対するつもりもーーーーあるっ♪」

雲仙が右腕を少し上に向けたかと思った瞬間、黒神の頭部に『何か』が直撃した。
武器からして飛び道具、ムチをイメージするのだが、黒神と雲仙の身長差で黒神の頭上からの攻撃により、武器が全くイメージがつかない。

「・・・？おかしいな。今のはただのアイサツ代わりだぜ？見えねーまでもよけれるくらいの手加減はしたつもりだけど？」
「ーー貴様から攻撃される理由がない。ゆえに、よける理由がない」
「・・・へぇ、面白いこと言うじゃんーーーもっぺん同じコト言えたらベタ褒めしてやんよ！！」
「（今度は下から！しかも・・・さっきより全然速い！！）」
「ケケッ♪」

笑い残して、立ち去ろうと後ろを振り向いた雲仙。

「貴様から攻撃される理由がない。ゆえに、よける理由がない。言ってやったぞ。褒めるがよい」
「・・・・・素晴らしい！」

そして、鬼瀬が仲裁に入り戦闘はなくなった。
『戦闘は』だ。

「生徒会潰しのための刺客を『四人』！既に放っちまったんだからよぉ！」
「う、雲仙委員長・・・『四人』、ですか・・・！？」
「どうしたよ鬼瀬ちゃん。生徒会は黒神を含めた『五人』だろ？」
「ち、違います・・・！生徒会は・・・黒神さんを含めた『四人』です」
「あ？・・・あ～あ、やっちまった。間違えて黒神とよく一緒にいる奴に刺客を送っちまった」
「な、名前を・・・聞かせてもらっても・・・よろしいでしょうか？」

震える声で、鬼瀬が雲仙に尋ねた。

黒神も、不知火までもがあせっていた。
もしかしたら、万が一の可能性は無いと信じたかった人物の名前が、雲仙の口から出された。

「あ～、名前?確か・・・『鳴神　礼』だったかな?聞き込みでその名前が出たと呼子から聞いてたから間違いねえよ」
「「「!!!!!!!」」」

最悪の事態が、起きた。
黒神は、礼の名前を聞いた瞬間、音楽室から飛び出していく。
そして、その直後、雲仙の携帯に連絡が入った。

「あ～もしもし?・・・うん。うん。ああゴメン、そいつ間違い・・・あ?・・・マジで?ああ、すぐに保険室、いや病院に連絡しろ。大至急だ」
「ど、どうしましたか?雲仙委員長・・・?」
「・・・ごっめん鬼瀬ちゃん。鳴神って奴、刺客の奴がミスって心臓に日本刀突き刺されたって」
「あ・・・!!ああ・・・!!」

鬼瀬の、心の芯が折れる音がした。
『自分の信条を貫いて、胸を張って頑張れ』といってくれた人が、『関係の無い』人が、死んだ。
雲仙もさすがに悪いと感じたのか、すぐに保健委員会に連絡し、鳴神のいる場所に行ってくれと頼んだ。
不知火は・・・ただ、一言、呟いた。聞けば誰しも心が折れそうな声で、ただ、一言、

『・・・喰らうぞ』と。

連絡をした風紀委員会の女性は、連絡を受けたあと、自分の過ちを悔やんでいた。

「・・・しまったぁ・・・・！」

ただそれは、何かにとても怯えるような声。

「・・・殺してしまった・・・！！」

そこには、刀がコンクリートの床にまで貫通し、水溜りが出来るほどの血を大量に流し、天を仰いでいる礼の姿があった。

第十五箱　風紀委員会２（前書き）

・・・さて、前回を読んでくれた皆には俺が今どういう状態かわかってくれたよな？
まぁ読んでいない人にもネタバレしちまうと、死んだんだ。俺。
じゃ、あらすじを言ったところでスタートだ。

第十五箱　風紀委員会２

・・・殺してしまった。
雲仙委員長から『鳴神　礼は間違えても傷をつけるだけ』と聞かされていたのにもかかわらず、殺してしまった。
心臓を、この手で・・・！この刀で・・・！！

「・・・あ～あ、いったいな～」
「！！？？」

どう、して・・・！？
声のした方向は完全に『ありえない』。
なぜなら、そこには『死体』しかないのだから。
ただ、死体におかしい点があった。
髪だ。髪が伸びている。
腰あたりまで伸びている。

「全く、『礼君』の心臓を一突きなんて、君は本当に人間かい？」
「ど・・・うして・・・！？」
「どうしてって、生き返ったに決まってるじゃないか。ああ、ゾンビかと聞きたいのかい？それならＮｏだよ。『僕』はれっきとした人間だ」
「なら・・・どうして・・・！？」
「簡単だよ。この体は異常だからさ。死んだことも『無かったこと』に出来る」
「ば・・・化け物・・・・！！」
「君が言うのかい？まぁ、僕が生き返ったのだから殺人罪にはならなかったけど、下手すれば君は殺人者だよ？」
「ち、近寄らないで・・・・！！」

胸から刀を引き抜き、血をたらしながら歩いてくる鳴神(ばけもの)くん。
きっと、私は殺される・・・！

「まぁ、『礼君』の頼みだからね。殺しはしないよ」
「え・・・？」
「そう、殺しはしない。生き地獄をみせてあげるよ」
「あ・・・」

やっぱり、私は生きているよりも辛い目に遭うんだ。
それはそうか。勘違いで、いや。手違い、違う。そんな言い訳は要らない。人を・・・

「・・・なんてね☆嘘だよ、嘘。大嘘」
「ど、どう・・・して・・・？」
「え？何が？」

そこには、本当にわからないという顔をした鳴神君の顔があった。

「こ、殺したのよ！？私は！！なのに、なんで仕返しも何もしないの・・・！？」
「ああ、殺されてないもの。現に、『僕』はここにいる」

ただ、その一言。
その一言だけで救われた気がした。

「う～ん、そうだね・・・じゃあ、一回だけ顔に平手打ちでどうだい？」
「あ・・・はい・・・！」
「じゃ、いくよー、えい！」

バチンっ！
その音が私の顔から聞こえた。
痛い。けど、何故か『安心』した。

「ま、頑張りなよ」
「ま、待って！保健委員が来るからここで・・・！」
「ああ、大丈夫だよ。君が刺した傷は、『もう無いから』」
「え・・・？」
「ほら、無いだろう？」
「あ・・・え？でも・・・なんで・・・？」
「ひ、み、つ☆」
「！！！」
「じゃ～ね～」

・・・私は、腰を抜かしてそこにへたり込むしかなかった。
顔が、熱い。今まで雲仙会長にしか赤くなったことなど無かったのに・・・。
彼は・・・一体何なのだろうか・・・？

さて、屋上を出た「僕」は廊下を闊歩していた。

『・・・今回は俺がこっちかよ』

「やあ礼君。ご機嫌斜めだね」

『当たり前だ。青空観察してたら心臓刺されたんだぞ?で、今回は教室側。そら機嫌悪いだろうが』

「そうだろうね♪でも、いや~久しぶりだな!礼君の体!いつ振りだっけ?半年ぐらい?」

『まぁそうだな。ってかまた髪を切らないと・・・』

「あっはっは!僕が出るときは本当に髪が伸びるね」

『お前と同じぐらいの長さだよな』

「まぁ僕が出てるしね」

そういうと礼君はため息を漏らしていた。

「さってと、礼君。どうしたい?」

『・・・さっさと家に帰りたい。あと体返せ』

「嫌だね。もうちょっと出ていたい」

『・・・結局俺の意見は却下かよ・・・てかテンション高いな』

「久しぶりだからね~」

そんな僕がいつも君の意見を否定してるような言い方はやめてほしいな。

さて、礼君のご期待通り、ひっそりと帰るとするかな。

「まぁ無理だね」
『・・・やっぱりなぁ』
「フフッ、めだかちゃんの頑張りを見るまではね」
『・・・今善吉のところにいるぞ』
「あら、じゃあどうしようかな。もう一度教室にもどって礼君と戯れるとしようかな？」
『・・・まぁ待て。ゆっくりと話し合おうじゃないか』
「二人っきりの教室で？」
『待て待て。それは（ドゴオオオオオオオ！！）・・・』
「『は？』」

どこからかすごい爆発音がしたけど・・・？
まぁ彼女ならやりかねないな。うん。

『「なじみ」、爆発音は?』
「生徒会室みたいだね」
『・・・よし、この校舎から離れよう』
「面白くなってきたね」

『それは無い』と否定する礼君。

「じゃ、見せて貰おうかな?めだかちゃんの真骨頂その?『乱神モード』っていうのを」
『・・・悪い予感しかしないな~』

礼君の言葉を聞きながら、僕は髪を括って校舎を後にした。

第十六箱　風紀委員会3

やあ、こんにちは。
皆のなじみお姉さんだよ～。
学校を出るまでの間、いろんな人から声をかけられて大変だったよ。
男たちから熱い視線をもらってるのは嫌だけど。
人気者は辛いよね♪

『・・・待てこら』
「どうしたんだい？礼君」
『今のモノローグ絶対お前のキャラじゃないだろ！！』
「うん。だから少し照れてる」
『マジか！？』
「嘘」
『やっぱりな』
「ノリが悪いぞ、礼君」
『お前が照れてるのは出会ってから見たことが無いから』
「なるほど・・・つまり照れてるところを見たら君は僕に惚れる・・・と？」
『どうしてそうなる！！』
「今流行のツンデレっていうものなのだろう？」
『断じて違う！』

ちなみに今、僕は校門から観察中だよ。
・・・おおっと、そんなことを言ってる間に学校がまた揺れたね。
これで二回目かな？

「それにしても、あれが乱神モードか」
『髪の色が少し違うな。なんというか・・・薄くなった？』

「そうだね。それにしても、派手だし学校を壊してしまいそうだしと荒れてるね」
『まぁ、あれぐらいが良いんじゃないか？あいつにとって』
「そうだね。・・・後ろから誰か来るね」
「鳴神様でございますか？」
「君は？」

そこには、白衣のようなものを纏った男たちがいた。

「保健委員会のものでございます。さ、病院へ行きましょう」
「傷はもう無いし五体満足だよ」
「それでも、『安静にしておきなさい』という理事長からのお達しでございます」
「・・・仕方ないね。僕は何日ほど休んだらいいんだい？」
「箱庭病院の個室で三日ほどでございます」
「・・・仕方ないね。それじゃあ向かいますか」
「よろしくお願いします」

保健委員会の人の言うとおりにし、僕は病院へ向かった。
まぁ、三日も礼君と話が出来ると思うと、お釣りがきそうだしね。

で、入院初日の午後。
善吉が『俺』のお見舞いに来てくれた。

「・・・で、風紀委員会の件は解決したんだ」
「ご苦労様だな、善吉」
「ああ。ま、お前も大事には至らなくて良かったよ。めだかちゃんなんか『な、鳴神はどうなったのだ!?』とずっと大慌てだったからな。『同級生』を忘れるぐらいにな」
「まぁ、それはそれでありがたいな。で?その黒神は今どうなってるんだ?」
「ああ、明日退院だってよ」
「相変わらず早い回復力だな。羨ましい」
「そういうなって。お前は後二日か。ま、放課後になったらお見舞いに来るから」
「助かるよ。娯楽が少なくてな」
「病院っていうのはそういうもんだろ?」
「確かに」
「それにしても、髪伸びたな?何をしたらそこまで伸びるんだ?」
「俺にもわからん。きっと風紀委員の奴が俺に育毛剤でもぶっかけたんだろうよ」
「ある意味凶器だな、それ。まぁいいや、意外と似合ってるしな」
「ありがとう。あまり嬉しくないがな。・・・そろそろ時間だぜ?」

「おっと。じゃあな礼！また明日来るからな！」
「おう、じゃあな」

善吉が出て行き、部屋が静かになった。
さて、こうなると問題は・・・

『僕のことかい？』
「部屋に誰もいないときに出てきやがって」
『退屈しなくて良いだろう？』
「テレビでも見ようぜ？」
『・・・明らかに答えを逸らされた感じがするがまあいいよ。僕は六チャンネルが見たいな』
「ん。・・・また『黒神グループ』か。最近多いな」
『まぁ大企業だからね。報道も多くなるよ』
「・・・ん？次のニュースは・・・」
『何々？「箱庭学園の校舎崩壊！」だって』
「・・・昨日だろうな」
『そうだね。なかなか面白いじゃないか』

・・・まぁ、有名だしな。この学校。
しかも校舎があれだけ壊れたんだ。そら報道されるだろうな。

「・・・寝るか」
『じゃあ、僕と夢のようなひと時を過ごそうじゃないか』
「読んで字の如く夢だがな。・・・まぁいいや、おやすみ」
『・・・おやすみ。礼君』

その言葉を聞くと、俺は眠りに落ちた。

で、いつもの教室。
俺はいつもの机から顔を上げると、至近距離で覗き込むなじみの顔があった。

「やあ礼君」
「だから顔が近いんだよ」
「僕と君の仲じゃないか」
「からかってるだろ？」
「酷いな。そりゃ、少しはからかいの気持ちが無いといえば嘘になるけど」

「はぁ・・・」
「こんな可愛い僕を前にため息は失礼じゃないかな？」
「自分で言うな自分で。それと徐々に顔を近づけるな」
「気づいたのか。惜しいな」
「・・・何がだよ」
「それは秘密さ☆」
「おい、キャラが違うぞ」

こいつは本当につかめないな。

「さて、今日はどうやって君を追い詰めようかな？」
「待て、なんで追い詰めること限定なんだよ！？」
「良いじゃないか。いつものことだろう？」
「それを当たり前みたいにするお前が良く分からない！」
「・・・前はマウントポジションだったけど、僕に乗られてどう思った？」
「体力が無くて何も思うことがありませんでした」
「じゃあ今回は今すぐだ」
「うおおおお！？」

椅子に座ってる状態から急に立たされたかと思ったらすぐに仰向けに倒されたぞ！？
どうやったらこんな一瞬で出来るんだ！？

「少しゾクゾクするな」
「何を言ってるんだ！？」
「この瞬間、何故か僕はこう背筋に何か冷たい物が触れたような感覚を得るんだよ」
「そんな嬉しそうな顔をするんじゃない！！」
「きっと礼君にこんなことが出来るからなのだろうね」

「Sだ・・・！激しくドSがいる・・・！！」
「さて、と」
「ぬおっ！思いっきり乗ってくるな！お前は軽いといっても勢いがついたらそれなりに痛いんだよ！」
「どうだい？感想は」
「・・・」
「黙秘するつもりかい？」
「・・・可愛い顔が俺の上にあって激しく欲情します」
「なっ！ちょっ！」
「うお、激レアだ！マジで照れた！！」
「・・・！！き、君という奴は・・・！！」
「はっ！マズイ！！」
「君って男はーーーーー！！」
「みぞおちっ！？」

な、なかなか良い一発を喰らった。
息が一瞬できなくなるほどの良い一撃を。

「全く！で？本音は？」
「・・・マジで言わないといけない？」
「ああ。あんな嘘まで言ったんだ。ぜひとも聞かせていただきたいね」

やべぇ、怒ってる・・・。

「・・・」
「もう黙秘は許さないよ。言わないと、君にキスするから」
「そっちのほうが照れないか！？」
「そんな返答は許さないよ。さぁ、早く答えるんだ」
「・・・やっぱり軽いんだな、お前」

「・・・それだけ？」
「・・・実はさっきのも本音。俺だって健全な男子だからな」
「・・・うぅ」

・・・マジで照れてる。
夢の中じゃなければ写メ撮りたいぐらいだ。

「・・・ま、まぁいいさ。でもこの体制はやめないからね」
「待て、これはこれで俺が大変だろうが」
「僕は軽いんだろう？」

・・・ここで逆のことを言ったら殺されるな。
まぁ、マジで軽いから別にかまわないのだが。

「お前が疲れないか？」
「意外と乗り心地がいいんだ」
「このドS！人を椅子にするのがそんなに良いのか！？」
「だから、礼君だからだと言ってるじゃないか」
「なんで俺だけなんだよ！！」
「親友だからじゃないかな？」
「普通親友にはこんなことはしない！」
「じゃあ君が僕の上に乗る気なのかい？」
「・・・ゴメン、それはちょっと」

流石にこいつの上に乗るのは犯罪臭と死亡フラグの匂いがしてやる気が失せる。

「じゃあこれで良いじゃないか」
「どういう理屈だよそれ」

・・・あ。そろそろ時間だな。

「じゃ、またね。礼君」

「って言っても、すぐに会話できるけどな」

「僕の姿が見れなくて残念かい？」

「独り言のように会話するのは気が引ける」

「僕は君の姿が見れなくて淋しいんだけどな」

「どうせ夢で会えるだろうが」

「そうだね」

・・・そんなわけで、俺と安心院なじみの夢日記でした。

第十七箱　大丈夫か？無問題さ！多分ね

はい、おはこんばんちは鳴神礼だ。
・・・三日が過ぎやっと学校生活が復活。
いや～、疲れたね。うん。

『なかなか有意義な休みだったね』
「お前のせいで疲れはあるけどな！」
『教室でマウントポジションを取ったりヘッドロックを決めたりしたぐらいじゃないか』
「それを寝てる間ずっとされ続けたら疲れるんだよ！！」

・・・ん？誰か来たよ？

「鳴神　礼様ですね？理事長がお呼びです」
「・・・りょうかーい。すぐに行くよ」
「・・・お聞きしていたよりも髪が長いのですね」
「仕方ないだろ？寝てる間にイタズラで育毛剤ぶっかけられたんだから」

・・・嘘だけど。

「ご愁傷様です。引き止めて申し訳ございませんでした」
「いやいや、有意義な会話が出来たよ。じゃねー」

・・・理事長、ねえ？

「来てくれましたね、礼君」
「お久しぶりです、理事長」

理事長室に入ると、俺をここに推薦した爺さんが笑顔で座っていた。
箱庭学園理事長「不知火　袴」。
前にも一度不知火との会話で出たが、不知火のおじいちゃんである。

「さて、君も聞いてると思いますが雲仙君がフラスコ計画から抜けてしまったので、白羽の矢を君に立てるしかなくなってしまったのです」
「・・・俺より適任なのがいますよ」
「黒神さんですね？」
「ええ。あいつなら理事長の期待に大いに副えることが出来ます」

「それでも、私は君を推したい」
「・・・何故ですか？約束が少し違うのでは？」
「ええ。ですが、君は私から見れば光るダイアモンドよりも価値があるのですよ」
「買いかぶりすぎですよ。俺は所詮、誰かの踏み台程度でしかない」
「・・・では、あの時と同じく、八個のサイコロを振ってください」

八個のサイコロを振る。
これはフラスコ計画に参加する際に理事長からされる占い。
・・・正直やりたくないなあ。

「これを振らなければ、君を黒神さんの代わりに計画に参加させますよ？」
「・・・仕方ないですね」
八個のサイコロをまとめて手に取り、振った。

一方その頃。
場所は食堂。そこには雲仙と、鬼瀬、そして善吉と黒神の姿があった。

「そういえば、鳴神同級生はどうしてる？」
「ああ、理事長室に呼ばれてた」
「何？」
「・・・どういうことでしょうか、雲仙委員長」
「・・・オレ知～らね」
「何か知っているのだな？雲仙風紀委員長」
「どうせ、お前もすぐにわかるよ。・・・それより、鳴神について教えろ」
「礼についてですか？どうしてまた」
「あいつ、普通（ノーマル）だったよな？」
「ええ。善吉と同じクラスです」
「・・・（どういうことだ？なんで普通がオレが抜けたとわかった

途端に、こんなにも早く呼ばれるんだ？）」
「・・・どうしました？」
「いや、なんでもねえ。それより鬼瀬ちゃん、鳴神のこと好きなの？」
「ふえっ！？」
顔が紅潮していく鬼瀬。
少し気にくわなさそうにする黒神。
「そういや、御剣（刺客として送られた風紀委員）もなんか顔が赤かったし、あいついったいなんなんだろうな？」
「わかりません」
礼の話題だけで少し打ち解けた生徒会と風紀委員だった。

話は戻りサイコロ占いの結果。

「・・・どうなっているのですか！？」
「どうもこうも、これが結果ですよ」

サイコロは、同じ数字の面がいくつかあるだけで、普通の状態だ。

「君は、あの時は全てのサイコロの数字が『一から六まで全て同じ面で積まれていた』というのに・・・！」
「ま、『偶然だった』のではないのでしょうか？」
「そんな・・・馬鹿な・・・！」

・・・さてと。

「理事長、改めて俺は黒神めだかを推薦します」
「・・・仕方ないですね、わかりました」

さて、クラスに戻るか。
変な奴らも俺を見てるし、ここにいると殺されそうだ。

「どうなって、一体・・・どうして・・・・・！？」
「理事長、何故あんな奴に肩入れするのですか？」

理事長の背後から男の声がした。
そこには、六名の男女が立っていた。

「あいつは俺たちに気づいてなかったし、ただの普通（ノーマル）だろ？」
「しかもサイコロ占いも普通」
「・・・」
「どうした？古賀」
「あの子、私たちに気がついてたと思うよ・・・？」
「・・・何？」
「だって、理事長室に入ってきたとき、一瞬私を見てたもの」
「それより、『彼になぜ肩入れするか』でしたね」
「そうだ。早く答えるがいい」
「・・・彼と私が出会ったのが二歳のとき。そのとき、私は彼をスカウトすると決めていました」
「「「「「「！！！？？？」」」」」」

後ろにいた六人が驚愕の声を漏らす。

「彼はそれほどの逸材だったのですよ。だから、彼の両親から礼君を譲り受けたのです」
「『貸してくれる』の間違いでは？」
「いえ、彼の両親は自分の息子を金で売り渡しました」
「・・・理由は？」
「『虐待にも飽きたからいらない』だ、そうですよ？」
「そんな・・・！」

古賀さんが怒りと驚愕を混ぜた声を発した。
普通なら考えられませんよね、確かに。

「・・・あれ？そのサイコロ変じゃない？」

「行橋君、どういう意味ですか？」
「だって、そのサイコロ『立方体じゃなくなってる』風に見えるから」
「なんですって！？」

すぐにサイコロを確認した。
すると、礼君が出した表面の逆、つまり裏面の数字が無くなっていた。

「・・・やはり、彼は素晴らしい！！！私の目に狂いは無かった！！！！」

ですが、彼とは約束してしまいましたからね。気づくのが遅かった、いえ、遅すぎたのが残念です。
黒神さんをスカウトするとしますか。

その頃話題の主人公は・・・

「・・・」

眠っています。

「起きろーーーー♪じゃないと髪を三つ編みにするぞー」

そして不知火と戯れていました。

「にしし、じゃ、始めようか（あみあみ）」
【（やめてやれよ不知火・・・）】

クラスメイトは思ったが、誰も口には出さない。
見てみたいのだろう。好奇心が勝ってしまったのだ。
ちなみになじみもわくわくしていた。

「ん？あぁ不知火。どうした？」
「今日は食い放題のお店を荒らしに行くって言ってたじゃん☆」
「ああそうだったな。じゃ、行くか」

三つ編みにされたことに気がつかない礼は、そのままクラスを後にした。
・・・クラスメイトがなんで似合うんだよと突っ込んでいたのは言うまでも無いことだろう。
礼への好感度が上がったのは知る由も無い主人公であった。

「じゃ、まずはこのお店ね～☆」
「さて、不知火に勝てるかな！？」

ある意味こちらも命がけです（お店の方が）

第十八箱　フラスコ計画『前日』

・・・どうも、鳴神　礼だ。
今、十三組の人に囲まれている。えっと三人かな？
理由なんか知らない。

「おい、時計塔で昼寝して午後の自習をなくそうとしている俺に何のようだ？」
「４１３６１６３７３５６４１？」
「・・・は？」

数字？

「１２４１５３２５８６５８７１０６８５１２、６８８７４６４７１８４１８６４６４５２２？」
「・・・５３８。」

（待て。）・・・なんてな。

「！・・・４６４７。３２５６７８７５４６５６４５５６４７（ほほう。私の言葉をこれだけのやり取りで解読したのか）」
「・・・え？マジで正解だったのか！？」
「・・・５６８９４５５４２６？（わからなかったのか？）」
「今何言ってるのかすらわからないけど？」

驚いた表情だけであってると判断したまでだが・・・

「ケケケ！理事長のお気に入りだからっていい顔してると思ったら大間違いだ」

「・・・おい、この目に変な包帯巻いた女は誰だ？いきなり現れたが……」
「ゴメン、俺にもわからない」
なんでお前ら一緒にいるのにわからないの！？
「・・・４８２（スマン）」
「今もしかして謝った？」
「６８５（正解）」
・・・なんか、こいつ等いい奴だな。
「まあいいや。俺ノーマルだぜ？」
「４６８５９４２４４５６７０２１３８３３５７９６２６４８７２１３０５（理事長が二歳のお前に目をつけるはずが無いだろう）」
「・・・なんとなく言いたいことはわかった。でも俺そのフラスコ計画に参加しないから」
「何だと！？」
「えっと、そこのアリスには数字言語？だっけ。それで言ったほうがいいのか？」
「５４６７２３。（必要ない。）３７１、５４８６２１３６９２４５８７６９（それと、私の名前は冥加）」
「・・・了解。じゃあね～」
・・・面倒くさい奴。
あ、一つ聞いておこうかな？
「４５６９９８７８２２３４６５６４？（その鉄球って重くないのか？）」
「１９２４８７１８９２６４１２９１０１０９４７１４１２（鉄球

もおっぱいだと思えば重くない）」
「下ネタ！？」

まさかこんな発言をする奴だとは思っていなかったぜ・・・

「じゃね～冥加さん」
「４６５８（さよなら）」

・・・いろいろカオスなやつらだったな。

・・・はい、つきましたよ時計塔。
風が気持ちいいね。
屋上のほうがまだいいんだけど。

『仕方ないよ、屋上閉鎖されちゃったんだから』
「だよな・・・。さて、寝るか」

『また夢の中で会話できるね』
「・・・今日はヘッドロックやマウントポジションは禁止な」
『・・・えっ!?』
「なんで驚くんだよ!?」
『だってそうしないと君は逃げるじゃないか』
「・・・普通に会話すればいいだろ」
『・・・仕方ない、恥ずかしいけど手を握るという方法で捕まえるよ』
「なんでそっちのほうが恥ずかしいんだ!?」

やっぱりコイツは良く分からない!!

「・・・さて、寝るか」
『フフッ、おやすみ』

・・・

「やっぱここか」
「いらっしゃい」
「顔がいつもより近くないか?」
「気のせいさ」
「・・・?なんでもうお前は俺の手を握ってるんだ?」

「君を捕まえておくためだよ。温かい手だね」
「夢なのに温かいという感覚があるものなのか？」
「僕は温かいと思うけど。君はどうなんだい？」
「すこし冷たいな」
「いいのさ。手が冷たいほど心が暖かいから」
「ほう？俺は心が冷たいと？」
「君は、僕に対しては冷たくないかい？」
「そんなわけ無いと思うが？」

・・・ん？
なんかいつもと違うような・・・。

「・・・どうしたんだい？」
「なぁ、お前なんか照れてないか？」
「そ、そんなわけないよ？」
「・・・それにしても冷たいな。どれ」
「・・・！」

もう一方の手を下から重ね、温める。

「・・・うむ。温かくなってきたな」
「・・・う、うぅ」

なじみの顔が紅潮し始める。

「？どうした？」
「君は・・・恥ずかしくないのかい？」
「・・・へえ照れるんだ」
「・・・意地悪」
「たまにはこっちからからかうのも悪くは無いだろう」

「・・・次は仕返ししてやる」
「それは怖いな・・・」

・・・あれ？いつもより早いな・・・
「携帯が鳴ってるから、みたいだね」
「・・・そうか。ま、じゃあな」
「すぐ会えるけどね」
「全くだ」

・・・・・・

「・・・起きた、か？」
「む？貴様・・・」
「誰？」
「俺を知らぬとは・・・、それより貴様はなぜここにいる」
「昼寝してた。意外と日光が気持ちよくて」
「・・・まあいい」
「えっと・・・携帯携帯・・・。ん？不知火からか。『理事長室に行ってね～☆』・・・」
「貴様、王を前にして携帯を開くとはいい度胸だな」
「・・・え？何それ？ナルシスト？」
『違うよ礼君。ただの自己中だよ』
「（お前が言うのか？）」
『どういう意味だい？』
「貴様、王に向かってそのような口を利くとは無礼者めが・・・！
『平伏せ』」
「・・・え？やだ」
「・・・何？」

平伏せといわれたから嫌だと言っただけなのになぜそこまで驚くのだろうか?

「もう一度言う、『やだ』」
「・・・では立て」
「了解」

なぜか立たされた。ほう、コイツは結構でかいな。
名前知らないから『王ちゃん』と名づけるか。偉そうだし。

「『跪け』」
「断る」

なんだ?何がしたいんだコイツは?

「・・・どういうことだ?愚民(ノーマル)ごときが俺の圧政を退けるだと?」
「・・・なにやらまた面白い奴とエンカウントしたみたいだな」
「あれ?君は・・・」

今度は仮面をつけた人が現れたよ。

「・・・仮面怪人?」

渾名はこれでいいな。

「怪人は酷いな」
「じゃあ仮面の人で」
「それならまだいいか」

時計塔のはしごからまた変なのが出てきた・・・。

「あれ?君・・・」
「・・・コイツは」

顔に包帯を巻いた女生徒に、ブラジャーを露出させている女生徒が現れた。
・・・包帯魔人に露出狂とは・・・。

「・・・この学園はいつから変態の集まりになったんだ?」
「きっと最初からだと思うよ」
「仮面の人、話せるじゃないか」
「そうだね」
「ねえ君」
「なんだ露出狂」
「ろ、露出狂!?」
「胸をそんな出すとは、それ以外に考えられないだろうが」
「・・・おいお前」
「なんだ包帯魔人」
「・・・包帯・・・魔人・・・」
「ああ名瀬ちゃんがショックを受けてる!!」
「レアだね」

・・・なんだコイツら・・・?

「おい、貴様」
「なんだ王ちゃん」
「お、王ちゃん・・・?」
「・・・コイツ、怖いものがないのかしら・・・?」
「さあ・・・?」

・・・やばい、激しく帰りたい。

「じゃ、俺理事長に呼ばれてるから！」
「こんな空気で帰るな！！」
「服を引っ張るな露出狂」
「私は古賀いたみ！」
「古賀、服を引っ張るな」
「あと私二年生なんだけど？」
「・・・先輩、服を引っ張らないでください」
「なんでそんな嫌そうなの！？」
「・・・だって・・・露出狂が先輩だなんて・・・」
「こ、この子殴ってもいいんじゃないかな・・・？」

よし、殴られる前に帰ろう！

「じゃあさようなら先輩達！！」
「あっ！しまった！！」

ダッシュで逃げろ！！
昔の偉人は言ったぞ！（嘘です）

「・・・なんだったんだろうあの子」
「・・・包帯・・・魔人・・・」
「まだ傷ついてたの！？」

・・・はぁ、やっと着いた。

「失礼しま～す」

「あ、来ましたか」

「あれ？半袖の方は？」

「どこかに行ってしまいました。全くあの子は」

「心中お察しします」

振り回される側の俺と理事長は一緒にため息をついた。

「それでですね、黒神さんが都城君と出会ったみたいですよ？」

「都城？誰ですか？」

「ええと、えらそうな人ですね」

「・・・ああ。王ちゃんはそんな名前だったのか」

「王ちゃんですか。ユニークなあだ名ですね」

「いえいえ。・・・それで？俺をどうするのですか？」

「はい。地下に行きたければいつでもどうぞ・・・と伝えたかっただけですよ」

「了解しました。・・・それにしても、この学園は変なのばかりですね」
「と、いいますと？」
「数字言語をつかったり目に変な包帯巻いていたり、露出狂に包帯魔人に仮面怪人に王ちゃん・・・。変態の魔窟じゃないですか」
「そこには君も入りますが」
「俺は普通ですよ普通。もし入ったとしても常識的な部類に当てはまりますから」
「確かにそうですね。君と会話してるのは実に楽しい」
「そういってもらえると嬉しいですね」

・・・おっと、時間か。

「では理事長。また明日」
「はい、また明日」

さて、晩御飯何にしようかな？

「君は必ず明日、地下に入る。楽しみになってきましたね」
「おじいちゃん、年甲斐も無くはしゃいじゃだめだよ？」
「おや、半袖ちゃん。どこにいたんですか？」
「廊下。にしし☆」
「なにやら嬉しそうですね、半袖ちゃん」
「礼君が珍しく頑張るみたいだからね♪帰りに焼肉に行こうってメールしなきゃ☆」
「・・・彼の懐が泣きそうですね」

お小遣いをもっとあげるべきでしょうか？

第十八箱　フラスコ計画『前日』（後書き）

ここで注意を。
数字言語は適当です！
黒神のように解読できませんでしたので、適当に作りました！

第十九箱　フラスコ計画『壱』

・・・さて、今時刻にして八時五十分。
俺は時計塔の入り口にいる。

「・・・あと十分か」

理事長に行くといったのは九時ジャスト。
それまでは何もすることが無い。

『僕と「いちゃつく」というのはどうだい？』
「なるほど、『能力確認』か」
『流石だね。良く分かってる』
「親友だからな。・・・さて、今現在で持っているのは俺の異常（アブノーマル）だけか」
『君の一つでこの計画は簡単に潰せるけどね』
「・・・まあな。でもこれを使うとねえ」
『あの理事長に切り札（ジョーカー）をみせることになるね』
「・・・つうわけで、何がいいと思う？」
『う～ん・・・。いっそのこと「免罪負（プラスギルティー）」とか』
「いやいやいや、それは加減が利かないだろ」
『・・・むう、じゃあ「現実踏否（ブレイクダンス）」とか』
「それ酷くなってる」
『え～？じゃあ・・・「環魂奏災（レクイエム）」は？』
「・・・お前、扱いづらいのばっかり選んでるだろ？」
『そうはいってもこれがオススメだからね・・・』
「なかなかSなものがオススメだな、おい」
『今日の僕の機嫌次第だからね』
「・・・仕方ないな。無難なところで『欲視力（パラサイトシーイング）』と『炎々武踏会（ボレロ）』、

『現実踏否（ブレイクダンス）』かな。俺のは預けるよ」
『・・・礼君が選んだのもなかなかSだと思うよ？』
「まあいいじゃないか。じゃ、頼むわ」
『いいよ。「夢我夢中（ドリームシアター）」』

そうコイツが言った瞬間、俺は教室に立っていた。

「いらっしゃい」
「おう。さて・・・」
「始めようか・・・『口写し（リップサービス）』」

唇を、重ねた。
それだけで、俺の中に俺が選んだ異常（アブノーマル）が入り、その代わり、俺自身の異常（アブノーマル）がなじみに預けられた。
『口写し（リップサービス）』・・・相手にキスをすることで、能力を交換したり与えたり出来る能力。
それを使って、俺たちは能力の交換をしている。

「・・・」
「・・・？」
「・・・・」

もういいんじゃないか？

「・・・ふぅ。ＯＫだよ」
「おう。あのさ」
「ん？」
「・・・いや、なんでもない。そろそろ戻る」
「ん。じゃあ僕はサポートに回るよ」
「頼んだ」

「じゃ、行ってらっしゃい」

・・・・

意識が戻る。
現時刻は九時ジャスト。

「行くか！」
『そうだね』

さて、参戦開始だ！

第十九箱　フラスコ計画『壱』（後書き）

「安心院なじみの能力講座！」
「やあ。皆のお姉さん、安心院なじみだよ♪」
「激しくテンションが違うな」
「そんなことはないさ礼君。さて、今回からわかりやすく礼君の使う能力を解説していくよ」
「まあ、これは原作では出てきていないしな。作者の適当な作りだし」
「メタ発言はやめようね。じゃあ、今回はこちら」

『夢我夢中（ドリームシアター）』
自身の夢の中に入ることが出来る異常（アブノーマル）。
礼となじみは暇なとき、これを使って夢で会話をしている。

「俺たちがよく使うやつだな」
「そうだね。これがあればいつでも礼君と顔をあわせて会話できるのがいいポイントだよね」
「そんなもんか？」
「そうさ。お互いの顔を見ることによって、いじり甲斐がでるときもあるんだから」
「Ｓだ！ドＳがいる！！」
「ではさよ～なら～！」
「・・・じゃあな～！」

第二十箱　フラスコ計画『弐』

・・・入り口に来ました。

『・・・壊れてるね』
「なんかで殴りまくった跡がある」
『・・・そこの横に置いている変形しすぎた物で殴り続けたのかな』
「・・・怖いなぁ」

今回はこの扉が壊れたことを『零（なかったこと）』には出来ないしなあ・・・

「まあいいや。先へ行くか」
『考えるより進んだほうが得だよ』
「行き当たりばったりとも言うがな」

で、次。

「・・・今度は何？」
『エレベーターだね。しかもキーボード入力の』
「・・・面倒だ。よく見ると階段があるじゃないか。それで行こう」
『だね。自分の足で歩くのはいい運動になる』
「じゃ、レッツゴー」

地下一階。

「・・・？なんか同じところを巡っているような？」

『いや、同じところを巡っているね。さながら迷宮と言ったところか』

「・・・面倒だ。声を張るのもしんどいし・・・。頼んだ」

面倒くさいことはなじみ任せ。万能さんだからね、なじみは。

『仕方ないね・・・。あった。じゃ、案内するよ』

「お～」

なじみに案内され、下（ゴール）に降りる階段が見えた。

「・・・何？この壁とかの傷跡と倒れてる人」

『衝撃波（ソニックブーム）とかで出来る跡だね』

「まあ考えられる人物は黒神だな。で、やられた先輩と」

ご愁傷様です。

『まあいいじゃないか。早く降りようよ』

「おう」

地下二階

「おいおい、庭園かよ。しかも小屋がすっげえ和風でいいな」
『ここに来て空調設備がとてもいいね。ドアを閉めてあげたほうが緑のためだよ』
「了解」

ドアを閉める。

「う〜む、本当ならここらで昼寝がしたいな」
『まあ僕もそれには賛成なんだけど、早く下に降りたほうがいいんじゃない？』
「だな。・・・てか黒神のやつよく倒したな。見ろよ天井」
『だね。あんなに「刀剣」が刺さってるのは初めて見たよ』
「地面には拳銃が散らかっているし」

すごいのね、黒神。
改めて再認識だ。

「じゃ、行くか」
『うん』

地下三階

「『・・・動物園？』」

もう見る限り動物だらけだ。

「すげえな・・・これだけの動物が地下にいるんだから」

『現実に僕がいたら撫で回してるね』

「お前ならやりそうだな・・・ん？」

『シャッターが下りてるね』

「おお微動だにしない。エヴァンゲリオンでも格納してるのか？」

『いや、それは違うと思うよ？』

「・・・うお！？すっげえ揺れたな！！」

『・・・この奥からみたいだね』

「・・・しゃーねーな。ぶち壊すか！！」

『炎々武踏会（ボレロ）』を発動させる。

すると、右足と左足を真っ赤な炎が包むように燃え始めた。

「キーーーック！！」

シャッターに右足でのキックが放たれた。

ドガアアアアアアアア！！！

シャッターに右足が当たった瞬間、爆発した。
シャッターを粉砕し、奥の通路が見えるようになった。

「・・・うん。本当にこれ凄い威力だな」
『蹴ったり、殴ったりしたものを問答無用で爆発させるからね』
「しかも威力の強弱つけ放題。戦争してるのかっていう話だよな」

いつもながらこの能力は好きなんだが怖いよな。
しかも両手にしたら殴った分だけ爆発するからな。

「・・・お？なんか穴開いてるぜ？」
『よし、飛び降りよう』
「・・・結構高いんですが？」
『男だろう？』
「・・・仕方ないな。じゃ、行くぜ！」

穴に飛び込んだ。
・・・以外に長いな。
こういうときにやるのは・・・

「『アイ・キャン・フラーイ！』」

言いたくなるのは仕方ないよね！

・・・・落下地点は・・・

「ベッド？」

『手術室みたいだね？』

よっと。

着地成功！

「おお、また暴れた跡があるな」

『だね。さて・・・どうする？』

「う～む、この穴に飛び込むのが滅茶苦茶早いショートカットなんだろうな」

『そうだね。エンカウントは避けたいしね』

「そうそう、あくまで見学だから。俺たち」

「じゃ、行くか」

『ジャンピングターイム』

俺は、飛ぶぜーーーーーー！！！

・・・これ、すごく落下してない？

『現在十階だね』

「えっとさっきのが？」

『四階』

・・・うん。

「死ぬうううううううううううう！！！」

『あはははは！！』

「しかもまだ落下してるし！！」

『十三階まで直通だと思うよ？』

「まじか！？」

仕方ない！！

ちょっと試してみるか！

「『炎々武踏会（ボレロ）』！！」

両足に炎を纏わせてっと！

「うおおおおおお！！！」

落下方向に足を何度も振り下ろす。

すると、爆発が何度も起きて、落下速度を殺していく。
簡単に説明すると、蹴る対象を空気にしただけ。
で、威力を少し加減している。
下につくまでに速度を出来るだけ殺さないと！

「む？何か上が騒がしいな」
「これは・・・爆発音？」
「その通りだの反対の反対」
「・・・誰か落ちてきますよ？」
「どいてーーーーーー！！」
「うわっ！」

なんかいるけどまあいいや！！

「ラスト！！」

最後に地面に着地する前に右足を振り下ろして完全に着地の衝撃も殺しきった。

「・・・九階の高さからの落下は初めてだな」

・・・ん？先客がいるね。

「・・・？」
「「「「「「・・・？」」」」」」
「「「「「「「誰？」」」」」」」
なんか六人がエレベーターに乗ろうとしてるよ？
「お前、どうしたの？」
「下に行こうと思って上の穴から落ちてきました。貴方達は？」
「上に行こうと思ってエレベーターで」
「あ、そうですか。それでは！」
「悪いな。お前は私たちと一緒に来てくれ」
「ちょっと待って？なんで逆戻り？」
「一緒に行こうよ～（棒読み）」
「棒読みの人と行きたくない！！」
「一緒に行こうの反対の反対！」
「結局一緒に行くのかよ！」
「連れないこと言わずに行くぞ！」
「ちょ、待ってーーーー！」
引き込まれた。
あああ、折角ここまで（飛び）降りてきたのに・・・・
「・・・ところであなた達誰？」
「糸島軍規だ！仲良くしてね」
ふむ、なんか赤いのが糸島先輩。
「湯前音眼だよ。仲良くしてね」

・・・オーバーオール一つだけしか着ていないけしからん女性は湯前先輩と。

「百町破魔矢なる者です。仲良くしてね」

メガネのクールな男性は百町先輩。

「筑前優鳥らしいんだ。仲良くしてね」

髪がとても長い女性は筑前先輩。そしてなんでらしいの？自分の名前だろ？

「鶴御崎山海という。仲良くしてね」

なんかいかにもサイボーグみたいな人が鶴御崎先輩。少し格好いいかも。

「上峰書子と申します。仲良くしてね」

大きな本を抱えてるメガネの女性は上峰先輩。重そうだね、その本。

・・・なんだろう？

『仲良くしてね』のセリフがすこし嫌悪感を醸し出しているような・・・

「で？お前はなんて言うの？」

「あ、鳴神　礼です。仲良くしてください」

「おうよ！礼だな！よろしく！！」

糸島先輩、気さくだ。

「・・・可愛い」
「おわっ！？」

なんか湯前先輩に抱きつかれたよ！？

「おお、湯前が雲仙君以外を気に入るとは珍しいな！」
「なんともいえない安心感がある」
「なんだと！？では俺も」
「鶴御崎はだめ」
「なぜだ！？」
「・・・メモメモ」
「上峰まで気に入ってるのか！？」
「実際あたしも気になる」
「私もですよ」
「実を言うと私もなんだよ！」

ここに来て礼の「アウトローに好かれる」という良く分からない能力が発動した。

「お！？着いたみたいだぜ！」

扉が開かれた。
で、そこには雲仙風紀委員長、冥加先輩、鍋島先輩に鬼瀬、であとよくわからない二人。
そして、生徒会の黒神以外がいた。

「・・・」
「「「「「「「「「」」」」」」」」

「「「「「「「「「なんで？／３６７？（なぜだ？）」」」」」」」」」

しまったーーーー！

会ってはいけない人物達に遭遇しちゃいましたよ！？

「な、なんで礼がいるんだ！？」

「てか鳴神！！なんでお前がこれに乗れる！！」

「えっと・・・」

「私たちが発見して確保したんだよ」

糸島先輩がフォローしてくれた。

やっぱりあんたいい人だ！

「なんか気に入っちまってよ？」

「そうそう」

「賛成の反対の反対」

「なんででしょうね？」

・・・なんでだろうか？

『アウトローに好かれる男、礼君』

「（それもどうよ・・・）」

「まあいいぜ！礼！また話そうじゃねえか！！」

「もう行っていいよー」

「私たちはコイツラと戦うからな」

「また携帯の番号を教えてください」

「私といろんなものを食べに行きましょう」

「カラオケなんてどうですか？」

なんていい人たちなんだ！！

これが終わり次第一緒に行きたいね！

「はい！ありがとうございました！！」

「「「「「「じゃ～な～！」」」」」」

・・・さて、下に降りるとしようか！

「え？善吉達も来るの？」

「めだかちゃんが捕まって洗脳されそうなんだ！！」

「・・・じゃあ仕方ない。行くとしようぜ善吉！」
「おうよ！」

「・・・ところで、君はなんであの人たちと仲良くなったんだい？」
「・・・成り行き？自己紹介したら仲良くなったんですよ」
「・・・なんでだろう？」
「喜界島にわかったら俺は苦労しないよ・・・」

階段を駆け下りながら新たな疑問に頭を悩ませていた。

第二十箱　フラスコ計画『弐』（後書き）

「安心院なじみの能力講座！」
「今回はこれさ」

『炎々（ボレロ）武踏会』

自分の好きな四肢に炎を纏わせることが出来る。
炎を纏っている部位で殴る、蹴るを行うと爆発を起こす。
ただし、炎を纏わせることが出来るのは二箇所のみ。
殴ったり、蹴ったりした方向に爆風が出るので、使用者に被害は無い。
空気も対象にすることが出来る。

「お！俺のお気に入りの能力じゃないか」
「これはボレロと呼ばれる曲の特徴である『同一のリズムが保持されるなかで2種類のメロディーが繰り返される』から、炎を纏わせる箇所が二箇所のようだね」
「炎はどこから来たんだ？」
「そういう能力だからね・・・。まあ作者のきぶんじゃないかな？」
「ま、オリジナルだしな」
「じゃ、今回はこれまでだよ」

第二十一箱　フラスコ計画『参』

は～い皆のアニキ、鳴神　礼ですよ～♪
・・・ごめん、これはすごく恥ずかしいな。

『慣れないことはするもんじゃないってことだね』
「（そうだな・・・）」
「・・・ここだ！地下十二階！」
「・・・あれ？この人誰？」
「ああ、黒神真黒さん。めだかちゃんのおにいさんだよ」
「・・・へえ。君、礼君だっけ？僕の妹にならないか？」

・・・この人も変態か。と、いうか。やっぱりか。

「お断りします。妹は生徒会長で十分でしょうが」
「おやおやふられちゃった。残念だ。・・・さて、ふざけるのもここまでにしようか」
「・・・ゲームセンター？」

地下十二階。

見渡す限りゲームセンターにあるゲーム機ばかり。
・・・遊びたいな。

『遊びたいね』
「だよな・・・お？黒神？」
「め、めだかちゃん！！」

俺が指差した方向に、黒神が倒れていた。

・・・なぜか布一枚で。

「・・・いつも思うのだが、ここに羞恥心を持った女性はいないのか?」

「それ、もしかして私も含まれてる?」

「喜界島、お前は大丈夫だと信じているからな?」

「・・・なんとなく、言いたいことはわかったよ」

・・・スマン。

お?黒神が目を覚ましたな。

「ん・・・、ああ・・・善吉か・・・」

「!気がついたのかめだかちゃん!何があったんだ!?地下十三階に囚われてたんじゃなかったのか!?」

善吉、質問攻めは良くないぜ?

まあこいつも気が気じゃなかったんだろうが。

「・・・ぎりぎりで記憶が戻って、都城三年生を振り切ってなんとか逃げてきた・・・。が、力尽きてしまったのだ。貴様達が着てくれて助かったぞ・・・」

「そ・・・そうか!なんにせよよかった!とにかく早くここを離れて上に戻ろう!詳しい事情は後で話すが雲仙先輩達が危ないんだ!!」

・・・なんだ?この違和感。

なにか、なにかがこの生徒会長に足りていない気がする・・・。

・・・そういえば、コイツに聞いていないことがあったな。

「誰にそこまで追い詰められたんだ?『めだか』」

「「「!?」」」
「ああ。古賀二年生にやられてな」
・・・ああ。ようやくわかった。
理解したぞ。
違和感の正体が。

「あれ?めだかちゃん。お前何時の間にそんなに礼と仲良くなったんだ?」
「・・・へ?」
「ああ。ありがとう、偽者さん。ちなみに俺はいつも本物のことを『黒神』と呼ぶからな」
「あ、ばれちゃったか。さすが理事長が目をつけるだけのことはあるなぁ」

俺たちと距離をとり、布をマフラーのように首に巻き、仮面をつけた。

「!!ひょっとしてその仮面!あんたあのときの・・・」
「・・・ええ~?お前仮面の人?」
「そうだよ~、昨日ぶりだね!お昼寝君!」

仮面の人の体がゴキッ!ゴキゴキッ!と嫌な音を立てて、昨日見た姿に変わっていく。
・・・これがコイツの異常か?

「ボクは行橋未造!三年十三組の『狭き門(ラビットラビリンス)』だよ、えへへへへ!」
「・・・もしかして、それが異常(アブノーマル)?」
「いやいや!変身は普通の特技だぜ?ボクの誇る異常性(アブノーマル)は他にある」

そっちのほうが異常だって。

「それより、ボクは君のほうが気になるなあ」
「・・・俺？俺はいたって平凡な普通（ノーマル）ですよ？」
「謙遜するなよ～。理事長に二歳児の時から目をつけられていたんだろう？」
「「「「！？」」」」
「ええ。ま、俺はそれでも普通ですよ」
「そうなのかな？」
「・・・どういう意味ですか？」

「それってさあ?君がそうありたいだけなんじゃないかな?」

「・・・・そうですね。そうかもしれません」

「・・・・・あ」

善吉は、いや喜界島も阿久根も悟った。

彼は、鳴神　礼はどういう人間なのかを。

彼の、彼の浮かべる表情から悟った。

「・・・君は、何なんだろうね？」
「そうですね。貴方は、どう思いますか？」
「・・・優しい人だと思うよ？君を見ていると、すごく心が落ち着く」
「ありがとう、ございます。・・・では、本題に戻りましょう」
「そうだね。悪いけど、ゆっくり眠りなよ」
「あ・・・？」

・・・催眠ガス！！

「しまっ！・・・・・」
「君達はここまでくる道程でもうボロボロだろ？遠慮せずに、ぐっすりおやすみ♪」

善吉、阿久根先輩、真黒さん、喜界島、そして、俺はその場に倒れた。

「・・・君は、連れて行こうかな？」
「・・・」
「なんでだろうね？君は、あの王土と同じくらい心が静かだ」

礼に独り言のように語りかけている。

仮面からは表情は伺えないが、声でわかる。
自分は、とても安心しきっている。
礼という男ただ一人に。

「・・・君は、本当に不思議だ」

礼を連れて行こうと、腕に手をかけて瞬間、物音が聞こえた。

「・・・ああ、君だけはまだ無傷だったね。しかしこの催眠ガスが充満する中で立ち上がれるというのはどういうことだい？」
『呼吸なんて一ヶ月くらい止めれるよ！だって泳ぐの得意だもん！』

「・・・（いや、それおかしいだろ）」

眠っていても、ちゃんと突っ込んでいる礼がいた。

第二十一箱　フラスコ計画『参』（後書き）

「今回は安心院なじみの能力講座は無いよ」
「オリジナル能力が出てきたときだけだと思っておいてくれ」

第二十二箱　フラスコ計画『肆』

・・・むう。

「ここにくるのはもはや当たり前なのだろうか？」
「つれないことを言うなよ」

机から顔を上げると、いつもの顔があった。

「でもあそこで催眠ガスは予想しなかったね」
「全くだ。喜界島が一ヶ月も呼吸を止めれるのも驚いたが」
「そうだね」
「そういえばさ、俺『炎々武踏会（ボレロ）』しか使ってない気がする」
「大丈夫だよ。きっと使うときがくるさ」
「そうだといいな」
「・・・あらら、そろそろお目覚めみたいだね」
「まあ催眠ガスだしな。じゃ、またサポート頼むよ」
「ああ。任せてくれ。・・・なんなら代わってもいいよ？」
「考えとくよ」

そういうと、彼はこの教室から消えた。

「大丈夫だよ、礼君。僕は何があっても、君のことを大好きな親友だから」

なじみの呟きが、誰もいない教室に響いた。

・・・・

「・・・お？」

目が覚めた。
状況を確認しようじゃないか。

善吉が誰かに向かって指をさしている。
阿久根先輩は腕を押さえて痛みに耐えているみたいだ。
で、その刺された方向に悠々と立っているのが都城先輩。
その遠くには行橋先輩。
で、柱の影には真黒さんがいる。

「・・・どっこいしょ」
「む？起きたのか貴様」
「ええ。なかなか状況が読めませんが」
「まあいい。貴様も『平伏せ』」
「『断る』」
「・・・やはり効かぬか」
「まあ、ね」
「貴様、何かが変わったか？あのときの雰囲気ではないな」
「ああ、そうだね。確かにそうかもしれない」
「・・・貴様も異常だと認めたというところか」
「こんな愚民の考えを理解してくれて嬉しいよ王様」

さて、状況を整理しなおさないと・・・

「・・・いえ、人吉クン。だからってーーーではありません」
「！？」
「これまでの私は愚かでした。正しすぎる私は、何かの間違いだったのです」
「おやおや、なんだ来たのか。黒神めだか」

「黒神めだかではありません。黒神めだか（改）です」

・・・拘束具をつけた服を着て、現れた。

なんか都城先輩と名瀬先輩が話しているがどうでもいい。

この黒神に対して思うこと・・・それは、

「面倒くさい」

「面倒くさいとは何ですか。鳴神くん」

「・・・君付けはいらねえよ。同級生のほうがしっくり来るね。そうだろ黒神」

「黒神ではありません。黒神（改）です。私はすでにあなた方の知る黒神ではありません。いまや私は私ではなく私であり、かつていた愚かしい黒神めだかは永遠に失われました」

「・・・ふうん。で？お前はこれからどうするの？」

「はい。人吉善吉庶務、阿久根高貴書記、喜界島もがな会計。これより生徒会執行部はフラスコ計画に全面協力します。私は『十三組（サーティー）の十三人（ン・パーティー）』に加入し、計画の完遂を目指します」

・・・まあ、好きにやりな。

俺は違う目的があるから。

「・・・鳴神くんも手伝ってください」

「嫌だよ。なんで俺まで手伝わなければいけない。やりたきゃ自分たちで好きにやんな」

「君はもともと十三組でしょう？」

「俺はこの計画を潰すために来たわけでもない。ましてや完遂させるためにも来たわけじゃない」

「ではどのような理由で来たのですか？」

「・・・今のお前に教える義理は無いな。黒神（改）」

・・・さて、この下・・・か？

「『跪きなさい』」

この言葉に、善吉達は跪く。

「・・・『嫌だ』」

俺は拒否するがな。

「！！」

「阿呆。俺にそんな言葉遊びが通じるものか」

「貴方は・・・何なのですか？」

「俺は、異常だよ。どこにでもいるただの」

「・・・貴方、昔会ったことがありませんか？」

「さあね。思い出せなければあってないんじゃないか？」

「・・・そうですか」

階段が見つからないな。

「・・・！！」

「・・・」

善吉と黒神（改）が戦闘を始めた。

さて、俺はどうしようか？

「君、ちょっといいかな？」

「？古賀先輩？」

「あの時はよくもいろいろ言ってくれたわねーーーーーー！！！」

「ぬおおおおおお！？」

いきなり殴りかかられる。
後ろの壁に拳がめり込んだぞ！？
なんちゅう馬鹿力！！

「一発、一発だけ殴るーーーーー！！」
「『欲視力（パラサイトシーイング）』！！」
「いけえええええ！！」
「うお！？」

相手の視界を乗っ取って、自分も見ることが出来る能力を使い、攻撃を回避する。

「なんで！？当たらない！？」
「当たったら死ぬわ！！」

古賀先輩怖えええええええ！！！
何？何なのこの威力！？

「じゃあ死ねえええええええ！！」
「なおさら嫌だわ！！」

スピードが上がり始めたぞ！？

「ってうお！？黒神が光ってる！？」
「え！？」

あっちはあっちで何が起きてるんだよ！？

「ん？黒神が立ち上がって・・・扇子を広げた？」
「どうなってるの？」
「俺に聞かれてもなあ・・・」
「れ、礼！！」
「どうした？善吉？」

なんかすごい嬉しそうな善吉がこっちにやってきたぞ？

「めだかちゃんが戻った！！」
「「あれで戻ったの！？」」

光って戻ったのか！？
いったいどういう仕組みだ！！

「・・・鳴神同級生」
「ん？どうした？」
「君は・・・あの異常な子供が集まっていた病院にいたのか？」
「おう、いたよ？」

久しいな、あの病院。
異常性を確かめるための病院だったか？
・・・ん？『君』？

「じゃ、じゃあ・・・もしかして・・・『レイちゃん』？」

・・・・・・・・。
・・・・・・・・あ。

「・・・ちょっと待ってくれめだかちゃん。レイちゃんは俺も覚えてるけどな？めだかちゃんと俺と一緒に遊んでいたし。でも、礼は

違うだろ？『ちゃん』がついてるんだぜ？」
「・・・」
「れ、礼？」
「・・・そうなのだな？」
「・・・久しぶりに呼ばれたな。忘れてくれ」
「え、えええええ！？」

善吉の大絶叫が部屋中に響き渡る。
あの時は、今と同じで腰ぐらいまで伸びてたし・・・。

『昔の君は、今よりも女の子ぽいね』
「（人の過去を覗くんじゃない！てか『今よりも』ってなんだ！！）」
『髪が伸びた程度で男たちの視線をあそこまで受けるわけが無いだろう』
「（嘘だーーーーーー！！俺は、俺は男らしくなったはずなんだ！！）」
『髪を切ったらね。男に見えなくも無いさ』
「（・・・泣きそう）」

なじみの言葉が辛い・・・。
意外とダメージがでかいな・・・精神的に・・・。

「久しぶりっ！！」
「うおっ！？」

黒神が抱きついてきたぞ！？
しかもなんだ今の声！？
いつもの黒神じゃない！？（改）か！？そうなんだな！？

「・・・黒神めだかの真骨頂その？『ツンデレ』」
「説明ありがとう善吉・・・。そして助けろ・・・！」
「あの時と変わらずサラサラの髪だなあ！」
「・・・レイちゃん」
「その名で呼ぶなあ！善吉！！」

こいつ、なんで今頃になってその名前を持ってきたんだ！？
畜生！状況が理解できない！！

「さて、感動の再会もして満足したし、本題に戻ろうか」
「では黒神めだか。俺達もそろそろ下校したいし、最後の実験（たたかい）を始めよう」

・・・さて、俺が聞かなければいけないことは唯一つだ。
期待通りの返答を待ってるぜ？

「黒神、お前の決意はどうなった？」
「決まっている。『フラスコ計画を叩き潰し、もちろん貴様達も幸せにしてやろう！』」

いつもの凛ッ！とした状態で、黒神は答えた。

第二十二箱　フラスコ計画『肆』（後書き）

「安心院なじみの能力講座！」
「今回は原作にも出てきた能力だ」
「ま、知らない人もいるしな」

『欲視力（パラサイトシーイング）』
他人の視界を乗っ取って自分が見ることが出来る能力。　能力によって視界を乗っ取られた相手は、特に自分の視界が見えなくなるわけではない。

「・・・これのどこが強いのかたまにわからなくなるな」
「相手の視界が見える。格闘ゲームで例えると『相手の次に出す技がわかる』という感じかな」
「なるほど・・・つまり相手の攻撃が読める、という認識でいいのか？」
「君もそうやってあの古賀とか言う人の攻撃を避けていただろう？」
「まあな」
「じゃ、今回はここまでだよ」

第二十三箱　フラスコ計画『伍』（前書き）

すみません！手違いで消してしまい、バックアップも取っていなかったので内容が前と少し変わっています。
こんなことが無いように注意いたします！本当に申し訳ありませんでした！

第二十三箱　フラスコ計画『伍』

「高千穂三年生と殴り合いになったり、善吉が殺されそうになったり、くじ姉と六年ぶりに再会したり、私が洗脳されたり・・・。まあ概ね私の責任なのだが」

茶々を入れるようで悪いが、お前ら何やってんだ。
殴り合いはまだわかるが・・・、善吉が殺されそうになったというのはどういうことだ？あれか？二階の天井に突き刺さっていた刀剣か？
そしてくじ姉って誰だよ。
もうちょっと後から来た奴にもわかるように説明してくれ。

『知りたかったらめだかボックスというマンガを買おうね♪』
「（なじみ、お前は何の宣伝をしているんだ？）」
『なあに、ちょっとした読者へのアドバイスさ』
「（・・・そこからわからんが・・・）」

「どうも今回は話があちこちに飛んでしまったきらいがある。ここで一度初心に立ち返るとしよう。『フラスコ計画を今日中に叩き潰す！』・・・確か私はそんな志を胸に抱いて地の底までやって来たはずだ」

・・・どうやったら志を忘れる出来事がここまで起こるのか教えて欲しいところだな。実践して欲しくはないが。

「・・・いいだろう黒神めだか。ついてくることを許そう。地の底で決着をつけようではないか」

ガコンッ！という音と共に都城先輩の足元の床がスライドし、階段が現れる。

「地下十三階・・・最深部にして最新部。フラスコ計画の真相へとご招待だ」

・・・・・・・これで、俺の目的が果たされる。

理事長がどういうつもりで俺を招待したかなんて知ったことか。

求めるものは唯一つ。そう、たった一つ・・・・！

「・・・何か欲しいのかい？鳴神君」

行橋先輩が俺に語りかけてきた。敵意の籠もった言葉ではなく、純粋な興味が含まれる言葉だった。

「ええ・・・・俺の十三年間待ち望んだものです」

「へぇ、それがこんな最深部にねぇ」

「理事長のご期待通りの結果ですよ。全く、油断も隙もねえなあの爺さん・・・」

「君の本音が聞けた。それについては僕も同感だ」

・・・お、もう到着か。意外と早いな。

重い扉が開かれる。

まぶしい光に目を細めながらも見た世界は、まるで軍の情報局のような大量のコンピューターが設置してある世界だった。

「それにしても・・・寒いな」

「仕方ないんだよ、鳴神君。これくらい冷やさないと僕たちは五分で蒸し焼きになってしまうからね。なにせ１３万１３１３台ものスーパーコンピューターが二十四時間三百六十五日休むことなく並列

で動作しているんだ」
「・・・・それはまた、お金をどれだけつぎ込んだのやら」

この圧巻の光景そのものがフラスコ計画ってことか・・・。
さて、ここでフラスコ計画について再び説明したいと思う。俺が理事長から昔聞いた話を含めてだ。わかっている人は別に聞かなくてもいいだろう。見る必要も無い。進めてもらってもかまわない。

フラスコ計画とは『完璧な人間を作る』という目的で作られたプロジェクトだ。
そしてこのスーパーコンピューターを見ればわかるかもしれないが、莫大な金額がこの計画に費やされている。国内でもこの計画に参加している人間を数えれば十万はくだらないだろう。
それら全員が『幸せ』になる、またはなりたいという意志でこの計画に参加していることだろう。
『友達が欲しい』『人のぬくもりが知りたい』『人に触って欲しい』『理解者が欲しい』『保護者が欲しい』『敵対者が欲しい』『知人が欲しい』『恋人が欲しい』・・・・しかし、異常者で、化物であるがゆえにそれが出来ない。
だからこそ、そんな人間関係が築きたい、欲しい。そんな関係性が何よりも。
天才で天災な者達の望む夢の王国。
それを実現可能にする道標。それが『フラスコ計画』。

「鳴神、貴様も計画に一時期だけとはいえ参加していたならわかるはずだ。これがどれだけ素晴らしいを！」
「・・・嗚呼。そうだな。これは素晴らしい理想郷だよ。俺だって望んださ。『こんな世界があるなら』『俺は普通に暮らせるのに』と」
「そうだろう。貴様も異常者ならわかってくれると信じていたよ」

都城先輩が満足そうに頷く。

「鳴神君、こちらへおいでよ。君は、幸せになる権利があるんだ」

行橋先輩が右手を差し出す。

「さっきは、ゴメン。でも同じ理想を持ってるってだけで少し、いや、凄く嬉しかった」

古賀先輩が嬉しそうな笑顔で俺を見る。

「・・・」

名瀬先輩はそっぽを向いているが、口元が少し上に上がっている。

・・・嗚呼、やはり世界は美しい。

人が笑顔になるだけで、世界はこんなにもキラキラと輝いているんだ。

俺は生徒会側の人間でもなければ、フラスコ計画側でもない。

・・・でも、人はこんなにも嬉しそうに笑って、満足そうに頷いて、照れ隠しのようにそっぽを向いて、謝りながらも嬉しそうにしていて、手を差し伸べてくれる。

嗚呼なんて美しいのだろうか。俺も、俺もあんな風に美しい世界の住人になれるのならばもう一度・・・。

『でも』

「・・・この箱庭学園（フラスコ）の人を実験台に、犠牲にはさせない」

「礼・・・」

「鳴神よ。つまり犠牲者が出なければ問題ないのだな？ならば黒神、それに鳴神。これが最後の勧誘にして、最終通牒だ。フラスコ計画に協力しろ。犠牲者が出ぬよう知恵を振り絞り、取り計ればよいだろう。そちらには黒神もいることだ。文句は無いだろう。俺達も幸せになり、貴様達も幸せになり、皆が幸せになる。落しどころの妥協点としては悪くないはずだ」

「違うよ。都城先輩。俺が言いたいのはそれだけじゃないんだ」

「ほう？ではなんだ？」
「・・・『完全な人間なんて作れない』。だよな、黒神」
「ああ。全く、貴様達の方が私よりもよっぽど理想主義者だよ。とても理解に苦しむし、ある意味本気でうらやましい。どうしてそこまで夢見がちでいられるのだ」
そうだ。完全な人間なんて作れない。
「完全な人間が作れたとしても、不完全さがなければそれは完全じゃないから」
「・・・鳴神君！それは改造人間である私への否定だよ！君は、君なら・・・！」
「・・・そうさ。同じ理想主義者だ」
「だったら・・・！君はわかるでしょう！？」
「・・・それでも、俺は否定する。否定して否定して否定する」
「・・・・！！！」
「古賀さん、ここは僕が彼と話しをするよ」
「行橋さん・・・！」
「彼も、君の気持ちがわかっているんだ。心の奥では賛同してるんだ。でも、彼は否定しなければならない」
「どうして・・・？」
「・・・彼がフラスコ計画で何かがあった。僕は彼の過去まで知ることは出来ない。だから、それしか言えない」
・・・行橋先輩は本当に頭がいい。
人の思考を読むだけじゃない。彼は優しすぎるんだ。だからこそ、人の心の痛みまで理解してしまう。
「・・・わかりました。鳴神！アンタはやっぱり一回殴るからね！！」

「避けるという手段をとっても・・・？」
「駄目！腹括って待ってなさい！！」

・・・助けてくれ。

「あはは、大変だね。君も」
「そう思うのなら助けていただきたいところです」
「僕が彼女の腕力に勝てるとでも？」
「・・・失礼ですが無理ですね」
「大丈夫だよ。結構言われるから」

本当に話ができる人で助かる。

「さて、あっちで古賀さんが黒神さんにキレてる間に聞きたいことを沢山聞いておこう」
「なんでしょうか？」
「君がフラスコ計画に求めたものはなんだい？」
「・・・『普通になる』。それだけでした」
「そうか。君の中では・・・」
「はい。俺の中では完全な人間は普通の人間だったんです」
「・・・そうか、それで意見の食い違いが起きたのか」
「はい。でも、古賀先輩の考えは、都城先輩の考えは俺は大好きです」
「・・・そうだね。僕もそう思うよ。じゃあ次だ。君は、一体過去に何があったんだい？」

・・・ここは結構言いたくない。
思い出せば辛くなるから。また孤独で苦しい記憶しかないから。

「・・・君の、トラウマなんだね」

「・・・はい」
「なら無理をしなくていいよ。それじゃあ、最後に聞いていいかな？」
「なんですか・・・？」
「・・・本当なら、君の異常性（アブノーマル）と聞きたいところだが、計画変更だ。君はどうしてそんなに優しいのかな？」
「・・・簡単ですよ。俺の世界を彩っているのは、いつも人の笑顔ですから」
「・・・本当に、君は憎らしいほど優しいね」
「こんなの言うのはあなたが初めてなんですよ？」
「それはよかっ・・・！？」
「せんぱい・・・？」

行橋先輩が、左胸を抑えて倒れた。

「・・・ああ、遠くに離れていろと言うのを忘れていたな。古賀の胸を貫かれた痛みを受信してしまったか」

声のする方向を見る。
そこには背中から大量の血を出している古賀先輩と、その場で泣き崩れる名瀬先輩、そして、蹴り飛ばされてスーパーコンピューターを貫通してもう一つ後ろの壊れた残骸のスーパーコンピューターに座るようにいる黒神だった。

「・・・あ」
「・・・・・・・・・」

行橋先輩を見る。呼吸はしている。ダメージが強すぎたが気絶ですんだようだ。

「・・・よかった」
「鳴神、お前のも頂くぞ。その未知数、王が使ってやろう」
・・・え？
「れ、礼いいイイイイいいイイイイいいイイイイ！！」
胸を貫かれ、電気が走る。
「・・・・・・・」
「ふむ、・・・！？」
「・・・・・・あ」
「き、貴様！！」
腕を引き抜かれた。
背中から大量の血が迸る。意識が朦朧としてくる。
それでも、俺は・・・。
「・・・・・・・・」
「貴様・・・なんだそれは・・・！？なぜ徴税できぬ！！それに、なんだその不気味なものは！？」
「・・・・・・・・」
沈黙。それしか出来ない。思考が回らない。口から鉄の味がする。
赤い液体が垂れてくる。言葉を発する力が無い。
「・・・死んだか」
「・・・・・・・礼・・・・礼！！！」
・・・なんだよ、泣くなよ善吉。

「・・・あ」
「!?貴様、どうして・・・!?」
傷が『消える』。無かったかのように、受けていないかのように。
「・・・また死ねないのか」
「まさか・・・!どうやって・・・!」
「別にいいさ・・・。それより・・・あっちだ。『現実踏否(ブレイクダンス)』」
古賀先輩に黒い光を向ける。
『傷の重さ』を『軽く』する。
少しでも直りやすいように、命の危険が無いように。
「・・・潰れろ!!」
電磁波を操り先ほど残骸となったスーパーコンピューターをかき集め鉄塊へと変化させる。
「・・・嗚呼、重そうだな」
だけど、俺には関係ない。
「・・・よっと」
その塊の位置まで跳ぶ。
自分の『重さ』を『軽く』して。
「さてと、おもちゃは没収だ」

自分の攻撃だけを『重く』して鉄塊の重量を『軽く』する。これで、どれだけ硬かろうが重かろうが関係ない。重力などあってないのだから。
ガキャアアア！！という音と同時に蹴り飛ばす。

「なっ！？なんだその貴様の異常性（アブノーマル）は！！どうなっている！！」
「ただの空元気ですよ・・・。黒神、支援はこれだけだ。体力が無い・・・。善吉、落ちるからキャッチ頼んだ」
「あ、ああ！！」

黒い光が消え、俺の重力が元の重さまで戻る。
それと同時に落下速度が急激にあがった。

「うおおお！キャーーーッチ！！」
「わ、私も手伝う！！」
「俺もだ！！」
「・・・ナイス」

皆、やっぱりお前達は頼れるな。
はぁ、体力がなくなるなんてな。

「な・・・ううん礼君」
「どうした喜界島」
「行橋先輩を助けてくれてありがとう」
「・・・俺の巻き添えをくらわすのはごめんだからな」
「不器用だね」
「うるせえ」

・・・あ～、本当に体力無いな俺。

「こういうことはあまり聞きたくないが、貴様、それでも人間か？」

黒神が都城先輩に言う。・・・頼んだぞ黒神、体力がない俺はそこらの柱にもたれかからせてもらうから。

「ああ。もちろん俺が人間だ」

自信満々に、胸を張って答える都城先輩。

「そうか・・・なら」

黒神は一呼吸置き、叩きつけるように叫んだ。

「私は化物でよい！！」

そして、都城先輩の腹に肘を叩き込んだ。

第二十三箱　フラスコ計画『伍』（後書き）

安心院なじみの能力講座！

「さって今日は礼君が使用した『現実踏否（ブレイクダンス）』についてだ。ちなみに、礼君は体力が無いから今日はいないよ」

現実踏否（ブレイクダンス）・・・『重さ』を操る能力でその扱いは実に多種多様。傷の重さを『軽く』したり、自分にかかる重力を『軽く』したり、攻撃を更に『重く』したりできる。便利だよね。

「これの欠点はどうあがいても『軽く』しか出来ないこと。傷は完治できないなどがいい例だね。まあ、それでも十分役に立つ能力だね。ちなみに、この『ブレイクダンス』という名前は知っての通りだ。『重さに逆らう踊り』という風に見えた作者が技名と能力をつけたみたいだね。作者安直過ぎないかい？と、いうわけで今回はここまでだよ」

第二十四箱　フラスコ計画『陸』

「都城王土、貴様が人間なら、私は化物でいいよ」

前に見た『乱神モード』とは少し違う。
あの時は、髪の色が少し薄く見えた。
だが、今回は漆黒といっていいほど黒い。

「ぐっ・・・はっ・・・！」
「動かんほうがいいぞ。嫌な手ごたえがあった、おそらく内臓が破裂している」
「・・・ふ、ふはっ。王に命令するなよ！黒神イイイ！！」

都城の拳を見切り、完璧に避けたふうに見えた。
しかし、黒神の頬から少し、出血が見えた。

「・・・避け切れなかったか」
『それよりも、驚くべきはあの回復力だね』
「・・・ああ。あの回復力と攻撃力が古賀先輩の異常だったのか」
『改造、されていたみたいだね。どうする？君の能力ならあれぐらい直せると思うけど』
「・・・大丈夫だ。あの二人がいる。『改造』と『解析』のスペシャリストなんだろ？」

古賀先輩の応急手当に取り掛かっている真黒さんと名瀬先輩を見た。

『そうだね。軽くもしていたし大丈夫だろう。さて、礼君はどうする？』
「・・・何もしない」

『じゃあ、「炎々武踏会（ボレロ）」と「欲視力（パラサイトシーイング）」を返却してもらうね』
「ああ」

・・・

夢の中に入り、顔を上げた。

「やあ礼君」
「・・・おう。頼むぞ」
「任せなよ」

『口写し（リップサービス）』が発動され、能力がなじみに返却された。

「・・・これでいいかい？」
「ああ。俺の能力は今回は使わない」
「じゃ、また」

・・・

「・・・起きた、か」
『お帰り、礼君』
「ああ」

いつもながら、どっちが現実かわからなくなるな。

「そして、さっきの四肢から放たれた黒い光。これは鳴神が行橋先輩を助けルことを目的で鉄塊を破壊するために使用した能力。なんの解説もしていないのに黒神はそれを当たり前のように使った」
「・・・え？あれ使えたの？」

今黒神の能力説明なんだろうけど、一度見ただけで『現実踏否（ブレイクダンス）』を使えたのは驚きだ。

「つまり、黒神は他人の異常性（スキル）を使えるんじゃねえ。他人の異常性（スキル）を使いこなし、完成させることが出来るんだ。『完成（ジ・エンド）』。それが黒神めだかの異常性（アブノーマル）だよ」

「・・・なんか滅茶苦茶な能力だな、おい」

『けっこう常識の斜め上を行く子だからね』

「それは説明にならねえよ。・・・さて、結果は見えたな」

これはもう黒神の勝ちだな。

自分のスキルを１００％しか使いこなせない都城じゃ勝ち目は無い。

それでも、徴税するのが都城だ。だが、

「・・・ああ、黒神（あいつ）は心から屈服させるつもりか」

心臓へと向かう都城の右腕を、受け入れるかのように黒神は両腕を開く。

そして黒神めだかの心臓に、都城の右腕が突き刺さる。

「ひいいいいいいいっっ!?」

だが、悲鳴を上げたのは都城だった。

・・・あいつの何を見たのか知らないが、自身を化物と認めた黒神は王では勝てないよ。

「冗談じゃないぞ、お前・・・あんなものを、あんな取り返しのつかないものを俺に押しつけようとしたのかお前は!?お前は人間（おれ）をなんだと思ってるんだ!?このっ・・・化物が!」

「・・・で、言いたいことはそれだけか?」

都城が激昂する。
押しつけようとなんてしていないがな。
お前が勝手に取り立てただけだ。

「・・・俺の負けだ。偉大なる俺はもう二度と王を名乗らん。フラスコ計画も今日をもって凍結する。だから、許してくれ」
「・・・言いたいことはそれだけか？」
「行橋と古賀の命は保障する。これまでフラスコ計画が犠牲にしてきた者達にもできる限り保障しよう。だから・・・許してくれ」
「言いたいことはそれだけか？」
「・・・！『言葉の重み』も『理不尽な重税』も永久的に封印する！今後、絶対に悪事は働かないと誓う！だから！許してくれ！！」

・・・黒神が聞きたいのはそんな言葉じゃないんだよ。
もっと単純明快に、簡潔に、そして、たった一言。
これが言えればいい。

「それ、だけか？」
「・・・それ以上、俺にどうしろというのだ・・・！！」
「・・・いや、別に何もしなくていいんだよ。あれこれ言わずに、反省してくれればそれでいいんだ。悪いことしたら、『ごめんなさい』だろ」

・・・あ、都城先輩が固まった。
と、いうより呆けてる？

「ごめんなさい」

土下座をしながら、黒神に謝った。

「んっ、許す！」

・・・ははっ！やっぱりこっちの方があいつらしいな。

「これにて一件落着ゥ！」
「お疲れ様でした」

・・・本当に、お疲れ様でした。

第二十五箱　フラスコ計画『終了』

・・・さて、この後追記することといえば。

「・・・なんか面倒だな。阿久根書記、スパコン全部壊しちゃえ」

「ええっ！？」

黒神が恐ろしい発言をしたり、

「行橋、大丈夫か？」

「ああ、うん。ありがとう王土」

助かった行橋先輩と都城先輩が再び仲良くなった。

そして、ここからが俺の目的だ。

「礼、お前は乗らないのか？」

「いや、俺は今からが仕事だ」

「・・・？そうか、じゃあ先に行ってるぞ」

「ああ」

「・・・あった。これだ」

俺の、目的のデータが見つかった。

「・・・『鳴神　礼の解剖データ』」

『解剖・・・だって・・・・！？』

「これが、これが俺の、実験データ」

『・・・内容は？』

「ああ。・・・『手順一、右腕を切断。手順ニ、左腕を切断』・・・」

『下種が・・・・！』

「・・・『手順七十二、右目の摘出。・・・手順九十六、脊髄の摘出』・・・」

・・・思えば、よくここまでやったもんだ。

「・・・『結果、彼はどの方法でも死なない。験体名「生きる屍（リビングデット）」と命名。能力はわからずじまいである。彼についての研究は、これ以上の発見は困難とされたため、中止する』」

『・・・君は、報われなかったままか』

「・・・俺の能力、か。奇しくも、この実験の終了後に判ったんだったな」
『・・・それが、君の能力』
・・・さて、このデータは頂いて行こう。
「・・・よし。じゃ、帰るか」
『そうだね。早く帰って君の小さい頃を見ないと』
「やめろ！あの頃は本当にからかわれたくないんだ！」
エレベーターに乗り込む。
パスワード？適当に打ち込んだら当たった。
「・・・こういう時間は長く感じるんだよな」
『何かを待つのはそういうものだよ』
「ああ。カップラーメンもそうだよな」
『喩えが具体的でよろしい』
「・・・お、着いたな」
ドアが開き、見えた光景は・・・・
雲仙先輩達の体に螺子が突き刺さり、倒れている光景だった。
黒神たちが呆然と立ち尽くす中、一人だけ、飄々と振舞う一人の女子の姿があった。
だが、箱庭学園の制服ではなく、有名校である水槽学園の女子の制服だった。

髪の長さは俺と同じぐらいで、日本人の特徴であるカラスの羽のように黒い。
まあ可愛いと思うレベルの容姿をしている。小動物を連想させる可愛らしさがある。
・・・頭にフランケンのように螺子が突き刺さってなければ。

「・・・何が・・・あった・・・？」
「『あっ！』『この声！』『礼君じゃないか！！』」
「お前、球磨川・・・？」
「『れーいくーん！！』」
「ええい飛び込むな！！」
「『きゃう！』」

なぜか笑顔で飛び込んでくる球磨川を避け、飛び込んできた球磨川は壁に激突した。

「・・・回避成功！」
「『避けるなんて酷いよ礼君』」
「ええい、纏わり付くな！腕を絡めるんじゃない！！」
「『酷いなあ』『僕は君の彼女なのに』」
「断じて違う！それはお前が言っているだけだ！」
「『あ』『それでさ』『礼君』」
「明らかに話を逸らしたよなあ、お前！！」

・・・コイツは、あの病院で出会った時と全く変わっていない。

「れ、礼・・・。お前・・・・」
「く、球磨川さんと知り合いなのか？」
「『許婚だよ』」
「ええっ！？」」

「嘘だ。大嘘だ。コイツは俺の親を知らない」
「『大丈夫だよ、愛があれば』」
「それはお前だけだろうが！！」

ああもう、コイツは本当に変わっていないな！！

「『それより礼君、聞いてよ！』『僕さ、今日付けでこの箱庭学園に転校してきたんだ』『だから理事長に挨拶に行かなきゃいけないんだけど』『道に迷っちゃって！』『よかったら理事長室までエスコートしてくれない？』」
「お断りだ。今理事長に会いに行きたくないんだ」
「『あらら』『振られちゃった』『まあいいや』『学園を探検するというのも面白いからね！』」
「・・・ああ。頑張れよ」
「『じゃ！また明日とか！』『愛してるよ礼君！』」

・・・嵐が通り過ぎた感覚だ・・・。

「・・・はあ、もう疲れがどっときた」
「お前、あの女と知り合いなのか？」
「・・・まあ。何の因果か俺のことをあんな風に言うのですが・・・」
「苦労しているのだな」
「あいつ、他の学校で『僕には将来を決めた礼君という男性がいるんだ！』って宣言してなきゃいいけど」
「・・・そこまでなのか？」
「あいつはそこまで言いますよ。全く、明日から登校拒否になろうかな・・・」

いやマジだよ？

あいつは本当にしんどい。

「ああ、吐きそうだ・・・」
「礼、あいつとどこで知り合ったんだ？」
「黒神や善吉と出会った場所。そこで出会った」
「「！！」」
「・・・はあ、『愛してる』か。嘘ならいいのに」

ああ、明日がこんなにも嫌なのは久しぶりだ。

第二十六箱　黒神めだかの携帯探し。それから・・・？

・・・さて、昨日の球磨川の事件から次の日。
まあ球磨川とは遭遇せず、放課後までゆっくりと過ごした。

「礼、頼みがある」
「どうした？黒神」
「携帯電話というのを一緒に探して欲しいのだが」
「おう。じゃあ向かうか」

黒神が携帯電話を買いたいという話を持ちかけられ、携帯ショップに向かうことにした。
携帯会社は俺と善吉と同じ。
そっちのほうが安いからな。

「おお！こんなにいっぱいあるものなのか！」
「ま、選ぶなら最新型がいいか。お前、所持金いくら？」
「今・・・二十万だな」
「・・・おい、それは学生としてどうよ？」
「足りないのか？」
「十分足りるわ！」

コイツはやっぱり少しずれてる！

「・・・なるほど、こういう機能まで付いているのか・・・」
「それにするか？」
「礼のオススメは何だ？」
「俺か？俺は・・・これだな」
「それは・・・おおっ！キラキラしてるぞ！」

「俺と善吉と同じ奴だ。色は青色。これにするか？」
「うむ！幼なじみ同じのがいいだろう！これにするぞ！！」
「じゃ、あとは手続きか・・・」

そこからが、波乱だった。
黒神の名前を出した瞬間、店員が急に低姿勢になったり、代金は半額だとか言い始めたりとすごい状態だった。
まあ、コイツが「私は自分のお金で買うつもりだからそんなことはしなくて良い」と言ってくれたおかげでことは収まった。
店員から店長までビクビクしっぱなしだったが。

「・・・ふう。これで私も現代人だな」
「いや、それが無くても現代人だがな？じゃ、そこのベンチで携帯の使い方を少し覚えておこうぜ」
「そうだな。説明書が思っていたより分厚かったのでな。早く全部覚えたいものだ」
「いや、全部覚えなくていいから！」

と、言うわけで俺の携帯講座スタート。

「・・・よし！これでいいな！」
「お疲れ様でした～」

現在の時刻、午後八時半。

「では、礼！早速貴様の番号を登録させてもらうぞ！赤外線通信だ！」
「おう。・・・、よし。送ったぞ」
「おお！礼の名前が私の電話帳に・・・！」
「じゃ、そっちも頼むよ」
「ああ！ピコピコピコ・・・あった。じゃ、送るぞ～」
「おう。・・・・よし、届いたな」
「これで、私も礼と遊びたいときに誘うことが出来るな！」
「そのときは頼むよ」
「ああ！・・・おお、そろそろ門限だ。では」
「じゃあな～」

黒神と別れた。
・・・まあ、嬉しそうにしてたから良かったんじゃないか？

「あの・・・」
「ん？君誰？」
「私、江迎怒江といいます。箱庭学園がどちらにあるか知りませんか？」
「・・・こんな時間には開いていないと思うが、それでもいいのか？」
「はい。案内をよろしくお願いします」
んじゃ、行きますか。

「・・・？どうした？」
さっきから静かだな。
なんか自分の手を胸で押さえてるし・・・
「い、いえ、その・・・」
「なんだ、怖いのか？ほれ、手を握ってやるよ」
「え・・・？」
「ん？」
なんだ、江迎ってやつ微妙に顔が赤くないか？
「え、いや・・・その・・・／／／」
「ほれほれ」

「あ・・・！ダメっ！」
「へ？」

あらま、手を伸ばしてきたから握ろうとしたら戻してしまった。

「その・・・私」
「ふむ、えい」
「あ！握ったら貴女の手が・・・！」
「・・・？」
「あれ・・・腐ってない・・・。あれ？あれ？」

・・・なるほど、コイツも何か能力があるのか。

「・・・あ、猫ちゃん」
「触ったら？」
「で、でも・・・」
「大丈夫だ。腐らないから」
「・・・は、はい」

恐る恐る、手を伸ばし、猫に触れた。

「あ・・・！く、腐らない・・・！」
「良かったな」
「ありがとう！ありがとう！！」
「ま、俺と手をつないでる時だけだけどな」
「それでも・・・ありがとう・・・！」
「な、泣くなよ・・・！」

よっぽど触れるのが怖かったんだろうな。
それと、うれし泣きか。

「・・・あの、お名前教えてくださってもよろしいですか？」
「ああ。俺は鳴神　礼っていうんだ。よろしく」
「礼さんですね。私は怒江と呼んでください」
「よろしく」

・・・お、目的地に着いたな。

「ここだよ」
「・・・大きいですね」
「色々あるからね」

本当に色々あるからなあ・・・

「ありがとうございました、礼さん！」
「いやいや、じゃ、帰ろうか」
「はい！」

「・・・本当に、ありがとうございました」
「いやいや。また何かあったらこの番号に連絡頂戴」
「はい。ではまた！」

・・・うむ、いい子だったな。

「・・・それにしても、スイッチが無いのか」

『彼女、球磨川くんと同じ過負荷（マイナス）だよ』

「やっぱりか。腐ると聞いた瞬間理解したが、彼女は過負荷の中でもまだ『幸せになりたい』と願ってるんだろうな」

『そうだね。・・・あのさ、礼君』

「なんだ？」

『君はさ、僕とこうやって会話できて幸せかい？』

「・・・ああ。あの時にお前と出会わなかったら、俺も過負荷だったよ」

『・・・そっか。うん、そっか！』

「どうした？」

『いや、これからも親友でいようね』

「あたりまえよ」

・・・こうして、一日が過ぎた。

「と、言うわけでもっと仲良くなろうじゃないか」
「やっぱりこうなるのか！？」

夢の中でマウントポジションを決める親友の笑顔は、とても輝いていた。

「今日はマウントポジションだけじゃないからね？」
「何をするつもりだ！？」
「最終的にはコブラツイストかな？」
「やめてくれえええ！！」

・・・夢日記でした。

第二十六箱　黒神めだかの携帯探し。それから・・・？（後書き）

「礼さん・・・か・・・フフッ」

今日、初めてちゃんと猫を撫でた。
暖かく、サラサラしてる毛並みがとても気持ちよかった。

「不思議な人だなあ・・・」

今まで、あんなふうに手を握ってくれる人はいなかった。
私が触ると腐ってしまうから。
でも、礼さんは違った。
多分、彼にも何かがあるんだろう。

「また一緒に遊びたいな・・・」

今度はちゃんと誘って、猫とかを撫でたいな。
二人で手をつないで・・・。

第二十七箱　今度は球磨川だと・・・！？

「『やあ礼君！』『奇遇だね！』」
「扉の前で出会って奇遇もクソも無いだろ・・・」

朝から嫌なエンカウントをしてしまった。
例えるなら、レベル１の勇者が魔王に遭遇したときぐらいだ。
背伸びをしながら球磨川は俺に近寄ってきた。

「『今日は学園は休みだし』『デートしようよ！』」
「・・・ちなみに拒否権は？」
「『あはは！』『面白いこと言うな～礼君！』『あると思う？』」
「・・・畜生」

すっげーいい笑顔で言ってきやがって！
コイツに絡まれて運が良かった日はほとんどない。
昔、厳ついおっさんに絡まれたり、そこら辺のチンピラに絡まれたり、挙句の果てにはヤクザにまで絡まれたことがあるほどだ。
・・・財布は持ってるし、なんか知らないけど理事長がお金をくれたしまあ懐は暖かいな。

「『じゃ、行くよー！』」
「ちょ、待てって！」

右手をつかまれズンズンと進んでいく球磨川。
なんだろう？道行く人が俺たちを見ている気がする。
視線の先は・・・球磨川？いや、俺も見られている気がする。

「『礼君』『気がついてる？』」

「あ？何に？」
「『僕たちすごい注目されてるってコト』」
「・・・そうだな。てかなんでだ？」
「『礼君がかっこかわいいからじゃないかな？』」
「・・・かっこいいだけが良かった」
「『嘘嘘！』『スッゴクかっこいいよ！』『礼君は！』」
「そりゃどうも。で？どこに行くんだ？」

球磨川の台詞をスルー気味で聞き流す。
どうもコイツもつかみ所が無いので困る。
中学時代もこんな奴だったな・・・
球磨川が生徒会長のとき、俺は違う学校で、なじみは球磨川の学校の副会長だった。
俺がたまたま球磨川に発見され、生徒会室に引き込まれた時に、なじみと出会ったんだったっけ？
そんなことを考えていると、球磨川が頬を膨らましながら俺を覗き込んでいた。

「『ブー！』『スルーなんて酷いよ礼君！』『まあ』『クールなところもかっこいいけど』」
「で？どこに行くんだ？」
「『携帯ショップ！』」
「・・・お前、携帯持ってなかったっけ？」
「『新しい機種が出たから』」
「どういう理屈だ！？」

笑顔で意味のわからないことを言い始めた。
携帯ってそんなに必要ないだろうに。

「『その後ファーストフード行って』『時間潰して』『夜になった

らファミレスでも行って・・・』」
「お～い、球磨川～？」

頬を両手で押さえて身悶えしている球磨川に声をかける。
しかし妄想の力とは恐ろしいもので、俺の声は全く届いていない。

「『で、少し夜遅くまで公園で一緒に・・・』『そのあとは・・・』
『キャッ！／／／』」
「・・・」

ダメだコイツ、早く何とかしないと・・・！
道行く人が球磨川を嫌そうな目で見ている。
・・・少しハァハァ言ってるのもいるのは気のせいだと信じてやろう。球磨川の為にも。

そういってる間に、携帯ショップについた。

「『じゃ』『少し待っててね、礼君！』」
「ああ。行って来い」

・・・元気な奴だな～。
お店の中に文字通り飛び込んで行ったぞ？
常連なのか球磨川への対応が早いな。

『いいじゃないか。元気そうで』
「（お前と球磨川は親友だったか？）」
『そうだよ？お互いに大好きで、礼君がいなかったら僕たち結婚してたかも』
「（百合、か。そっちのほうがいいかも知れんぞ？）」
『馬鹿を言うなよ。僕も禊ちゃんも、君が大好きなんだよ？』

「（・・・恥ずかしいからやめい）」
『ふふっ、大好きだよ、礼君』

・・・コイツは。
くそお、絶対今顔が赤い・・・！

昔、親にも愛というものすら与えられていなかったせいなのかこういうのに耐性が無い。
『好き』と言ってくれるのはなじみや球磨川、善吉に黒神も、かな？もしかしたら他の友達も言ってくれるかもしれない。
・・・とても嬉しいことだ。涙が出そうなほどに。
俺が欲しくてたまらなかったものが、こんなにもすぐ傍にある。
・・・だめだ、嬉しくて顔がにやけてるかも。

「『たっだいまー！』『あれ？』『あれれ？』『どうしたのかな礼君？』『まさか大好きな僕と一緒にいることを想像したら嬉しくなったのかな？』」
「うっせえ・・・」
「『かわいいなあ、もう！』」

頭をなでられる。
折角落ち着いてきたというのに・・・！
見ろ、通行人が『仲いいわね』や『微笑ましい』みたいな目で見ているだろうが・・・。

「『さ』『お昼食べに行こうよ！』」
「ああ・・・」
「『うっふふ～♪』『れーいくーん！』」
「ええい！腕を絡めるな！もう夏だから熱いだろうが」
「『いいんだよ！』『愛があれば！』」

「新しい理由だな、おい！」

俺と球磨川の一日は、始まったばかりであった・・・。

第二十八箱　球磨川とデート？なのか？

「『ぼろぼろだね』『礼君』」
「だ・れ・の・せ・い・だ？だ・れ・の！」
「『いひゃいひゃいよ！』」

球磨川が言ったとおり、俺は今ぼろぼろである。
なぜか？
簡単だ。チンピラからヤクザの組長まで一気に絡んできたからである。
・・・不幸すぎる。
で、俺はそのストレスを球磨川の頬をつねって晴らしているのである。

「『らいひょうふらよれいくん！』『なおひてあげるひゃら』」
「それでもこのイライラをお前にぶつける！！」
「『いひゃひゃひゃ！！』」

・・・ああ、すっげえ今満足中。
ふう、もういいか。

「・・・じゃ、時間潰すか」
「『あうっ！』『い、痛いじゃないか礼君・・・』」
「うるせえ。さ、行くぞ」
「『まってよ～！』『直すから～』」

球磨川が触れた瞬間、俺の服から擦り傷までもが消えた。
・・・何したんだ？コイツ。

「『はい！』『できた！』」
「・・・さんきゅー。じゃ、行くか」
「『うん！』」

・・・ま、いいか。
深く考えたら、また馬鹿を見るし・・・。

・・・まあ、色々あったよ。
遊園地に行ったらジェットコースターの螺子が外れたり、お化け屋敷に行ったらセットのシャンデリアがマジで落ちてきたり、コーヒーカップに乗ったら機械が故障し止まらなくなったり・・・！
今、気持ちを落ち着けるためにファミレスに入って夕食を食べているところだ。

「『いやあ』『色々あったね！』」
「どうやったらあんなコトが一気に起こるんだよ・・・！？」
「『僕にもわからないよ』」

・・・まあ、今回のコイツは意図してしていないからな。
コイツに罪があるとは思えない。

「・・・お前、デザート何がいいんだ？」
「『う～ん』『パフェ！』」
「おう、店員さ～ん！パフェ一つ」

「は～い」

・・・ま、それなりに楽しめたといえば楽しめたかな。
最近は色々あったから、のんびりした日というものが少なかったし。

「はい、ご注文のパフェです」
「『ありがと～！』」

嬉しそうに頬張るな。
美味そうだ。

「『礼君も、はい！』『あ～ん』」

球磨川がパフェをすくったスプーンを俺に差し出す。

「俺はいいって」
「『いいから』『あ～ん』」
「・・・あーん」

頂きます。
・・・イチゴとアイスの美味しさがいいな。
またこのパフェを頼むとしよう。

「『ご馳走様でした』」
「おう。じゃ、行くか」
「『お金は僕が払うよ』」
「女性に出させるかっての。俺が出すから先に店から出とけ」
「『そう？』『じゃあ、お言葉に甘えて』」

球磨川が店から出た。

俺もさっさと勘定済ませて向かうとしよう。

「『最後はここだね』」
「・・・この公園とは、懐かしいな」

俺たちが今いる場所。
そこは、俺と球磨川、なじみが中学の時、放課後によく一緒に雑談をして盛り上がっていた場所だった。
夜は少し雰囲気があるな。

「『・・・懐かしいね』」
「ああ。そうだな」
「『礼君』『君は今幸せかな？』」
「・・・さあ、どうだろうな」
「『顔は幸せだって』『言ってるよ』」
「ああ、そうかもしれない」
「『ならいいんだ』『僕も』『君と一緒にいれて幸せだよ』」
「・・・そうか。それは良かったな」
「『うん！』」

球磨川は嬉しそうにベンチのほうに向かい、くるっと一回転して俺のほうに向いた。
街灯の明かりがコイツの笑顔を更に輝かせていた。

「愛してるよ！礼君！」
「・・・括弧が外れてるんじゃないか？」
「いいんだよ。今は括弧つけず、本気で言ってるんだから」
「そっか」

コイツは、本当に変わらない。
周りに俺たち以外がいないとき、俺に対して、「愛してる」と括弧つけずに言うところなんか全く変わっていない。

「『じゃ』『今日はここでお別れだね！』」
「ああ、じゃあな」
「『うん！』『また明日！』」

・・・手を振って、俺たちは別れた。

「愛してる・・・か」
『僕も、大好きだよ』
「そうか」
『嬉しそうだね、礼君』
「・・・お前達がそういうこと言うからだろ？」
『そうかな？そうかもしれないね』
「たく・・・」
『愛してるからね、僕も』
「・・・おう」

こいつもこいつで、変わらないな。

『一夫多妻制がＯＫな国で結婚式を挙げようじゃないか』

・・・本当に、コイツは変わらないな。

『大丈夫だよ。禊ちゃんも賛成してくれるから。それがだめなら、法律を変えてでも』
「まあ待て、法律を～はやめようじゃないか」

コイツなら、本当にやりかねん・・・！
やり遂げてもコイツなら納得してしまいそうで怖い。

一日の終わりを告げるかのように、夜の星が、美しく輝いていた。

第二十九箱　俺の、実験記録

俺は今、廊下を闊歩している。
休みが終わり、久しぶりに学園に来た。

「あ～！廊下に差し込む光が気持ちいい！」

さて、俺が今向かっているところは生徒会室。
黒神からメールが届いたので向かっている。
内容は、

『メールの試しもかねて送ってみた。今から生徒会室に向かってくれ』

とのこと。
メールだと本当に早いから助かるな。

「を、着いたな。失礼しまーす」

扉を開いて中に入る。

「おっ！来たな。礼！」
「おう、善吉」

善吉が右手を挙げる。
それにしても・・・

「花、すごい量になってきたな」

「頑張ってるだろ？俺たち」
「ああ。よくやってるよ」

生徒会室の外にまで花が飾られてるんだ。
コイツらも頑張ってるな。

「あれ・・・君・・・」
「・・・？善吉、お前の妹か？」

ちょこんと椅子に座って、紅茶を飲んでいる小さい女の子が俺を見て訝しげな表情をしている。

「いや、俺に妹はいない」
「へえ、じゃあこのそっくり具合はどういう説明になるんだ？」
「・・・お母さん」

・・・は？
今コイツなんて言った？

「お母さん？」
「うん。お母さん」

この小学生といっても何の違和感を持たない人が・・・お母さん？

「えええええええええええええ！？」
「気持ちはわかるよ・・・」

阿久根先輩が俺の肩に手を置いた。
・・・すっごく不自然だ。この親子。

「・・・あれ？善吉のお母さん？」

あれ？どこかで聞いたような・・・

「あ、ああ！人吉先生か！！」

「もしかして、礼くん！？」

あの病院以来だ。

いや～懐かしい。

「あ・・・れ、れい・・・くん・・・・！」

どうしたのだろうか？

人吉先生が震えている。

・・・あ。そうか。

「あなたは知っていましたね。俺の状態」

「だ、だい・・・じょうぶ・・・なの・・・！？」

「ええ、なんとか。正直もう経験したくないですけどね」

この人は知っていたんだった。

俺がなんであの病院に来たのか。

そして、俺の実験を。

「お母さん、どうしたんだよ？」

「どうしたのですか？人吉先生」

「あ、あなたたちは・・・聞いて、無いの？」

「何のことですか？」

「俺が言ってませんからね」

「・・・そう。ごめんなさい、ごめんなさい・・・！」

・・・この人はこの人なりに、俺を心配していてくれたのか。
膝をついて泣いている先生を見て、俺はそう思った。

「れ、礼よ！これはどういうことなのだ！？説明してくれ」
「・・・黒神、人吉先生がこうなった理由、知りたいか？」
「あ、ああ。知りたい」
「・・・誰でもいい。パソコンを持ってきてくれ」
「善吉、いいか？」
「任せろ」

善吉が生徒会室を飛び出し、数分後、ノートパソコンを持って帰ってきた。
俺はパソコンの起動を開始し、首にぶら下げていたメモリーを取り出した。

「・・・よし。これが俺の、俺のデータだ」
「でー・・・た？」
「・・・すぐにわかるよ」

パソコンのデスクトップを開き、メモリーを接続する。
そして、そのデータが画面に表示された。

「な・・・なんだ・・・これは・・・！！」
「『鳴神　礼の解剖記録』！？」
「これが、俺の実験だ」

そこから下にスクロールし、実験手順が表示される。

「手順一・・・右腕の、切断！？」

「その次は、左腕！？」

黒神、善吉の驚愕の声が部屋中に響き渡る。
阿久根先輩と喜界島は、その二人の後ろで震えていた。

「て・・・手順、は、八十四・・・肺の・・・摘出」
「・・・九十六・・・脊髄の・・・摘出」

・・・喜界島が、吐いた。
阿久根先輩、そして、善吉は喜界島の背中をさすっていた。
人吉先生は、『ごめんなさい！ごめんなさい！』と机で震えて泣いている。

「て、手順・・・百・・・心臓の・・・てき、しゅつ・・・！」
「こ、こんな・・・こんな・・・！！！」
「礼・・・お前は・・・」

そうさ。これが俺の実験記録。
そして、その結果、俺は死ななかった。
いや、何回も死んだのだろう。しかし、蘇った。

「・・・俺は、生まれてすぐに、親に虐待を受けた」
「れ・・・礼・・・」
「そう、なんどもなんども。一歳で、腹を殴られ、蹴られ、右腕の指を一本ずつ折られ続けた」
「そ・・・んな・・・！」

喜界島が、俺を驚愕の瞳で見つめた。

「・・・ここから、俺の過去を語ることになるけど、いいかな？」

「・・・頼む、教えてくれ」
「ああ」

第三十箱　俺の、記録（前書き）

今回はグロテスクな表現が含まれています。
お気をつけください。

第三十箱　俺の、記録

過去の俺の一人称は僕だったか？

二歳になり、親に捨てられた。それでも、生き残ろうと頑張り、親は僕を発見し、病院へ連れて行った。そのとき、僕は球磨川とであった。

『ねえ』『君の名前はなんていうの？』
「・・・礼。礼って言うんだ」
『へえ！』『礼君か！』『いい名前だね！』
「そう・・・かな・・・？」
「れいくん。診察の時間ですよ」
『行ってらっしゃい！』
「・・・うん」

診察室。
ここで、初めて人吉先生とであった。
普通の病院の診察室なんだろうけど、僕と同い年ぐらいの人がいるのは良く分からなかった。

「君が、礼君だね？」
「・・・はい」
「どうして、君はここに来たのかわかる？」
「・・・いいえ」
「君はどこか異常なのよ。それで、社会に出ても大丈夫なようにするために、ここに来たの」

嘘だ。
僕の親がそんなことをするはずがない・・・！
あんなに痛いことをするのに！

「・・・大丈夫？」
「・・・」
「失礼します」

・・・お父さん、お母さん。

「なんだ、まだ生きていたのか？礼？」
「先生、早く殺してって頼んだじゃないですか」

・・・やっぱりか。
やっぱり、この先生も僕を痛い目にあわせるんだ・・・。

「何を言っているんですか！？貴方達の子供でしょう！？」
「それが？はっ！それなら兄のほうが頭がいいし要領もいい！」
「こんなカス、ウチの恥さらしでしかないわ！それに」
「そ、それに・・・？」
「もう虐待するのも飽きたから」
「俺たちのストレス解消にもならないカスは殺したってかまわないだろう？」
「貴方達は・・・それでも・・・人ですか・・・！？」
「当たり前だろう。こんな胡散臭いことに俺の息子は連れて行けない。だが、そこのカスならいいじゃないか」
「名案でしたね、あなた」

・・・もう、いいや。

これが当たり前なんだ。
僕は、生きていてはいけない人間だった。
それだけだ。

「・・・ほら、迎えが来たじゃないか」
「礼君、こっちに来てください」
「な、何をするんですか・・・！？」
「実験ですよ。ただし、この二人に頼まれた方法の、ね」
「や、やめなさい！！その二人は自分の息子を殺すつもりで！！」
「・・・」
「行きましょう、礼君」
「・・・はい」
「行っては駄目！！」
「・・・」

そういって、俺は男の人たちに連れて行かれた。
そこからが、地獄だったのをよく覚えている。
他の記憶なんて、そこから途絶えるかのように鮮明に。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああアア
アアああああああああアアアアああああああアアああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアあああああああああああああああああ
あああああああああああああアアアアアアアアアアアアああああア
アあああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああアアアアあ
あああああああアアあああああああああああああああああああああ
ああアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアあああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！
！！」

麻酔も打たず、痛覚が残っている状態での解剖。
右腕を、左腕を、指を、足を、胃を、腸を、腎臓を肝臓をすい臓を
肺を脊髄を右目を左目を脳を心臓を。
まるでおもちゃのように切り開かれ、摘出された。
それでも、死なない。死ねない。死ぬことが出来ない。
切り開く人間の顔はとても笑顔で、それでいて、狂ったような笑み
を浮かべる。

『・・・・!!!!!』

手術室のドアが叩かれた音がするが、誰も気にしない。

「・・・ふむ、百通りほどやってみたが死なないとは。これ以上の
結果は得られなさそうだな。もうこのおもちゃには用済みだ」
「捨てますか？」
「いや、それよりもドアの外に五月蠅いのがいるようだから見せて
やろう」
「はい」

ドアが開かれた。

「れいくん！・・・・・！！！！！」
「これがあなたの見たがっていた礼君ですよ」
「あ・・・ああ・・・・・あああ！！！」
「・・・・」

先生が目にしたのは、首から股まで切り開かれて、内臓を露出させている僕の姿だった。

「・・・」

「驚くことに、まだ生きていてしかも回復するんですよ。すごいでしょう？」

「・・・・・」

「ですが、それが解明できないのでこれにはもう用はありません。さっそく、処分しましょう」

・・・処分方法は簡単。

燃やす。ただそれだけだ。

「や・・・めて・・・やめてえええええええええええええええええええええ！！！」

燃える。

もう痛みは無い。

今度こそ僕は死ねるのだろう。

「・・・死なないのか！？」

「・・・え・・・？」

なんで？

なんで!?

「・・・も・・・ころ・・・して・・・」
「・・・ああ。殺してやりたいな。流石に」

さっきまで解剖していた先生が言う。
憐れみ、悲しそうに言う。

「・・・・・」
「・・・病室に連れて行ってやれ。そして、不知火さんを呼べ」
「は、はい・・・！」

俺は、生きていた。

「君が、礼君ですか」
「・・・」
「もう廃人のようになっていますね。・・・ではご両親、よろしいのですね？」
「ああ。コイツはもう邪魔だ。俺たちの金になっただけありがたく思うべきだ」
「そうよ、ね！あなた！」
「・・・では、頂きます」

・・・何を話しているのか分からない。
なんだろう、聞き覚えのある声が耳に入ってきている。
でも、理解が出来ない。

「・・・礼君、今日から君は、私の息子となりました。ですが、名前は君が『誕生した』という証なので、そのままにします」
「・・・・ぃ」
「・・・いい子だ。では、最初に私の遊びに付き合ってください」

ベッドにかかっている机の上に、八個のサイコロが入ったグラスが置かれた。

「これを、振ってみてください」
「・・・」
「ああ、やり方がわかりませんよね。君のこの手で、このサイコロを握るのです」

右手にサイコロが握られた。

「そして、これを机に向かって投げる感じで・・・」
「・・・」

手から離れたサイコロは、全ての面が同じ向きになり、積み上がった。

「こ・・・これは・・・！素晴らしい！素晴らしいですよ！礼君！！」

何が嬉しいのだろうか？

笑顔で僕の両手を握ってくれる。
・・・暖かい。

「今日はありがとうございました。それでは、また」
「・・・」

ああ。
良く分からない。
見てる風景は全て色がない。
・・・塗り絵でもやるのかな?

「・・・」
『やっほー!礼君!』
「・・・」
『あれ?どうしたのかな?』
「・・・」
『無視かな?いや、しゃべることが出来ないのかな?』

誰?
どこかで出会ったのかな?
・・・どうでもいい。
とりあえず頷いておこう。

『・・・ああ、そういえば君はあの実験で廃人になったんだったっけ』
「・・・」

・・・この子はなんで僕に話しかけてくるんだろうか?

「・・・大丈夫だよ」

「・・・」
「僕が、君の生きる理由になってあげる」
「・・・」

生きる、理由？
何？それ？
それよりどうやったら死ねるのかな？
この塗り絵の世界から抜け出せるのかな？

「・・・」
『あ、時間だ！礼君！じゃあね！また絶対に会いに行くから！』
「・・・」

誰かが部屋から出て行った。
・・・さよなら。

「お友達が、できたの？」
「・・・」

看護婦さんが病室に入って来て僕に聞いた。
友達？何それ？

「・・・わからないわよね。今日はもうおやすみなさい」
「・・・」

良く分からないな・・・

病室に戻り、ベッドに入ると、なんだか目の前がかすんできた。
・・・死ねるのかな？
さようなら。

「『起きて』『礼君！』」
「・・・？」

暗闇から光が見えたと思ったら、昨日の女の子がいた。

「『起きたね！』『礼君！』」
「・・・」
「『あはは！』『すごい寝癖！！』」
「・・・」

なにが面白いのだろうか？
それより、この子は誰なのだろうか？

「『ん？』『ああ』『僕は球磨川って言うんだ！』『よろしくね』」
「・・・（こくん）」

とりあえず、首を振っておこう。

「『あ！』『このうさちゃん可愛いね！』『もらってもいいかな？』」

「・・・（こくん）」

良く分からないけど頷いておこう。

「『やったーーー！！』『ありがとう！！』」

「・・・」

何がそんなに嬉しいのだろうか？

まあ、いいか。

「『たぶん』『今日で僕とお別れだけど・・・』」

「絶対に君を見つけ出して、幸せにしてあげるからね！！」

・・・そう。

「あ、やっとしゃべったね？」

「・・・ぇ？」

「君の声は澄み渡るように綺麗だね。僕は今の君の声を絶対に忘れず、君を見つけ出してあげるから！じゃあね！礼君！」

「・・・」

球磨川は、そういうと病室から出て行った。

何日か時が過ぎ、病室で僕はボーっとしていた。

「・・・」
「・・・？」
「・・・」
「おい、お前」
「・・・」

今度は誰だろうか？

「・・・しゃべれないのか？」
「・・・（こくん）」
「そうか。なら付き合え」
「・・・」

腕を引っ張られ、病室から出される。
向かった場所は・・・託児室。

「・・・おい、来たぞ」
「わあ！また来てくれたんだ！！・・・あれ？その子はだれ？」
「・・・れいというらしい」
「・・・」
「僕は人吉善吉って言うんだ！よろしく！」
「・・・」
「あれ？しゃべれないの？」
「・・・（こくん）」

「じゃあ仕方ないね！一緒に遊ぼうよ！」
「・・・」

なんでだろう？
この二人は良く分からない。
さっきの女の子といい、なんで僕にかまうんだろうか？

「・・・ここにいたのね！れいくん！」
「あ、看護婦さんだ」
「あら、あなたたち。今日は礼君疲れてるから部屋で眠らせてあげてね？」
「仕方ないな・・・またな、れい」
「じゃあねーれいちゃん！」

さよなら。

そこから、僕はめだかちゃんという女の子と、善吉という男の子とよく一緒にいることが多くなった。
球磨川という子とは会わなくなった。

「・・・お前」
「・・・」
「無視してんじゃねーよ！」
「・・・？」

皮膚が切れた。
血が飛び散る。

「きゃはははは！」
「・・・」
「あ？お前痛くねえの？」
「・・・？」
「じゃ、もっと痛めつけてやるよ！！」

更に血が出た。
・・・何がしたいのだろうか？この子は？

「お前、そんだけ血が出ておいてなんで立ってられるんだよ？」
「・・・ぁ」

そうか。
殺してくれるのか。
しゃべっている女の子に近づく。

「く・・・くるな・・・」
「・・・ぁぁぁ」
「くるなあああああああああ！！」
「ぁあああああああああ！！あはははははっはははっはははっはははっははは！！！」
「ひっ！！」

笑う僕に悲鳴を上げる彼女。
あれ？どうしたんだろうか？

「殺して？殺してよ！！」
「な、なんなんだよ・・・！お前・・・！！」
「どうして殺してくれないの？ねえ？なんで？早く、早くぅ！」

どうして殺してくれないのだろう？
早く、早く殺してよ！

「し、飛沫さん・・・！」
「う、うあ・・・うああ・・・！」

・・・なんだ、彼女は僕を殺してくれないのか。

「・・・なんだ・・・殺してくれないのか・・・」
「・・・な、なんなん、ですか・・・！」

ゲーム機を持っている男の子が僕を恐怖の瞳で見る。
・・・つまんない。
早く病室に戻ろう・・・
そういえば、なんで彼女は血だらけなのだろうか？
僕の赤いのがついたのだろうか？
そして、なんで僕は拭いてもいないのに赤いのがなくなっているのだろうか？

「・・・はぁ」

殺してくれなかった。
彼女なら、殺してくれると信じていたのに・・・。

「・・・寝るか」

全く。
何時になったら死ねるのだろうか・・・。

第三十一箱　ああ、無常

「と、まあこんな感じだ。俺は生きていることではなく『死』を求め生きていた」
「・・・礼」

部屋にいる全員から悲しい視線を浴びる。
・・・別に哀れんでもらおうとか思ってなかったんだがな。

「・・・ま、これが俺の過去だ」
「礼・・・、礼・・・！！」
「黒神・・・？」

黒神が泣きついてくる。
いつもでは考えられないほど、人間らしく、子供のように。

「れいくん・・・」
「先生」

人吉先生が涙を流しながら、俺に近づいてくる。

「私が・・・私がもっとしっかりしていれば・・・！」

泣きながら、謝りながら、叫ぶ声で俺に謝罪する先生。
・・・あれは仕方が無い。先生は悪くない。

「大丈夫ですよ、俺は。コイツらと出会って、今幸せですから」
「・・・！！」

黒神が、俺を見上げてくる。
涙で潤み、真っ赤に腫らしたその目を、俺は見つめ返す。

俺は今、最高に幸せじゃないか。
友達がいる。仲間がいる。
なじみに球磨川も・・・。
これで幸せじゃない、なんて絶対に思わない。

「だから、大丈夫です」
「あ、あああああ!!」

黒神が、更に涙を流した。
先生も、一緒になって俺のところに駆け寄って来る。

「やあ、茶番は終わったかな?」
『!!』

生徒会室のドアから、男の声が聞こえた。

「お前、生きていたんだ・・・。全く、早く死ねばいいのに」
「・・・誰だ?」

男を見る。
背は俺より高く、若干やせ気味。
目に付いたのは制服。
箱庭学園の制服ではなく、有名な陸王学園のものだ。

「俺か?俺はお前の兄だよ」
「・・・俺に兄はいないが?」
「冷たいなあ。兄弟」

「俺はあの家のものじゃない」
「いいや？お前は鳴神家のものであり、この俺、鳴神靖人の弟だ」
・・・元兄が俺について語ってくる。
面倒くさいなあ。
「で？何のようなんだよ」
「お前、鳴神家に戻ってこないか？」
『！？』
・・・コイツは何寝言をほざいてるんだ？
「絶対に嫌だ。以上」
「そういうなよ。お前には頼みたいんだよ」
「・・・何を？」
「俺と球磨川の結婚式で、球磨川の友人としてスピーチをして欲しいんだ」
「・・・」
俺に何の得も無い理由をありがとうございます。
・・・ああ、そういえばコイツもなんか過負荷の気配が合ったらしいな。
球磨川が少し言っていた覚えがある。
「どうだ？いい条件だろ？」
「ぬかせボケ。俺に1千万振り込むぐらいの条件出せや」
「・・・あんまり調子に乗るなよ？カス」
おお、元兄の殺気が鋭くなったね。
正直この程度？って感じだけど。

これなら球磨川とのデートで絡んできたヤクザのほうが怖いね。

「『やあ』『靖人君』『何してるの？』」
「球磨川。いや、躾のなっていない弟にお灸をすえに来ただけだ」
「『あ！礼君！！』」
「・・・さっさと連れて帰ってくんない？正直うっとおしい」
「『お義兄さんにそんなこと言っちゃだめだよ』『礼君！』」
「表記が違うからな！？それに俺はこの家のものじゃねー！」

ああ、なんかコイツが来たら微妙な感じがするなあ・・・。
今回は空気が少し和んだけど。

「・・・おい、球磨川に触れんな」
「良く見ろ。俺から触れているように見えるか？」
「『触れてくれる勇気を僕は礼君にあげたいなぁ』」
「ええい！離れんしゃい！」
「『あっ！』『・・・もう』『照れ屋なんだから！』」

頬を押さえながらくねくねする球磨川。
だめだ、コイツは何を言っても無駄な気がする。
・・・ああ、元兄がなんかすっげえ殺気立ってるよ？

「・・・とっとと帰ってくれないか？」
「『う～ん』『仕方ないね！』『今日はこの辺で帰らせてもらうよ』『じゃあね～！』」
「おう、帰れ帰れ」
「『愛してるよ～！』『れいく～ん！』」

・・・色々な意味で捨て台詞だ。
ああ、やっと静かになった。

「カオス過ぎる・・・」
「お疲れ」
「さんきゅー、善吉」

元兄貴、か。
正直どうでもいいな。
面倒くさいし。

「じゃ、仕事の残り頑張れよ～」
「おう、じゃあな」
「何かあれば相談するのだぞ！何も無くても気軽に話しかけて来い！」
「おっけ～！」

全く、いい友達を持ったもんだな、俺は。
俺は満足げに生徒会室を出た。

第三十二箱　過保護の強さ！

・・・え～、鳴神です。
現在、教室の自分の席で本を読んでいました。
そして、ホームルームの時間。
だが、だが！

「なんでここにいるんだ・・・！？」

俺の目の前には・・・なぜか担任に連れてこられた人吉先生の姿があった。
・・・黒板にご丁寧に名前まで書いて。

「今日から一緒に学ばせていただきます、人吉瞳！４２歳です！！」
「・・・・」
「善吉、魂出てる」
「・・・はっ！！」

ふう、善吉魂の帰還完了！
まあ、親が転校生として同じ教室に来たらそりゃ驚くよな・・・。
そんな俺たちをよそに、クラスは可愛い女の子を見る目でざわついている。

『へ？４２歳？』
『１２歳の聞き間違いだろう』
『へぇ、飛び級なんだ！すごいなぁ・・・』

「違うんだよ・・・！違うんだよ・・・！！」
「善吉、気持ちはわかる。だが今は押さえろ・・・」

善吉が拳を握り締め、プルプル震えながらうつむいている。
・・・なんだろう。こいつ本当に今日は厄日じゃないのか？

「うっふっふ！驚いた？礼君」
「驚きすぎて顎が外れそうでした・・・」
「それならよし！！」
「何が！？」

胸を張って満足そうに頷く４２歳。
何が嬉しいのだろうか？

「今日からよろしくね！」
「・・・本当によろしくお願いします」
「うむうむ」

人吉先生は頷きながら不知火の席に座った。
・・・そういやあいつ、今日は学校に来ていないな。
体でも壊したのだろうか？

「おやおや、どうしたの善吉くん。元気ないねー。クラスではそういうキャラなの？」
「ごめんなさいねえ！なにせ母親が自分のクラス転校してくるって体験に不慣れなものでしてねえ！」
「いや善吉、それに慣れてる奴はもっとおかしいからな？」

善吉もあせって変なことを言っているぞ？

「つーか隣座んな！そこは礼と同じくらい大好きな親友の席なんだよ！今日はなんか休みみてーだけどな！！」

「・・・親友？」

不知火の奴、大丈夫かな・・・？
あいつも体調を崩すときがあるんだな。
不知火のことを考えているうちに、授業が始まった。

授業中

善吉が黒板に数学の答えを書いている。

「・・・これでいいか？」
「そこ間違えてるよ！」
「・・・！／／」

善吉の顔が赤くなってゆく。
よかったな、不知火がいなくて。
あいつなら絶対大爆笑だぜ？

昼食

「礼！弁当食おうぜ！」
「おう！おかずチェンジするか？」
「当たり前よ！」

俺の机を使い、二人で昼飯を食い始める。

「お、から揚げ！俺の豚のしょうが焼きと交換してくれ！」
「いいぜ。ほらよ」
「サンキュー！じゃ、こっちも・・・」

善吉が自分のしょうが焼きを交換しようと箸を向けた。

「ほら！箸の持ち方が変」
「なっ！／／／」
「・・・ご苦労様」

どこからか現れた善吉のお母様が箸の持ち方の矯正をし始め、昼休みが終わった。

放課後

「礼、生徒会室に寄っていかねえか？」
「おう、行くよ」

カバンを持ち、席を離れた。

「一緒に帰るよーー！」
「ぬあっ！／／／ちっくしょおおおお！！／／／」
「・・・がんばれ」

善吉が、母親から猛ダッシュで逃げ出した。
・・・あまりにも、善吉の背中が恥ずかしいという感情を物語っていた。

「あ、待ってよー！！」

ローラーシューズで善吉を追いかける人吉先生。
・・・さすがローラーシューズ、機動力が違う。

「善吉、逃げ切れるかな・・・？」

全ては善吉の努力次第か・・・。

「さてと・・・、生徒会室に向かうかな！」

「ちわーっす！」

・・・あらま、誰もいない。

「ん?善吉に向けてか・・・えっと何々?『善吉よ、変態兄貴の所に向かう』か」

じゃ、目的先は・・・

「旧校舎、『軍艦塔(ゴーストバベル)』か・・・」

あそこに行くのは初めてだな・・・。

善吉から色々聞いてはいるが、行く気はしないな。

「ま、行かないとな」

旧校舎に行ってみるとしよう。

善吉は・・・まあ大丈夫だろう。

第三十三箱　お母さんの力（前書き）

※江迎の能力名が間違っていたので訂正しました。

第三十三箱　お母さんの力

・・・着いた。

「これが軍艦塔」

うん。不気味すぎる。
４０年前まで使われていた旧校舎。
風雨に晒されて廃墟のようになっている。

「・・・怖そうだな」
『君はそういうのは駄目だったのかい？』
「いや、そういうわけじゃないんだが・・・」
『じゃあ、中に入ろうじゃないか』
「おう・・・」

なんか、軍艦塔から近づきたくない雰囲気が出ている。
・・・俺が怖がっているだけなのだろうか？

「・・・行くか」

重たい扉を開き、中に入った。

歩いていると、どこからかグシャッ！という音が聞こえた。

「・・・な、何かいるのか？」

『怖いのかい？』

「だ、大丈夫だ！」

・・・うん？あの部屋から光が漏れている。

「失礼します」

「礼！よく来たな！」

「おう、黒神。・・・なんだ？その穴」

黒神の足元で、グジュグジュという音を立てている穴がある。

「今、過負荷がここにいてな。兄貴がこの様なのだ」

「やあ礼君！元気にしていたかい？」

「・・・とりあえず服を着てください」

「いやあ、怒られちゃった」

怒る怒らないの問題ではなく、あなたのパンツ姿が見たくないだけです。

あと・・・

「名瀬先輩の素顔を初めて見ました」
「あんまり見るなよ」
「黒神にそっくりですね」
「姉だからな！」

黒神が胸を張って言う。
そういや地下でも『姉と再会～』みたいなこといってたな。
・・・？でも、確か・・・

「あの時は『くじ姉』って言ってなかったか？」
「この人が、くじ姉の黒神くじらだ」
「へえ・・・そうだったのか」

ドラマだな。
黒神めだかにとっては。
いや、真黒さんもかな？

「ああ、さっきの話だが・・・善吉君はどうしているのかな？」
「ああ、実は今、善吉は自分のクラスに転校してきた母親から逃げている最中なのですよ」
「・・・そうか。人吉先生が来ているのか。それはとんだ転校生ラッシュだね。しかしね、めだかちゃんーーー善吉君、いや、礼君も単独で行動させるのはまずいな」
「？まずいとは、どういう意味ですか？」
「どうもこうも、彼に礼君・・・特に礼君は、あの通りアウトローに好かれがちだからね。そして多分、過負荷の連中には嫌われるより好かれるほうが致命的だ」

・・・球磨川がいい例だな。

俺は全く問題は無いが、他の奴なら簡単に心を折られるどころか引きこもりになるかもしれないし。

「そういえば、ここに誰が来たのですか？」
「ああ、江迎って女の子だよ。過負荷は、手で触れたものを全て腐らせる『荒廃した腐花（ラフフラフレシア）』だったかな」
「そうですか」

江迎の奴もこの学校に来たのか。
・・・善吉とエンカウントしてなきゃいいけど。

「・・・善吉を探すとしよう」
「ああ。じゃ、俺は特別校舎のほうに向かうよ」
「ふむ・・・まああそこなら過負荷もいないだろう。頼むぞ」
「おっけー」
「喜界島同級生と阿久根書記は私と共に善吉を普通教室の方に探しに行こう」
「はい！」「おまかせください！」
「では、見つけ次第携帯にメールを入れること。集合場所はここだ。解散！」

さ、向かうとしますか。

「・・・一階はいないと」
「お前」

「あ？・・・なんだ、元兄貴か」

嫌な奴とエンカウントしてしまった。

さっさと上の階に行かないと。

「球磨川を探してる。どこにいるか知らないか？」

「知るか」

「ッチ！使えないカスが」

「目を離したお前が悪いんだろうが馬鹿。俺に当たるな」

「・・・口の利き方を知らねえな。殺すぞ？」

殺す？

殺す・・・殺す・・・！！！！！！！

「・・・え？殺ってくれるの？マジで？」

「（ゾクッ！）」

「嘘じゃないよな？今言ったよな？『殺すぞ』って！」

「お、お前・・・何なんだよ・・・！」

「それより、今は俺を殺してくれるかの問題だろ？なあ、殺してくれるのか！？」

「う、うるせえええ！！」

「ガフッ！！」

蹴られた。

その衝撃が伝わり胃の中のものが逆流しそうになった。

「・・・え？終わり？ねえ、終わり？」

「き、効いてねえのか？！」

今ので終わり？

・・・なんだ。

「じゃあ俺と同じ目に遭って救われるといいよ！」
「何を言ガハアッ！？」

兄貴が倒れこむ。
俺が蹴られたところと同じ腹を押さえながら。

「兄貴、まだ何かあるんだろ！？さあ、早く！！」
「て・・・め・・・！」

・・・え？
もう、無いの？

「・・・なんだ、口だけか。じゃあね、兄貴。俺今忙しいから」
「ま、まち・・・やがれ・・・！」

うずくまり、声を絞り出している兄貴を無視して俺は上の階の探索に向かった。

「・・・はあ、何もなしか」

現在二階。
善吉にメールを送ったが返信が帰ってこない。

「どこ行って（ドンッ！！）・・・へ？」

今、外から変な音が・・・って

「ぜ、善吉！？」

善吉が、善吉が壁を駆け上っているだと！？
な、何がおきてるんだ！？

「と、とりあえず上の階に・・・！」

急がなければ・・・！！

「はあ、はあ、はあ・・・！」

現在、屋上に出る扉の前。
階段を駆け上がるのはしんどいね！

「じゃ、じゃあ・・・行くか・・・！」

扉を開けた。
そこで見た光景は・・・

「子供は何人欲しい？」

江迎が善吉に告白している（？）光景だった。
いやはや・・・確かにアウトローに好かれる善吉だけあって、江迎にもう子供の話をされているとは思ってもいなかった。やるな、善吉。

「・・・善吉に二度目の春か」

そんなことを呟いていると、江迎が善吉との将来について語っていた。
・・・これは書くべきか迷ったが、とりあえず書いておこうと思う。

「私は三人欲しいな。女の子がふたり、男の子がひとりね。名前は人吉くんが決めてあげて。私ってあんまりネーミングセンスないから。えへへ、どっちに似てると思う？私と人吉くんの子供だったら、きっと男の子でも女の子でも可愛いよね。それで庭付きの白い家に住んで、　大きな犬を飼うの。犬の名前くらいは私に決めさせてね。人吉くんは犬派？猫派？　私は断然犬派なんだけど、あ、でも、人吉くんが猫の方が好きだっていうんなら、勿論猫を飼うことにしようよ。私、犬派は犬派だけれど動物ならなんでも好きだから。だけど一番好きなのは、勿論人吉くんなんだよ。人吉くんが私のことを一番好きなように。

そうだ、人吉くんってどんな食べ物が好きなの？どうしてそんなことを聞くのかって思うかもしれないけれど、やだ明日から私がずっと人吉くんのお弁当を作ることになるんだから、ていうか明日から一生人吉くんの口に入るものは全部私が作るんだから。やっぱり好みは把握しておきたいじゃない。好き嫌いはよくないけれど、でも喜んでほしいって気持ちも本当だもんね。最初くらいは人吉くんの好きなメニューで揃えたいって思うんだ。お礼なんていいのよ彼女が彼氏のお弁当を作るなんて当たり前のことなんだから。でもひとつだけお願い。私「あーん」ってするの、昔から憧れだったんだ。だから人吉くん、明日のお昼には「あーん」ってさせてね。照れて逃げないでね。そんなことをされたら私傷ついちゃうもん。きっと立ち直れないわ。ショックで人吉くんを殺しちゃうかも。なーんて。

それでね人吉くん、怒らないで聞いてほしいんだけど私、中学生の頃に気になる男の子がいたんだ。ううん浮気とかじゃないのよ、人吉くん以外に好きな男の子なんて一人もいないわ。ただ単にその子とは人吉くんと出会う前に知り合ったというだけで、それに何もなかったんだから。今から思えばくだらない男だったわ。喋ったこともないし。喋らなくてもよかったと本当に思うわ。だけどやっぱり

こういうことは最初にちゃんと言っておかないと誤解を招くかもしれないじゃない。そういうのってとても悲しいと思うわ。愛し合う二人が勘違いで喧嘩になっちゃうなんてのはテレビドラマの世界だけで十分よ。もっとも私と人吉くんは絶対にその後仲直り出来るに決まってるけど、それでもね。

人吉くんはどう？今まで好きになった女の子とかいる？いるわけないけども、でも気になった女の子くらいはいるよね。いてもいいんだよ。全然責めるつもりなんかないもん。確かにちょっとはやだけど我慢するよそれくらい。だってそれは私と出会う前の話だもんね？私と出会っちゃった今となっては他の女子なんて人吉くんからすればその辺の石ころと何も変わらないに決まってるんだし。人吉くんを私なんかが独り占めしちゃうなんて他の女子に申し訳ない気もするんだけどそれは仕方ないよね。恋愛ってそういうものだもん。人吉くんが私を選んでくれたんだからそれはもうそういう運命なのよ決まりごとなのよ。他の女の子のためにも私は幸せにならなくちゃいけないわ。うんでもあまり堅いことは言わず人吉くんも少しくらいは他の女の子の相手をしてあげてもいいのよ。だって可哀想だもんね私ばっかり幸せになったら。人吉くんもそう思うでしょ？」

・・・江迎の奴、すごいな。

一度も噛まずにここまでの台詞を言い切れるなんて。

善吉の奴、どういう返事をするのだろうか？

「うんっ！そうだなっ！」

おーい！善吉の奴頷いちゃったよ！？

しかも善吉なかなかいい笑顔で頷いたもんだから見ろ！江迎の顔が蕩けきってるじゃねえか！

『僕もこれぐらいしないと君に思いは伝えられないかな?』

・・・なじみの今の台詞は聞かなかったことにしよう。

俺のために。

「あ!そうだ!俺用事思い出したからこれでーーー」

善吉が屋上から立ち去ろうと後ろに下がった。

そして、その足に包丁が突き刺さり、血が流れ出る。

「なっ!?あああああああああああああああっ!!?ほ・・・包丁!?文化包丁!?てめえ!何いきなり刺してーーー」

「なんで逃げるのよなんで逃げるのよ?さっき手を差し伸べてくれたじゃない。あれって好きってことでしょ、あれって好きってことでしょ?私のこと好きなんだよね?私達はもう恋人同士なのでしょう?大体用事って何よ?私より大事な用事なんてあんたにあるわけないじゃない。あんたは私を愛するために生まれてきたんだし、あんたは私に愛されるために生まれてきたんだし、私に出会ったあんたはもう何もしなくていいのよいいんだから」

・・・ここまでくるとあれだな、ヤンデレ?

善吉の奴、痛みと恐怖と気持ち悪さで顔が真っ青じゃないか。

「う、あああ、ひっ・・・!うわあああああああ!!!!」

善吉が江迎を蹴り飛ばした。

屋上の手すりに江迎の体が叩きつけられる。

・・・善吉の奴、手加減を忘れているな。

「って、おっとおっと!びっくりしすぎて動けんかった!!」

『まあいいじゃないか。彼女の力を見るいい機会だよ』
「しかしだな・・・」
「礼君!頭を下げて!!」
「へ?」

言われた声のする方向を向くと・・・待ち針が飛んできた。

「うおおおおっ!?」

咄嗟に伏せる。
髪の毛を何本か掠め取られながらも避けた。
そしてその待ち針は、江迎と善吉の間のコンクリートの壁に突き刺さった。

「人の、息子にっ・・・色目使ってくれてんじゃないわよーーー小娘!」
「だ・・・誰!?」

俺の前に出てくる人吉先生。

「女の子の愛?それって・・・母の愛より強いのかしらん?」
「ま、今回は見学だな。俺」
「お、お母さん!!礼!!」
「・・・」

人吉先生の心療外科手術(パッチワーク)を久しぶりに見せてもらうとしよう。

第三十三箱　お母さんの力（後書き）

・・・江迎の台詞だけですごい文字数になりました。

第三十四箱　お母さんの愛　ＶＳ　永遠の愛？

「母の愛ぃぃぃ？そーんな胡散臭いものであなた、相思相愛超運命的フォーエバー及びトゥルーラブハッピーエンド超絶確定な私と人吉くんの仲を裂こうっていうんですかあ？」

「やーね、私はそーんな野暮なおばあちゃんじゃないわよ。ただまあ、惚れた男をものにしたいならまずは母親くらい倒しとけって話だわ」

・・・女って怖い。

俺の周りにいる女子はいつも特殊だな。一人４２歳だが。

怒江が包丁同士をぶつけ合い、人吉先生は待ち針と糸を取り出した。

「お母さん！わかってると思うがちゃんと手加減してやってくれよ！俺の蹴りを二発も喰らってそいつ、立っちゃあいるが既にかなりのダメージのはずだからな！」

「ったく、自分を包丁で刺した娘の心配なんてあんたは本当に優しい子だねえーーー。わかったわかった！ちゃんと手加減してあげるわよ」

そこまで言うや否や、怒江は人吉先生に襲い掛かった。

「もっとも・・・足加減はしないけどねっ！」

振り向きざまに怒江を蹴った。

善吉よりも威力がある蹴りが、怒江の横わき腹に入った。

バガッ、という音が静寂の中響き渡る。

蹴られた怒江はコンクリートを跳ねながら吹っ飛ぶ。

「ーーーーーーーっ！！」
「なーに鳩が８８ミリ砲喰らったみたいな顔してんのよ善吉くん。わざとらしいわよ？あんたにサバットの基礎を教えたのが誰だか忘れたわけじゃあないでしょうに」

いやいや、それでも威力がおかしいよ先生。
サバットでもあの吹っ飛び方はありえないから。三回バウンドしていましたよ？

「・・・いやあんた悪魔か何かか！今のが自分の母親の振る舞いだとか思いたくねー！めだかちゃんでもなねー女子を本気で蹴る奴があるかあ！！」
「いや、善吉。先生の判断は正しいみたいだ」
「れ、礼？」
「あれ、見てみろ」
「な・・・！起き上がった・・・！？」

ムクリ、と怒江は起き上がった。
あれ意外とダメージがあるはずなのにな・・・・。

「礼君の言う通りよ。生憎、過負荷が相手じゃあまだまだ手ぬるいくらいなのよ。いや、足ぬるいか」
「・・・よーやる」

起き上がった怒江を見る。
俯いたまま立ち上がろうとしない。

「・・・お母様。あなた昔、どこかで私と会ってますかあ？今の蹴り、なんだか身に覚えがある感じなんですけれどお」

・・・こいつも人吉先生の診察を受けた口か。

「・・・さあねー。私はあなたみたいな小娘知らないけど？それからそれとなくお母様って呼ぶな」

「・・・・・・・そうですかあ、私の勘違いですかあ。だったら自己紹介させてくださいね☆」

起き上がり、両手を前に出す。

「私は一年マイナス組、江迎怒江です。城砦学園から転校してきました。抱える過負荷（マイナス）は『荒廃した腐花（ラフラフレシア）』。私が触れたものはなんであれ、生物であれ無生物であれ、有機物であれ無機物であれ」

「！？」

そこまで説明すると、先生が急に膝を着いた。

「空気であれ☆腐ってしまうんです☆ちなみにそちら、風下ですよおー」

「ぐっ・・・気体までだなんて・・・そんな無茶苦茶なーーー！」

いや、それは過負荷にとっては成長なんだ。

だから、あれは過負荷にとって喜ばしいことでしかない。

「お、お母さ「来るなあ馬鹿息子！！」ーーー！！」

「・・・風下に来たらあんたも二の舞よ善吉くん。いいからその、風通しのいいとこにいなさいな！」

「！！」

「うふ！息子思いなんですねえお母様」

怒江が人吉先生の胸倉を掴んだ。

徐々にそこが腐っていく。

「でも子離れの季節がやってきたんですよ。人吉くんのことはもう私に任せてください。ご体感の通りわたしぃ、結構いい感じに最強ですからあ☆」

江迎の目がどんどん暗くなる。

「少なくとも十三組の生徒（エリート）を皆殺しにするというマイナス十三組ーーそして球磨川さんの夢を、他の転校生（マイナス）の到着を待つまでもなくひとりで実現できるくらいには☆」

・・・そうか、それがアイツの狙いか。

全く持ってアイツらしい。

「さあ人吉君。お母様、つまり私達の敵はやっつけたよ」

「う・・・！」

「だから、結婚しようよ結婚してして結婚しなきゃ結婚しなさい結婚するべき結婚しやがれ結婚結婚結婚結婚結婚結婚結婚結婚結婚結婚結婚結婚、レッツマリッジ！私人吉くんのためなら絶対なんでもするから！人吉くんと一緒に必ず幸せになるから！！」

「ーーーーっ！！」

うむ、怖い。マジで怖い。

これは本当に逃げ出したくなる。

いや、俺の場合は過負荷になりそうになる。

過負荷側に引き込まれる。

「何？私の言ってることがわからない？じゃあお父様もやっつけたほうがいい？ひょっとして親戚全滅させたらわかってくれる？とり

あえずお母様にトドメさそっか？人吉くんも親離れしなきゃ駄目だしねー」

「・・・・・・・」

ここからじゃ聞き取れないが、先生が何かを呟いた。

「え？なんですか？お母様。聞こえませんよお。『息子との結婚を認める』ですかあ？」

「・・・お母様って呼ぶな、だよ」

口から何本もの針が出た。

あれは・・・含み針？

「呼吸を止めたぐらいでいい気になるところが小娘なのよ。あなたラマーズ法とか知らないでしょ？おっ嬢ちゃん！」

先生が体性を立て直し、攻撃を再開する。

「愛だの恋だのほざくのは！赤子の一人でも産んでからにしな！！」

「いや、それは理屈が違うでしょうに・・・」

突っ込んでる間に、怒江がコンクリートに縫い付けられた。

一体どういう針と糸を使ってるんだよ・・・

「縫合格闘技『狩縫』、六の技『針漬』・・・つってね」

少し落ちつくために息を吐いた。

勝敗は決したな。

『まあ、妥当な結果だったね』

「ああ。母は強しってか？」

俺となじみがそんな話をしていると、怒江が『荒廃した腐花（ラフラフレシア）』の説明をしていた。

「・・・マズイ！！」

アイツ、校舎をずっと触って腐らしてやがる！！

「先生！！」

「礼く！？キャッ！！」

先生を善吉のほうに突き飛ばした。

それと同時に怒江が指をコンクリートにトンッ、と叩く。

その瞬間、校舎が腐り崩れた。

「礼！！！」

「大丈夫だ！後で会おう！！」

「くそおおおおおお！！」

怒江と共に屋上から地上へと落下する。

「うおおおお！？この浮遊感怖えええええええええ！！」

『ははは！！風が気持ちいいね！！』

「そういう問題じゃねえええええ！！」

そういえばまだ返していない能力があったな・・・！！

「『現実踏否（ブレイクダンス）』！！」

重力をほとんど無くし、ゆっくりと落下する。
そして、着地した。

「ふうう・・・・」
「あ・・・礼さん」
「怒江、大丈夫か?」
「少しダメージが・・・。咄嗟に地面を腐らしてクッションにしたけど、考えなさ過ぎたかな?」

足を引きずっている。
骨が折れているな・・・。

「動くなよ?・・・ほれ」

右手を足に当て、治す。

「あ・・・痛くない・・・?」
「後は・・・これか。よいしょっと」

右腕を振った。
すると、腐っていた校舎が何事も無かったかのように元の姿で建っていた。

「す・・・凄い・・・!!」
「ふう・・・これで『何してるの?』げっ!」
「『あー!礼君に怒江ちゃん!』『どうしたの?』」
「あ・・・その・・・!すいません!新教室の強奪に失敗したのも報告せずに・・・!」
「『別に気にしなくてもいいよ!』『実は怒江ちゃんが心配で来てみたんだけど杞憂だったな』」

「え・・・？」

球磨川の言葉に顔を上げる怒江。

「『君は僕の予想以上に素晴らしい才能（けってん）の持ち主だったよ！』」

「あ・・・」

「『ほら、顔の泥とか擦り傷を治してあげるから』」

怒江の右手を取り、自分に近づけていく。

「あ！い、いけません球磨川さん！私の手に触ったら・・・！」

「『やだなあ、大丈夫だよ』『それに、君がどんな酷いことをしても』『僕が全部なかったことにしてあげるから』」

「う・・・うあ・・・く、くまがわさん・・・！」

手を握り返した球磨川に涙を流す怒江。

ま、いいんじゃないか？

「『よしよし、泣かなくたっていいんだよ』」

「・・・じゃ、またな」

いい雰囲気なので立ち去るとするか。

「『あ、礼君！待って！』」

「礼さん！待ってください！」

「へ？」

二人に呼び止められる。

「あ、あの・・・！このまま私達と来てくださいませんか？」

「『ケーキを食べに行くんだよ！』『一緒に行こうよ！』」
「う～む・・・じゃ、ちょっとここで待っててくれ！あいつ等に帰ると言って来るから」
「『はーい！』」

「おう、待たせたな」
「いえいえ！では、行きましょう！」
「『そうだね！れ～い君！』」
「腕に絡みつくな！ほれ、怒江」
「あ、はい・・・！」

左手を差し出し、怒江は握った。
うん、腐らないな。

「『あ、いいな～！じゃ、僕も！！』」
「お、おい！」
「『や～ん照れてる！』」
「ふふっ」
「お、おい怒江、笑うなよ！」
「『あはは！』」

そのあと、三人でケーキを食べに行った。

「『あ、チョコケーキ美味しい！』」
「こっちのショートケーキも美味しいです！」
「『礼君のチーズケーキも美味しそうだよ！』」
「食うか？」
「『うん！』」
「い、頂きます！」

「礼さん、動物園にはいつ行きましょうか？」
「『あ、いいな！僕も行きたい！！』」
「じゃ、最後の夏休みあたりで行くとしよう」
「はい！」
「『楽しみにしてるね！！』」

過負荷でも、友達二人の幸せそうな顔が見れたのは幸運だと思ったね。
夏休みは、すぐそこだ。

第三十五箱　元生徒会長登場

えっと・・・次の日。
帰宅しようとしていたら、なぜか俺は知らない二人組みに捕まった。

「あのー、ちょっといいですか？」
「なんですか？」
「お前、球磨川さんって知ってる？」

球磨川の名前がでたってことは・・・

「・・・過負荷か」
「お！話が早いな！案内してくれないか？」
「別にいいが・・・」
「サンキュー☆」「ありがとうございます」

俺の横に二人が並んだ。

「お前、名前なんていうの？」
「鳴神　礼だ。えっと・・・」
「あたしは志布志飛沫っていうんだ。ここに転校してくる一年生」
「私は蝶ヶ崎蛾々丸といいます。同じく転校してくる二年生です。よろしくお願いします」
「なるほど、志布志とは同年代か」
「お、いいねえ！話が合いそうじゃないか！」

背中をパンパン、と叩いてくる志布志。
なんだかコイツは結構フレンドリーだな。
執事姿の蝶ヶ崎先輩も笑顔だし・・・。いい奴だな。

「あなたが球磨川先輩の話によく出てくる鳴神くんですか」
「・・・球磨川はやっぱり俺の話をしていたのか」
「おうよ！すげえぜ？ベタボレって言葉があんなに当てはまるとは思ってなかったぐらいだ」
あいつ、今度は何を言ってるんだ？
「お、着いた（ドゴオオオオオオオオ！！！！！）・・・」
『は？』
なんだ？今何かが盛大に壊れる音がしたが・・・
「盗み聞きは失礼ですが・・・」
「やるしかないな」
教室のドアにそっと聞き耳を立てた。
「無理だな球磨川。お前は俺に殴られた恨みを覚えておくことが出来ない。俺の異常性は『知られざる英雄（ミスターアンノウン）』。誰も俺を目視することは出来ず、誰も俺を記憶することが出来ない！」
「『うん』『どうやらみたいだね』『正直に言えばもう既に忘れかけてるくらいだよ』」
「『でも君の異常性と僕の過負荷が近いとか今はそんなことはどうでもいいんだ』『そろそろ僕の大好きな人がここに来るみたいな予感がしててね？』『それで日之影くんにはお帰り願いたいんだ』『僕も女の子だし』『大好きな人の前では身だしなみはしっかりとしたいじゃないか』『まあこの格好は制服がいい感じに破れていて扇情的かもしれないけど』『彼とはやっぱり綺麗なままで会話を弾ま

せたいと僕は思うんだよ。だから』」

ああ、まずいな。
非常にまずい。

「この螺子曲がっていく感覚・・・！」
「はあ・・・ちょっと待ってて」
「あ、おい・・・！」

教室のドアを開け、球磨川の頭に手を乗せた。
なんだ、傷も制服の破れも無いじゃないか。
いや、正確には「無かったこと」にしたのか？

「『あ！』『礼君！！』」
「ほら、ストップだ。お前はここで世界を滅ぼすつもりか？」
「『礼君がいる世界だもん！』『滅ぼすつもりは無いよ！』」
「ならよし」

そして、俺は日之影先輩の方へと顔を向けた。

「な、鳴神。どうしてお前が此処に？」
「案内を頼まれましてね。さて、ここで手を引いてもらえませんか？コイツが本気になったら制御が利かなくなるんで」
「・・・仕方ないな。だが、聞きたいことがある」

拳を下ろし、俺のほうに真剣な顔を向けた。

「何でしょうか？」
「お前は・・・過負荷側か？」
「ありえません。此処には会いたくない奴がいるので」

「・・・そうか」
「じゃあな球磨川。夏休みに遊びたかったらメール入れてくれ」
『わかったよ！じゃあまたね！！』
笑顔でこちらを見上げる球磨川。
「じゃ、行きましょう」
「ああ」
俺と日之影先輩は教室を出た。

そこから、俺は黒神と名瀬先輩に合流、生徒会室に向かった。
生徒会室に入ると、日之影先輩のイタズラ心が小規模で爆発したのか誰にも気づかれないように善吉の後ろに向かった。

「日之影空洞って人に会えばいいんだろ？で？どこにいるんだその先輩は？」
「もう来てる」
「！！！！！！」
おお、善吉を含め皆のあの驚きっぷり。
確かに面白いかもしれない。

「・・・」

日之影先輩が皆を品定めするような目で見た。

一人目、黒神真黒さん。

「・・・合格」

二人目、善吉。

「不合格」

三人目、人吉先生。

「・・・合格」

四人目、阿久根先輩。

「不合格」

五人目、喜界島。

「不合格」

六人目、古賀先輩。

「・・・ギリ合格。ただし故障中」

そこまで言うと、日之影先輩は頭をボリボリと掻いた、

「・・・参ったな。別に高望みしてたつもりはなかったんだが、こりゃあ予想以上に惨憺たる有様だ」

そこまで言うと、俺を少し見てから黒神の方へと向き、言い放った。

「断言するぜ、黒神。このメンバーでマイナス十三組に挑むのは格安自殺ツアーを組むようなもんだ」

「日之影前生徒会長。理由をお聞かせ願えませんか？」

日之影先輩が椅子に座り、話し始めた。

「俺は一十三組の奴等と接触してきたが、率直に言うと『話にならない』というのが奴等への感想だ。そんな連中に敵対するにあたって、生徒会役員の三名がそろって不合格だというのは問題外と言ってもいい」

『妥当な判断だね』

日之影先輩の意見に賛同するなじみ。

「（お前にはプラスもマイナスも関係が無いけどな）」

『そりゃそうだよ。僕と礼君、そして禊ちゃん以外は等しく平等なんだから』

「（その考え方はどうよ？）」

『僕はそれ以外の人間にほとんど興味が無いからね。二人がいてくれれば十分だよ』

「（そうか）」

色々突っ込みたいところはあるがな。

さて・・・今、話はどこまで進んだかな？

「凶化合宿、お前等やってみるか？」

・・・おっかない響きだな、おい。

『へえ、あれか』

「知ってるのか？」

『まあね』

「博識な奴。内容はどんなんだ？」

『黒箱塾時代から行われていたメンタルトレーニングだよ。理事長が着任したすぐにこのトレーニングは廃止したみたいだけどね』

あの人が廃止した？どんだけえげつない内容なんだよ・・・。

ま、俺は別に要らないな。

本当に心が折れそうになったら、過負荷になればいいし。

戻るのは・・・中学以来か。

「はあ、面倒くさいなあ・・・」

明日は終業式。そして、それが終われば夏休みだ。

過負荷とも普通とも異常とも、楽しく過ごせる夏休みにしよう。

第三十六箱　終業式。夏休みを満喫したいなあ・・・

次の日。箱庭学園終業式。
俺は行動に向かっていた。

『明日から夏休みだね。ずっと教室にいてよ』
「俺は休み中ずっと寝とけと？」
『僕はそっちのほうが嬉しいな』
「却下！」

コイツは・・・冬眠ならぬ夏眠をしろというのか。
こんな会話をしているうちに、終業式の会場にたどり着いた。
中に入り、自分の場所へと移動する。

「（・・・ま、話し聞いてる間って暇だよな）」
『なら僕と教室で色々しようよ』
「（・・・それはゴメンこうむるな）」
『え～？なんでさ？』
「（黒神にばれたらひとたまりも無い）」
『ああ、確かにね』

急に涼しくなったかのような錯覚に襲われた。
黒神への恐怖だろうか？

「お、始まるな」

黒神が壇上に立ち、それに続いて生徒会執行部のメンバーが傍に立つ。
いやあ、やっぱり威厳があるなあ・・・黒神。

「それでは、これより本年度一学期終業式をーーー開始(ふぁいひ)ふる」
「なっ！？」

なんで球磨川がそこにいるんだ！？
しかも、黒神の頬を引っ張って！

「・・・・・・・・・！！」
「『やっほー』『箱庭学園の皆さんはじめまして！』」

・・・のうのうと挨拶する球磨川。
いや、はじめましてとかの問題じゃないだろ・・・？

「『僕は球磨川禊！』『一年一組の鳴神礼君の許婚でーっす！！』」
『はあああああ！？』
「ちょっと待てこらあああああああ！！」

あいつ、何て超弩級の爆弾を投下してくれたんだ！！
見ろ！クラスメイトどころか先輩方まで俺を見てるじゃないか！！

「『ーーーというのは冗談だよ』『ま、そのうちこの冗談を本当にするけどね！』」
「不吉な発言をするなーーーーー！！」
「『礼君！』『後で会いに行くからね～！』」
「こんでいいわっ！」
「・・・鳥肌が立つような冗談を抜かすな球磨川。危うく礼が卒倒するところだったろう」

全くだ！
黒神、やっぱお前は幼なじみだよ！！

俺の気遣いをしてくれるなんて本当にいい奴だ!!

「このような場で何のようだ。今、壇上に上がってよいのは生徒会役員だけだぞ」

「『・・・・』『生徒会役員、ねえ』」

・・・球磨川の纏っている雰囲気が少し変わった。

こう、過負荷側に。

「『いやいや、邪魔する気も卒倒させる気も無いよ』『ただ』『このような場でめだかちゃんに話しておかないといけないことがあるからさ』」

そういって紙の束を黒神に差し出す。

・・・なんだ?あれは?

「・・・それは、署名?」

「『そう、署名だよ』『めだかちゃんの好きな皆の意見って奴だ』」

「『箱庭学園学校則第４５条第三項に基づき』『生徒会長黒神めだか』『君に解任(リコール)請求を宣言する』」

・・・何が狙いだ?

俺の周りの奴らは騒いでいるが、俺はそれよりも疑問を持った。

あと、生徒手帳っと・・・えっと何々?

「生徒会執行部の罷免に関する条目で・・・第三項は・・・『生徒会執行部に明白な不備がある場合・・・全校生徒の過半数の署名をもって役員は即日罷免される』。ああ、そういえばあったな。罷免される点が」

「『礼君の言うとおりだよ』『君は副会長を選定していない』『これは明らかに生徒会則第二条に違反している』」

生徒会則第二条。『生徒会長になった者は迅速に副会長・書記・会計・庶務の四職にふさわしき者を選定しなければならない』という内容。

「黒神の性能（スペック）が高すぎて気にしていなかったな。それに・・・黒神と正反対の人間がいなかった」

「ど、どういうことや？」

「鍋島先輩、黒神が求める副会長は黒神にとって天敵とまで言えるレベルの人材です。自分の意見に反対意見を出せるほど優秀かつ寝首をかけるほどの、ね」

「そ、そういえばそんなこと言っとったな・・・」

つまり、それを見つけ出せなかったのが痛いところだ。

適役は不知火あたりだったんだが・・・勧誘に失敗したな。

「それに・・・マイナス十三組は理事会とつながっている。これなら、過半数の署名は簡単だ」

「くっ・・・！」

壇上にいる阿久根先輩がうめき声を漏らした。

どうやら、正解だったようだ。

「『ちなみに会長が解任される際には役員もろ共だよ』『学校則第四十五条第七項！』『つまり高貴ちゃん達もお役御免ってわけだ』『今までお疲れ様！』『駄目な会長の下でよくがんばったね三人とも！』」

「学校則第四十五条には他にも補足があったはずだな、球磨川」

「『あるよ』『第十三項「解任責任」』『行事運営に支障をきたさぬよう解任請求者は次期選挙までの間、臨時で生徒会長を務めなければならない』」
「えっ!?それってまさかーーーー」
「『そう。この抜け道なら転校したての僕でも生徒会長になれる』『さあ、めだかちゃん』『その似合わない腕章を自分で外して僕に渡すんだ』」
「球磨川・・・!貴様という奴は・・・どこまでマイナスなのだ・・・!」

黒神が苦しそうに声を出した。

「『さあ、阿久根くん達もご苦労だったね』『君達の腕章も僕に頂戴』『無能な先代とは違い、僕はもう新生徒会の役員は選び終えている』『出てきていいよ』」

その一言により、舞台袖から現れる過負荷達。
怒江、志布志、蝶ヶ崎先輩、そして不知火。それと、兄貴。

「『僕なんて補佐までつけちゃったよ』『ね?えらいでしょ?』」
「不知火!?なんで!?」
「なるほど、不知火がそちら側なら納得がいったよ。転校したてにしてはやけに校則や生徒会則に詳しいはずだ」

「『さて、いい機会だし新生徒会長として新しいマニフェストを発表しなきゃ!』『え~っと、まずは・・・授業及び部活動の廃止』」

学生としての本分をぶち壊すマニフェストだなおい。

「『直立二足歩行の禁止』『生徒間における会話の防止』『衣服着

用の厳罰化』『手及び食器等を用いる飲食の取り締まり』『不順異性交遊の努力義務化』『奉仕活動の無理強い』『永久留年制度の試験的導入』『で、鳴神礼君のマイナス十三組への移動』」

最後がおかしいな。
なんで俺がそっちに行かねばならない！
しかもなんだ？兄貴以外がなぜか笑顔だぞ？

「『なお前生徒会の負の遺産である目安箱は』『当然この僕が引き継ぎますね』『困ったことがあったら遠慮せずになんでも言ってください』『２４時間３６５日』『僕は誰からの相談でも受けつけます！』」

よし。なら『生徒会長が俺の外堀を埋めようとしてきます。どうにかしてください』とでも書いて入れるとしよう。二百ぐらい。

まあ、それはさておいて、
黒神。お前しかこの状況を打開できる人間は今この場にはいない。
どうする？

「『礼君は「零静」だね』『この状況で打開できる方法があるのかい？』」
「あ、あるんか？」
「・・・ある」

存在はする。ただこの方法は本当に博打に近い。

「・・・黒神」

選択するのはこいつだ。

「・・・黒箱塾塾則第百五十九条『塾頭解任請求ニ関スル項目』」
「『・・・・・・・黒箱塾?』」
「この箱庭学園の前身ーーー黒箱塾におけるリコールのルールだよ。塾頭ーーーつまり今では生徒会長に解職を請求する場合、塾頭側と請求者側の決闘をもって次期塾頭を選出するという内容だ」

・・・選んだな。
ここでは確かにこの方法しかない。
球磨川を生徒会長にするという事態を逃れることが出来る。

「・・・これが吉と出るか、大凶と出るか」

他の奴らは安堵の顔をしているが、甘い。
窮地からは脱出できた。
しかし・・・日之影先輩の診断通りなら、本当にまずい。

「『あ、礼君』『この生徒会戦挙に君も出てもらうからね』」
「・・・わかったよ」
「れ、礼!!そんなあっさり・・・」

・・・生徒会側のメンタルを少し鍛えてやろう。
久しぶりに中学時代に戻るとしよう。

波乱の終業式が終わった。

第三十七箱　お、俺の兄貴がこんなに優しいわけが無い！！

終業式が終わり、俺は電話をかけていた。

「あ、不知火？」

『やあ礼君☆驚いた？』

「マジで驚いた。最近電話に出ないと思ったらそういうことかよ」

『心配してたんだ☆うふふ～♪』

「てっめ！ったく、この戦挙が終ったら鍋食いに行こうぜ。結局食いにいけてないし」

『え？いいの！？やったね！☆』

「ったく、都合のいい奴」

はあ、心配して損した。

取り越し苦労かよ恥ずかしい。

『・・・礼君も、さ』

「うん？」

『まだ礼君も、友達なのかな？』

「はあ？当たり前だろうが。お前は確かに人を喰ったような女だ。だがな、俺と善吉はお前のそういうところが好きでつるんでんだ。覚えとけよ？敵であっても俺と善吉はお前の友達だ」

『・・・そっか☆そんなにあたしに頭が上がらないか！』

「いや、そこまでは言ってないから！」

『じゃ、またね～！』

「お～、またな～！」

ふう。

ま、不知火なら大丈夫だろう。

鍋がいいかな・・・焼肉もありだな。

「・・・礼」

「あ？って兄貴か。どうした？」

一番会いたくない奴が現れた。

だが、いつもと雰囲気が違うな？

なんというか、おとなしい。

・・・はは～ん！

「兄貴、球磨川にふられたろ？」

「アホな事を言うな！」

「なんだ、ちげえのか。じゃ何？」

「ああ。お前、なんで戦挙に立候補した？」

「あ？邪魔だとかいいに来たわけ？」

「いや、一応理由を聞いておきたくてな」

「ほう、兄貴らしくないな？どうした？」

「いいから、さっさと答えろ」

むう、どうしたのだろうか兄貴の奴。

前にあったときは王様キャラだったというのに・・・

まあ、理由は決まってるんだよね～。

「兄貴と喧嘩したかったから」

「は？」

「いやさあ、俺ってさ兄弟喧嘩とかしたこと無かったじゃん。だから」

「・・・バカだな」

「てんめ！俺の大事な理由を・・・！」

「バカだなバーカ」

ぜってえコイツを百発殴ってやる！
兄貴がそこまで言うと、決心を固めていた俺の頭になぜか手を置いた。

「・・・本当に、バカだ」
「兄貴？」

ど、どうしたのだろうか？
急に目が優しくなっている・・・。
こいつ、まさか・・・！

「お、お前！兄貴の偽者だな！？」
「はあ！？」
「お、俺はだまされねえからな！！」
「・・・ぷっ！あっはっはっはっは！！」
「な、何がおかしい！！」
「っくっくっく！！」
「な、何なんだよ！？」

急に笑い出したぞ！？

「いや、楽しみにしてるからな？」
「お、おうよ。本物に伝えておけ！俺はお前に勝つ！ってな！！」
「ああ、じゃあな」

偽兄貴は手を振りながら歩き出した。
な、なんだったんだ？

「・・・アイツ、面白くなりやがって」
「『やあ靖人くん』『どうしたんだい？』」
「おお、球磨川じゃないか。いやな・・・」

そこまで言うと、急に黙り込んだ。
ただ、思い出を噛み締めるように笑みを浮かべて。

「『どうしたんだい？』」
「いや、なんでもない」
「『変なの』『礼君に関係することかな？』」
「俺があのバカに思うことがあるわけ無いだろう」
「『そうかな？』『まあ君が言うんならそうじゃないかな？』」
「疑問系じゃなく断言だ。じゃあな」
「『あ、じゃあね～！』」

球磨川と別れ、帰宅する。
そうさ、礼は、礼は・・・俺の弟だ。

誰が何を言おうと、あいつを絶対にこちら側に戻してやる。

「今度は・・・俺が体を張る番だ」

夕焼けにそう呟く靖人だった。

第三十八箱　庶務戦前1

一週間が過ぎた。
俺はというと、何もしていない。
善吉は特訓をし、他の皆は凶化合宿中だ。

「ま、なるようになれ・・・か」
『早く終って、夏休みを満喫したいね』
「まったくだ・・・」

こっちには夏休みを使って海の家でバイトをしたかったのに・・・。

『せっかく僕と礼君のラブラブが出来ると思っていたのに・・・』
「いや、それは無い」
『えっ!?毎日教室で会うっていう約束は嘘だったの!?』
「約束した覚えがねえよ!!」

知らぬ間に約束されていたようだ。

「はあ・・・まあ、これはこれで楽しめそうだな」
「『そう?』『礼君は楽しみ?』」
「・・・どうしてここにいる?球磨川」

背後から聞こえてきた声に少し冷や汗をかいた。
コイツは気配を消して俺の背後に立っているから怖い。

「『いやあ』『礼君がここにいそうだな?と思ったから』」
「お前の頭にはレーダーがついているのか?」
「『礼君感知器ならあると自負してるよ?』」

「そんなものは必要ないよな！？」

はあ、コイツは何をしに来たのだろうか？

「『あ、礼君』『僕、庶務戦に出るから』『見に着てね？』」

「あ？お前マニュフェストを言っておいて庶務かよ。人が悪いな」

「『いや、僕は悪くない』『庶務っていう雑用をやってみたかったんだ』」

「あ、そう。じゃ、また後で」

「『うん！』」

球磨川が嬉しそうにこの場から立ち去った。

さて、俺も行かないと・・・

「・・・着替え？」

「ああ。戦挙戦モデルに着替えて欲しい」

そういって差し出されたのは赤を基調とした改造制服。

俺は生徒会役員ではないのだが・・・

「礼なら似合うって！！」

「それに、礼君は生徒会補佐になるんでしょ？それなら着替えないと！」

古賀先輩？笑顔が怖いですよ？

「あの時の恨みもそのまま・・・」
「そっちが本音だな！？」
「いいから神妙にお縄につけい！！」
「い～や～！！」

「おお、似合うじゃないか！礼」
「ばっちりだぜ！！」

俺は皆と同じ真っ赤な衣装に身を包んだ。
誓いは無いけどな。

『さて、今のネタが何人に通じるかな？』
「（・・・何を誰に向けて言ってるんだ？）」
『独り言だよ』
「（はあ・・・）」

まあ、いいか。

「では、行くぞ！！」

『おう！！』

『生徒会戦挙受付会場』と書かれている扉を見つけたので中に入った。
部屋の中には、ジャンプを読んでいる球磨川だけがいた。

「『あ』『遅かったねめだかちゃん』『駄目だよー』『時間厳守ってプリントに書いてあったじゃないか』」
「・・・球磨川。貴様、まさか一人か？」
「『うん』『そうなんだー』『僕って礼君みたいに人望が無くってね？』『他の過負荷はみーんな海水浴とかで夏休みを満喫しているよ』」

・・・いいなぁ、俺も海水浴とかしたかったな。
海の家でバイトして、泳いだりしたいなあ・・・

「『あ、人吉先生みーっけ！』」
「！」
「『もう、前にあったときに逃げられてショックでしたよ』『そう

そう！』『この間怒江ちゃんと本屋に行ったら礼君とそっくりの男が出ているエロ本を見つけたんですよ！』『是非見てもらえませんか？』」

「待て！それは女子としてどうかという問題に怒江を巻き込んで何をやっとるか！！」

「『れ、れひひゅん！』『く、くひをひっぴゃらひゃいへ～！』」

うむ、ストレスが少しずつ無くなっていくな。

ここで更に半回転を加えて・・・！

「何をしてんだ！！」

「いたあああ！！」

脳天にチョップだと！？

誰だ！？

しかもがっちりとホールドを決めてきやがって！！

「って、兄貴！！」

「てめ、球磨川に何してんだ！！」

「俺の人権にかかわるんだ！ホールドを解け！！」

「本当に何をしているんだ！？」

兄貴！放してくれ！じゃないと俺が世間的に死んでしまう！！

「『ううう・・・助かったよ靖人君』『それにしても酷いじゃないか礼君！』『痛かったよ！！』」

「俺の方が世間的に痛くなりそうなことを言っておいてーーー！！」

「・・・球磨川？一体何を言ったんだ？」

「『礼君にそっくりの人が出ているエロ本の話を少々』」

「うん、それは確かに礼の言い分があってるかも知れんな」

「『え～？』」

兄貴！俺を助けてくれるのか！！
なんといい奴なんだ！！

「それはいろんな人と見るんじゃなく、過負荷全員で見たほうがいい」
「ＮＯ－－－－－！！」

コイツ、やっぱり敵か！！
俺の、俺の世間体がーーーー！！！

「ちょっと待て球磨川、礼と戯れていないでこっちを向け」
「『ん？』『なんだいめだかちゃん』」
「ひとりということはひょっとして、貴様が庶務戦に出馬するつもりか？」
「『ひょっとしなくてもそのつもりだよ、めだかちゃん』『僕は昔から庶務になることが夢だったんだ！』」

・・・嘘を言うな。

「『だから今日はよろしくね善吉くん！』『正々堂々フェアに戦おう！』」

球磨川が凄くいい笑顔で、俺達を見た。

・・・てか兄貴、本当に放してくれないか？
そろそろ腕が痛いんだ。

第三十九箱　庶務戦前2

「一一一!!球磨川!!!貴様は・・・!!貴様という奴はどうしてそうなのだ!!」

黒神が球磨川に掴みかかる。

「『?』『なんでそんなに怒ってるのめだかちゃん?』『僕と直接戦えなくなったから?』『それとも善吉くんがピンチだから?』」

「それも含めてだが・・・今回のこと全てだ!私には貴様の考えていることがさっぱりわからん!!」

苛立ちを少し抑えるためなのか、後ろの壁を殴る黒神。

その威力のせいで壁にヒビが入る。

「十三組の抹殺!?エリートの皆殺し!?どうして貴様はそんなことを企む!?そんなことで本当に世界が平和になると思っているわけではなかろう!?」

・・・どうなのだろうか?

エリート抹殺計画だったか?球磨川ぐらいしかわからないだろうな・・・。

「エリートと呼ばれようと、アブノーマルと呼ばれようと彼等は私達となんら変わらぬ人間だぞ!?喜んだり悲しんだりする人間だ!おいそれと傷つけていいものではない!どうしてそんなことがわからんのだ!?」

今まで溜め込んでいたものがここに来て破裂したっていう感じだな。

「『わからないくせにわかってもらおうとするなよ』『めだかちゃん』」

「ぐっ・・・」

「『でも・・・どうして僕がこうなのか、か』『ふうむ』『言われてみれば不思議だ』『考えたこともなかったなあ』」

黒神の言葉に考えるそぶりを見せる球磨川。

そして、俺たちに目が見えないようにしながら口を開いた。

「『うーん、そうだねぇ』『たとえばの話なんだけどさあ』『「人生はプラスマイナスゼロだ」って言う奴いるじゃん』『エリートでも喜んだり悲しんだりするとか』『幸福な人間もそれ相応の大変な苦労を積み重ねているとか』『まあおよそそんな意味で』『だから人間はみんな平等だって言いたいと思うんだけど』」

そこまで言い切って、球磨川は顔を上げ、目を見せた。

「『でも』『「人生はプラスマイナスゼロだ」って言う奴は』『決まってプラスの奴なんだ』」

「・・・！」

球磨川の言葉にたじろぐ黒神。

「『幸せな奴だからそんな悟ったみたいな常套句を言えるんだよ』『少なくとも過負荷(ぼくたち)は』『プラスがあったからってマイナス(やなこと)が帳消しになるだなんて思えたことがない』」

球磨川が黒神を真っ直ぐな目で見つめる。

「『なんのことはない』『僕は幸せでプラスなみんなに』『マイナスの気持ちをわかってほしいだけなのかもしれないね』」
「・・・どうせそれも嘘なのであろう。すがりつきたくなるような嘘だ！」
「『・・・うん』『きっとそうだね』」

・・・今のは、嘘なのだろうか？
俺は、球磨川が本当にそう思っているように聞こえた。
『すがりつきたくなるような嘘』か。
確かに、そうなのかもしれないな。

「『とにかく僕はめだかちゃんとは戦わない』『僕は君が嫌いだからね』『会長戦は他の過負荷が務めるよ』『だからめだかちゃんは、僕が善吉くんを嫌というほど螺子伏せる場面を』『間近でじっくりと見ればいい』」
「・・・球磨川！だから貴様はーーー」
「それでは定刻になりましたので始めさせていただきたく存じます。まずはみなさま、本日はご多忙の中こうしてお集まりいただきありがとうございます」

黒神が駆け寄ろうとすると、それに割ってはいるかのように目に包帯を巻いた男が現れた。
・・・謎のファッションセンスだ。

「わたくしめは僭越ながら今回の生徒会戦挙管理させていただく選挙管理委員会副委員長、二年十三組の長者原融通と申す者にございます。ほんのひと夏の間ではございますがどちら様もよろしくお願い致します」

第四十箱　庶務戦前3

長者原先輩の説明が始まり、ルールにとても厳格な人だということがわかった。
名瀬先輩によると、『公平』の異常を持っているそうで。
どんな圧力にも一切屈さない審判を行う。徹底的にフェアに、ありえないほど公平に、だそうだ。
あと雲仙先輩の唯一の男友達だそうである。

「で、クジ引き？」
「その通りでございます鳴神様。黒箱塾時代、彼等は十三の決闘法を用意したそうです。そして、その決闘法を選ぶ権利は挑戦者側、つまり球磨川さまにあるということでございます」

干支は・・・モチーフだとしても、最後の『人』はなんだ？
一つだけ黒いし。

「では、お選びください」
「『じゃあ巳だ』『縁起を担いで蛇で行こう』」
「『巳』でございますね。流石は球磨川さまと言わせていただきましょう。初っ端でこのカードを引ける人間はあなた様の他におりますまい」

そう言いながら長者原先輩は巳のカードをめくる。
『流石』とはどういう意味だろうか？

「庶務戦の形式は『毒蛇の巣窟』に決定致しました。これは我々が用意した十三の決闘法の中で、もっとも残虐なルールで行われる選挙でございます」

・・・確かに流石だ。
球磨川のクジ運は最悪な方向で運を引き寄せたらしい。

「では、グラウンドへと向かいましょう」

長者原先輩に連れられて、皆が外に出た。

「兄貴、この体制は一体何時まで続くんだ?」
「さあな」
俺はまだ兄貴にホールドを決められたままだった。
腕の感覚がもう無いので、このままでも別にいいか。

第四十一箱　庶務戦『開始』

「こちらになります」

案内されたのは、グラウンド。
長者原先輩が指し示す方向には、正方形の穴が開いている。

「縦十メートル×横十メートル×深さ十メートル。この深き闇こそが生徒会庶務戦の舞台となります」
「・・・学園のグラウンドにこんな大穴を空けおって、何が深き闇だ。で、この穴の底で善吉と球磨川が戦うのか？」

黒神が大穴を訝しげな目で見る。
俺もそれに習って穴に近づいて覗き込んだ。

「・・・はあああ！？」
「黒神さま、鳴神さまの驚きを見ればわかると思いますが、わたくしめと致しましてはこの穴の底で戦いをするというのはお勧めできません」
「どうしたの鳴神くん？」

古賀先輩が近づいてくる。
そして、俺の横に立って同じように穴を覗き込んだ。

「！？なっ・・・へっっ、蛇ぃいっ！？」
「・・・長者原先輩、もしかして・・・『ハブ』ですか？」
「はい。蛇ーーー、そして鳴神さまの観察眼には感服致します。その通り、トカゲ目クサリヘビ科のハブにございます。賢明なる皆々様（ノーマル）には申し上げるまでもありませんが猛毒の種類にございます。異（アブ）

常者であろうと過負荷（マイナス）であろうと、咬まれれば大袈裟でなく命が危ないとお考えください」

「『！』」

あ、球磨川が何か閃いたな？

・・・善吉に対して嫌がらせをするつもりなのだろうか？

「・・・じゃあ俺達はどこで戦うんだよ！？穴の底がこんなことになってたんじゃ・・・」

「ええ。その件でございますが、実はこのリング、まだ未完成でしてーーーーおやおや？どうやら丁度よいタイミングのようですよ」

ザッ、ザッ、ザッ！という足音のする方を見ると、大きな金網を持ってくる団体がいた。

黒い服に身を包み、まるで歌舞伎などに出てくる黒子を連想させる団体だった。

黒神に聞いてみると、選挙管理委員会の人達だそうだ。

選挙管理委員会の人達は、持っていた金網を正方形の大穴の四隅にあるポールにはめ込んだ。

「決戦舞台『毒蛇の巣窟』、これにて完成にございます。人吉さまと球磨川さまには穴の底ではなく、この金網の上にてバトルを行っていただくことになるわけでございます」

長者原先輩が大穴に背を向けて俺達を見て言い放った。

「・・・おいおい、さっきの選挙管理委員会の人は金網を固定してなかったですよね？そんな状態で戦闘なんてしていたら金網が落ちるんじゃないですか？」

「その通りでございます鳴神さま。しかしこれはそもそもそういっ

た競技なのでございます。ルール説明を致しますと、人吉さまが腕にお巻きになっておられる腕章、それを奪えば球磨川さまの勝利ー
ー守りきれば人吉さまの勝利でございます。奪取または守防にあたっていかなる手段をもちいても構いません。また、制限時間も設けません。しかし、あまりにも時間をかけていると、当たり前ですが金網はどんどん底に沈んでいきます。そして、金網が底に達すれば当然のことながら両者共に、金網の隙間からすり抜けた獰猛な毒蛇の餌食となるわけでございます。その場合、両者失格となりますので悪しからず」

まあなんと球磨川に有利な条件。
ギブアップもありだそうだが、どう考えても球磨川がギブアップ宣言を簡単にするとは思わない。
それに、善吉の勝利条件が無い。
不公平に感じてしまうな。

「いえ、鳴神さま。生徒(そちら)会側の勝利条件は、球磨川様にただ一言『まいった』と言わせるだけでございます。圧倒的な実力差で、挑戦者を屈服させることができないというのなら、生徒会戦挙を執り行う意味が無いでしょう」
「・・・王としての義務、というわけか？」
「その通りでございます。または公正なる罰則と考えていただけると幸いに存じます」

むむむ・・・球磨川を屈服、つまり『まいった』なんて言わせるのは至難の業だろうな・・・。
これはいよいよ善吉が不利になってきたな。

「・・・・・・」

善吉が金網の足場を眺める。
その肩に、球磨川が手を回し善吉にささやき始めた。

「・・・!!!球磨川っ・・・!てめえって奴は・・・・!」
「『あは!』『怒っちゃった?』『まあ、君がそんな風に僕を不快に思っているう内は』『百年かけても僕を止められないよ』」

球磨川はそう言いながら、俺たちに背を向け、金網に近づき始めた。

「『受け入れることだよ』『善吉ちゃん』」

「『不条理を』『理不尽を』『嘘泣きを』『言い訳を』『いかがわしさを』『インチキを』『堕落を』『混雑を』『偽善を』『偽悪を』『不幸せを』『不都合を』『冤罪を』『流れ弾を』『見苦しさを』『みっともなさを』『風評を』『密告を』『嫉妬を』『格差を』『裏切りを』『虐待を』『巻き添えを』『二次被害を』」

「『愛しい恋人のように受け入れることだ』」

「『そうすればきっと』『僕みたいになれるよ』」

「！！！」

球磨川が、何の躊躇も無く金網に足を踏み出した。

恐ろしい奴。死ぬことが怖くないと言っているようなものだな。

そして、球磨川の一歩に驚愕する善吉。

「・・・人吉。ねえ今からでも棄権するってアリだと私は思うよ」

「！」

「アンタさっきからヘンに強がっているけど、それは心底あいつにブルってる裏返しなんでしょ？実際あいつと向き合ったらその時点で身動き取れなくなっちゃうんじゃない？」

「・・・」

「元ノーマルで、今も異常（アブノーマル）をなくしてる私だから言えることだけど、逃げることは恥ずかしいことじゃないよ。むしろ私は、負けるとわかっているのに意地で逃げない方が、恥ずかしいと思う」

・・・善吉。俺は確かにそう思う。
けどな、善吉。お前は違うだろう？

「善吉」
「・・・礼」
「お前はどっちだ？恥知らずか恥ずかしがり屋か」
「・・・カッ！言われるまでもねえよ。古賀先輩、ご忠告ありがとうございます！だけど俺は、恥知らずでいるより、恥ずかしがり屋でいたいと思う」

善吉が、金網に足を踏み出した。

「よし！善吉、がんばれ！！」
「がんばる！！」
「・・・もう！本当に男子ってどうしようもないなあ！」

古賀先輩が呆れたように言う。

「まあ。ああ言っちゃあいるが、勝算がねーわけじゃねーだろ」

名瀬先輩が古賀先輩に言う。

「こうなると気になるのは、あいつがこの一週間誰の下で修行してきたのかってことだなー」

確かに。日之影先輩と真黒さんは凶化合宿。
鍋島先輩は入院中だし・・・。

「・・・・・それについては心当たりがありますよ。確証こそは

ありませんが、しかし十中八九間違いないでしょう」
「え？黒神わかってんの？」
「ああ。ですから問題は、善吉がその人の下でどんな修行を積んできたかという一点・・・」
「『さーて、じゃあさっそく始めようか！』『生徒会庶務戦！』」
黒神の言葉をさえぎるかのように球磨川の声が耳に入った。
「『といっても』『いきなり腕章を奪っちゃってもつまらないし』」
球磨川が普通の螺子の何倍もある大きさ螺子を取り出した。
どこにしまっていたんだ？
それを、善吉に刺そうと球磨川が螺子を突き出した
「『最初はちょっと遊ばせてもらうね、善吉ちゃんーーーー』」
「・・・フッ！」
善吉の踵落しが、球磨川の右肩に直撃した。

第四十一箱　庶務戦『開始』（後書き）

おまけ

・・・そういえば

「長者原先輩、これだけの数のハブをどうやって集めたんですか？」
「もちろん、沖縄に向かい採取して参りました。選官総出で」
「・・・ご苦労様です」

意外と手間がかかっているし、影で苦労する選挙管理委員会であった。

第四十二箱　庶務戦『弐』

善吉の蹴りの衝撃で金網が五センチほど沈んだ。
どういう結果にしろ、早く終りそうだな・・・この庶務戦は。

・・・っていうか

「普通に戦えてるな、善吉」
「そうだな。いやー、さっぱり見当もつかねえぜ」

名瀬先輩にわからないなら俺にもわからないな。
むう、誰が鍛えたのか気になる。

「『いったいーい』『うわー右腕が動かないー』『呼吸もなんだか苦しいぞお？』」

・・・誰に説明してるんだ？球磨川。
そんな棒読みでしゃべっていたら、痛がっているとは思わないぞ。

「『鎖骨が折れて肺に突き刺さったかなー』『一生後遺症が残るなーこれは！』」

ブリッジをするかのように起き上がる球磨川。
うん、気持ち悪い動きだな。
ぐにゃあああああ、という効果音が聞こえてくるくらいだ。

「『あーでも痛くなくなってきた？』『治る兆しかなー』『それとも壊死する兆候かなー？』」

また、螺子を構えて善吉に向かう。

「『まっ』『どっちも似たようなもんかあ！』」

球磨川が突っ込んでいく。

が、今度は球磨川の顔面に蹴りが直撃した。

更に五センチ、金網が沈む。

「・・・すげえな」

「本当だぜ。人吉の奴、球磨川に心を折られるどころか球磨川に対する恐怖心！トラウマを完全にクリアしてやがる！魔法使いの兄貴でもこうはいくまい！こりゃあこの一週間人吉を鍛えたというトレーナーは兄貴を越える明白楽に違いないぜ！これからはそのお方を魔王と呼んでみんなで尊敬しよう！」

「そうですね！！」

魔法使いの真黒さんの実力は良く分からないが、確かにここまで出来るのは凄い。

過負荷に対しての対策をちゃんと練っている人だ。

尊敬しても損は無いな！

『・・・』

「ん？どうしたんだ皆？」

「礼、本当にわかっていないのか？」

「名トレーナーさんのことか？誰なんだ？」

「・・・くじ姉だよ」

「え？名瀬先輩？」

「あーそうだよ俺だよ！実は俺が人吉を鍛え上げてましたけど駄目ですかー！？」

照れ隠しなのか少し大袈裟に振舞う。
だが俺にはそんなことは関係なかった。

「魔王さま！！」
「お、おお！？」

俺はなぜか名瀬先輩の両手を握り締めて尊敬のまなざしで見つめていた。

「こ、こら鳴神くん！名瀬ちゃんから離れなさい！」

古賀先輩に引き離される俺。
ってかなんで俺は名瀬先輩の両手を握っていたのだろうか？
まあ、古賀先輩に拘束されながらも、俺達は名瀬先輩が善吉のトレーニングをし始めたかの経緯を聞いた。

・・・・・・・・・
・・・・・・
・・・
・

「おい人吉。お前凶化合宿に兄貴のトレーニングにも参加せず、来週の庶務戦どうするつもりなんだよ？」
「別に・・・ノープランですよ。日之影先輩と真黒さんには見込みのある他みんなを鍛えるのに集中して欲しいから辞退しただけで、俺はいつも通りのトレーニングを地道に行うって感じですかね」
「ふーん、ところでお前。俺に何かお願いしたいこととかねーの？」
「は？いや、別にないですけど？」

きっぱりと断る善吉。
だが、名瀬は善吉に注射器の針を今にも突き刺せる位置まで突き出した。

「いーやあるはずだよく思い出せ。高千穂先輩！宗像先輩！そして古賀ちゃんとーーー『十三組の十三人（サーティーンパーティ）』の戦闘班を見事に鍛え上げたフラスコ計画統括のこの俺に！人間の肉体を改造し強化することにかけては右に出るものはいないこの俺に！お前はお願いしたいことがあるに決まってる！」
「え？え？えええええっ！？」

「とまあそんな感じで？まさしく嫌々やむおえず暇つぶしに！俺は人吉を一週間調教してやったってわけさ」
（いい人なのに性格がとても鬱陶しい！）

俺は拘束されながらもそう思った。
そして、次に感じたのが背後からの不機嫌なオーラ。

「ふーんそっかー。最近名瀬ちゃん付き合いが悪いと思ってたけど、そっかー人吉と遊んでたんだー」
「ハッ！ち、違うんだ古賀ちゃん聞いてくれ！俺はあくまで実験の一環としてーーー」
「いーよいーよいーんだよー。私なんて名瀬ちゃんにとっては実験台の一人に過ぎないんだもんねー。人吉に忠告とかしちゃって馬鹿みたい私ー」

拘束されたおかげで俺は古賀先輩の嫉妬だらけの言葉を無理やり聞かされた。
なんだこの二人。のろけすぎじゃないか？

「鳴神くんも善吉に忠告してたのにねー」
「そーですねー（棒読み）」
「ぐふう！」

名瀬先輩が胸を押さえた。
俺と古賀先輩の言葉にまさしく胸を痛めたのだろう。
その後、嫉妬でむくれている古賀先輩を背後から抱きしめる名瀬先輩。
仲いいな、この二人。

「・・・善吉を鍛えてくれたことはありがたいですが。お姉さま、まさか改造手術を施して薬漬けにしたということはないでしょうね？」

黒神が善吉の心配をして質問を投げかける。

「ま、まあ！そうしてやってもよかったんだがな。残念ながら時間が足りないのは凶化合宿でも改造手術でも一緒だよ」
「ではどんな手を使ったのです？どうやって善吉に球磨川（マイナス）に対する恐怖心やトラウマを克服させたのですか？」
「そこは見解の相違だなめだかちゃん。クリアしたとは言ったが、誰も克服したとは言ってねーぜ？」
「は？」

黒神が疑問符を浮かべたところで、激しい蹴りの音が耳に届いた。

「しこたま入ったーっ！！」
「てゆーか！人吉あいつ！目を閉じてっ！？」

なるほど。
見るだけで心が折れる奴等なら見なければいいというわけか。
しかし目を閉じたままあんな不安定な足場で戦うほうが怖くないか？

「だからそこら辺を一週間かけてみっちり鍛えてやったのさ。トレーニング中はもちろん食事中も睡眠中も目隠しを外すことなく生活してもらった。動物相手のじゃれあいから始まって、最後には目を閉じたままボクシング部の連中とスパーリングできるところまで行ったぜ。今ならあいつは目隠しをしたままで学園を一周できるだろうよ」

・・・よーやる。
失敗したらすぐに負けるぞ？

「大敗の可能性増やしてこそ勝率を上げる！それがこの俺、名瀬沃歌の戦法（タクティクス）だ！」

ノーリスクなんておこがましい。
リスクがあるからこそ勝率が上がるという発想だな。

「おわかりかい？球磨川先輩。受け入れるも何も！最初から眼中にねーんだよお前のことなんか！！」
「『・・・やれやれ』『目の前にいる僕を無視するなんて酷いなあ』『これは週刊少年ジャンプだったら規制されかねないいじめの描写だよ』」

・・・そこまでか？

しかし、魔王様は考えることが普通と逆で面白いなあ。

「もちろん俺が善吉に教えた戦法はこれだけじゃねーぜ・・・。次回にもまだまだ続くぞ。魔王・名瀬ちゃんのマイナス無効化システム！」

第四十三箱　庶務戦『参』

「魔王さまの戦法はどのくらいあるんですか？」
「・・・ごめん、名瀬先輩に戻ってくれない？」
「いいですよ。名瀬先輩の戦法はどのくらいあるのですか？」
「ざっと十三だな。にしても、気持ち悪い動きだな、アイツ」

名瀬先輩が指を指した方向には、気持ち悪い動きで起き上がる球磨川の姿があった。

「球磨川をプラス思考で考えると、気持ち悪いですよ？」

戦闘時のアイツは、プラス思考で戦うと必ず、マイナス思考まで引きずり込まれる。
かといって、マイナス思考で考えると生徒会執行部の威厳自体が無くなる。
つまり、球磨川を倒すには球磨川レベルのプラス思考で挑まなくてはならない。

「それにしても善吉の奴、よく球磨川の居場所がわかるな」

善吉が間髪いれずに球磨川を蹴る。
球磨川が何度も蹴られ、吹き飛ぶ。

「声で位置を特定してるんだよ」
「え？ですが球磨川の声を聞いただけでも・・・」

心が折れていく。
アイツの声だけでも人の心を折るなんて造作も無いからな。

「いやあ?今の善吉にとって音は貴重な情報源だからな。しゃべってる内容の気持ち悪さなんて関係なく、ただただ反射的に!ただただ機械的に!音のした方向を蹴るだけなのさ」
「なるほど、球磨川を黙らせることも出来る、ということですか」
「ああ。簡単だろ?そして、黙っても意味が無い。マイナス無効化システムその三」

球磨川が口を閉ざしたというのに、善吉は球磨川を蹴り続ける。

「見えなかろうが、聞こえなかろうが!お前の気持ち悪さは肌で感じるぜ!!球磨川アアア!!!!」
「『う』『ぐあ』『善吉』『ちゃんーーー』」

・・・上手い。
本当に考えられている戦法だ。
気持ち悪さを逆手に取ったこれ以上ないと思えるほどシンプルかつ最高のマイナス封じ。
ただ・・・自分の置かれている状況が見えていないのがこのシステムの欠点だな。

「長者原先輩、善吉へのアドバイスはＯＫでしょうか?」
「鳴神さまは生徒会補佐候補でございましたね。はい、補佐はその場に応じてのアドバイスが可能というルールでございます」
「ありがとうございます。では・・・善吉!球磨川を蹴り続けるのはいいがそろそろ金網の方が結構沈んでるぞ!!」
「おっと・・・!サンキュー、礼!球磨川をギブアップさせなきゃいけねーんだった」

善吉が俺のほうを向いて手を振る。

わからないと思うが俺も手を振り返した。

「息を潜めたってどこにいるか丸わかりだぜ！視界の無さにも慣れてきたし、ここからは先は更に蹴る！降参するなら今のうちだぞ球磨川禊！」

「『・・・』『うん』『参った！』『僕の負けだよ』『強くなったね善吉ちゃん！』」

「「「！？」」」

球磨川が自身の負けを確定した。

・・・ここからか。

「『いつまでもか弱い後輩だと思っていたけど』『いつの間にか僕を越えていたんだね』『なんだろう不思議と全然悔しくないや』『ほっとしたよ』『きみはもう僕がいなくなっても大丈夫だね』」

球磨川が、少し嬉しそうに言う。

「『ふふっ』『と言っても信じてはもらえないかな』『きみ達にはーーー特に善吉ちゃんには僕は随分辛く当たってきたからね』『だけどどうやらその甲斐はあった』『きみ達のために心ならずも悪役を演じてきたけれど』『これなら真実を隠す必要は無いね』『今こそ語るよ』『僕がこの学園に来なければならなかった理由を！』」

「・・・・・！？この学園に来なければならなかった理由！？それはどういうことだ球磨川！！」

球磨川がいい台詞を言い放つ。それにより善吉は、球磨川に対しての警戒心を緩めてしまった。

「善吉イ！なに気を緩めてやがる！！球磨川はここからだろうがあ

！！」
「がッ！！」

善吉の体に何本もの螺子が突き刺さる。

「『僕がこの学校に来なければならなかった理由――』『それはほら』『親が高校くらい出とけってうるさいんだよ』」
「――――！！！！！」
「善吉イ！！」

黒神が悲痛な声で善吉の名を叫んだ。

「『相手（ぼく）が降参したぐらいで油断しないでちょうだい』『こともあろうかこの僕と』『スポーツでもしているつもりだったのかい？』」
「くっ・・・！球磨川ア・・・！！」
「『いいねその顔』『やっぱり善吉ちゃんは』『目が綺麗だ』」

球磨川を睨む善吉の目を褒めた。

「～～～～～～～～っ！！長者原二年生！あやつは降参を宣言した後に善吉を攻撃したぞ！あれは反則ではないのか！？」
「・・・いえ、黒神さま――――反則以前の問題です。球磨川さまが降参を宣言した時点で既に勝敗は決しております。庶務戦は人吉さまの勝利――即ち現生徒会の勝利で幕を閉じました」
「だ、だったら早く止めに――」
「・・・だからこそ」
「『止められないんだよ』『めだかちゃん』」

俺の言葉に重なるように球磨川が口を開いた。

「『礼君は理解したみたいだけど』『長者原君の言う通り』『僕の負けで決着はついている』『だからこそ、ここから先は』『僕と善吉ちゃんの個人的な喧嘩だよ』」

そう。だからこそ、選挙管理委員会の長者原先輩は止めに入ることが出来ない。

・・・足場的にも。

「くっ・・・！なら私が・・・・！！」

「ダメよ！今あなたが飛び降りたらその重みで一気に底まで到達するわ！！そうなったら、生き残れるのは『動物避け』のスキルを持つあなただけじゃない！！」

「・・・まさか、他の人が助けられない位置まで金網が落ちるのを待ったって言うの！？高校生の発想って言うか、人間の発想じゃないでしょ！！それって！！」

「・・・それが、過負荷（マイナス）ですよ」

いけるか？俺の『現実踏否（ブレイクダンス）』なら重さを極限まで軽くすれば・・・

『いや、多分「現実踏否（ブレイクダンス）」でも発動までのタイムラグで間に合わないね。礼君の能力以外は』

なじみのアドバイスが入る。

今役に立つのは俺の、能力のみ・・・。

「・・・礼、お前はここにいてもらう」

「兄貴・・・」

「これは球磨川が望んだ喧嘩だ。お前には入らせない」

兄貴が俺の目の前に立ちふさがった。

「く、球磨川くんの怪我が治ってる・・・！」

人吉先生の言葉どおりに、球磨川の怪我が治る。

・・・携帯を見に行った時と同じだ。

「『おいおい』『適当なことを言わないでくれよきみ達』『それじゃあまるで僕の過負荷（マイナス）が治癒能力か何かみたいじゃないか』」

球磨川がどこか遠くを見て、言葉を紡ぐ。

・・・てか

「・・・誰に言ってんだ？」

『あそこの屋上みたいだね・・・えっと、二人いるね。双眼鏡を持って』

「・・・なんでわかるんだよ」

「『それは僕だからだよ』『礼君』」

「・・・左様ですか」

球磨川から意味のわからない補足説明が入った。

「『話を戻すけど』『治癒能力のように前向き的な能力が』『僕のような負完全（ねじれ）から生まれるわけが無いじゃないか』」

そこまで言うと、球磨川は善吉に手を伸ばした。

「『僕はただ善吉ちゃんのがんばりを』『僕が彼に蹴られまくったという現実を』『「なかったことにした」だけさ』」

そしてその手のうちの二本の指が、善吉の目に触れた。

「『現実（すべて）を虚構（なかったこと）にする』『それが僕の「大嘘憑き（オールフィクション）」だ』」
「うっ、うっ、うおおおおおおおおお！！」

善吉が、悲鳴を上げた。
球磨川はただそれを楽しむように見ている。

「チッ！人吉の野郎何やってんだ！完全にビビらされてやがる！落ち着け人吉イ！まずは目を閉じろ！いったんリセットだ、切り替えろ！！」

名瀬先輩が善吉のフォローに入る。

「さっきと状況は何も変わってねえだろ！訓練どおりにやれば大丈夫だ！！」
「『いやあ名瀬さん』『目を閉じる必要は』『もうないんじゃないかなあ』」
「どういう意味だ！？」
「『善吉ちゃんは過負荷（ぼく）を見たくもないみたいだから』『ずっと見なくても済むようにしてあげたんだ』『つまりーーー』」

「『きみの視力を「なかったことにした」』」

「ーーー!!!球磨川ア!!」

「『だけど安心して善吉ちゃん』『それでもきっと地獄は見られると思うから』」

黒神の怒りの叫びを無視して、球磨川は善吉にそう告げた。

第四十四箱　庶務戦『終了』（前書き）

はあ？俺の視力を「なかったことにした」だって？それがどうした馬鹿馬鹿しい！
元々俺は目を閉じたまま戦うつもりだったんだ！視力をなかったことにされたところで痛くも痒くもならねえよ！
むしろ目を瞑るまでもなくお前の不気味な姿が見えなくなって丁度いいぜ！ありがとうございますと礼を言いたいぐらいだ！
『すべてをなかったことにする』過負荷（マイナス）ーーーー『大嘘憑き（オールフィクション）』！
なるほど、大したスキルだがーーーー今更驚きもしねえよ！てめえみたいに負完全にお似合いのスキルってだけじゃねえか！

さあ！続けるぞ球磨川！なんなら俺がお前をなかったことにしてやるぜ！！

第四十四箱　庶務戦『終了』

善吉は、立ち上がった。
だが・・・明らかにビビって震えている。
心の中では必死に明るく振舞おうとしてるんだ。だが・・・震えてしまう。

「・・・善吉・・・！！！」
「抑えて・・・めだかちゃん・・・！」

黒神は今にも球磨川に飛び掛り、善吉を救出しようと前へ進もうとする。

「うっ、うわあああああああああああああああああああ！！！」
「『ヒョイっと』」

善吉が球磨川に蹴りを放ったが、軽く避けられてしまう。

「『ところで善吉ちゃん』『一つ聞いてみたいんだけど』『「目を閉じたほうが強くなる」とか』『そんな戯言、本気でそう信じていたのかな？』」
「あああああああああああああああああああ！！！」

蹴りを、何発も放つ。だが全て、避けられる。

「『漫画（フィクション）じゃないんだから』『見えた方が強いに決まってるだろう？』」
「・・・！！」

裏返った。
今まで切ってきた善吉のカードが、球磨川のエースによって全て切り捨てられた。
つまり、善吉を支えていた名瀬先輩考案の『マイナス無効化システム』は全て、マイナスにしか働かない。

「つーか聞いてねえんだよ。なんだよ『すべてをなかったことにする「大嘘憑き(オールフィクション)」』って！てっきり俺は球磨川の過負荷(マイナス)は問答無用な治癒・回復能力だと思ってたぜ。あるいはせめて幻覚系とかよー、フタを開けてみりゃあ全然違うじゃねえか！むしろ真逆だと言っていい！」

名瀬先輩が黒神を睨む。

「それを教えておいてくれりゃー手の打ちようはあったんだよ。お前ら中学時代からの敵対(つきあい)なんだから知ってるはずだろ？」
「・・・・・知りませんよ、中学生の時の球磨川は、あんな物理法則を無視するような真似はできませんでした」
「！！」

・・・つまり、今球磨川が使っているのは新たに手に入れた、いや、新たに失った過負荷(マイナス)か。

「・・・チッ！怯えてんじゃねーぞ人吉！テメーを鍛えてやったのは誰だと思ってやがる！！聞けばそいつの『大嘘憑き(オールフィクション)』は最近身につけたばかりの過負荷(マイナス)らしいじゃねえか！！」
「！！」

名瀬先輩の言葉に善吉が反応を示した。

「つまり使い慣れてねーってことだ！ビビるこたあねえんだよ！！すべてをなかったことにするってのもハッタリに決まっている！本当にそこまでのことができるなら、そもそもこんな戦挙は成立しねえ！むしろアンコントローラブルな能力と見たほうがいいぜ！！」

「・・・・・名瀬先輩・・・・・」

上手い。善吉が少し冷静さを取り戻した。

これならまだ希望がある。

「『・・・ご名答』『確かにこの「大嘘憑き（オールフィクション）」』『怒江ちゃんの「荒廃（ラフレシア）した腐花」みたいに乱用できるタイプの過負荷（マイナス）じゃないよ』『だって』」

そこで区切ると、名瀬先輩を残念そうに見ながら言う。

「『油断すると世界そのものを』『なかったことにしちゃうからね』」

「・・・・・」

流石に、言葉を失ったか。

「『ただし、まるっきりコントロールできないというわけでもない』『たとえば善吉ちゃんの視力をなかったことにした現実を』『更になかったことにするくらいはできる』」

「！！」

善吉が球磨川の言葉に顔を上げた。

「『あれ？』『反応したね善吉ちゃん』『まさかとは思うけど戻し

てほしいの？』」

本当にあれれ？と思ったかのように首をかしげる球磨川。

「『僕のことなんて眼中にないって』『あんなに格好よく言ってたのにおかしいなあ』」

「・・・・・・・！」

「『まあでも、そろそろいい時間だし』『喧嘩はやめて仲直りしようか善吉ちゃん』」

「・・・・仲直り・・・・だと？」

「『うん』『善吉ちゃんが僕と友達になってくれるなら』『その目』『戻してあげてもいいよ』」

球磨川が両手を広げ、善吉を仰ぎ見る。

「『僕たちがこんな風に争う理由なんか何もないじゃないか』『そんなことより仲良くしようよ』『いろいろ行き違いもあったけど』『僕たちはきっと、とてもいい友達同士になれると思うんだ』」

「～～～～～～～っ！」

やわらかな笑みを浮かべ、善吉を見る。

甘い。心を腐らせるほど甘い言葉だ。

「馬鹿な・・・何言ってんだあの野郎・・・。なかったことをなかったことにするなんて、そんなレトリックみてーなことできるわけねーだろ・・・！」

「いえ、お姉さま・・・。球磨川はやりますよーーーーできなくってもやります。球磨川は善吉の心を折るためならば、不可能でも可能にし、不可逆だって可逆にする・・・！！」

黒神が悔しそうに呟く。
だが、それは間違いだ。球磨川にだって出来ないことがある。

「『今までいっぱい意地悪してごめんね』『それもこれも全部善吉ちゃんの気を惹きたいがためだったんだよ』『折角の夏休みだし』『これから礼君も誘って一緒に遊園地に行こう』」
「・・・・・・・・」

善吉、お前はどうする？
ここで頷けば、お前は助かるかもしれない。
もしかすると、球磨川は今までと違って本当に優しく接してくれるかもしれん。
これが嘘だとしても、お前はこの状況から脱出できる。
・・・だから、

「・・・善吉、お前のしたいようにしろ」
「礼・・・」
「もうこの勝負はお前の勝ちで決着は着いてる。お前の好きなようにしたらいい」
「・・・ああ、そうする。球磨川・・・」
「『うん』『聞かせてよ、善吉ちゃんの答え』」

「俺はお前が嫌いだ。だから、友達にはなれない」

「・・・よく言った」

善吉の心は折れなかった。しかも、何の躊躇いもなくきっぱりと断った。

善吉、お前はやっぱり凄い奴だよ。

「めだかちゃん！楽しい高校生活だったなあ！」

善吉は声を張り、黒神に言う。

「入学式！新入生代表の挨拶でお前はいきなりぶちかましてくれたよなあ！日之影先輩とも実は最初モメてたしな！そうそうたる先輩方を向こうに回しての生徒会選挙！ありゃあ燃えたぜ懐かしい！目安箱を設置してからは休む暇も無かった！一学期だけで百件以上は悩みを解決したか？花の世話全部俺におしつけやがって！阿久根先輩との柔道対決！喜界島との水泳対決！敵だったあいつらが今じゃ一番頼れる仲間だ！風紀委員会との抗争！時計台地下の視察！忘れようもないほど大変だった！！」

今までの思い出を懐かしむように、善吉はしゃべる。

・・・善吉・・・・！

黒神も善吉の考えに気づいたのか、顔がどんどん青ざめていく。

「やめろ・・・善吉」

「いろいろあったけど、今となっては全部いい思い出だ」

「何を言っておるのだ善吉・・・？やめろ・・・！言うな」

「礼、お前には本当に助けられた。お前のフォローやアドバイスがなけりゃあ、俺は此処まで来れなかったよ。しかもお前が『レイちゃん』だったのは驚いたぜ！」
「善吉・・・やめろ・・・！」

「そんな今わの際みたいなこと言うなあ！！！！」

善吉。お前は絶対に折れない。それがお前の強さであり、お前の弱点であり、そして、お前の

「好きだぜ。めだかちゃん、礼」

俺がお前の、一番大好きなところだから。

球磨川が、背を向けている善吉に襲い掛かる。
それを善吉は、蹴って防ぐ。

「『～～～～～～っ！！』『嘘・・・・！』『見えないはずなのに・・・・！！』」
「見えなくても戦えるように一週間、名瀬先輩とがんばったんだ！お前は俺の努力まで！なかったことにはできねえよ！」

蹴った足を自分の下に引き戻す。

「とはいえ身体はまだお前にビビってる！心底お前にブルってる！だがそれなら戦いようはあるぜ、マイナス無効化システムその１３！」

引き戻してきた足を振り上げる。

そして、金網を踏みつけた。

「身体の震えが止まらないなら！もっと激しく震えるまでだ！！」

とてつもない衝撃が、金網を襲った。

「『！？』『震脚・・・・っ！？』」

その衝撃で、金網が底まで一気に下がる。

当然・・・、ハブが一斉に二人を襲う。

「『う』『わ・・・！』『気持ち悪っーーー！』」

「ハブの毒は出血毒・・・！これなら球磨川もひとたまりもねーだろ・・・！しかし・・・！」

「『そう僕には！』『「大嘘憑き（オールフィクション）」という欠点（マイナス）がある！』」

両手から螺子を取り出す。

「その欠点なら、俺がカバーしよう」

その両手を善吉が掴み、球磨川の過負荷（マイナス）を封じた。

「友達にはなれないけどせめて一緒に死んでやるよ。一緒に地獄を見に行こうぜ球磨川先輩！」

「『・・・・・』『嫌だよ』『死にたくない』『謝るから離して』『僕が悪かった』」

「ははっ。お前の口からそんな言葉を聞くとはな。とてもじゃねえが、信じられねえよ」

二人の身体が大量のハブに咬まれ、悲鳴を上げる。

「善吉・・・！善吉・・・！！ぜんきちイイイイイいいいいいいいいいいいいいい！！！！」

黒神の叫びもむなしく、球磨川と善吉はその場に倒れ伏した。

第四十五箱　庶務戦『後』

「早く血清を持ってこい！ありったけだ！！病院へ運んでいる時間はないーーーこのままここで処置する！！保健委員会への連絡を忘れるな！！」

長者原先輩の指示により、穴から善吉と球磨川が選挙管理委員会の手により引っ張り上げらる。

「B班は球磨川さまを担当しろ！咬まれた数は球磨川さまの方が多いぞ！急げ！意識が完全になくなっている！！」

「A班は俺と一緒に人吉さまの解毒に全力を注ぐんだ！意地でも死なせるな！自分の身体を治すつもりでやれ！」

治療が開始された。

「そしてC班からZ班までは全員がかりで！彼女を絶対に放すんじゃないぞぉぉっ！！」

長者原先輩が顔を向けた方向には、選挙管理委員会をなぎ倒し、善吉のところへ向かおうとする『乱心モードの』黒神の姿があった。

「善吉いいいいいいいいいいっ！！！！！！！！！」

「絶対に放すなよ・・・！放した瞬間選管全員皆殺しにされるぞ」

「やめろ黒神！お前が暴れても人吉が助かる訳じゃないだろ！？」

・・・善吉・・・・。

酷く、友人の死に対してただ「零静」に思考をつづける。いや、続

けなければいけない・・・。
だが、俺の意思に反して感情は昂ぶったままだった。
待ってろ、その死を『零(なかったこと)』にしてやるからな・・・。
善吉の下へ、向かう。

「「「「「「(ゾクッ!!!)」」」」」」

一斉に、皆が俺を見た。
名瀬先輩も、古賀先輩も、暴れている黒神も顔を青ざめて俺を見た。

「どいてください」

その一言で、選挙管理委員会の人は道を開けた。

「・・・ありがとうございます」
「鳴神・・・!お前・・・!?」
「礼・・・!!」

古賀先輩と、黒神が俺を見て声を絞り出した。
そんなのはどうでもいい。それよりも善吉だ・・・。
善吉の下に辿り着いた。

「・・・心臓が、止まっている・・・だが・・・これは・・・」

ハブの毒はまだ効いていない。
全身を襲う痛みでショック死しそうな状態だ。
だが、それとは別の力が善吉に働いている。
これは・・・。

「・・・なじみ、お前だな?」

『ああ。ショック死しそうだったから意識を切り取ってやった』
「・・・もう少し時間はかかるか？」
善吉は今、なじみに会っている。
まあ、顔は覚えていないだろうがな。
話の途中で切り上げるのは申し訳ない。
『もうそろそろ終るよ。それと・・・「欲視力（パラサイトシーイング）」をなくなった視力の代わりにしたからもう君は貸し出せない』
「・・・そうか。なら」
早速発動させるか。
「『その必要はないよ』『礼君』」
能力を発動しようとした俺の背後から、聞きなれた声がかかる。
「球磨川・・・？お前何時の間に・・・」
「『さっきのやり取り聞いてなかったのかい？』『まあいいや』『久しぶりだね！』『その状態は』」
「それより、必要ないとはどういうことだ？」
「『「零静」だね』『そんなキミも愛しいけど』『僕の「大嘘憑き（オールフィクション）」で』『生き返らせるからだよ』」
「・・・人が悪いな球磨川。ここまで善吉を殺しかけておいて結局は生き返らせるのかよ」
「『いいや、僕は悪くない』『それに』『僕の方こそ善吉ちゃんに殺されかけたんだよ？』『僕は被害者だ』」
「一一一一一！！！！！」
「相変わらずだな、球磨川」

黒神の声にならない叫びが聞こえてきた。
それに反して、善吉の身体が急に起き上がる。

「・・・・ん？」
「善吉、『戻ったか』」
「・・・・れ、い？」
「あ・・・！！善吉ーーーーー！！！！！」
「ぐほあああああああああああああ！」

弾丸のような速度で、黒神が善吉に抱きついた。
おい、善吉の身体からベキベキベキベキベキ！という音がしてるぞ？

「あれ・・・？俺視えてる・・・？ってか生きてる・・・？」
「そうだよ、生きてるよ・・・！善吉・・・！！」

はぁ・・・全く。
心配かけさせやがって・・・この馬鹿が。

「『・・・・・』」
「「「「（ゾクッ！）」」」」

今度は皆が、球磨川を見る。
俺も視線をそっちに向けると、球磨川の怒りの表情が目に入った。

「『・・・生きていたことには驚かない』『礼君にも言ったけど死んだら生き返らせるつもりだったから』『でもーーー』『「大嘘憑（オールフィクション）き」でなかったことにしたはずの視力が戻ってるだなんて』『そんなことは僕にもできないのに』」

やっぱりできないのか・・・。

「『・・・そうか』『つまり「彼女」の仕業か』『なるほどね・・・』」

球磨川が何かを悟り、自分の顔に手をあて、下に降ろした。
すると、いつもの球磨川の表情に戻っている。
いつもの何も考えていないような、自分の心を見せない表情に。
俺も、元の状態に戻さないとな・・・。

「『お帰り善吉ちゃん』『どうだった?』『久しぶりに会った彼女は?』」
「・・・は?彼女?何のことだよ」

善吉が球磨川の言葉に意味不明そうな表情を浮かべる。
やはり覚えてないときたか。

「『・・・いや、わからないならいいんだよ』『それより庶務戦勝利おめでとう』『僕は敗者としてきみを大いに讃えるよ』」
「・・・とても勝ったとは思えねーな。終ってみれば結局、俺が一人で死にかけてただけじゃねーかよ」
「『いやいや!そんな風に謙遜しないでよ』『実際、言い訳しようもないくらいの完敗さ』『わかっていたこととはいえ』『ルールのある戦いじゃあ僕達はきみ達に勝てないや』」

まあ、過負荷達は自称『負け犬集団』だからな。
過負荷にルール無用で挑む奴になら、勝てると思うが。

「『このままだと次の書記戦でもその次の会計戦でも』『きっと僕達は高貴ちゃんと喜界島さんに負けちゃうんだろうなーーー』」
「・・・・・何が言いたい?」

「『うん』『だからこそ彼らには』『棄権してもらうことにしたんだけど』」
「！！？？」

球磨川の台詞に驚愕した。
いや、正確には意味が理解できない。

「『高貴ちゃんと喜界島さんは、今修行中なんでしょ？』『時計台地下五階駐車場で』『真黒ちゃんと日之影くんに師事してさ』『凶化合宿だっけ？』」

・・・やたらピンポイントでわかるんだな

「『でも本当に面白いよねえ、きみ達は』『相手が鍛えて強くなるのを』『僕達が黙って見過ごすと思うなんて』」
「！！」

・・・この庶務戦はそのための時間稼ぎだった、というところか。

「『それよりも聞きたいことがあるんだ』『礼君』」
「なんだ？」

球磨川の目が、俺の本心を見透かすかのように見つめる。

「『君は』『「彼女」を覚えているの？』」
「覚えてるさ。誰が忘れるか、あのチート女」
「『あは！』『彼女が聞いたら怒っちゃうよ？』」
「・・・やべえ、俺死ぬかも」
「『やっぱり』『また三人で楽しく過ごしたいね』」
「ククッ！それはそうだな」

全くだ。中学時代に俺がこの二人に出会ってから、世界はより美しくなった。
灰色の世界に虹のような色が描かれたような感じを、俺は味わうことが出来た。

「『じゃあねー』『次の戦挙も楽しみにしてるよ！』」

そういうと、球磨川は立ち去っていった。
直ぐに思考を切り替えろ。何をするべきかはもうわかっている。

「・・・急ぐぞ、黒神」
「ああ・・・！！」

時計台地下五階、駐車場。
そこの扉を開き、目に映った光景は・・・、
善吉以上のダメージを負い、山のように積まれている四人の姿があった。

俺たちは四人を急いで名瀬先輩の工房（ラボ）に運び、応急手当をしてもらったが、やはり二人とも書記戦と会計戦は出場不可となった。

第四十六箱　書記戦『前』（前書き）

今回は会話が多めです。

第四十六箱　書記戦『前』

庶務戦から六日が過ぎた。
あの後、黒神から一週間身体を休めるようにと申し付けられ、病院へ行ってお見舞いしかしていない。
特に真黒さんはきつかった。扉を開けるといきなり抱きついてこようとするから思わず掴んでベッドに放り投げてしまった。
回復は真黒さんを除き流石はアスリートとでも言うべきだろう。他の人よりもだいぶ治りが早かった。

そんなこんなで場所はいつもの夢の中の教室。
一つの机を境に俺となじみは向き合って椅子に座っている。

「・・・なあなじみ」
「なんだい？礼君」
「お前は『誰に対しても平等な人間』って自分で言ってたよな」
「そうだよ。礼君以外には、だけどね」
「・・・球磨川は入っていないのか？」
「彼女は・・・そうだね。他の人より優先順位が上なだけかな」
「左様で。にしては珍しいな。善吉に能力を貸すなんて」
「仕方ないさ。めだかちゃんを泣かせないようにするためだからね」
「優しいことで」
「話を戻すけど・・・・・・まあ、僕以上に平等な人間は存在するね」
「・・・へえ、初耳だ」
「君のことだからね。初耳だろうさ」
「そうですか」

俺はそこまで他人に対して平等という意識を持ったことがないから

わからん。

「・・・君は、実験のせいでそういう考えを失ってしまったんだよ、きっと。だから君は過負荷（マイナス）の立場にも立つし異常（プラス）の立場にも立つ」
「そんなものか？」
「うん。だから禊ちゃんが君の心の中で一位に立とうとしてる」
「・・・優先順位、か」
「まあ、僕もそのレースに負ける気は更々ないよ」
「球磨川も大変だな・・・」
「ま、同着一位でもかまわないさ。僕は」
「仲のよろしいことで」
「中学時代からの付き合いだからね」
「・・・そうだな。さて、今回はこっちから出るとするか」

席を立ち、教室のドアに向かう。
ドアに手をかけたところで、なじみの手が開けようとする俺の手を掴んで止めた。
いつものじゃれあいのような力ではなく、開けようとする力を必死に拒む力で俺の腕を掴む。

「やめるんだ礼君。そこから出てはいけない」
「・・・やっぱり、か」
「ドア越しでも見えるだろう？その先は、僕でも支えられるかわからない」

なじみの声が、少し震えている。
・・・ここから先は、俺自身がもたないってことか。
全てを『零』にする、俺の過負荷（マイナス）でもあり、異常性（アブノーマル）が最も濃く俺の中へと帰ってくる場所。

「その闇は、君を殺す」
「それでも行くさ」
「・・・いつもなら、『男の子は仕方がないね』と引きとめもしないんだけど、今回は別だ。確実に、君は暴走する」
「・・・」
「善吉君の時、僕が少し気を緩めたら君はどうなった?君は一瞬で思考を失くしたじゃないか」
「わ、悪かったよ・・・」
「・・・会長戦だ」
「ん?」

なじみの声が、俺の思考を中断させた。

「会長戦の時なら、許してあげる」
「助かるよ、なじみ」

コイツには頼りっぱなしだな。
男としては、情けないのかもしれん・・・。

「このお礼はまたする」
「・・・絶対だよ?僕の言うことを何でも聞いてね」
「おう。じゃあな」

俺は意識を現実に戻した。

「僕は彼に対して甘いな・・・。全く・・・。さて、何をしてもらおうかな?」

なじみの呟きが、教室に響き渡った。

「・・・まぶしっ」

太陽の位置は天高く、憎らしいほど輝いていた。

「平等すぎる、か・・・・・・」

それのせいでだったか、俺は確かこんなことを考えついたんだったか？

「世界は美しくもつまらない」

初めてこの学園に来た時、理事長に言った台詞だ。

中学時代までを振り返って、俺はこの考えを持つようになった。

「・・・何悟ったことを言ってんだろうな、俺」

俺の少しどんよりした気分に反して、太陽のあんちくしょうはキラキラと世界に光を振りまき続ける。くそぉ・・・綺麗じゃねえか・・・！

「美しいねぇ、全くもって・・・・」
俺にはまぶしすぎて相容れない。

「何してんだ？」
「ん？飛沫か」

後ろから声をかけられたので振り返ると、ぼろぼろのセーラー服を身に着けた飛沫が立っていた。

「久しぶりだな。海水浴、楽しかったか？」
「すっげえ楽しかった。でも他の奴らは海より山派でさ。途中で切り上げたんだよ」
「へえ、なかなかいい一週間の使い方だな」
「海から山だぜ？大変だった」

飛沫が少し嬉しそうに言う。
ま、過負荷（マイナス）でも娯楽はあるってこった。
しかし海に山か。これが終ったら俺も満喫するとしよう。

「そういや次の書記戦、あたしが出るからこない方がいいぜ？」
「なんでだ？」
「痛すぎる思いをしたくないだろ？」
「ご忠告どーも」
「ま、来たかったら来てもいいぜ！あたしの下克上見せてやるよ！」
「楽しみにしてるよ」
「じゃあなー」

そういうと、飛沫が屋上から姿を消した。

「・・・・痛すぎる思い、か」

何回しただろうな？
数えるのも面倒なほどしたっけか。

「・・・そういや、俺の切り取った臓器はどうしたんだっけ？」

あの実験の後、俺の臓器は再生されたのも含めて『ホルマリン漬けにされて保管してあるー』と言っていたような・・・。
実験の記録にも載っていなかったし・・・。

「・・・ま、いいか」

深く考えるだけ面倒だ。

「空は青いんだろうなぁ・・・・・・」

俺の目には空の美しい青色が全く目に映らなかった。

「『礼君』」

また後ろから声がかかる。今度はなんども聞いている声だ。見なくてもわかる。

「球磨川。どうした？」
「『いや』『君がここで黄昏てるから』『来ちゃった』」
「どこから見てたんだ？」
「『校庭から』」
「いい目をお持ちだそうで、うらやましいねえ」
「『いやあ』『そんなに褒められると照れちゃうよ』『もっと褒め

て』」
「予想斜め上の台詞ありがとうございまーす。で？それだけじゃあないんだろ？」
「『うん』『彼女の話だ』」
「・・・なじみ、か」
「『うん』『彼女、生徒会戦挙が終る頃に転校してくる予定だから』」
「・・・まじか」
「『大マジ』」

つまり、だ。

「・・・さようなら、平和な美しき世界」
「『あれ』『どうしてここで涙を誘う台詞が出るのかな？』」
「アイツ来たら平和がなくなる」
「『まあ』『お祭り騒ぎにはなるよね』」
「お祭り程度で済めばいいけどな」

アイツの場合、休み時間を一気にグレードアップして学園祭にするなんて高等技術はデフォルトで備わってるからな。
・・・いつも思うのだが、アイツは一体何がしたいのだろうか？
俺や球磨川でもわからない迷宮入りのミステリー。

「『そういえば』『あの考えは変わっていないのかな？』」
「・・・『世界は美しくもつまらない』か？」
「『うんそれ』『だって』『「美しい」なら「つまらない」なんて思うことがないはずでしょ？』」
「俺の見る世界は色がないからな」

そう、俺の視界に映る世界の色は、灰色と太陽の白い光だけ。

テレビも、雑誌も、黒板も、皮膚の色も、服の色も、全てに色がない。

「『・・・』『大丈夫』」
「ん？」

球磨川が俺の前に立って、俺の顔を両手で包む。
そして、口を重ねてきた・・・って、えええええええ！？

「『・・・・』」
「んっ、んんんっ！？」
「『・・・・ぷは』」
「な、なに、なにすんだいきなり！？」
「・・・大丈夫。きっと僕が礼君の世界に色を取り戻してあげるから」

・・・球磨川も顔を真っ赤にさせて、俺に言った。
恥ずかしかったのか、いつもはしない足をハの字にさせて座り、俺を見る。

「だから、大丈夫」
「お、おま・・・・！」

だめだ。頭がオーバーヒートして言いたいことが上手く言えない。
キスなんてなじみの『口写し（リップサービス）』で何回もしているはずなのだが・・・。
あれは夢だからか？いや、それでも・・・・！

「礼君、僕は君の心の一番に立つ。なじみちゃんでも、これは譲りたくない」

「・・・・・・・あ、ああ・・・・・」

球磨川の宣言に、こんな返事しか出来なかった。
俺の思考回路のショートはまだ続いているらしい・・・・。

「それじゃあ、また明日。ずっと君を愛しているからね、礼君」

球磨川が呆然とする俺を残して、屋上から立ち去った。
・・・・・・・・。

『・・・・・・やってくれるじゃないか、禊ちゃん』
「・・・・・・なじみ？」
『礼君、僕も転校を急いで済ませるよ』
「あ、ああ・・・・・・・・」
『僕への宣戦布告として受け取ったよ、禊ちゃん。同着なんて生ぬるかった。彼女を追い越して一位になってやろう。大好きな礼君をかけた勝負だからね。仲良し二人三脚でなく、血で血を洗うような壮絶なレースになることを期待しててもらおう。禊ちゃんよりも君を愛してあげるからね、礼君』

「・・・・・・へ？」

取り残された俺は、なじみの台詞にまた呆然とするのだった。

第四十六箱　書記戦『前』（後書き）

ロサです。更新が遅れてごめんなさい。

実はこのネタを実行するのにだいぶ悩んでいました。
「会長戦の前にやった方がいいんじゃないか？」という考えが頭をよぎり、実行するのに悩みました。球磨川の台詞回し等も含め。

感想や誤字脱字、こうしたらもっと面白くなるんじゃない？なども含め、お待ちしております。

・・・これ言うの久しぶりだな（遠い目）

第四十七箱　書記戦『開始』

「皆様、一週間のご無沙汰でございました」

久しぶりに見る長者原先輩のファッションセンス。

いやあ、あれは何時見ても面白いなー。

「それではこれより生徒会戦挙を始めさせていただきたく存じます」

両手を左右対称に広げ、宣言する。

・・・てか、毎回これを聞かなければならないのか。それはそれで退屈そうだな。

「ですがその前に、黒神さま、球磨川さま。少々前に出てきていただいてもよろしいでしょうか？」

「？」

「『？』」

二人が疑問符を浮かべながら長者原先輩の下へ向かい、黒神は右腕に、もう片方は球磨川の左腕に三つの手錠がかけられた。

「「『！？』」」

「・・・あらら」

これはまた大胆な行動に（笑）

「『お～・・・』」

「・・・ちょっと待て。これは一体何の冗談だ？」

黒神は手錠をかけられたことに疑問を持ち、長者原先輩に質問する。それに対して球磨川はまるで『いい手錠だな』とでも言いたげに手錠を見つめている。

「いえ、あなた方は試合後に見境もなく暴れるなど戦挙遂行に支障を来たしかねない危険行為が目立ちますので、互いに互いを拘束させていただくための措置でございます」

「『・・・やめてあげようよ長者原君』『僕なんかと繋がれたらめだかちゃんが可哀想だよ』『それより僕は』『礼君と繋げられたいなあ』」

「・・・一向に構わんわ。貴様の愚行及び愚考を見張るには丁度よい立ち位置だ。そして礼とは繋がせん」

ま、流石『公平』の異常性（アブノーマル）を持つ長者原先輩ってところか。（スルー）

『みんなを幸せ（プラス）にしたい黒神』と『みんなを不幸（マイナス）にしたい球磨川』は、実を言うと似た者同士だということをしっかりと理解している。この二人の望みである『幸せ』、『不幸せ』それはたった一枚の紙を仕切りにしたようなものだ。

「そしてもうひとつ名瀬さま。あなたさまは今回阿久根さまの代理で書記戦にエントリーされておりますが、代理はあくまで代理でございます。現生徒会側が勝利を収めても、書記職に着くのは阿久根さまということになりますのでその旨ご了承ください」

「・・・いーよ別に。俺は元々生徒なんて柄じゃねーし。すさまじく字汚ねーしなー」

なんだろう。名瀬先輩の字が急に見たくなってしまった。

「俺はそこの時代後れなスケバン刑事（デカ）をぶちのめせれば、他にはなーんも文句はねーんだよ」
「うるせえ、二代目」

何があったんだ？あの二人に。

『僕の推測からすると、名瀬さんの勧誘をしたらああなったんじゃないかな？』
「・・・お前の推測はほぼ正解だろうが」
『たまたまだよ。たまたま』
「はぁ・・・」

まあ、そんなどーでも『どうでもいいは酷いな』・・・どーでもいい会話はほっといて。

『スルーとは、なかなかにSだね』

ええい！地の文を読むな！！とにかく！！二人がいがみ合ってる間に長者原先輩がまた十三枚のカードを机に並べ終え、俺たちのほうを見た。

「では、時間も押してまいりましたので、書記戦の試合形式を決めたいと思います。挑戦者である志布志さま、十三枚のカードからお好きな一枚をお選びください」
「・・・・・『巳』のカードがあるけれど、その裏側は庶務戦の時と同じく『毒蛇の巣窟』なのかい？」
「いえいえまさか。庶務戦と書記戦では性格が違いますので『巳』のカードのみならず十三枚のカードの裏側を我々は総とっかえしております」

一戦ごとにわざわざ十三個ルールと試合場を用意しているのか・・・。

『お金かけてるね』

「あの理事長だもんなぁ・・・」

まあ、『教育者として～』と言っていろんな設備を用意したりしてるもんな。

実にあの人らしい。

「じゃーあー、考えるのもめんどくせーしあたしも球磨川さんと同じ『巳』でいーや」

「『巳』のカードでございますね、わかりました。『毒蛇の巣窟』を知りながらこのカードを引くとは、志布志さまの度胸にはこのわたくしめ、ただただ感服するばかりでございます」

そう言いながら『巳』のカードを捲り、裏に書かれている内容を見ている。

「書記戦の形式は『冬眠と脱皮』に決定いたしました。これもまたやはり！今回我々が用意した十三の決闘法の中で最も残虐なルールで行われる戦挙でございます」

・・・また残虐ルールかよ。引き運悪いな。

「冬眠と脱皮って・・・また蛇を利用するのか？そんなことを繰り返してたらいずれ沖縄からハブがいなくなるぞ！」

うむ。善吉の言うとおりだ。ハブがいなくなったら沖縄の人はハブ酒が飲めなくて泣いてしまうぞ。

「いえ、今回は実際の蛇は用いません。蛇はあくまでモチーフでございますね」

モチーフと言うことは・・・

「プレイヤーが蛇の位置・・・ということか？」

「流石鳴神さま、そのとおりでございます。そして今回の書記戦の勝利条件は単純明快でございます。庶務戦では腕章を取り合っていただきましたが今回は、相手の身包みを全て剥いだ方の勝ちとなりましてございます」

「なるほど。だから脱皮か」

「『・・・おいおい、いい加減にしなよ長者原君』『苦言を呈さずにはいられないよ』『同じ女性としてはね』『そんな芸者遊びみたいなふしだらなルール』『神聖なる学び舎で行っていいわけがないでしょ』」

「おお！球磨川がまともなことを言ってる！！」

「『あれ？』『驚くところそこなの？』『礼君』」

すげえ！あの女性のパンツでも興奮する球磨川が、なんという真面目な発言を！

「いえ、球磨川さま。あなた様のお叱りは最もなのでございますが・・・、そんな色っぽい試合にはならないと思いますよ？」

「『え？』」

「試合会場へと向かわせていただきます。そこで、答えがわかるかと思います」

長者原先輩がドアを開き、俺達を導く。

「もう少し早く歩かんか球磨川！」
「『え～？』『そっちのペースが速いんだよ』」
「そんなことはない。ほれ、礼がどんどん遠ざかるだろ」
「『あ！』『待ってよ』『礼君！』」
「く、球磨川！今度は速すぎるぞ！」
「『礼君♪』『礼君♪』」
「球磨川、人の話を聞けーーー！」

・・・あの二人は大変そうだな。

「あのさ、鳴神」

後ろを見ながら歩いていると、古賀先輩が話しかけてきた。

「どうしました？」
「あのさ、ふと思ったんだけどね？ひょっとしてあいつ、毎回同じこと言うんじゃね？」

そういって目線を長者原先輩に向けた。

・・・大丈夫ですよ。

「作者がカットしますから」
「作者？」
「いえ、こちらの話です。マンネリ化は多分、選挙管理委員長が許しませんよ」
「そうかな？」
「そうですよ」

多分ね。あの先輩、暇なら寝てそうだからなぁ・・・。

「こちらです」

そういって示されたのは・・・なんかとてつもなくぶっといドア。選挙管理委員会の黒子さんがドアを開くとそこは冷凍庫に入る部屋があった。氷柱が出来るほど温度を下げているのが窓越しからも良く分かる。

「学食係の皆様が使用している巨大冷凍庫で零下４８度・・・、南極差ながらの極寒空間でございます。この倉庫全体が書記戦の舞台となりましてございます」

・・・身包み剥がされたらあっという間に凍死するな。

「黒箱塾時代は氷室でバトルを執り行ったそうです。ちなみに今回はギブアップは認められません。凍えようが凍ろうが、どちらかがどちらかを全裸に剥くまで戦いは継続されます」

えげつねー・・・。こういうときなら、『炎々舞踏会（ボレロ）』か『自気高揚（アップビート）』あたりがオススメだな。

「言うまでもなく、身包みの剥ぎ合いは脱皮の見立てであり極寒ステージは冬眠の見立てでございます。鳴神さまもおっしゃっておりましたが、つまり今回は立候補者こそが蛇であり、この決闘は蛇同士の食い合いなのだとご理解ください」

「～～～～～～っ！！」

・・・なかなかに驚愕の戦挙内容だな。

「そして、今回は生徒会補佐のお二方も中に入り、書記のサポートをしていただきます」

「と、言うと？」
「例えば、名瀬さまの身包みが残り一つと言う時、『自分の衣服を着せる』ということが可能です」
・・・なるほど。寒そうだなぁ。
「おい、長者原くん。試合中に剥いだ相手の衣服を着るってのはアリなのか？」
「勿論でございます。と言うより、それはこの書記戦の肝のひとつでございますね」
「ふーん」
ふーん。なかなか親切なルールだな。
まあ、俺には身包みなんて関係ないが。
「『どうしたのめだかちゃん』『黙りこくっちゃって』『脱衣という自分の専門分野を取り逃がして残念なの？』」
「・・・黙りたくもなるわ。私達は貴様達に勝とうと命懸けで躍起になっておるのに、貴様達は勝ち負けを度外視して嫌がらせみたいな戦法ばかり取って来るのだからな」
「『あー、そりゃそうだね』『でも勝ち負けを度外視してるって決め付けるのは心外だね』『こっちはこっちで真剣なんだから』『よし！』『じゃあこうしよう』」
球磨川が何かを考え付き、俺達全員を一瞥したあと、部屋中に響き渡るように言った。
「『もしもこの試合で飛沫ちゃんが名瀬さんに負けたら』『僕はその時点で箱庭学園から手を引くよ』」
「！？」

「『飛沫ちゃんが負けたら累計二敗で僕達は王手をかけられたも同然』『テトリスで言えばブロックを半分以上積んでしまった状態だ』『そこからこまめに一列ずつ消していくなんてテンション上がんないしねー』」

・・・なんという気分屋発言。そして何故に過負荷（マイナス）以外の皆は安心しているのだろうか？

志を失ったか。目先の利益に目が眩んで本当の目的を見失ったか？

「球磨川先輩、よろしいんですか？選挙管理委員会の前でそんな約束をしてしまえば取り消せませんよ？」

「『あ』『礼君と会えなくなるのか・・・』『それは嫌だけど・・・』『いーんだよ』『この約束ばかりはなかったことにはしないとここに誓う』『そんなわけだから飛沫ちゃん』『頑張ってね』」

「！」

「『本来過負荷（マイナス）に言うような激励じゃないけど』『絶対に勝ってね』」

う～む、これは少しまずいな。球磨川があそこまで言うと言うことは、この書記戦に勝算が少なからずあるということだ。

「・・・ひひひ・無茶言うなあ球磨川さん。あたしの弱さを知ってるくせに！勝つとか！９９％無理に決まってんだろ、そんなこと・・・」

扉が徐々に開き、飛沫が中に入る。

「だけど！１％でも可能性がある限りあたしは諦めない！！」

・・・よくあんな薄着で入れるな。

「・・・じゃ、俺も行って来る」
「『頑張ってね』『靖人君』」
「ああ」

兄貴は兄貴で、ブレザー姿で悠々と入っていった。

「ハ！なーんか、代理の身には荷が重い試合になっちまったなー。なあ鳴神」
「そうですね。全く、あんな宣言しなくていいのに」
「プレッシャーがかかるっつーのにな」

ため息をつきながら、名瀬先輩が冷凍庫へと通じる扉に向かう。

「まあでも、今年の夏は暑いからな。こんな涼しげなバトルも悪かねぇー「名瀬先輩、来ます」あ？って！！？？」

冷凍庫に足を踏み入れた瞬間に、名瀬先輩から血があふれ出し、倒れこむ。

「きゃっ・・・きゃあああああ！名瀬ちゃんっっっ！！」
「ぼんやりしてんじゃねーぞ名瀬先輩。試合場に入った瞬間から既にバトルは始まってるんだぜ！」

倒れた名瀬先輩の頭を踏みつける飛沫。うん、なんて嬉しそうな表情をしてるんだ・・・。

「それにしてもよく気づいたなぁ礼。結構自分でも不意打ちだと思ったんだけど」
「まあ、企業秘密だ」

「面白おかしく会話してるとこ悪いけどよー、その言葉そっくりそのままお返しするぜ志布志後輩」

名瀬先輩が立ち上がる。右手に何かを持って。

「早速一枚！剥がしてもらったぞ。キャラに似合わず可愛いパンツはいてんじゃねーか！」

・・・なんであの状況で奪えるの？

「なっ！？何時の間に「フェイクだ！」何！？」

「ふっ！」

兄貴が飛沫にフォローを入れるが、時既に遅く、名瀬先輩の飛び膝蹴りが飛沫の顔面に直撃した。

うわぁ・・・あっちもいたそー・・・。

「あー悪い悪い間違えた。これは俺のパンツだったわ」

そう言いながら態勢を立て直し、パンツをはきなおして顔の包帯に手をかけ解く。

包帯の下からは、黒神の目つきをキツくしたような顔が出てきた。

「不意打ちみてーな当たり前のこと、人吉とか黒神とか真面目な奴相手にやってろよ。俺は名瀬夭歌、箱庭学園一不真面目な生徒だぜ」

臨ッ！とした雰囲気で言う。

ここらあたりがめだかにそっくりだな。

「・・・騙すとはなんて悪い奴だ、許せねー。こんなに人を憎い

と思ったのは二人目だ。てめえは、皮まで剥ぐ!!」

・・・はぁ、今回は面倒くさくなりそうだ。

「・・・礼、俺達も始めるとしよう」

「ん?ボクシングスタイル?・・・いや、それは」

「ああ。お前の良く知る奴のスタイルだよ」

・・・この構え方、そして雰囲気はまるで・・・

「日之影先輩・・・」

「始めるぞ」

兄貴が拳を振りぬく。だが、俺との距離はまだ数歩残ってる。あたるわけ・・・!?

「あぶね!」

『れ、礼!どうした!?』

俺が避けたのを不思議がった善吉が壁越しに聞いてくる。

「・・・拳の届く距離が、伸びた?」

「正確には違うがな」

・・・今の間合い、普通なら当てることは出来ない。なんだ?

「考える暇は与えない」

「チッ!また!!」

兄貴がラッシュを仕掛けてくるが、また間合いがある。
なのに、俺の服を掠めたり、なぜかそこに拳が飛んでくる気配がする。
なんだ・・・!?
「オラオラオラ!まだまだいくぞ!!」
「こ・・・のお!!調子に乗るな!!」
「ぬっ!?」
飛んでくる拳をガードし、兄貴の懐に向かう。
いくぞ・・・!
「『炎々舞踏会(ボレロ)』!!」
「まずッ!!」
兄貴がバックステップを踏み、三メートルほど距離をとる。
おかしい、たった一回のバックステップで取れる距離じゃない!
「流石に、それを喰らったら『この身体』でもあぶねーからな」
「この身体・・・?」
なんだ?拳の間合い、バックステップの距離、そして『この身体』・・・なんのキーワードだ?
「ってうお!?」
「注射器!?」
俺と兄貴に向かって何本もの注射器が飛んでくる。
飛んできた方向を見ると、顔以外を黒いタイツで覆った名瀬先輩の姿が見えた。

「ああ、悪ぃ。当たらなかったか？」
「だ、大丈夫で・・・って今度はこっちかよ！！」
「余所見すんなよ！！」

間合いがつかめねー！！

「・・・おい、鳴神。どうしてそいつは『日之影先輩のスタイルそのものなんだ』？」
「え？『そっくり』じゃなくて『そのもの』ですか？」
「ああ。・・・ッ！？」
「名瀬先輩！？」

名瀬先輩の顔や身体から、また血が噴き出していた。

「な・・・に・・・？」
「そっちこそ、よそ見してていーのかよ、名瀬先輩。あたしの過負荷は、封じられちゃいねえぜ？」
「・・・この右手に走る痛みはまさか・・・！」

名瀬先輩が黒タイツの右手部分を外し、出血箇所を見ている。

「おっと気づいたみたいだな。さすがだね！その通りだよ。『他人の古傷を開く』。それがあたしの過負荷（マイナス）『致死武器（スカーデッド）』だ」

他人の古傷を・・・開く？

「つまり、完治した怪我や疾患を強制的に再発させるスキルってことだよ。つまり・・・」
「がぁっ！！！」

前に風紀委員に貫かれた胸の傷が開く。
おいおい、確実に死亡する傷だぞ？

「・・・痛みに耐える暇は与えん！」
「しまっ・・・！！！」

傷が開いたところを寸分たがわず殴られる。
この威力・・・！まさか・・・！！

「ついでに俺の過負荷（マイナス）も紹介しておこう。『他人の能力をコピーする』。それが俺の『下手横好（トレーサー）』だ」

・・・つまり。

「ああ。日之影空洞の身体能力をそのままコピーした」

・・・そうか。それであの間合いと身体能力と、戦闘スタイルか。
もう少しはやく気づけばよかった。もう遅いけど・・・。

いきなり死にそうとか。「興奮」してきた・・・。

第四十七箱　書記戦『開始』（後書き）

「安心院なじみの能力講座ー！」
「ひさしぶりだね」
「やっと新しいスキルが出たからな」
「今回は三つだね。では始めようか」

『自気高揚（アップビート）』
自分の体温を上昇させる過負荷。『炎々舞踏会（ボレロ）』と上手く併用すると、一気に爆発の温度を上げることが出来るよ。

「これさえあれあ、南極に裸で行っても大丈夫だよ」
「裸は嫌だな」

『下手横好（トレーサー）』
礼君の兄、靖人君の過負荷（マイナス）だね。他人の身体能力をコピーできるの力だけど、一度見た人物のみに限られていて、異常性（アブノーマル）や過負荷（マイナス）はコピーできないみたい。

「・・・日之影先輩の身体能力があったら最強だろう」
「でも、それ以上は活動できないのが難点だね。めだかちゃんの『完成（ジ・エンド）』に近いともいえるかな？」
「次が最後か」

『致死武器（スカーデッド）』
自分以外の古傷、つまり完治したはずの怪我や疾患を再発させる過負荷（マイナス）だね。雨の日に古傷が疼くってことがあるよね？それのすさまじくハードなバージョンと考えたらいいと思うよ。

「・・・これもまた無敵級だな」
「アスリートなどには最悪の能力だね」
「自身をいじめぬいて鍛えるからな。あれも古傷にしたらきついだろうな」

「今回はここまでだよ」

第四十八箱　書記戦『弐』

「・・・・」
「・・・おいおい、やりすぎだぜ靖人先輩」
「すまんな。コイツに手加減してたら俺が死ぬ」

倒れ伏していたはずの礼の身体が徐々に起き上がる。
顔に笑みを浮かべながら。

「あはは・・・！またきっついねえ『兄さん』」
「・・・殺すたびに俺との距離を近づけるのはどういう了見だ？」
「知ってんだろ？『あの人達』との約束」

心底嬉しそうに、滑稽そうに自分の兄を見る礼の目は死んでいた。

「・・・またその目か」
「いやあ、ちょっと待っててね！今戻すから」

顔に手を当てその手を下ろしただけで、礼の血色から胸の傷が『なかったことのように』元に戻っている。

「球磨川さんの過負荷（マイナス）・・・！？」
「いや、あいつは『因果律』に作用するが、俺のは『時間軸』にも作用する。というより、元々あいつの能力は『俺の能力』を基盤（ベース）にしたような能力だ」
「・・・礼、お前の能力はなんだ？」

この試合場から観戦している全員の疑問を兄が弟に投げかける。

「俺の能力か。さて、なんだと思う？」

しかし礼は言葉を濁し、片手を上げ、やれやれというポーズをとる。
その姿が、あまりにも球磨川にそっくりで、二人は不気味さを感じていた。

「気をつけろ、志布志。アイツは幾ら殺しても死なない」
「今の状況見たらその言葉は本当に同意しか出来ませんよ」
「それに、今のアイツは何かがおかしい。何をしてくるかわからない」

「・・・ふう。こちらもいい感じで終ったし、始めようか」
「サンキュー鳴神。傷が一瞬で無くなるっていうのは面白い体験だったぜ」

そこには、無傷のまま立ち上がる礼と名瀬の姿があった。

「・・・名瀬君の傷も治せるのか」
「関係ないですよ。あたしの『致死武器（スカーデッド）』の前では、ね！」

右手を名瀬の方にむけた。
それだけで、名瀬はまた出血しその場にへたり込み、震えだす。

「そういえばあんた記憶喪失気味って言ってたっけか？よかったな。いろんな不幸（トラウマ）を思い出せて」
「・・・他人の心の傷も開けるのか」

礼は名瀬先輩の状態を見て、なんの変化もなしに言う。

「おいおい、先輩の心の傷を開かれても表情一つ変えないってどう

いう神経してんだよ」
「いやあ、いい機会じゃないか。家族のことも思い出せるし」
「おお怖え～、トラウマを見せられてる人に言う台詞じゃねえだろそれ」
「ま、今の俺の状況で出来るのはこれだけだからな」
「ん？・・・ってあいつがいねえ！！」

そう名瀬先輩への意識を俺に向けることで、頭をクールダウンさせる機会を得た先輩は姿を隠した。
ただ、さっきまで着たいた全身タイツは脱いで。

「・・・しかも頭冷やすために脱いだとは・・・すげえ度胸だな」
「そこは俺も感嘆するね」
「だが血痕は残してるな。あとはこれを辿るだけだ」

そこまで言った瞬間、観客席の方からガラスの割れる音がした。

「ん？」
『聞こえますかお姉さま。理不尽な敵の能力に追い詰められ、事前の準備は全て水泡に帰し、打つ手は残されていなくも見える。しかしめだかはあなたを心配も激励もしません。何故ならあなたは！黒神くじらという姉は！逆境でこそ輝く人だから！！ですから心配も激励もしません！めだかはただただ馬鹿みたいにあなたを信じ！ここからの逆転劇をひたすら楽しみにしております！！』

・・・それを人は激励と呼ぶのだよ、黒神。

「まあ、あたしには関係ないね。この血を辿っていくだけさ！！」

気をつけろよ？飛沫。火がついた名瀬・・・いや、くじら先輩は一

味も二味も違うからな。

「・・・さて、俺達も決着つけます？兄さん？」
「そうとするか」

日之影先輩の戦闘スタイルをコピーする兄さん。
それの対処はもう出来てる。

「行くぞ！！」

右のストレート、見切って避ける。左のフック、バックステップでかわす。右足の上段蹴り、背中を曲げて避ける。
避ける避ける避ける避ける。

「ッチ！もう間合いを把握したか！！」
「甘い甘い！」

避け続ける。ようは日之影先輩をイメージすればいいんだ。
あの巨体の間合いをただ俺の視界に写す。それだけで間合いは把握できる。

『な！？腕が・・・凍り・・・氷・・・！？』

飛沫の驚愕の声が聞こえる。
ということは、くじら先輩が優位に立ったのか。

「俺も使うか・・・！」
「うらあ！！」

兄さんの姿を見る。全身を、視界に納める。

拳が振るわれたが、『間合いがあるため』に攻撃は届かない。

「な!?俺の『下手横好(トレーサー)』が掻き消された!?」

「・・・ふう。成功か」

「何を・・・した・・・!」

「ああ、兄さんの能力を消しただけだ。気にするな」

「なっ・・・!?」

いや、この程度で驚かれても・・・ねえ。

ただ俺は視界に映った才能(スキル)を『零(なかったこと)』にしただけだし。

そんなことを考えていると、俺の身体から血が吹き出る。ってまたこのパターンかよ・・・。

それだけではなく、兄さんの身体からも血が出ていた。そして、冷凍庫全体にも罅がはいる。

「・・・あっれー?これって崩壊パターン?」

「のんきだなお前は!!」

兄さんに突っ込まれる。いやあ、別にのんきではないのだけれども・・・。

「喰らいなあたしの『憎武器(にくしぶき)』・・・『バズーカー・デッド』!!!」

飛沫の声が崩壊する冷凍庫全体に響き渡る。

「・・・あほか」

しかし、くじら先輩の声が聞こえたと思った瞬間、身体の出血箇所が全て凍り、血が止まった。

「俺もあまり人のこと言えねーけどよー、勝ち負けはともかく、ちっとは後先ってもんを考えろよお前はよー。俺が倉庫全体を凍らせてなきゃ、お前も今頃ぺっしゃんこだぜ」

くじら先輩の両手から、氷の柱が出ており、それが倉庫全体を凍らせて瓦礫を支えていた。
っていやいやいや。人の両手から氷柱？

「足掻くなよ一年子ちゃん。飛沫が吹雪に敵うはずがねえだろう！」

・・・すげー。

「おお鳴神。さっきは助かったぜ。ま、この瓦礫に押しつぶされないようにした俺の行動でチャラってことで」
「・・・そう言っていただけると助かります。ところでその能力は？」
「ああこれか。さっき自分で作った体温操作の過負荷（マイナス）でな？名前を『凍る火柱（アイスファイア）』って言うんだ」
「・・・凄すぎますよ？それ」

くじら先輩の異常性が『改造』だとしても、この状況下で過負荷を作れるのは本当に異常だ。

「・・・さて、お前の過負荷は完膚なきまでに破ったし、これであとはお前の身包みを完膚なきまでに剥げば俺の勝利か。とはいえ、男子の目の前でうら若き女子の服を剥ぐというのはやっぱり・・・・気乗りしないぜ（満面の笑み）」

「ノリノリじゃないですか！！」「ノリノリじゃねえか！！」

その場の雰囲気にそぐわない俺達のツッコミが、凍った部屋に響き渡る。

第四十九箱　書記戦『終了』

「ま・・・待て！いや待ってください名瀬先輩！勘弁してくださいわかりましたもう負けを認めます！！」

一歩ずつ歩みを進め、もう少しというところで飛沫が負けを認めた。

「いやいや、負けを認めるっつってもよー。この書記戦はギブアップなしのルールじゃねえか。てもーを裸にしなきゃ試合が終わらねーんだよ」

「だ・・・だったら自分で脱ぎます！それでいいでしょう？無理矢理服を脱がされるなんてみじめ過ぎます・・・で、ですからちょっとだけ向こうを向いててくれませんか？いくら女の子同士とはいえ近くでまじまじと着替えを見られるのは恥ずかしいですし・・・」

「・・・・・・いいだろう。二十秒だけ視線を外しといてやる」

飛沫に背中を向け、その状態で名瀬先輩が口を開いた。

「ただしお前が可哀想だからじゃねぇ。これは一度は過負荷（なかま）になりかけた俺から、お前にくれてやる最後のチャンスだ」

名瀬先輩がとても格好いいことを言っている。
ちなみに俺は視線を天井に向けている。女子の生着替えを見たい気持ちも無いことは無いが、名瀬先輩の宣言に従い視線を上に向けることにした。それが男のマナー。

「・・・ひひひ！だったらそのチャンス！ありがたく使わせてもらうぜ名瀬先輩！！」

視線を少し下に向けると、名瀬先輩の背後に氷柱をナイフの代わりにして突き刺そうとする飛沫の姿が見えた。

「目には目を！歯には歯を！氷には氷だあ！！」

「「違うね。氷には炎だ」」

名瀬先輩が右手を飛沫に向けるとその手から火柱が放たれ、飛沫を焼いた。

「だーかーら、体温操作って言ってんだろうが。低温にも出来るってことは高温にも出来るってことなんだよ。ゆえに、どっちつかずの『凍る火柱（アイスファイア）』！」

飛沫の服を焼き払い、ルール上勝利。

・・・『丸焦げにした』って表現が凄く似合う勝ち方だなぁ。

「やれやれ、最後のチャンスを逃したな。お前がまともな人間になれる最後のチャンスだったのによ」

・・・お疲れ様でした。

「それにしても、どうして飛沫に気づけたのですか？」
「ああ、これだよこれ」

そういって見せた右の手の平には、氷で作られた手鏡があった。

「これで観察してたってわけだ」
「容赦ないですね」
「抜かりないと言え！抜かりないと！」

そういって背中を思いっきり叩かれた。

「ま、お疲れさん」
「お疲れ様でした」

パアンッ！といういい音と共に俺と名瀬先輩がハイタッチを交わす。

「さ、帰ろうぜ。球磨川の旦那の約束のせいで妙に疲れちまった」
「はい」

名瀬先輩の後ろについてドアに向かう。

「・・・！？」

視界が霞み、少しふらついた。

・・・見ている世界か更に色が失われていく。

「・・・またか」

「ん？どうした？」

「いえ、なんでもありません」

・・・もう、灰色すらもわからない。

見えるのは、輪郭をなぞった黒い線と影のみ。

マンガのキャラクターを見ている気分だ。

「（・・・もう、太陽の光もわからなくなってるのかもな）」

・・・また、俺の世界から色を亡くしていくのか。

・・・また、また、また・・・。

「・・・い！礼！！」

「あ・・・、善吉」

「どうしたんだ？ボーっとして」

「ああ、温度差に驚いてな」

「大変だったな、お疲れ」

「おう」

ハイタッチを交わす。

・・・大丈夫だ、世界はまだ、美しい。

「・・・善吉、俺ちょっと外に出てるわ」
「あ、ああ・・・（礼？どうしたんだ？）」

外へと向かう扉を開けてもらい、屋外へと出た。

「・・・やっぱりかよ、ちくしょう・・・！！」

太陽の光がわからない。
キラキラと、世界に光を振りまき続けるあの天高く存在する唯一無二の大きな光が、わからない。
・・・そろそろ、過負荷（マイナス）の制御が難しくなってきたな。
髪を右手で掻き上げ、空を見る。

「・・・時間が、無いか」

俺が自身の能力に呑み込まれるまで、もう少しか。

「・・・戻ろう」

冷凍庫に戻ってきた。
そこでは、さっき焼かれ、意識を失った飛沫が球磨川の手によって元通りになっており、その横で黒神が球磨川に話しかけていた。

「『ふふっ』『不安かいめだかちゃん？』『僕が約束を守るか破るかわからなくて』『僕はぜんっぜん不安じゃないよ』『むしろ最高に楽しいんだ』『だって・・・』」

「『約束を守る』『約束を破る』『僕は今、どちらでも好きな方を選べるんだから』」

球磨川が言い放った。書記戦開始前にした約束を守るか守らないかの話をしているのだろう。

そして、それに過負荷と俺を除く全員が呑み込まれた。

「『約束は破るためにあるとか言ってる連中（ワルモノ）には』『考えられない自由度だ』」

「・・・ああ、この状況か」

予測していた通りだ。
球磨川に主導権を握られてやがる。

「『お帰り礼・・・く・・・ん・・・・？』」

球磨川が俺を見て目を見開いた。
まるで信じられないものを見る目だ。

「『れ・・・れい・・・くん・・・』『もしかして・・・また・・・！』」

「球磨川・・・？」

球磨川が驚いた状況についていけず、皆が球磨川の表情の変化に驚いた。
そう、いつもは感情を表に出さないようにしている球磨川からはっきりと読み取れる、驚愕の表情だったからだ。

「『礼君！』『どうしてまたその目をしてるの！？』」

「・・・いつもの通りだ」

「『！！』」

球磨川が少しよろめく。

・・・コイツには、心配をかけてばかりだ。

「『・・・』『めだかちゃん』『約束の話をすぐに済ませるよ』『今日の僕は約束を守る』『悪いけどすぐに出て行かせて欲しい』」

「どうしたのだ?球磨川」

「『ノーコメントで』『ほら、行くよ』」

球磨川の言葉に怒江は少し残念そうに返事をし、蝶ヶ崎先輩はため息をつきながら渋々納得していた。

「・・・よかった」

人吉先生がほっとしながら呟く。

それにあわせて善吉も名瀬先輩も「よかった」と言う。

「・・・よかった」

黒神も、よかったと呟いた。

「よかったの？」

古賀先輩が、黒神に向けて言った。

「やな奴追い出して、めでたし？」

・・・黒神、わかっているな？

「鳴神も、そう思ってるんじゃない？」

「・・・俺は、球磨川を追い出すのは反対だ」

「れ、礼！」

「・・・意見を聞かせてくれ。二人とも」

黒神が、俺たちに話す許可を出した。

「じゃあ、言う。黒神、お前の最初の目標はなんだった？目先の利益で騙されるなよ」

「過負荷（アイツ）ら、反省も後悔も全くしていないよ？いつもどおりのテンションで転校して、私達のことは忘れて、同じように生きていくだけだと思うよ。それに、ここでお前が見放したら、球磨川禊という呪われた魂は永遠に救われない」

「・・・お前、いつも言ってるだろ？『下克上大歓迎』って。『敵も味方も大切にする』『みんな幸せにする』っていうスタンスを忘れてんじゃねえのか？過負荷（あいつら）も、生きている大事な人間に含まれないのか？」

「・・・礼！これ以上めだかちゃんを混乱させるなよ！！古賀先輩も！！球磨川を幸せにするなんて、そんなこと世界中の誰にも出来ねーよ！」

「・・・あたしもそう思う」
「俺は思わない」
『なっ!?』

俺の発言に、皆が驚いた顔で俺を見つめる。

「・・・球磨川が救えないなら、お前達は俺も救えないよ」
「礼・・・」
「俺は自慢じゃないが球磨川以上に救われない。それに、お前の役職はなんだ?黒神めだか」
「え・・・?」
「球磨川を含む『嫌なやつを追い出す』。それは誰でも出来る。日之影先輩もそうしていた。あの人なりに、頑張って。だが、お前は日之影先輩になんて言った?」
「!!」
「守るべき物を見失うな。信じた信念を魂に刻め。どうしても他の人には出来ない負の連鎖を断ち切るために、生徒会長はいるんじゃないか」
「・・・ああ!!」

黒神が出て行こうとする球磨川の方を向いた。

「待て球磨川。約束を守ることは許さん。生徒会戦挙を続けるぞ。この戦いを通じて私は、今度こそ貴様を改心させ、今度こそ貴様を幸せにしてやる!」
「『・・・・・・』『惜っしい~~~~い』『もうちょっとでめだかちゃんんを』『一般生徒にすることが出来たのに』『人を嫌い敵を潰す』『一般生徒に』」

球磨川が残念そうに、滑稽そうに笑った。

「なるほど。そういうことでしたか球磨川先輩。確かに多くの幸せを生み出すであろう黒神の志を折る事は、長い目で見れば百万人のエリートを殺すことよりずっと有意義ですからね」
「『あはは』『そーんな深い意味は考えて無かったよ』『単に』『嫌いな奴が夢を諦めるところが見たかっただけだよ』『失敗しちゃったけど』」

・・・聞こえなくなってきた。
視界が霞み、聴覚が働かなく、立っているのかさえわからない状態になってきた。
感覚がゼロに近づいていく。

「・・・・ぞ・・・・・。・・・・・・・・・・」
「・・・いん・・・・」

・・・何を話している？
何をお前らは話して、見て、幸せそうにしているんだ？

・・・《代わって》・・・

心の奥底から聞こえる、俺の声を少しだけ高くしたような声。
なじみとは違う、別の声。俺の過負荷（マイナス）の本質みたいなものだ。

嫌だな。代わる気は無い。
てか、俺とお前は一心同体だろうが。代われねえよ。

・・・《じゃあ出ていいかな？》・・・

なじみにボコられてもしらんぞ？引きこもり。

・・・《それはやだ》・・・

諦めんの早いな、おい。

・・・《でも、会長戦ならいいんだよね？》・・・

ああ。出すのに二週間かかるから、会計戦と副会長戦は欠席だな。

・・・《わかった。楽しみにしてるよ、礼》・・・

そこにテレビ用意しとけよ？外の様子を確認させるから。

・・・《わかった。待ってるからね》・・・

声が止んだ。

と、同時に少しだけ視界のもやが晴れる。

「・・・」

『礼君、大丈夫かい？』

「ああ。大丈夫だ」

『全く、困ったもんだよ。彼女出る気満々じゃないか』

「・・・引きこもるのに疲れたんだろ。それより、明日から出しに行く。身体頼んだ」

『任せな。きっちりと代役を務めさせてもらうさ』

なじみの声がここで止まる。

・・・あ、俺の過負荷漏れ出してる。

それにより、冷凍庫の全ての罅や崩壊が跡形も無く片付いていた。
さっきアイツと会話したせいだ！
過負荷（マイナス）だけじゃなく能力（スキル）が漏れ出しやすくなっている。

「あれ・・・？冷凍庫全部直ってない？」
「ほ、ほんとだ・・・」
「球磨川の旦那がしたんじゃねえの？」

お？球磨川のやったことになってない？これはチャンスだ！

「（・・・球磨川、頼む）」

そんな思いを込めて、俺は球磨川に目配せをした。

「『（・・・どうしよっかな～？）』」
「（頼む！）」
「『（・・・そこまで言われたら仕方ないな。いいよ！）』『流石にあのままだと次に使う人が可哀想だからね』『ちゃんと遊び終ったらキレイにするのが基本だよ』」

・・・助かった！！

「・・・助かりました」
「『いいよ長者原君』」

ついでに長者原先輩も助かったようだ。
・・・長者原先輩は本当に苦労しているなぁ・・・。

「・・・」
「ん？どうしました蝶ヶ崎先輩？」

「いえ、本当に仲がよろしいのですね」
「・・・秘密でお願いします」
「ええ。私も他の人にしゃべり倒すほど口は軽くありません」
「助かります」

この人は本当に理性的だなぁ。
本当に助かる。

次の戦挙からは、なじみが俺の代役で出ることに決定し、俺はその間に教室の扉を開け、対面を果たす。

第四十九箱　書記戦『終了』（後書き）

次回、なじみのターン

「礼？お前なんか雰囲気が違うんじゃねえか？」
「そ、そうか？いつもどおりじゃないか？」
「いや、いつもより『男らしい』というか、逆に女らしいような」
「どういう意味だい？善吉？」
「い、いえ！何でもございません！！」

善吉の言葉がなじみの琴線に触れる。

・・・なじみ無双、始まるよー。

第五十箱　会計戦『前』　ｂｙなじみ（前書き）

「じゃ、今から行ってくるわ」
「こっちは任せてよ」
「ああ。ばれるんじゃねえぞ？」
「わかってるよ。そっちこそ気をつけるんだよ？」
「おう」

第五十箱　会計戦『前』　ｂｙなじみ

・・・今朝こんなことがあり、今日は僕が礼君だ。

「・・・太陽が眩しいな」

会計戦前日、僕は家にいていた方が他の人にばれずに済むのではないか？と考えていたが禊ちゃんが突撃してくるのを恐れたので学校の時計塔で過ごすことを決めた。この時間帯に礼君の身体を使うなんて初めてだから陽射しが少しきつく感じる。

「って、僕は誰に解説をしているんだろうね？」

「お、礼じゃねえか！！」

「や・・・おう善吉！傷は大丈夫か？」

善吉君か。

彼は厄介だな・・・。普段は鋭くない勘をいらぬところで鋭くする。

例えば、礼君のこととか。全く、無駄な鋭さだ。

「礼？お前なんか雰囲気が違うんじゃねえか？」

ほらきた・・・！

礼君の言動は僕と禊ちゃんが一番良く知っている。

頑張れ僕！

「そ、そうか？いつもどおりじゃないか？急にどうしたんだよ」

「いや、いつもより雰囲気が『男らしい』というか、逆に女らしいような」

・・・この子は今なんて言った？
いつもより『男らしい』？今は礼君の格好をしているが、それだけは譲れないんだよ善吉君・・・。

「どういう意味だい？善吉？」
「い、いえ！何でもございません！！（やべえ！！礼の笑顔がここまで怖いと思ったのは初めてだ！！）」

失礼な。いつもの礼君が女らしいみたいな言い方はやめて欲しいな。
・・・いや、それもありかも・・・／／／いやいやいや！だが、だが！！礼君が僕に甘えてくるというのは・・・すごくいい・・・！

「ん？どうした礼？ぼーっとして（怒ってない・・・よな・・・？）」
「あ、ああ大丈夫だ。明日のことを考えていてな」
「会計戦か。あのさ、俺・・・怒江を改心できると思うんだ」

へぇ、善吉君も過負荷（マイナス）に対して見方を変えてきたね。

「どうしてそう思うんだ？」
「礼が書記戦で言ったことを思い返してさ・・・。生徒会長（めだかちゃん）だけじゃなくて、生徒会庶務（おれ）もあいつ等と向き合ってみようと思ったんだ」
「・・・そうか」

やっぱり、礼君はすごい。彼の一言で、『不可能』だと思っていたことを『可能』に出来ると信じさせるほどの力がある。
・・・まぁ、彼等が思ったのは過負荷（マイナス）の改心だけじゃなく、礼君の改心も含まれているみたいだけどね。

「それにさ、怒江の奴言ったんだよ。『幸せになりたい』って。俺は球磨川を改心できるとは思えない。でも！幸せになりたいって言った奴を俺は幸せにする！！」

「頑張れよ、善吉」

「ああ！お前も救ってやるからな！！それじゃ、身体鍛えねーと！！」

・・・彼らしい、実に真っ直ぐな答えだ。そして、めだかちゃんの隣に立つために頑張ってきていた彼が、自分で見つけた新たな目標。彼に貸した『欲視力（パラサイトシーイング）』は、きっと君の役に立つだろう。

「・・・生き残らせるためだけに貸したつもりが、思わぬ方向で役に立ちそうだな」

まぁ、僕にはどちらでもいいことだ。礼君と禊ちゃんさえ生きてくれれば。

「・・・それにしても、いきなり遭遇とは」

「『あ、礼君』」

「うわっ！！」

ま、まさか禊ちゃんがここで登場だと！？

「『元気そうだね』『礼君！』」

「ああ」

「『あれ？』『いつも以上に目に力があるね』『僕と出会えてやる気が出たとか？』」

「それはない。それと、俺が普段からやる気が無いように言うんじゃない」

「『ごめーん（笑）』」

舌をすこし出して謝る禊ちゃん。
可愛い・・・。僕が礼君じゃなかったら抱きしめてるよ・・・。

「そういや、カードは引いたんだったか？」
「『ううん』『今日の午後2時に引くんだって』『まぁ、そうであっても僕のやる気は出ないけどね～』」

肩を落としてだるそうにする禊ちゃん。うん、本当にやる気がなさそうだね。

「『でもま』『礼君がいてくれるなら僕もやる気を出さないとね』」
「なんでだよ？」
「『だって』『愛してる人に見られるのにやる気が無いのは恥ずかしいじゃん』」

そう言って、僕に背中を向けて握りこぶしを上に突き出し「『おーっ！』」っと言う禊ちゃん。腰まである黒い髪が太陽の光で艶やかに見えきれいだ。
ああ、抱きしめられないのが残念なほどに可愛いよ禊ちゃん・・・！敵対してると考えたくないくらいに抱きしめたいよ・・・。

「『あ、じゃあ僕行くね』」
「おう、じゃあな」
「『じゃあねー！』『また明日―！』」

・・・なんとか危機は去った。僕の禊ちゃんへの衝動も含めて、ね。

「・・・早く屋上へ行こう！」

危険を回避するためには一歩でも早く向かうことが大事だ！

「・・・礼君、君はどれだけ女の子にかかわっているのさ」

校舎に入ると普通クラスから特待クラスの生徒の女子にまで声をかけられた。
そのたびに対応するのがしんどかったよ・・・！特に猫のような女性が。
・・・そういえば、なぜか委員会の女性もいたような・・・？

「ま、まぁこれで屋上に到着だ」

長かった。色々な意味で長かった。
礼君が帰ってきたらきっちり問い詰めよう。禊ちゃんと。

「はあ、風が気持ちいい・・・」
「礼さん・・・？」
「ん？」

後ろから声をかけられたので振り返ると・・・そこには次の会計戦で出場する江迎ちゃんがびっくりした顔で立っていた。

「どうしてここに？」
「・・・風に当たろうと思ってな。そういう怒江は？」
「あ、うん。私は明日のカードを決めてきたの。で、一息つこうかなって」

「何のカードにしたんだ？」
「『卯』のカード。確か・・・『火付兎（ひつけうさぎ）』だったよ」
「『火付兎（ひつけうさぎ）』か・・・確か植物園でやる戦挙だったはず・・・」
「あ、はい。箱庭学園の植物園、通称『木漏れ日』みたいです。予習したんですか？」
「うん。そんな感じ」

・・・ま、僕のは予習じゃなくて過去の経験なんだけどね。
それにしても、ここの植物園は確か四季折々の植物だけじゃなくて地球上の植物の半分以上をそろえてあるはずだけど・・・そんな国宝級のところで戦挙させるなんて太っ腹だね、『袴君』。

「あ、携帯が・・・球磨川さんから・・・？呼び出しかな」
「じゃ、また明日かな」
「はい。また明日！」

そう言うと江迎ちゃんがタタタと駆け足で走っていった。
・・・なるほど。確かに彼女は過負荷（マイナス）向きではないな。

「ま、善吉くんが改心させるだろ」

さて、一眠りでもしようかな。
礼君の身体で眠るなんて、初めてだな・・・。
少し禊ちゃんに優越感。こういうのは彼女では出来ないからね。ちょっと嬉いかも。

「ふあぁ・・・。そういえば眠いと感じるのも久しぶりだな・・・」

いつも人の夢の中にいるからそういう感覚を持つのが久しぶりに感じる・・・。

・・・礼君の体温・・・・。礼君の身体・・・・。大好きな人の・・・・
見ている世界・・・。

「・・・この状況を嬉しく思っている僕はどうしたんだろうか／／／」

寝てショートしかけの思考回路を冷やすとしよう／／／
・・・あ。

「寝るなら、家に帰ってからのほうがいいよね・・・うん」

コンクリートは身体を痛めそうだしね・・・。帰ろうか・・・。

「む、礼ではないか！」
「め・・・黒神。どうしたんだこんなところで？」
「水臭いな。『めだかちゃん』もしくは『めだか』と呼びかけただろう？そう呼んでくれて一向に構わんぞ！」
「は、恥ずかしいので遠慮します」
本当はそう呼んだほうが僕は楽なんだけど、礼君が文句を言いそうだからね。耐えて見せるよ。
「ふふ、まあよい。いや、善吉が走りこみに行ったのだが、いつも以上にやる気が出ていたのでな。観察だ」
さっきの会話の影響かな？
ま、やる気があるのは感心だね。彼らしくていいんじゃないかな。
「そういう礼はどうしたのだ？」
「少し眠くてな。家で寝ようと思ってな」
「ふふ、書記戦では働き尽くめだったからな。ゆっくり休め」
「助かるよ。じゃ、また明日」
「ああ」
・・・意外とあっさり解放された。
幼なじみだからかな？『身内には厳しい』みたいだけど優しい時はとことん優しいねめだかちゃん。
「・・・早く戻ってこれることを心から待っているよ、礼君」

僕も早く転入して、君に会いたいからね。

・・・・晩御飯、どうしようか。

「と、とりあえず寝る前に商店街かな」

睡魔に誘われながらも、僕は駆け足で晩御飯の材料を買いに向かった。

第五十箱　会計戦『前』　ｂｙなじみ（後書き）

記念すべき五十箱目がなんと主人公の出番がほとんど無いという恐るべき事態に！！
次から出ますよ～

礼「いや、一応俺が主人公だからできれば毎回ちゃんとした出番を用意して欲しいんだが」
ロ「すまぬ・・・話の流れで『なじみの一日』を書きたくなって・・・」
礼「まぁいいんだが、次はどっちなんだ？」
ロ「次は礼です。間違いなく」
？「やっと私の出番だね！」
礼・ロ「え？どちら様ですか？」
？「ちょっとーーーーっ！？」

第五十一箱　会計戦『前』　ｂｙ礼（前書き）

闇の中を歩く。
ただひたすらアイツのいる場所を求めて。
・・・こう書くとなぜか好きな人を求めている感じがするような表現だからやめよう。
あの引きこもりを引っ張り出すためにやってきた。うん。これがいい。
そして、見つけた。
体育座りをして、昔のダイアルでチャンネルを変えるタイプのテレビを見ている真っ白な髪のアイツを。

第五十一箱　会計戦『前』　by礼

「・・・来たな！魔王よ！！」

急に立ち上がって俺の方を見て言う。

「誰が魔王だ誰が。立場逆だろ」

「え～？私を出そうとするから礼が魔王。で、私は勇者なのだよ！」

「待て。引きこもりの勇者なんて聞いたこと無いだろ。どっちかって言うと、引きこもってるのは魔王のほうじゃないか」

「うっ・・・！痛いところを突いてくるね礼は。そりゃ確かに魔王は引きこもりだよ？だから新ジャンルで勇者が引きこもるのは・・・って考えたら面白くならない？」

「・・・世界崩壊するのに引きこもっている勇者はただの馬鹿だろ」

「そ、それはそうだけど！ほ、ほら！魔王が勇者を更正させるってのも面白そうじゃない？」

「それ魔王が勇者じゃないか？なんともまあダメな奴を勇者に選んだな王様は」

「礼は夢が無い～～～！！」

「怒るところかよ・・・ってそうじゃなかった。『零（レイ）』、準備はどうだ？」

「いけるよ、『礼』。全く、魔王が勇者に『仲間になってくれ』って言うのは世界の半分を渡してからだって相場が決まってるのに・・・」

どこの相場だそれは。あれか？ドラゴンが大量に出てくるような名前のＲＰＧか？

「使えるか？『孤苦零帳（ロストワールド）』は」

「余裕だね。私は君だよ?まぁ、リスクに多大な差はあるが・・・ね?」

全くもってその通りだ。俺の場合、使うたびに気を抜けば何かを失う。見ているもの、見ている世界、色、そんなものまで『零(なかったこと)』にする。

球磨川の『大嘘憑き(オールフィクション)』が気を抜けば世界をなかったことにしてしまうように、俺の能力も同じ。

気を抜けば世界自体をゼロにしたり、そのまま作り変えることも出来てしまう・・・。そんな過負荷(マイナス)。

俺があの実験で、『自分の存在を零にしたい』という願望から『作り上げた』もの。

自我を持つ過負荷(マイナス)であり、もう一人の俺。それが『孤苦零丁(ロストワールド)』であり、『零』だ。

「でもま、私は礼のそういうところが好きだけどな~」

「なんだ?突っ込みか?」

「いやいや。私を『道具』ではなく『人』としてみてくれるところ。突っ込みも好きだけどね」

「普通だろ?」

「ふふっ、それが出来るのがなかなかいないんだなぁこれが。思い上がった人間は、能力を得た瞬間にそれを人とは思わず道具として使う。一種の優越感と傲慢さが人を支配するんだ」

「ふ~~ん?」

「礼は『世界は美しくもつまらない』と思っているけど、私は逆だ。礼も気づいているんじゃないか?君がその考えを持つようになった本当の理由を」

「・・・」

わかっているさ。世界は確かに美しい。だが、球磨川が言ったとお

り、『美しい』なら『つまらない』なんて思うはずが無い。俺が一番、見ないように見ないようにと努力していたもの。
零はそれを一番良く知っている。俺の過負荷（マイナス）の起源であるコイツがわからないはずが無い。
そして、これを俺が言ったら、俺は確実に過負荷（マイナス）をコントロールすることが出来るだろう。
ただし、世界の美しさを感じられなくなるが。

「礼、君の心はわかっている。私も君と同意見だよ。このテレビで見た。確かに・・・この世界は本当に美しい。輝いて見えるものがたくさんある。人も、動物も、そして、天高く輝くあの大きな光源も。でも、君は受け入れなくてはいけない。私も君の見ている世界があまりにも美しいと感じていて受け入れることが出来ないんだ。だから、礼が受け入れたら私も受け入れるから・・・。それまで、一緒にいようよ」
「・・・ああ」

・・・俺は、本当に甘えてばかりだ。
零、なじみ、球磨川、善吉、黒神・・・数えるだけで両手の指なんてレベルでは収まりきらないほどの人間に支えられている。もちろん、兄さんにも支えられている。そして多分、俺の両親にも。
だから、だからこそ、今度は俺が皆を支えていかなければいけない。
だから・・・。

「・・・零」
「・・・ごめん、私の方がまだ決心がついていないんだ。礼、そして君も今考えていることは間違いだよ」
「え・・・」
「他の人を支えるために私の今まで見て来たものだけを受け入れるのは大きな間違いだ。それは、ただの大馬鹿野郎だ」

「・・・」
「・・・だからこそ、君はテレビを用意させたんだろう？勇者の私に」
「その件はまだ続いていたのかよ」
「当たり前でしょ。私はあくまでも勇者！これ絶対だからね！」
「俺はどうして魔王なんだ」
「そんなの、引きこもっている私を連れ出すという行為が私にとっては魔王のごとき行いだからよ！」
「・・・さいですか」
「さいなのですよ。さってと！早くテレビ見ようよ！なじみがどれだけ頑張っているか見たいじゃない！」
「ああ」

テレビの電源をオンにする。
そして映し出されたのは・・・女子に囲まれている姿だった。
いや、少々男子生徒の顔もうかがえる。

「「・・・は？」」
『礼君、少しお話できないかな？』
『あの・・・前の運動靴の件でお礼が・・・』
『柔道部に来て欲しいんやけど！』
『５９６４８２，８４５６９７９５（鳴神発見、一緒にお茶しよう）』
『な、鳴神様！！委員長を動かしていただけませんか！？』
『一緒に本を読んで語りましょうよ～』
『・・・戦挙で怪我人が少々、手伝って』
『鳴神ー！次こそチェスで勝ってやるぜ！風紀委員会室へ来な！』
『あ、鳴神君！』
『いたいた！！ちょっと相談が！！』

・・・わらわらわらわら・・・
なぜか委員会の人までいるのが気になるがぞろぞろと集まる。
・・・なぜだ？

「礼、君は一体どんな学園生活を歩んでいたのかな・・・？」
「いや、ごく普通に過ごしていただけなんだが・・・。手伝いは何度かしたけど」
「きっとそれだよ・・・・」
「だ、だが数回しか会っていない人が多数だぞ!？」
「礼は印象に残りやすいからね・・・。特にその人が一番困っている時に助けたりするもんだから深く印象に残るんだよ」

・・・確かにそうだ。
例えば図書室の本が大量に落ちたのでそれの手助けをしたり、前生徒会長が追い出そうとしていた人間が傷つけた人を保健室に運び込んだりとか・・・。

「礼は天然のフラグメーカーだしね」
「なんか失礼な感じもするがそうなのだろうか・・・」

なじみにもそんなことを言われた気がする。
なじみは常に『礼君は女の子とかかわらないこと！僕と禊ちゃん以外！！』といっていたが・・・こういうことか？
傍から見て痛感することって、あるよね？

「ま、いいんじゃない？礼をここまで慕ってくれている人が多いのは。それに、付き合っての好きではなく友達としての好きだから大丈夫でしょ？多分だけど」
「そ、そうだな」
「そ・れ・に♪なじみの戸惑っている姿は滅多に見られないしねー

！これは見逃せないよね！」
「ああ！こんなレアシーン見逃せるかよ！」
「ふふふ！いつも私を殴る罰だよなじみ！これを期になじみの弱点を・・・！？」

・・・ってなんだ！？今背筋に悪寒が走ったぞ！？

「おい、今の会話聞かれてたんじゃないのか・・・？」
「いやいやいや・・・私も急に背筋が冷たくなったんだけどたぶんそれじゃないよ・・・。礼、何かした？」
「い、いや俺は何も・・・」

テレビ画面を見ると、なじみの視線が遠くの空を見ていた。
・・・え？本当に俺、もしかして何か悪いことしたのか！？

「・・・礼、ご愁傷様」
「やめてくれ！！俺が何かよくないことに出会うように言うんじゃない！！」
「だって・・・この悪寒はさすがに洒落にならないって」

・・・大丈夫だよな？俺・・・戻っても何もされないよな・・・？
そんな淡い期待と不安を抱えたまま、ゆっくりと一日目が過ぎていった。
・・・二週間後がこんなに怖いと思ったのは生まれて初めてだ。

第五十一箱　会計戦『前』　ｂｙ礼（後書き）

学校の期末テストが後二日という近さなので更新が遅くなると思います。塾もあるので・・・。

感想等お待ちしてますねー！

第五十二箱　会計戦『開始』

礼ｓｉｄｅ

「んで、能力譲渡の時間はやっぱり」
「うん。二週間かかるね。渡すのにまず時間がかかり、私の世界観と礼の世界観の一致が一番時間が必要」
「・・・そうか」
「ま、私の見てきた世界は醜い部分ばっかりだからね。それを受け入れるのには相当時間がいると思うよ。もちろん、私もね」
ま、今まで見なかった部分のツケだな。目をそむけていた罰ってところか・・・。
「それじゃ、始めるよ」
「ああ。対話の始まりだ」
俺達の世界が一つになるまで、なじみに任せるとしよう。

なじみｓｉｄｅ

・・・体の感覚が変わった。非常に不愉快だけど始まったか。
この感覚は腹が立つ。礼君の見ている世界を捻じ曲げる感覚が。
「・・・次にあの子が出てきたら殴り倒してやる・・・」

「どうなされましたか、鳴神様？」
「いや、なんでもない。独り言だ」
「そうですか。それでは、会計戦を始めさせていただきたく存じます」

ふぅ、危なかった。独り言もなかなか呟く暇が無いな。それに、今礼君の心の教室に行くことは出来ないしね・・・。次にいけるのは二週間後、そのときには僕はもう転校できるしね。毎日会えるし・・・ふふっ／／／

おっと、話が脱線したね。会計戦なんだけど・・・禊ちゃんの脱力具合がとっても凄い。見るからにやる気が無いね。
今の禊ちゃんの格好を説明するとだね、ぼさぼさの髪、しわしわのカッターシャツ、リボンを着用しなければいけないのにつけていない、スカートもカッターと同じでよれよれといった具合だ。
リーダにあるまじき・・・と言いたいところなんだけど過負荷（マイナス）で言えばまだましな方じゃないかな。『体操服』ではないから。
何故『体操服』かというと、中学時代、禊ちゃんが生徒会長を勤めていた頃にやる気の無い時は体操服のみというまあ『体育の時以外は制服着用』の校則を無視した形で過ごしていた時があったから。
それに比べれば、まだ少しだけやる気があるととってもいいだろう。
体操服姿も久しぶりに拝みたかったが、その情熱は胸の中だけにしまっておこう。

「では、今回の会計戦に出場されるのは代理の人吉様（母）と江迎様でよろしいですね？」
「いいわよ」
「はい」
「それでは、今回の会計戦ですが各陣営からもう一名ずつサブプレイヤーを選出していただくことになります。形式としてはタッグ戦

になるということになりますね」
「サブプレイヤー？なにそれ誰でも構わないの？」
「はい。既に試合を終えた候補者でも構いません」
う～ん。ここは補佐として出て行くべきかな・・・？
「『んー』『じゃーまー僕が出るよ』『一応リーダーだし仕方ないよ』」
「・・・誰でも出ていいって言われてもな・・・。こっちからは俺が出るしかねーだろうが・・・」
お、善吉君が出るのか。じゃあ僕は別にいいかな。
「なお、今回も生徒会補佐の方には出場していただきます。サブプレイヤー、そして会計の補佐と二つの仕事を同時にこなしていただきます」
「・・・前々から思っていたんだけど、何故生徒会補佐は庶務戦の時には助言しか出来ずそれ以外の戦挙では補佐が出来るんだ？」
「それは役職の位と業務で考えていただくとわかりやすいと思います。基本、庶務は雑用ですが、補佐は雑用に庶務以外の役員を補助する仕事となっております。それゆえ庶務よりかは位が高く、それ以外の役職よりは位が低いのです。庶務戦では、同じ雑用を行う役職なので助言のみ、それ以外は補佐としての仕事を全うしていただくと言うことだとご理解ください」
「なるほど。理解した」
後から着いた役職なのに、善吉君よりも位が高いのか・・・。なんだか得をした気分だね。
「『まあそんなことは礼君と靖人君以外にはどうでもいいでしょ』

『さっさと始めちゃおうよ』」
「球磨川、お前さっさとって・・・俺が言うのもすげー変だがちょっとはやる気出せよだるそうに！」
「『はい？』『そんなのは僕の勝手でしょ～～？』『僕は書記戦での失敗が本気でショックだったんだよ？』『だから本当はもう帰りたいのに』『きみ達の道楽にこうやって付き合ってあげてるだけ感謝して欲しいなー』」

ま、褄ちゃんが気分屋なのはいつものことだしね。別になんとも思わないよ。僕はね。
あと善吉君、江迎ちゃんに話しかけるのはいいけど彼女ツンデレのツン状態だからめげないでね。

「さて、参加なさるサブプレイヤーのお二方にはこのブレスレットを装着いただき、補佐のお二方にはこの携帯端末を渡します」

善吉君たちに渡されたブレスレットは茨の模様をしており、僕たちに渡された携帯端末も特別仕様なのかわからないけどまるで茨のような模様をした端末だった。

「えらく模様がこってるね。これは？」
「善吉様たちの物は端的に言えば爆弾でございます」
「！！」
「『・・・』」
「時限爆弾内臓式のブレスレット・・・作動させてからちょうど一時間後に爆発する仕組みになっております」

へえ・・・そういう内容だったかな？時限爆弾ではなかったはずなんだけど・・・。

「爆弾って・・・冗談でしょ？そんなの腕が吹っ飛ぶくらいじゃ済まないよ！？」

古賀さんが驚愕の声を上げる。ま、普通に考えたら死ぬね。間違いなく。

「ええ。ですから急いで外してさしあげないといけませんね。それがこの会計戦のテーマでございます。江迎様には人吉様のブレスレット、人吉（母）様には球磨川様の腕輪の鍵をお渡しします。どのような手段を用いても構いません。相手の持つ鍵を奪い、パートナーの腕輪を外してください。先にパートナーを救った方の勝利となりましてございます」

えらく簡単な条件だね。これなら楽に終りそうだ。

「持つ鍵、または奪った鍵は肌身離さずよく見えるようにお持ちください。捨てたり隠したりするのはルール違反と致します。もちろん鍵の破壊も反則となりますので、特に江迎様はその点お気をつけくださいませ」

ま、彼女の『荒廃した腐花（ラフラフレシア）』は触れたものを腐らせる過負荷（マイナス）だからね。ちゃんと注意するあたりが『公平』の異常（アブノーマル）を持つらしい長者原くんらしい発言だ。

「即ち、この会計戦において留意すべき点は以下の四つ。『1、制限時間内に　2、鍵を守りながら　3、鍵を奪い　4、パートナーを助ける』。ただそれだけの実にシンプルな競技でございます」

「ちょっと待ってください。俺達補佐組はどうなるのですか？この携帯端末はもしかして鍵の代わりだったりして」

「いえ、お二方に渡した携帯端末は腕輪の鍵ではなく『爆発を一定

時間停止させる』ものでございます。いわゆる『チャンスタイム』と呼ばれるものでございますね。鳴神様には善吉様の、鳴神（兄）様には球磨川様の爆弾の起爆を遅らせるデータが入っております。腕輪に向けてデータを送信していただくと、敵味方の腕輪の爆発時間を五分のみ起爆を遅らせることが出来ます。つまり合計十分ほど遅らせることが出来るわけでございますね」

「自分たちだけではないのですか？」

「はい。それではタイムアップによる引き分けがありませんので」

「・・・なるほど」

つまり、延長するのは鍵を確実に奪えると確信した時のみだということか。延長して鍵を奪えるかどうかがこのチャンスタイムの使い道ってところかな。

「ちなみにその携帯端末に限っては、破壊を許可いたしております。チャンスタイムを生かすも殺すも補佐次第ですのでお気をつけくださ い」

・・・はじめる時に壊しておこうかな。この携帯端末。どうせ五分しか延長できないんだし・・・。

「待たんか長者原二年生、いい加減にしろ！それでは絶対に片方のパートナーが爆死するではないか！勝ち負け以前の問題だ！確実に死人が出るようなゲームに参加できるか！！」

「ご安心ください黒神様。片方の爆弾が解除された時点で会計戦は終了。もう片方の爆弾の時限装置も連動して同時に停止されます。爆弾が爆発するのはあくまで一時間後、タイムアップの場合のみでございます。それに補佐のお二方に渡した起爆延長コードもそのためのものだとお考えください。なるべくタイムアップによる死者を出さないためであると」

つまり、勝ち負けを度外視し、パートナーの命を優先すればこの会計戦は早く終了する。
ただしそれではその方法を選んだチームの敗北は決定だが。

「・・・それでも同じことだ！いやむしろ死人が二人になる分悪質といえる！！球磨川！流石の貴様だってこのようなルールを受け入れられるわけが・・・！！」
「『何を言ってるんだめだかちゃん』『我侭を言って長者原君を困らせちゃダメじゃないか』『気持ちはいたいほどわかるけどそこは人として！』『決められたルールは守ろうよ、ね？』」
「～～～～！！！！！」

禊ちゃんが制服の襟を正し、リボンをしっかりと着け、スカートのしわを正し、髪を櫛でとかした。
やる気出たんだ・・・禊ちゃん。僕は正直こんなどうでもいい戦挙にモチベーションがだいぶ下がったよ。
でもどこでやる気が出たんだろうか？『死ぬ』からかな。僕と夢で逢えるからとか・・・。それなら嬉しいなあ・・・。
さて、始まるまで僕は礼君の状態を身体の調子で調べておくとしようか・・・。
さてさて、どうなって・・・！？

「・・・・・・・」
「『あれ』『礼君どうしたの？』『そんないやそうな顔をして』」
「・・・・・・・」
「『およよ？』『れいくーん？』『聞こえてるー？』」

・・・零、君は確実に殴る。泣いても殴る。まさか、まさか・・・！！礼君と一緒に横になって寝るなんてそんなうらやましいことを

君は・・・！！いくら礼君から生まれた人格だからといって許されることじゃないんだよ・・・！

「『あれ・・・？』『君・・・本当に礼君かな？』」

おっといけない。早く戻ってこないと・・・。

「・・・どういう意味だ？球磨川」

「『もしかすると』『「零ちゃん」だったりして』」

「そんなわけ無いだろう。俺がアイツだったら一人称と口調がやたらとハイテンションだからな」

「『・・・そうだね』『その通りだ』『ごめんね？』『変なこと言って』」

「別に構わないさ。ただ・・・」

球磨川の頬を引っ張る。いつも礼君が引っ張ってるレベルの力加減で、ね。

「『いひゃいひゃい！！』」

「あんな引きこもりと一緒にするな・・・」

「『ごひぇん！（ごめん！）』『ごひぇんなしゃい！！（ごめんなさい！！）』『あひょ（あと）』『べひゅにかまひゃなひっひぇいっひゃくへにー！（別に構わないって言ったくせにー！）』」

「はっはっは・・・それとこれとは話が別だ」

「『どひょひゃー！？（どこがー！？）』」

ふふっ、やわらかいな・・・楽しいなぁ・・・。礼君がやるのもわかる気がする

むにむにぐにぐにぷにぷに・・・そんな効果音が似合うほどに褪ちゃんの頬をいじる。

「（・・・めだかちゃん。礼に任しとけば球磨川倒せるんじゃ・・・）」
「（う、うむ。私もそんな気がして来たぞ・・・）」
た～のし～な～！これ癖になりそう！
「・・・そろそろよろしいでしょうか」
「あ、ああ、すみません。お願いします」
「『あう～』『頬が～』」
両頬をさする禊ちゃん。・・・転校してきたらもう一回やるとしよう・・・。
「では始めさせていただきます。まず補佐のお二方はお入りいただいて移動を開始してください。五分後に出場者とパートナーを入場させます」
「俺たちを探しつつも、というわけですか？」
「はい。それでは中に入り、移動を開始してください」
植物園に入る。
礼君のお兄さん（靖人君）だっけ？は反対側の入り口から入った。
・・・さて、どこに行こうかな・・・。植物を観賞しているのも悪くないな・・・。
「とりあえず、五分で出来るだけ見つから無い場所へ移動っと・・・」

五分後

最初に謝っておくね。ゴメン。

「・・・ここどこだろう」

迷った。予想よりはるかに速い速度で迷った。
いやあ・・・適当に歩いていたら迷うものだね。

「う～ん、『迷宮究明（ダンジョンマップ）』でも使ったら簡単なんだけどね・・・」

礼君はこれを使っていなかったからな・・・。ま、あと二十分しても誰とも出会わなかったら使うとしよう。

《それでは会計戦『火付兎』、開始してください》

植物園全体にスピーカーによる長者原君の声が聞こえた。

「それじゃあ、また動くとしよう」

僕が戦挙に出るのは珍しいんだぜ？楽しませてくれよ、禊ちゃんに善吉君。

第五十三箱　会計戦『弐』

「・・・さて、始まったか」

どう過ごそうかな・・・。別に僕たちが合流する必要性は無いしね。出会いたかったら探し出せば言い話しだし・・・。

「やっぱり植物観賞でも（ズゴアッ！！）・・・え？」

いきなり根っこが盛り上がって僕に向かって迫って来た・・・ってうおい！！

「『炎々舞踏会（ボレロ）』！！」

半歩左に身体をずらし、横から炎を纏った拳で殴りつける。そしてその根っこの内部で小さな爆発が起き、燃える。

「・・・これは誰の過負荷（マイナス）かな？禊ちゃんはありえない。そして書記戦でも見たけど靖人君のも『他人の身体能力を真似る』だけだから、消去法で江迎ちゃんかな。『荒廃した腐花（ラフラフレシア）』で土を腐らせたとか、そんなところだろうね」

なんともまぁ植物園において有利すぎる扱い方だね。これは流石としか言いようが無いかも。

「さて、こんな植物達でも観察するとしよう」

姿が変わっても僕はあまり気にしない。どっちにしろ同じものだし。変化前より生き生きとしているしね。

・・・でも。

「カスが僕と礼君の身体に手を出そうなんていい身分だ」

さて、この少しの腹立たしさはどこにぶつけようか。

・・・次に襲ってきた植物でいいか。

さて、二十分と言ったがこの調子だと結構早く過ぎそうだな・・・。

それに、今は僕が礼君の身体を使っているからスキルも出し放題。

やったね。サービスタイムだよ。

「じゃ、とりあえずこの植物園を歩き回るとしようか」

散歩だと思えば結構楽しいんじゃないかな。木々の間から光が差し込むのが気持ちいいね。

球磨川ｓｉｄｅ

「『人吉先生か・・・』『懐かしいなぁ』」

「そうなんですか?球磨川さん」

「『うん』『僕が礼君と初めて会う前に出会った人でね?』」

思えば十三年前だな・・・。

場所は箱庭総合病院の診察室。時間は午後の診察開始時間ちょうど。

うさぎのぬいぐるみを持って入ったときの先生の驚愕の顔は忘れら

れない。

「『あ、そうだ怒江ちゃん』『実は相談があるんだけど・・・』」
「はい、なんでしょうか？」

耳元で作戦を伝える。上手くいくだろう作戦を。

「・・・そうですね。それは確かに」

さて、楽しみだね。

人吉（母）ｓｉｄｅ

視界や道を遮る植物が多い。善吉は一緒にいるから大丈夫だけど、問題は・・・！

「礼君か・・・！急ぐわよ！！『庭弄り（ガーデニング）の守護神（ガーディアン）伐採版（なでぎりばん）！！』」

ランドセルから取り出した二本のナタで迫る植物を切る。
これは私が『母親』として身につけた『お母さん（マザーズタスク）のたしなみ』のひとつ。草から盆栽までなんでもこいってね！

「（庭師って言うか、もはやマタギだ！！）」
「善吉君！ちゃんとついてきてる！？そして本当にこっちであってるんでしょーね！？」
「ああ！名瀬先輩にさんざん調教されてきたからな。どれほどの植

物で目隠しされようが過負荷（マイナス）の位置なら肌で感じるぜ。特に球磨川の気持ち悪さは強烈だからな！」

「なるほど、つまり遠恋してる恋人を感じ取るように！善吉君には球磨川ちゃんが感じ取れるってことだ！」

「そのつまりは言わんでいい！！」

そうね。確実にこれを球磨川ちゃんの前で言ったら怒られる上に嫌がられそうだものね！礼君なら大歓迎そうだけど！

「・・・おい、お母さん。球磨川を警戒すべきなのはわかるけど・・・あくまで会計戦の対戦相手は江迎なんだぜ。そこはちゃんとわかってるよな」

「・・・・・わかってるわよ、そんなこと」

球磨川ちゃんで思い出すことは二つ。嫌な記憶と、心の底から驚愕した記憶。

十三年前、箱庭総合病院。

私はそこに勤める心療外科医だった。仕事が好きだったしそれ以上に誇りも持っていた。もちろん、フラスコ計画の暗部は知っていたけれど、それでも、私が計画を主導する『彼ら』に協力し続けたのは、異常（アブノーマル）と呼ばれる子供達を少しでも社会に馴染ませてあげたかったからだ。

私自身も異常と呼ばれながらも育った子供だったから、おこがましいけれどそれが自分の使命なのだと思っていた。

「人吉先生、そろそろ午後の診察を始めていただいてよろしいでしょうか？」

「あ、うん。お待たせ。もう準備できてるからいつでも・・・」

診察室に入ってきた女の子は、不気味な雰囲気を纏っていて包帯でぐるぐる巻きの兎のぬいぐるみを引きずって現れた。

「・・・えっと、球磨川禊ちゃん・・・でいいんだよね？」

「『・・・・』『はい』」

その声は端的に、しかし何か変な感覚を覚えさせる声だった。

「・・・大丈夫！緊張しないで。別に怖くないからさ。あ、私はきみの担当医になる人吉瞳！よろしくね！」

「『・・・』『よろしくお願いします』『ところで人吉先生』『最初に一つお願いがあるんですけれど』」

「ん？なにかな？何でも言ってよ球磨川ちゃん」

「『僕の症状は異常なしって診断してもらえません？』『お父さんとお母さんに』『心配かけたくないんですよ』」

「お母さん！いたぞ球磨川と江迎だ！！」

意識が善吉君の声で記憶の海から引き戻される。

肉眼で目標の二人を、特に球磨川ちゃんを捕らえる距離まで接近した。

躊躇はしない。しゃべる暇も与えない。

「一瞬で決める！！」

頭を思いっきり蹴る。これで・・・！？

蹴ったところから緑色の葉が舞い散った。

「なっ！？植物で作ったダミー！？」

ドスッ！
そんな嫌な音が私の背後から聞こえてきた。
そして後ろを振り向くと、シャツに短パンという姿で善吉君の背後を奪い、ぶっとい螺子で背中を突き刺していた。

「くま・・・がわっっ・・・！！」
「『作戦成功』『そして今だよ怒江ちゃん』『おもいっきりやっちゃえ』」
「了解です☆『荒廃（ラフラフレシア）した腐花狂い咲きバージョン・・・タイプ「柵（しがらみ）」』！！」

善吉君と江迎ちゃん、私と球磨川ちゃんとの間に大きな棘のある植物が現れ、分断された。

・・・これは、ナデの刃が通らないほどに硬いわね・・・。下手すると腕ごとやられそう。

「植物の壁を作って私と善吉君を分断するとか・・・。二人きりになりたいのならそう言ってくれればいいのに、照れ屋さん☆」

いそいそと服を着ている球磨川ちゃんに言う。ここからは心理戦だ。
・・・というより羞恥心は無いのかしらこの子。

「『あはは』『まあ怒江ちゃんには人吉先生の相手はしんどいでしょうからね』『一年生には一年生同士で遊んでもらおうという計らいです』」
「私だっていちおー一年生よ？４２歳だけど。つまりあなたが私

から直接腕輪の鍵を奪うつもり？サブプレイヤーの権限を逸脱したルール違反すれすれの作戦ね」

「『いえいえ、今回はフェアプレーに徹します』『僕の役割はあくまで引き分け（タイムアップ）まで』『人吉先生と怒江ちゃんとの接触を断つことだけですよ』」

「引き分け（タイムアップ）まで？」

なにそれ・・・。マイナス十三組が勝ち負けを度外視するのは恒例だけど・・・？タイムアップになれば善吉君と球磨川ちゃんの腕が爆発する。庶務戦の時と同じで善吉君を傷つけたいだけ？いや、あの時にもちゃんと目的はあった・・・。

「・・・そういえば、さっきはどうして善吉君の後ろを取ることが出来たの？善吉君はあなたのことを肌で感じることができるはずなのに」

「『ああ』『それは簡単なことです』『僕の気持ち悪さを肌で感じる・・・なんて酷い修辞的表現は礼君だけにして欲しいところですね』『話を戻しますけど』『要するに気配を感じているってだけでしょう？』」

・・・そうね。確かにその通りかもしれないわ。

「『だから』『僕の気配をなかったことにしました。』」

その言葉が私を驚愕させた。どうしてこの子はこんなに明るくそんなことを言えるのだろうか・・・！

「それがどういう意味を示すかわかっているの？『大嘘憑き（オールフィクション）』でなかったことにしたものはもう戻せないのでしょう？つまりこれから先、あなたは一生誰にも気づかれない人間になってしまったってこ

となんだよ?」
「『?』『そんなの別にかまいませんよ?』『それに』『礼君の家に入っても気づかれないってことは』『寝顔を堪能しつくせますしね!』」
「・・・どうしてそんなことが言えるのよ。その強さ(アブノーマル)ゆえに誰からも忘れられてしまった日之影君の苦しみを、あなたはちゃんと知ってるはずなのに・・・」

そう。彼は孤独だった。一目見ただけでわかる。あれは一人ぼっちで悲しそうな目だった。

「皆が大切にしているものを平気で踏みにじり、そうかと思えば皆が恐れ怯えることを平気で受け入れる。球磨川ちゃん、そんな自分にあなたは本当に何の疑問も感じないの?自分が何のために生まれてきたのか、考えたことは一度も無いの?」
「『・・・・・』『それが勝負の後に聞きたいことってやつですか?』『あはは』『変わらないですねぇ人吉先生』『あなたは初めて会ったあの時のまんまだ』」
「・・・」

再び、球磨川ちゃんの言葉で記憶の海に潜ってしまう。
そう、私は球磨川ちゃんが『問題なし』と言った後・・・

「・・・駄目よ。カルテに嘘は書けないの。そして検査をするまでもないわ。あなたは明らかに異常(アブノーマル)・・・ううん。それ以上の、それ以下の何かよ」
「『・・・(ブヂヂヂッ!ブヂヂヂヂヂッ!!)』」

球磨川ちゃんが兎のぬいぐるみの頭を掴んだかと思うと、首のところを引き裂き始めた。そして、千切れた胴体の中に腕を突っ込み何かを探り始める。

「『あなたは異常者（アブノーマル）の研究が出来ればいいんでしょう?』『じゃあ取引しましょう人吉先生』」

そしてその胴体の中で目的のものが見つかったのかこちらに顔を向け何かを取り出した。

これは・・・データディスク・・・?

「『まだこの病院で検査を受けていない異常者（アブノーマル）二千人分のデータです』『これを差し上げますから僕を見逃してください』」

「あなた!そんなものどうやって集め「『方法なんてどうでもいいでしょう?』『重要なのはこのデータを運用すれば』『あなたの研究は飛躍的に進歩するということです』」!」

そんなこと・・・!

「もっと駄目よ!そんな賄賂じみた取引には応じられない。ご両親にはありのままを報告させてもらうわ。・・・あなたは多分入院することになると思う」

そうだ。私には、

「私には心療外科医としての誇りがあるし、あなたのような子供を幸せにしてあげる義務がある!」

「『・・・・』」

このとき、私は彼女に背中を向けるべきじゃなかった。そうすれば、

彼女の浮かべる笑みに気づけていたのに・・・。

「『託児室にいるあの子って』『人吉先生のお子さんですかあ?』」

「!?」

「『二歳くらいですかね』『あはは』『今が可愛い盛りですねえ』」

笑顔だった。今まで見た中でとてもいい笑顔だった。

だが、その笑顔とは裏腹に私の背筋を凍らせるほどの台詞を言い放った。

「『僕って寂しがり屋だし』『見知らぬ病院で一人きりなんて不安で怖いから』『もしも入院したら彼に友達になってもらおうかなあー』」

この言葉が、どれだけ私の恐怖を煽ったか。とてもいい笑顔なのに、私はなぜか怖くなった。

「なによそれ・・・脅迫?賄賂と同時に脅迫って・・・一丁前にアメとムチのつもり?」

子供だから、上手く言いくるめようとしてまだ打開策があると思って安心したのが駄目だった。

「『いえいえ』『両方ムチです』『僕をここで見逃せばあなたは賄賂を受け取った誇りなき医者になり』『僕を見逃さなければあなたは実の息子を見捨てた使命なき医者になる』『まあどちらにしても』『あなたの生き様はここを境に折れ曲がりますから』」

結局、私は逆らえなかった。だが、それでも診察は続けようと努力した。

だが、やはり彼女の言ったとおり、私は心療外科医の誇りどころか信念を失った。
原因は礼君に対する人道に反する実験。
私が不甲斐ないせいで礼君を幸せにするどころか『不幸(しぬこと)が幸(すくい)せ』という考えまで歪めてしまった。
結果、私はその日の残りの診察をするなんていうやる気は鎮火させられ、それからも起きることは無くなった。

・・・だが、これには後日談がある。もう一つ、驚いたことがここだ。
次の日、どうにかして診察をしようと思い病院に来ると、球磨川ちゃんが私の元まで全速力で走ってきた。

「『せ、先生!!』『聞きたいことがあります!!』」

その目には、昨日のような悪意はなく、それどころかとても澄んだ目だった。

「な・・・なに・・・?どうしたの・・・?」
「『ぼ、僕・・・』『ある男の子を好きになってしまったみたいなのですが・・・』『どうすればその子を死ぬこと以外で幸せにしてあげれますか!?』」
「!?」

このとき、球磨川ちゃんは本当に必死で、そして誰よりも恋をした顔をしていて、とても心配をしている顔だった。

「『・・・なつかしいですねえ』」

球磨川ちゃんの言葉でまた記憶の海から顔を出す。

「『あの時は見逃していただいて』『そして相談に乗ってくださいましてありがとうございました』『おかげで僕は礼君のこと以外で幸せになることなく今日まで生きてこられましたよ』」

「・・・そう」

彼女は、そこまで礼君に惹かれている。

あの時、礼君は植物人間だった。後で聞くと球磨川ちゃんは礼君に会いに行ったようで、その時に何かあったのだろう。

彼女の心をここまで奮い滾らせる何かが。

「『そういえばこの状況もあの時と似ていますねえ』『善吉君のことが心配でしょう？』『百円くれるなら怒江ちゃんに彼を傷つけないよう電話してあげますよ？』」

「・・・全然違うわよ球磨川ちゃん。あの時と今じゃ全然違う」

そう、めだかちゃんとずっと一緒にいただけでなく、礼君という幼なじみに再び巡り会うって、善吉君はみるみる変わっていた。

「善吉君はもう『子供』じゃない。一人の、一人前の『男』よ」

そう。もう善吉君は大丈夫。

「この前の庶務戦を見て確信したわ。礼君という友人がいて、どんなことがあっても自分の信念を貫ける。だから、もう母親の過保護は必要ない。そして、あなたの思惑もまた外れるのよ。そうやって私を足止めしても無駄なの。だってあの子がすぐに江迎ちゃんを連れてお母さんのところに帰ってきてくれるから」

だから、私は私の出来ることをしましょう。

善吉ｓｉｄｅ

時間は・・・４４：４４：４４か。

「・・・知らない仲じゃねーからまずは忠告してやるぜ江迎。降参するなら早めにしとけ。今日の俺はなんだか『目の色』が違うんだ」

「・・・？目・・・？」

なじみｓｉｄｅ

「やっとか善吉君」

僕は今『迷宮究明（マッピング）』を使用して彼等の位置を探り、『壁耳障目（ノイズキャンセル）』で全てを見て、全ての会話を聞いていた。

「それにしても、面白い状況になってきたね。流石禊ちゃんだ。全く驚嘆に値するね」

さて、どちらの側にも期待しておこう。

・・・それにしても、礼君のお兄さんはどうして皆と反対側にいるのだろうか？どんどん離れていくし。

第五十三箱　会計戦『弐』（後書き）

安心院なじみの能力講座！

「また礼君がお休みだ。なんだか淋しい気もするけど始めようか。今回はこれだ」

『迷宮究明（ダンジョンマップ）』・・・・室内の状況を完全に把握することが出来る能力。人の位置から向かう方向まで全部把握できる。これで迷路もばっちりだよ。

『壁耳障目（ノイズキャンセル）』・・・どんな場所にいても人の会話、行動を知ることが出来る能力だ。
由来は見たらわかるとおり『壁に耳あり障子に目あり』からだね。

「今回はここまでだよ♪」

第五十四箱　会計戦『参』

・・・さて、面白くなってきた。
傍観者としてはもう少し観察して禊ちゃんの話をうっとりしながら聞きたいところだがそれも危なくなってきた。
理由は礼君の身体だ。僕の存在を拒み始めた。

「・・・『腑罪証明（アリバイブロック）』すらも拒絶するか・・・」

流石だよ礼君。流石僕が認めただけのことはある。その能力は確かに欲しい。『手のひら孵し（ハンドレッド・ガントレット）』や禊ちゃんの『大嘘憑き（オールフィクション）』ですらその域まで達しなかったというのに・・・。

「礼君が言っていた『めだかちゃんに見せられない』というのは良く分かる。こんなもの、完成させたらめだかちゃんは異常者（アブノーマル）から普通（ノーマル）に下がってしまう。『乱神』も『改神』も『完成』も無いただの少女に」

さて、僕が礼君の身体に存在できるのはもって後二日・・・。礼君の予想以上に早いな。僕も予想していた時間よりだいぶ早い。全く、どうなっているのだろうか。

「でも、零ちゃんと寝ているのは許されないよ礼君」
「ほう、零ちゃんだと？」
「・・・おかしいな。君はさっきまで僕たちと逆方向に動いていたはずだが」

背後から声が降りかかる。
そちらを向くと先ほどまで逆方向に走っていた靖人君がいた。

「あれはお前の気配がしたから俺の位置を探っていると予測して動いていただけだ。気配が消えたら向かうつもりだったよ」
「ふーん、そんな解説はどうでもいいんだよ。君は僕の事を知っているのかい？」
「いや、俺はお前のことなんて知らないが、礼の身体に宿っている人格だということはわかった」
「上出来だよ。この短時間でそこまで理解できれば十分だ」

流石礼君のお兄さんとだけ言っておこうか。別に僕にとってはどうでもいいが。

「それよりさ、ここは休戦にしないかい？僕は戦いは嫌いなんだ」
「・・・お前の名前と『零ちゃん』について言うならいいだろう」
「いいぜ。僕はそういう風に取引できる奴は大好きだ。では自己紹介から。僕は『安心院なじみ』。僕のことは親しみを込めて『安心院さん』と呼びなさい」
「そうか。俺の自己紹介は不要だな」
「ああ。鳴神靖人君。礼君のお兄さんだね。過負荷・・・というよりはそれは異常性と見たが違うかい？」
「・・・そこまで知っているのか。では次だ。『零ちゃん』とは誰だ？」
「いいぜ、教えてやるよ。本名『鳴神零華』。礼君が初めて死んだ時から『徐々に生まれてきた』と言っている過負荷人格だ」
「・・・待て。『死んだ』とはどういうことだ」

ん？彼は聞いていたのではないのか？礼君が過去話（中学時代を除く）話をしていたときに乱入していたじゃないか。

「おい、早く言え」

「君は何故知らない。あの時『生徒会室』に乱入してきたじゃないか」
「何を言っている。俺は礼と出会ったのは『終業式』が初めてだぞ」
「・・・どうなっている」

なんだこの食い違い。確かに礼君と彼は『生徒会室』で遭遇した。それに善吉君を探す時も彼と遭遇していたはずだ。礼君と同じ二重人格？いや、まだ確証性がない。

「・・・君に問おう。礼君と終業式の前日に一度廊下で出会っていないか？」
「出会っていない。さっきも言っただろう。俺は弟と『終業式当日』に出会ったと」

なんだこれは。いや、彼は嘘をついている顔をしてはいない。ではあの靖人君は誰だ。彼とは性格も真逆の彼は一体なんだ？
・・・調べる必要がありそうだ。

「質問を増やしていいか？」
「あ、ああ。かまわない。なんだい？」
「礼はどこへ行った」
「彼は今眠っているよ、零華と一緒にね」

さて、ここら辺で切り上げるとしよう。そうでなければ時間はすぐに消えてしまう。
『時は金なりという』諺はその通りだと褒めてあげたいぐらいだ。

「ここら辺で切り上げるとしよう。『沈黙は金』という言葉もあるしね」
「そうだな。残り時間も二十分を切った。縁があればもう何度か礼

について話を聞いておきたいところだ」
「縁があれば。それじゃあね。『腑罪証明（アリバイブロック）』」

目標は禊ちゃんがいる場所。さて、そこへと移動するとしようじゃないか。

「到着」
「『れ、礼君!?』『いったい何時の間に!?』」
「礼君!?どうして!?」

僕が見た禊ちゃんと人吉さんの状況は、遠足に来ているかのようにビニールシートを広げ、ティータイム中だった。ふむ、過負荷（マイナス）相手に心理戦とは恐れ入ったね。流石は元心療外科医だった先生だと言うべきか。

「よう。目から血の涙を流してどうした球磨川。感情でも揺さぶられたのか?」
「『うん』『流石人吉先生と言わざるおえないね』『さっきまでなじみちゃんの話をしていたところだよ』」
「なんていったんだ?」

ここは重要だ。禊ちゃんが僕のことを語るのは全く持って珍しい。
さて、僕の評価を早く聞きたいな。

「『礼君と同じくらい好きな人』『彼女といればこんな僕でもまともになれるんじゃないかと思えるほど』『嫉妬すらできないほど綺麗な人だったよ』『って』『嫉妬しないでね礼君』」
「・・・そうか。あと、嫉妬はしねえよ」

そっか・・・。禊ちゃん僕をそんな風に思っていたのか。嬉しいなあ。礼君は嫉妬せずに『そうか。よかったな』って言いそうだけどね。

「『それにね？』『めだかちゃんについても言ったんだ』」
「・・・何て言ったんだ？」
「『うん』『彼女は恋を知らない』『人間が好きなだけで』『人が好きなわけじゃないんですよ』『ってね』」
「・・・そうか。黒神大丈夫かな・・・？」
「『あは』『礼君は気にしなくていいんだよ』『めだかちゃんなんて』『それより僕を見て欲しいよ』『ずっと見ていて欲しい』『君の事を愛している僕を』」

おっとマイナスオーラ全開だね、禊ちゃん。めだかちゃんと張り合ってるけど昔何かあったのかな？

「礼君気をつけて。彼女その大好きな人の『顔を剥がした』そうだから。礼君ももしかしたら・・・」

ん？ああ、そういえばそうだっけ。僕はもう気にしていないし。でも彼女は一つ僕に『したこと』を早く解いてほしいな。

「『礼君にはしませんよ』『人吉先生』『それにしても』『なんで皆なじみちゃんを忘れたんだろうね？』『彼女はあんなにも魅力的だというのに』『あ、礼君も世界で一番魅力的だから』『不安にな

らなくても大丈夫だよ』」
「・・・さあな。アイツにはいつか聞かないといけないな（礼君も気にはなっているみたいだしね）。それと不安になんてならねえよ」
そこまで言うと、僕の横にある草が徐々に腐っていき、穴が開いたところから二人の男女が現れた。
「ぐっ・・・」
「カッ！相手の視界が見えるんならその動きを誘導することも容易だよなあ。お前の過負荷（マイナス）でこの分厚い壁を打ち破ることもよ」
ふむ、善吉君に江迎ちゃん登場か。
「これこそまさに『デビルアイ』！！」
・・・そのネーミングセンスは僕好きだよ。結構。それにしても彼、『デビル～』とか『サタン～』とかつけるの好きだねぇ。ちょっと遅めの反抗期みたいな感じかな？反骨精神の塊みたいなのが好きみたいだし。あとお母さんのセンス。
「『違うよ善吉君』『彼女はその目を「欲視力（パラサイトシーイング）」と呼んでいた』」
「！！球磨川っ・・・え？彼女？」
ふむ、夢の中で会ったというのに忘れているとは・・・、やっぱり君にはまだ早かったみたいだね。
それと、上手く僕の貸した能力を使っているみたいじゃないか。飲み込みが早くて助かるよ。
まぁそれさえあれば生徒会戦挙なんて生き残るのはおつりがくるほどに簡単で楽勝だ。

「『やれやれ』『やっぱりその目は』『彼女からのレンタルだったんだね』」

む、空気が不穏になってきた。禊ちゃん怒り気味だね。僕が貸してあげたのが気にくわなかったのかな？

やれやれ、君には僕から『手のひら孵し（ハンドレッド・ガントレット）』を貸してあげたというのに。それでイーブンってことにしようじゃないか。

「『君と彼女の関係が明白になった以上引き分けを狙う意味は無くなった』『と、言いたいところだけどやっぱり引き分けようか』『彼女と善吉君』『そして僕』『計画的にうまく死（す）れば久しぶりに三人で話せるかもしれないし！』」

禊ちゃん。三人で話すことなんてほとんど無いよ。僕は今礼君のことのほうが気がかりで仕方が無いんだ。それに、お兄さんのあの発言。どうにも変なことが渦巻いているみたいだからねえ・・・。

・・・これは予想以上に複雑な状況みたいだね。やっぱり早く転校するとしよう。副会長戦にはもうこの学校にいないと駄目かもしれないし。

あと、礼君がもうちょっとで目覚めそうだしね。拒絶されるのは辛いけど彼のお願いだし、現実で彼と会えるほうが楽しいしね。頑張るとするか・・・。

・・・あ、サプライズで出会い頭にキスをするというのもありだな。うんそれがいい。そうしよう。してもいいよね。したらいいんじゃないかな。させてくださいお願いします。

眠っている礼君に耳元で語りかけるように僕はこの思考を胸中で語った。

第五十四箱　会計戦『参』（後書き）

安心院なじみの能力講座☆

「やあ、礼君のことになると読者が心を読んでいるとわかっても地の文で礼君への愛を語る安心院さんだよ。今日も礼君はお休みだ。次回あたりで復活の予定だ。では時間も無いので、今日の能力は僕のお気に入りだ」

『腑罪証明（アリバイブロック）』・・・　いつでも好きなときに好きな場所にいることが出来るスキル。宇宙など現実世界だけでなく、天国・地獄・他人の夢の中でも自由にいることが出来る。僕の好んで使うスキルの一つだよ。

「これなら礼君の夢の中に自由にいけるから好きなんだよ。他にも禊ちゃんの心の中とかにもね。さて、今回はここまでだよ」

第五十五箱　会計戦『肆』

「引き分け狙い？なんだそりゃ。相変わらずわけわかんねーなお前は。お願いだから一個くらいなんかわかることをしてくれよ！」
「『善吉くんには一生僕のことはわからないよ』『君もめだかちゃんと同じく』『恋を知らないお子様だからね』『・・・・・』『ただまあそんなお子様が』『彼女の目を我が物顔で使っているっていうのは』『流石にちょっと不愉快かな～～～』『な！』」

ふふ。嫉妬するところも可愛いな禊ちゃん。でも、君の心の中にいる僕は君の事をどう思っているのかな？
『僕は僕であって僕ではない』。さて、禊ちゃんの中にいる僕はどんな性格なんだろうね？楽しみだよ。

「・・・欲視力（パラサイトシーイング）」
「礼・・・？」
「善吉、お前は誰の視界を見たんだ？」
「江迎だ。アイツの視界で世界を見た。・・・過負荷（ラフフレシア）で腐らせるまでもなく、空気も、人も、地面も、建物も、ありとあらゆるものが腐っていた。・・・礼、俺は自分自身が許せない。この世界をあんな目で見ている奴がいるとも知らず、のうのうと生きてきた自分が許せねえ・・・！」
「・・・」

この子は、本当に真っ直ぐだな。
なるほど、禊ちゃんが嫉妬するのもこれなら頷けるというものだ。

「礼、お前はどんな風に世界を見ているんだ？」
「・・・今は見るなよ？」

「当たり前だ！今は、江迎に集中するさ！」

違うんだ。僕が言いたいのはそういうことじゃない。
今は礼君が見ている世界じゃないんだ。礼君という身体を使って僕が見ている世界だから、『見るな』と言ったんだ。

「さて、球磨川が何か仕掛けてくるな」
「ああ、一体・・・」

禊ちゃんが江迎ちゃんの片手を取り、地面に押し付けた。

「『簡単さ』『日之影君が強いのはただただ単純』『身体（サイズ）が大きい』『それ以外に強さの理由は無いよ』『荒廃した腐花狂い咲きバージョンタイプ「千年杉（ラフラフレシア）」！！』」

目を放し、少し会話をしただけの時間が仇となったのか。
目の前には特撮映画顔負けの大きな木の人間がいた。
植物園の天井を破り、その巨体は狂ったように暴れようと今か今かと待ち構えている。

「・・・礼、今なら」

そう、今しかチャンスは無い。禊ちゃんは江迎ちゃんの邪魔にならないよう観戦するつもりでいる。そして、この巨体を操る江迎ちゃんは流石に余力が無い。
今なら、対話が出来る。

「行け。時間は稼いでやる」
「ああ！！行ってくるぜ親友！！」
「さっさとアイツの心を幸せにして来い！！親友！！」

善吉君が走る。
・・・それにしても、損な役回りだな僕も。流石に甘すぎたかな？
まあいいよね。今は礼君なんだから。

「行くわよ！礼君！！」
「ええ！行きましょう！！『自気高揚（アップビート）』『炎々舞踏会（ボレロ）』！！」

拳と片足の体温を上昇させ、そこに紅色の炎を纏わせる。
さて、ここからは僕も骨が折れそうだ。さっさと話を終らせてくれよ？善吉君。

「礼さん！本気で、行きますよおおお！！『荒廃した腐花（ラフラフレシアアアアア）』！！！」
「来い！怒江！！燃え滾っていくぜ！！『炎々舞踏会（ボレロオオオオ）』！！」

『自気高揚（アップビート）』にはもう一つ、面白い能力がある。自身の感情を高ぶらせることができるんだ。
だから、僕の口調がおかしいのは気にしないでね？

右や左、足元から巨大すぎる幹の手や根が襲い掛かってくる。
操っている本人が疲れているせいか遅い、だが高威力過ぎるそれは、かすっただけでもダメージが大きい。

「・・・礼君なら、気にしないんだろうけど！僕は違うからね！！」

『炎々（ボレロ）舞踏会』を使用し、空中で爆発させその爆風で高速移動を続け回避する。
足元から根っこが僕の足を捉えようとしてくるから、空中へと回避するがそれを狙ったかのように轟音のように風切り声を上げ迫って

くる左腕。
もう一度空気を踏みつけ上昇し、すれすれで回避する。はずだった。

「・・・!?」

一瞬、『炎々舞踏会(ボレロ)』の炎が消えた。
それにより、タイミングが一瞬遅れ、回避が不可能になる。
ここにきて、拒絶反応・・・!!

「善吉・・・!まだかよ・・・!」

千年杉の右腕が、僕を捕らえ「『庭弄りの守護神(ガーデニングガーディアアン)』!!!」
・・・え?

モーターの回る音を更に上回る轟音が耳元で五月蠅く響き渡り、巨大な右腕が切り落とされた。

「大丈夫?礼君」
「・・・うわあ、すご・・・」

市販されているチェーンソーの二倍以上を上回るほどの大きさを持つチェーンソーを持つ人吉先生の姿があった。
・・・おかしいね。見た目は小学生なのになんであんな巨大なものを持てるんだろうか?

そんなくだらないことを考えていると、千年杉が消滅した。
これは、善吉君が江迎ちゃんの心を開いたという合図だ。
やっと・・・終わったか。

「江迎ちゃんのところに行きましょう、礼君」
「・・・ええ」

なかなか立ち上がれない。身体を上手く操れない。
生きているうちでこんな体験が出来るなんて僕は贅沢者だと思うね、
いや皮肉を言っているわけじゃあないんだ。単純な感想だよ。

「・・・さて、本命のお二方は・・・っと」
「あそこね」

善吉君が両手を腐敗させながらも江迎ちゃんの手を掴んでいる。
そして、江迎ちゃんは涙をひとつ、ふたつとこぼし始めた。

「・・・死んじゃうの。私が触ると、可愛いわんちゃん撫でても
可愛いねこちゃんを抱いても、みんな腐って死んじゃうの・・・。
私も、死んだ方がいいのかなあ・・・？」
「いいわけねえだろ」
「れ、礼さん・・・」
「お前はあの時猫を撫でたじゃないか。その時、幸せだったんだろ
う？幸せすぎて涙を流すほど嬉しかったんだろう？なら、死んでは
いけない」
「でも・・・あの時はあなたが・・・」
「安心しな。強弱（ハイロウ）だけじゃなくて入切（オンオフ）も出来るようにしてやるぜ」
「・・・そっか」
「江迎ちゃん、君みたいな子を幸せにするために、私は心療外科医
をやっていたんだから」
「そして、お前みたいな奴を幸せにするために俺達は生徒会をやっ
ているんだ。悩みごとがあるなら目安箱に投書しろ！二十四時間三
百六十五日！『俺達』は誰からの相談でも受けつける！！」

「・・・！！」

格好良いね善吉君。

ほら、江迎ちゃんも言うことがあるだろう？催促するわけじゃあないが、ここで言ったらスッキリするよ？

「ありがとう善吉君・・・ありがとう、瞳先生・・・ありがとう、礼さん・・・私・・・」

江迎ちゃんが言おうとする直前、目の前を何かが通り過ぎた。

「（ドスッ！！）！！」

「（ドスドスッ！！）ガッ！！」

通り過ぎたものから放たれた『螺子』は、江迎ちゃんと善吉君に突き刺さった。

「球磨川ちゃん！？いきなり何を・・・！！」

「『・・・』『善吉君の両手の腐敗』『と』『怒江ちゃんの過負荷（ラフラフレシア）をなかったことにしました』」

・・・褄ちゃん、その嫉妬は見苦しいだけだよ。勝利への執念ならまだ許せるけど、その嫉妬は駄目だ。

残念だね。そこまで君は落ちてはいないと信じていた・・・？いや、考えて動いていたというに・・・。

これで、僕の評価が下がったから、君は夢の中でもっと酷い目に遭うだろう。比喩表現でもない、本当の意味で悪夢になりそうだね。

「『怒江ちゃんはもう普通の女の子です』『どうか一組あたりで引き取ってあげてください』」

「・・・・・どういうつもり？あなた、引き分け狙いじゃなかったの？」

「『・・・いやですねえ人吉先生』『人を助ける理由なんて』『「気に入らないから」で十分でしょう』『過負荷（マイナス）を過負荷（マイナス）でなくすなんてこんな簡単な事だって』『僕は善吉君に教えてあげたかっただけですよ』」

「あらら。何かと思えば負け惜しみ？なんだかなー！球磨川ちゃんからそーゆー台詞は聞きたくなかったなー！」

僕もだよ、禊ちゃん。

君は幾ら弱くても、幾ら負け犬でも、負け惜しみは言わないと思っていたよ。

評価ダウンだ。君はもう僕の中では真ん中あたりに属することになってしまった。

「何これ・・・！？鍵穴が無い・・・！？」

「・・・」

「『はい』『鍵の反則負けになるそうなので』『鍵穴の方をなかったことにしました』『もちろん僕の手錠からも既に鍵穴はなくしております』『ですから、時間内に爆弾を止める方法はもうありません！』」

残念だね、禊ちゃん。

「『これでこの会計戦！引き分け以外の決着はなくなりました！』『あ、それでは皆様ご唱和ください――――――――――』」

君は、何のために僕という存在がこの場所にいるのか理解していないようだ。
タイマーが残り一秒。十分だ。

「『Ｉｔ’ｓ』『Ａｌｌ　ｆｉｃｔｉｏｎ！！』」

「阿呆」

携帯端末を、善吉に向けデータを送った。

「『・・・・え？』」
「爆発は無しだ」
「『れ、礼君・・・？』『どうして・・・・？』」
「残念だが球磨川、お前は俺という存在の意味を忘れてしまったよ

うだな」
「『あ・・・！！』」
「そう、生徒会補佐権限により爆弾爆発の時間を『延長』した」
これにより、五分間の延長となる。会計戦は続行だ。
「『れ、礼君・・・！！』『礼君！！！』」
「・・・ああ、後は任せたよ、『礼君』」
「『何を言って・・・！？』」
「きゃ！！な・・・何・・・！？」
二人から悲鳴と驚愕の声が漏れる。
それもそのはずだ。礼君の身体から黒い、どす黒い色のオーラが噴出す。
予定より本当に早かったね。まさか二週間が半分に収まるとは思ってもいなかったよ。
礼君、君との夢の一時は終わりだ。これからは、現実で会おうじゃないか。
・・・ああ、ちくしょう。でも、君とはずっと離れたくなかったよ。

第五十五箱　会計戦『肆』（後書き）

次回、礼復活。しかし・・・？

感想等お待ちしております。

第五十六箱　会計戦『終了』

・・・・戻ってきたな。

「一週間ぶりの身体っていうのも珍しいな」
《そうだね。まあ私はあまり使ってないけど》
「だよなぁ引きこもり。さってと、現在状況も理解できていないし、誰かわかりやすく説明してくれると嬉しいんだが、無理か」
《ずっと寝てたからね～。しかも過負荷全開中（ロストワールド）。なじみが拒絶されていなくなっちゃったよ》
「マジでか。それはまた・・・助かった？」
《聞かれたら説教くらうからフラグ立てるのはやめてね？》

柔軟代わりに背伸びをする。
いやあ、木漏れ日が気持ちいいな～～～！
そういえば、さっき二人ほど驚きの声をを出していたような？

「どうした球磨川。そんな驚いて」
「『れ、礼君・・・？』『え・・・？』『「零華」ちゃん・・・？』」
「・・・君・・・本当に礼君・・・？」

何が言いたいんだこの二人は。
あれか？なじみが変わっていたときの性格とだいぶ異なっているから驚いてるのか？
それとも、零とシンクロしているから俺と零が重なって見えるとか？

「ううむ、しかしどう証明したら俺だってわかるのだろうか・・・？」

あれか？髪を切ればいいか？それとも・・・

「・・・礼」

「あ、兄貴」

後ろから歩いてくる音がしたので振り返ると、兄貴がいた。

「戻ったか」

「（な、なんで知っているんだ！？）な、何のことだ？」

「・・・なるほど、隠すことか。後で話す」

なじみ、兄貴に知られてるってどういうことだよ・・・。

まあ、アイツならやりそうだが。

「『君』『本当に礼君？』」

「あ？どうした球磨川。そんな睨むなよ」

「『・・・』『そうか』『理解したよ』『「孤苦零帖（ロストワールド）」をついに使う気になったんだね』『完全な状態で』」

「まあそんなところだ」

「『・・・もしかして』『異常性（アブノーマル）もわかったとか？』」

「ま、そこらは会長戦で」

さて、ポケットに入っているなかなか『センスのいい』携帯端末のディスプレイを見る。

残り時間・・・は二分ちょっとか。会計戦は時間制限だったんだな。

二分ちょっとか。十分だな。この状況を全て台無しにすることぐらい造作もなさそうだ。

「やっと過負荷（マイナス）を気兼ねなく使えるようになったし、やるか！」

「させると思うか？」

兄貴が立ち塞がる。

ああ、『下手横好（トレーサー）』か。まぁ俺には関係ないんだけど。

「ま、今はそれよりも・・・」

善吉と球磨川についている腕輪を見る。この模様・・・、確か・・・

『いばら姫（スリーピングビューティー）』！？どうしてこんなものが・・・！！

早く取り外して、ここから離れないと・・・。

「礼君！時間がもう！」

「アイさー。施錠部分をなくして・・・」

ん？施錠部分が無い。

どういうことだ・・・？

「鍵は、もう意味が無いの・・・。球磨川ちゃんが鍵を『なかったこと』にしてしまって」

指で腕輪の『くぼみ』をなぞる。

その部分の金属を無かったことにして、善吉の腕から外す。

「え・・・？今何を・・・」

「よし・・・。球磨川！お前のも！」

「『い、嫌だね！』『僕は死んでも甦るし』『それに、彼女に聞きたいことが山ほどあるんだ！』」

「駄目だ。お前を死なせるわけにはいかない」

タイムリミットまで残り一分。

早くしなければ・・・。

「『む、無駄だよ！』『これは礼君の頼みでも僕は断るからね！』」

「球磨川・・・」

「『ち、近づかないで！』『今の、今の礼君は礼君なんかじゃない！』『病院で』『僕にあの言葉を言ってくれた、僕を惚れさせた君じゃない！！』」

「球磨川！」

残り、二十秒。

「時間がねえ・・・！球磨川！！」

手段は選べない。選んでいる暇なんて無い。

これが前に鬼瀬の言っていた危険な手錠、『いばら姫（スリーピングビューティー）』なら、球磨川を殺してしまう。そんなことはさせない。

球磨川の元に走る。形振りかまっていられない。

球磨川を死なせるものか・・・！

「『こ、来ないでよ・・・！』『れいくん・・・！』」

「大丈夫だ！お前は殺させない！！」

「『いや・・・』『いや・・・！』」

左腕を掴む。だが、抵抗していて上手く外せない。

残り・・・十秒・・・！！

「・・・い・・・さん」

背後から声が聞こえ、誰かが球磨川の腕輪を奪った。

「『え・・・？』」
「球磨川！下がれ！！」

さっき奪ったのは・・・？

「れいさん・・・あなたも・・・逃げて・・・！」
「怒江！？」

俺の持っていた腕輪も怒江に奪われていた。
畜生！もう残り時間が！！
そして、俺の考えも虚しく爆弾は爆発した。

時限爆弾内蔵式ブレスレット『いばら姫（スリーピングビューティー）』の火薬の量は少なく、手榴弾などと同じく爆風ではなく飛び散る破片により対象の殺傷を試むものだ。

つまり、破片が飛び散らせさえしなければ威力はたかが知れている、ということでもある。
そうたとえば、爆発の直前にブレスレットを全身で包み込むようにすれば・・・。

「・・・・・・ぁ」

「『きゃ、あああああああああああああああああ！！！！』『怒江ちゃん！？』『な、なんで・・・！！』『一体・・・！！』」

俺の背後にいる球磨川の見る先、そこには爆発により腹が爆発で焦げ、出血をし、天を仰ぐようにして倒れている怒江の姿があった。

「・・・信じられないことが起こったのよ。特に球磨川ちゃん。君みたいな子には特に信じられないことがね」

怒江は腕輪を地面と自分の身体でサンドイッチにするように抱き込み、爆発して吹き飛ぶ破片を皆へと逃がさなかった。

つまり、ここにいる全員を身を挺して守った。

「・・・『荒廃した腐花（ラフラフレシア）』は私が昔から付き合ってきた過負荷（マイナス）です。嬉しい時も悲しい時もずっと一緒だった授かり物・・・。球磨川さんでもなかったことにはできません・・・」

「『・・・・・！！』」

「しゃべっちゃ駄目よ江迎ちゃん・・・、いや、しゃべり続けて！意識をしっかり持つのよ！！」

人吉先生が怒江の手当てを始める。応急手当だが、人吉先生なら一命を取り留めるぐらいは出来るはずだ。

「怒江」

「れいさん・・・。私、頑張りましたよ。人吉くんに言われた通り、私の過負荷（マイナス）は・・・、こんな風にも使えますし、こんな風にも生きられるんだ・・・。球磨川さんに、人吉くん、それに、れいさんも・・・助けることが出来たんだ・・・」

「ああ、頑張ったな」

「はい・・・。私、誰かの役に立ってもいいんだあ・・・」
「『・・・・』『おかしなこと・・・言わないでよ・・・・』『怒江ちゃんは、僕の邪魔をしただけじゃないか・・・!』『大体!』『僕は死んでも、死んでも生き返るんだ!』『僕を』『僕なんかを助けなかったら・・・怒江ちゃんの傷はそこまで酷くならなかったんだよ!!』」
「・・・・球磨川さんだって、言ってたじゃないですか。週刊少年ジャンプを読んでるんじゃあるまいし、どうせ死んでも生き返るとか、命はそんな風に考えられませんよ・・・」
「『・・・・!!』」
「いままでありがとうございました・・・。どういう意図があったとしても、あなたが私に優しくしてきてくれたことは忘れません・・・!これからの私は生きることと生かすことに腐心します」
「『むかえ・・・ちゃん・・・!』」

球磨川から、異常なほどの汗が落ちる。
それはまるで今まで見てきたものが壊れていくかのような、球磨川の心を表すように。

「『・・・人吉先生、どいてください』『怒江ちゃんのそのダメージを』『僕が無かったことにしますから』」
「・・・お断りさせてください、球磨川さん。このダメージは私の誇りです。なかったことにしないでください」
「『違う・・・!』『それはただの怪我だ』『ただの火傷と裂傷だ』『そして君の言うことはただの奇麗ごとだ』」
「・・・いいじゃねえか奇麗ごと。それともお前は汚い方が好みかよ」

善吉の意識が戻ったのか、起き上がり球磨川に言う。

「『！！』『善吉・・・くん・・・』」
「ちがうよな？俺の知るお前は誰よりも、めだかちゃんよりも綺麗好きな潔癖症だよ」
・・・ああ、体力というか何もかもがねえな俺。過負荷（マイナス）取ってきただけでこれだ。立っているだけで精一杯とか泣けてくる。
「礼さん、本当に、ありがとうございます。前も、『今も』」
「・・・これからもだろうが」
「・・・そうですね。夏休み、遊べなくなってごめんなさい・・・」
「阿呆。それよりも治すことに専念しな。それが終ったら行くぞ」
「・・・はい！」

《・・・本会計戦は、規定（タイムアップ）により引き分けとします！！》

マイクにより植物園全体に響き渡る長者原先輩の判定が決した声が聞こえてきた。
ま、怒江の決死の覚悟もあったしいいんじゃない？それで。
ここまできて勝利にはこだわらねえよ。

「・・・礼さん」

怒江が保健委員会の人たちに担架に乗せられている。
ってか、何時来たの保健委員。

「ん？どうした？」
「・・・どうして、私と仲良くしてくださったんですか・・・？」
「お前、やっぱり阿呆」

「ええっ!?」
「友達だからに決まってるだろ?」
「・・・そっか、私の欲しいものはもう手に入ってたのかあ・・・。あなたと出会った日から、ずっと・・・」
「・・・気づくの遅いぜ、怒江」
「ふふっ・・・ごめんなさい」
「礼、いいか?」
「黒神!?お前何時来て・・・!!」
「まあそんなことよりも、貴様が江迎同級生だな?」

黒神が江迎の手を握る。
しっかりと、そして、親友の手を掴むように優しく。

「・・・ふむ、どうやら球磨川の『大嘘憑き(オールフィクション)』の効果が無かったわけではないらしいな。強弱(ハイロウ)どころか入切(オンオフ)も出来るようになったみたいではないか」
「・・・黒神・・・さん」
「こうやって話すのは初めてだな。しかし私は既に貴様のことを十年来の友人のように感じるぞ。退院したらすぐ生徒会室を訪ねてくれ」

・・・は?唐突過ぎて話がつかめんぞ黒神。

「私は在学中に箱庭学園一面に花を咲かせるのが夢なのだ。万難を排して協力して欲しい。私たちには貴様の力が必要だ」
「・・・どうかな?私の怪我が治ってるころあなたが生徒会長をやってるとは限らないわよ?」
「限る。貴様の勇気は私の歩む道に希望をくれた。貴様のような生徒がいるなら、貴様のような生徒がいるから、生徒会長は辞められん」

どんな理由だ。

「・・・・」

「そうだぜ江迎。それに考えてみればお前の『荒廃した腐花（ラフラフレシア）』って植物を操る以外にも使い道はいっぱいあるだろ？なあ礼」

善吉登場。

まあ、善吉の言うことには一理あるな。

「ああ、腐敗のバリエーションで言えば・・・発酵だな？」

「そうそう！だとすれば江迎って味噌とか作るのすっげー得意そうじゃね？なんなら俺はお前の作る味噌汁、毎日飲みたいぐらいだね！」

「「！！」」

俺と怒江が驚愕する。

こいつ、あっさり怒江を『俺の嫁』宣言しやがった！！

「・・・あっはっはっは！それはいいな善吉！是非とも毎朝作ってもらえ！幸せな家庭を築くが良い！！」

「？いやわかったけど・・・家庭？どういうことだよ礼？わかるか？」

「・・・この朴念仁」

「ええ！？なんでお前怒ってるんだ！？」

「れれれれれれれ礼さん！！どうしよう私！！」

「ええい、落ち着かんかお前ら！！とりあえず善吉！お前は怒江と幸せな家庭を築け！！」

「え、えええええ！？どうしてそうなるんだよ！」

「あっはっはっはっはっは！！！」

・・・こんな感じで会計戦は幕を閉じた。
ほんともー、善吉は恋を知らなくていけない。

「・・・ま、二人ともいい縁で結ばれている」
「何か言ったか？礼？」
「なんでもねえよ、黒神」
「そうか？」
「ああ」

さて、俺の異常（アブノーマル）が働きすぎている気がするが・・・気のせいだよな？

第五十七箱　なじみとデート。「君を好きになったわけ」（前書き）

主人公の能力説明を少し足しました。

第五十七箱　なじみとデート。「君を好きになったわけ」

会計戦の翌日、俺はいつものところに陣取っていた。

「・・・屋上ってサイコー！！！」

風が、風が気持ちいいぜこんちくしょーーーーーー！！

「久しぶりの身体で浴びる風の気持ちよさは絶大だな！テンションあがるわー！！」

はっはっはっ！風がこんなにも気持ちいいと思うのは久しぶりだ。

「怒江の容態はいい方向に向かっているし、夏休みに退院は難しいが大丈夫だろう。さて、寝るとするか」

なじみがいないというのは変な感じだが、ゆっくり出来るという意味では感謝かも知れんな。

さて、おやすみ・・・・。

意識を、闇の中へとおとす。

その感覚が久しぶりで、何か懐かしくて、ゆっくりと、ゆっくりとその感覚を楽しむように沈んでいく。

アイツがいない。それだけの話なのになぜか寝ている間の身体が涼しく感じた。

夢、夢が見える。いつもの教室ではなく、懐かしい思い出。
中学時代の、懐かしい一ページ。
また夢で見れたらと、そんな淡い思い出の夢。

「・・・ここは」
「やあ、久しぶりだね」

校門の前で、立っている俺に声をかけるいつもの声。

「・・・なじみ？」
「どうしたんだい？不思議そうな顔をして。僕と出会えたことはそんなに不思議かな？」
「いや、そうじゃない」
「じゃあどうしたんだい？」
「いや、お前生徒会なのにこの時間に終っているのは珍しくてな」
「ふふっ、それは僕のような人外だからだよ」
「それ好きだねえ・・・。なんていったっけ？」
「『悪平等（ノットイコール）』だ。覚えておくといい」
「そこはイコールじゃねえの？」
「違うよ。少なくとも、僕は同じじゃない」
「見た目は同じの癖にな。なるほど、性格、か」
「・・・どういう意味でそれを言ったのかは聞かないでおこう」

風が『二人しかいない』校門を吹き抜けてゆく。

「さて、今日はどうする？暇なら少し遊ぼうじゃないか」

「ゲーセンでも寄って、腹ごなしでもするか」
「いいね。僕はパフェを希望しよう」
「仰せのままに」

なじみが俺の隣に並び、歩みを進める。
夕日を背に受けながら、俺となじみはゆっくりと時間を過ごしていく。

まずはゲームセンター。学校では見かけなかった学生がここには沢山存在している。
・・・学校から帰るときは寄り道しないと教わらなかったのかこいつら。まあ俺もその教わらなかった人間の一人だが。

「・・・まずはこれかな？」
「ほう、いきなりプリクラとは」
「やったことがないんだ。写真に写ると魂を抜かれるのが嫌だからね」
「いや、それ凄く大昔の話だよな？それにお前、その話の真実知ってるだろう？」
「ふふ、ジョークだよジョーク。さて、入ろう」
「おう」

プリクラの中に入る。真っ白な空間に、モニターが一つあるシンプルな奴だった。

「・・・意外と狭いね」
「そうか？二人だと狭い気もするが広い方だぞ？」
「それで、どうやるんだい？」
「えっと・・・確か金を入れて・・・っと」

『いらっしゃいませ！サイズとフレームを決めてね？』
「サイズは・・・これで。フレーム・・・？おお、これか」
「どれがいいんだ？」
「ふむ・・・じゃあシンプルにこの星にしよう」
「よし。ぽちっと・・・」
『それじゃ、撮影を始めるよー！画面で位置を確認してねー』
「・・・ここら辺かな？」
「おう、ここだな」

画面で確認して、位置を調節する。なじみとくっつく位置に調節・・・。こうしないとカメラに入らない。

『それじゃあ、いくよー！5、4・・・』
「・・・カウント、長いね」
「我慢しとけ。そら、いくぞ」
『1・・・はい、チーズ！』

ガイドの声と共にシャッターの切られる音がする。

「・・・これでいいのかい？」
「ああ。もう一回撮るみたいだし少し待っとけ」
『それじゃあ、次は二人で好きなポーズをとってね！』
「・・・好きなポーズか」

なじみが考える。そうだなぁ、好きなポーズといわれてもなかなか思いつかないしなぁ。

「何がいい？」
「ふむ・・・お姫様だっこ・・・とか？」
「え、お前それがいいのか？」

「意外？」
「まあ。いつもなら『そうだねえ・・・君が椅子になって僕が乗る』とか」
「それは君の願望ならやってもいいが？」
「遠慮します。んじゃ、やるか。時間も無いし」
「え、ちょ！？」
「ほれ、カメラ向け」
「（ま、いいか）」
『じゃあいくよー！5、4、3、2、1、はい、チーズ！』
「「（にこっ）」」

写真が撮られる。カメラのシャッター音が鳴り響きこのポーズが記録として収められた。

『それじゃあ、印刷するから外で待っててねー』
「・・・落書き機能が無いとは、珍しいな」
「落書きなんて出来るのかい？まあ、そのままの二人というのもいいじゃないか」
「ま、お前がいいならいいさ」

同じクラスの女子が言うには『落書きって可愛いよね！』『そうそう！あれないとだめだよね！』と言うのを聞いたのだが、まあなじみにこの話をしても興味は持たないだろう。

「お、綺麗に撮れているじゃないか」
「そうだな。じゃ、これを半分にして・・・ほれ」
「ありがとう。それにしてもいい仕事だね」
「そりゃあできなかったら流行らないだろう」
「昔なんて一枚の写真を撮るのにどれだけ苦労したか」
「しみじみと語るな。で？次は何をする？」

「いや、目的は達した。パフェを食べに行こう」
「オーライ」
俺となじみは写真を鞄にしまい、甘いものを求めて歩き始めた。

「ま、そんな描写をしてても喫茶店はゲームセンターの向かいなんだけどね」
「言うな。作者の苦労がなくなるだろう」
「それにしても、今日は人が少ないね」
「そうだな。まあ、ゲームに熱中してるんだろう」
「そうだね。ラッキーだったと言うべきかな？」
「そう考えとけ」
「お待たせしました！イチゴパフェとチョコサンデーでございます！」
俺の目の前にはチョコ、なじみの目の前にはイチゴパフェが置かれる。
・・・思っていた以上にでかいのが来たな。
「・・・意外に大きいね」
「俺もそう思った。とりあえず食べよう。アイスが溶けたら大変なことになる」
「そうだね」
スプーンをとり、目の前のチョコの山を崩しにかかる。
「・・・（パクパクパク）」
「・・・（パクパクパク）」

お互い無言で、一心不乱にパフェを食べる。

「・・・（パクパクパク）」

「・・・！（キーン！）」

「・・・なじみ？」

「・・・な、なんでもないよ！」

「・・・お前、急いで食いす・・・！（キーン！）」

「君こそ、急いで食べすぎなんじゃない？」

「・・・そうかもしれん。とりあえず、少しペースを落とそう」

「そうだね・・・。そっちの方が賢明だ」

・・・なんで意地張って急いで食べてしまったのだろうか。こうなることは目に見えていたのに。

お互い溶けないように食べていたから無言だったし、なぜかコイツには負けられないという謎の意地の勝負があった気がする。

「くぅ・・・！頭にくる・・・」

「ま、これも冷たいものの醍醐味だな」

「そうだね・・・っ！また・・・！」

「治ったからって急ぎすぎだぞ。少し落ち着いてから食え」

「そ、そうするよ・・・」

なじみがスプーンを置く。なじみの様子から見て、あれは相当きてたな。

「・・・それにしても、こうして二人だけっていうのも稀だと思わない？」

「そうだな。いつもならお前に球磨川だものな」

「そうそう。彼女には絶対に『礼君探知機』が備わっているからね」

「・・・できれば外しておいてもらいたい機械だ」
「僕もそっちのほうが嬉しいよ。で、この『夢の世界』はどうかな？」
「なんだ、やっぱり『戻ってきた』のか」
「そりゃそうだよ。拒絶はほんの少しの間だ。戻ろうと思えば戻ってこれる」
「そういや、俺のどこが気に入ったんだ？お前は人を平等に見るのに」
「・・・そうだね」

なじみが考えるように手を組み、俺を覗き込んでくる。そして、感慨深く息を漏らし、言葉を発した。

「最初は、いつもと同じだった。そう、襖ちゃんとなんら変わらないただの人間。君の過負荷、それに異常をもらうつもりで近づいた。まあ、君はそういうのに勘が鋭いのか警戒していたからね。友情を芽生えさせてから奪うつもりだったんだ」
「あ、やっぱり？」
「うん。しかも君の能力はある意味貴重だ。『異常者（アブノーマル）は孤立する』『過負荷（マイナス）は嫌われる』といわれる中で、めだかちゃんのように友人を作れる。それ自体が異常（アブノーマル）なんだ。わかるかい？そして君は幼い頃にめだかちゃんに出会っている」

・・・そういうことね。
つまるところ、この物知りな博識チート女はこういいたいわけだ。

「黒神の人徳は、『俺の異常性を完成させたから』といいたいのか」
「そういうことさ。もう言わなくてもわかるだろう？『全てのモノと縁を結ぶ』。それが君の異常（アブノーマル）だ。そして過負荷（マイナス）はその逆。『全てのモノと縁を切る』。だからこその『孤苦零帖（ロストワールド）』。ふふ、君の過負（マイナス）

荷能力にぴったりの名だ」

皮肉にしか聞こえねえよ。いや、皮肉なんだろうけど。

「けどスイッチが無いから異常（アブノーマル）と過負荷（マイナス）で±0にしてスイッチを切った状態にしているとはたいしたものだ。それに、強弱もつけれるみたいだね」

「なんでわかったんだ？」

「江迎さんだよ。彼女は礼君に手を握られても惚れず、尊敬や親しみ、感謝の念でいっぱいだったのに善吉君だと惚れていたじゃないか。つまり君は縁の深さを『友情』あたりで止めているんだろう？」

「大正解」

恋人を作るのは、異常（アブノーマル）のおかげなんて虚しいじゃないか。

「それで、なんで俺の能力を奪おうとしたわけ？」

「簡単さ。それは僕に有害となる。それ以外に理由なんて無い。『縁を結ぶ』『縁があるもの全てを断ち切る』だなんて二つの能力、危ないじゃないか。その気になれば僕と僕の所持している能力全てとの縁を切ることだって可能なはずだ」

「ま、そうだな」

実際可能だ。俺が能力をフルで使用できる今、なじみの能力との縁を切るなんて造作も無い。もし、フルで使えなくてもなじみに害を与えず縁を切ることもできる。

「それに、君の異常（アブノーマル）は僕に影響し始めた。気づかぬうちにね。友人の域を超えないつもりがどんどん君との距離を縮めていった。気づいた時には遅かったよ。それに君の見る世界に心を惹かれてしまったらしい」

「・・・俺の見る世界、ねえ」
「そう、君の見る世界。ある意味僕と同じで、僕と対照的な世界」
・・・なじみは平等に人を見る。
まあ、俺もなじみから聞かされたときはびっくりしたさ。なにせ『人をそこら辺の消しゴムと同価値』って言ってたし。
で、俺は・・・まあ簡単に言えば『全てが美しい』ということだ。
虫も、人も、空も、太陽も、星も、全てが俺にとっては『美しいもの』なのだ。
それゆえに、俺は『全てが美しい』＝『同じ』みたいな価値観になっているらしい。
自分では意識していないがなじみが俺の視界で世界を見た時そういったのだから間違いはないのだと思う。

「あれを最初に見た時は驚いた。僕と似たような価値観を持っているのはいないと思っていたからね。いや、人外だからこそ、いないと思っていたかな」
「まあ、なんというか、気に入られた理由はわかったよ」
「そうかい？僕の気持ちが伝わったみたいで安心した。それと」
「ん？」
「この口調は君専用だから。他の人にはしないと思っておいてね」
「あ、ああ。よくわからんが了解」
「それじゃあ、そろそろ目を覚ます時間かな」
「ん？そうなのか」
「うん。あと、君の異常（アブノーマル）の名前を聞いておこう。何にしたんだい？」
「・・・ああ、『縁結びの神様に礼を』から文字って『縁結神礼（コンダクター）』だ。ぴったりだろう？」

もしも、この能力がなかったら。俺はあんな酷い思いもせずに済んだのかもしれない。

もしかすると、過負荷（マイナス）のせいで俺は親父達にあんなに嫌われた。無意識のうちに『両親との縁を切った』。だからこそ、虐待され、病院で何度も殺された。そんなもしもが頭に浮かぶ。

でも、球磨川に、黒神に、善吉に、理事長に、不知火に、なじみに、皆に出会った。この異常性（アブノーマル）のおかげで。

全く、これのどこに文句をつけるというのだろうか。感謝こそすれ、恨むことはない。

「・・・君らしいね。それじゃあ、また会おう」

「ああ」

いつもと同じように、俺を光が包み込む。

「・・・ん」

目を開ける。また俺を光が包み込んでいる。

・・・まあ実際のところ、太陽の光が俺の視界を埋め尽くしていただけなんだが。

「まぶしすぎるうっ！」

目が、目がああ！！

目覚めた瞬間に日の光が直撃って、うおおおお！！目から涙がぼろぼろ零れ落ちるう！！

「ってか夢では夕暮れで起きたら昼って、時間差凄いな」

うわー、日差しの強さが慣れねえ・・・。

「・・・ふあああ」

背伸びをしながら欠伸をし、携帯で時間を確認する。
そろそろ昼飯時か。夢の中でパフェ食っても現実では腹が膨らまないから悲しい。

「・・・昼飯、食べに行こう・・・」

なんか、懐かしい思い出を語るのにちょうどいい夢だったな・・・。
ま、いつかどこかで語るとしよう。戦挙後にでも語ってみるかな？
そうしよう。それがいい。

そんな思いを込めて、俺は炎天下の中フラフラと昼飯を求めて歩みを進め始めるのだった。

ｓｉｄｅ安心院なじみ

「・・・写真、ゲット」

現実に戻ってきたなじみは、夢の世界で撮影したプリクラ写真を手に持っていた。

「礼君の鞄にも入れたし、夏の思い出はこれでいいか」

満足そうに、その写真を見つめるなじみだった。

第五十七箱　なじみとデート。「君を好きになったわけ」（後書き）

えー、ロサです。
夏風邪で投稿するのが遅れました。ごめんなさい！
活動報告を読んでくださったらわかると思いますが、本当にＰＣを立ち上げる気力も無かったんです！！本当に申し訳ない！！それに夏休みの宿題がまだたまってること。ほとんど終っていないのです・・・！
現在、夏風邪は大分回復し、続きを書けるレベルまでもどりました。宿題の山は今回の話のパフェほど楽に崩せないのが僕の涙を誘いました。
それでは今度は僕にとって嬉しいお知らせをもう一つ。
ついにこの作品のＰＶが百万を越えました！！
やっほおおおおいい！！夏風邪なんてフットバース嬉しさ！
夏風邪の力がまた弱まった頃にＰＣを立ち上げ確認すると、百万を超えていたのです！
「・・・え、マジで？」
と寝ぼけているのかと目をこすり、もう一度しっかり０の数を数えるとしっかり百万ありました。嬉しいなあ♪
と、いうわけで。戦挙編が終り次第お礼の番外編を書こうと思います。

ネタは何がいいだろうか・・・。よければ、感想と共に書いて欲しいです。
誤字脱字、もっとこうしたら?という意見もお待ちしております。

第五十八箱　副会長戦『前』

「さて、今日も楽しく屋上だ」
『飽きてこないのかい？』

復活してきたなじみの声が俺の屋上満喫ライフを邪魔する。

「いいんだよ。風の気持ちよさ、日光の照り具合、この場所が一番いいんだ」
『時計塔があるじゃないか』
「あそこは高すぎ。昼頃は暑い」
「おや、鳴神くんじゃぁありませんか」

いつもの如く、背後から声をかけられる。
振り向くと、髪をオールバックにした執事の人がいた。

「まさか、蛾々丸先輩？」
「そのとおりですよ。いやあ、ここはいい場所ですね」

隣に並ぶ。そして、俺の見ているこの風景を楽しむように息を漏らす。

「礼君、率直に言いましょう。マイナス十三組に来ませんか？」
「どうしてまた」
「簡単ですよ。私はあなたほど友情が芽生えやすい人物を知らない。それに、病院での出会いはなかなか刺激的でした」
「覚えてましたか」
「はい。私から見てもあなたは負完全。そして、それゆえなのかあなたとは敵対したくない。こちら側に来ていただけるのが、とても

嬉しいのです」

蛾々丸先輩が嬉しそうに言う。今までの柔和な笑みではないが、その表情はとても嬉しそうだ。『言葉が弾む』という表現がぴったりだ。

「いえ、今は敵同士でしたね。これをいうのは失礼でした。こう言っておきましょう。『私たちが勝って、必ずあなたを手に入れる』と」

「そうですか。それは、球磨川が大喜びしそうな台詞だ」

「そうでしょう？なので、ここで宣戦布告しておきますよ」

そういって、蛾々丸先輩は屋上から姿を消した。

「・・・慕われてるなぁ、俺」

《いい傾向だね！》

「お、まさかヒッキーが出てくるとは思わなかった」

《失礼な》

『いやいや、失礼でもないでしょ』

《ムキイイイ！なじみまでそんなこと言う！》

「お前、今までの自分の行動省みろ」

《え？えっとー、テレビで礼の世界見て、寝てー》

「『駄目人間まっしぐら』」

《あと、縁魔帖（スコア）つけてた！》

「お、意外と」

『律儀だね』

縁魔帖（スコア）。それは俺の異常を具現化したものだと思ってくれればいい。その本には俺の縁が書かれている。友達の名前から、世界まで。そして、縁魔帖（スコア）に書かれている縁を消し去ってしまうのが俺と零華

の過負荷。『孤苦零帖（ロストワールド）』。

「ま、切っても繋ぎなおせるけどな」

『やはり欲しいね。君たちのスキル』

《私は同姓とのキスはＮＯ！拒否！》

「だとよ」

『変なところでしっかりしてるんだから』

《え、ちょ、まって！その堅く握られた拳に真っ赤な火を灯してどうして私のほうに歩いてくるのかな！？》

「こらこらこらなじみ。『炎々舞踏会（ボレロ）』はかわいそうだろう」

《さ、流石礼！助け舟とはありがた「やるなら『闇宙喪朔（ノクターン）』で真人間に」敵ばっかりか！孤軍奮闘なんてレベルじゃねえ！四面楚歌だ！》

『ふむ、確かに真人間にさせるのが一番辛そうだね。そうしよう』

《やめて！それが一番きついんだああ！！》

『闇宙喪朔（ノクターン）』の説明をしようか。簡単に言えば触れた相手を強制的に操る能力で、しかも相手にはその記憶がなく、『自分の意思でこうなった』と思わせるまあなんとも都合のいい能力。しかもこれ後遺症というものが無いからうつ病になった人やスランプになった人にはオススメ。自分には使用できないけどね？

『冗談だよ。前の仕返しさ』

《酷い！鬼！人でなし！》

『君も人外に近いだろう』

《この私とニートが人外だって？》

「言い切ったなコイツ」

『あるいみ羨ましくなる吹っ切れ方というか馬鹿というか』

《なにおう！》

「諦めて寝てろバカ」

《れ、礼まで!!酷い!!その身体女の子にして変なテンションで学校中を歩き回らせてやる!!》
「具体的過ぎて怖いわ!!」
『零華。その話のってもいいかな?』
「こいつ!裏切りやがった!!」
《いいよー!っていうか、仲間に入れる気満々だったし!》
『これは面白くなって来たよ。生徒会戦挙編が終了しだいすぐに実行しよう』
「ぬあああああ!」

畜生!仲間だと思っていたのに!急に背水の陣だと!?しかもこの二人のタッグは凶暴すぎる!!く、球磨川に知れたらもっと終る!!あいつは嬉々として女物の服を持ってくるだろう。髪も切っていないから『似合う!似合うよ!!』とでも言いそうだ。
・・・・・まあ、ここまで言っておいてなんだが、俺は断じてナルシストではない。アイツは俺がどんな格好をしても『似合う』と言うやつだからだ。
前にもあっただろう?『礼君がかっこかわいいから』という言葉が。まさにそれだ。

《ふふ、勇者に喧嘩を売った魔王が悪いのだよ!》
「その設定残ってたのね・・・」
『ま、僕も転校後の楽しみが出来たし、よかったよかった』
「よくねえよ!」

むう、こんな状況になったのは何故だ!
なんで俺が女装しなければならんのだ!全く、持つべきものは友達という言葉は少し訂正しなければならないのかもしれない。

「さて、と。零、縁魔帖(スコア)見せてくれ」

《ん？どったのいきなり》
「確認しておこうと思ってな」
《了解。んじゃ、いきなり出るからしっかりキャッチ》

目の前に一冊の本が現れる。
ハードカバーに近い本だ。表紙は白と黒で彩られている。

「さて、と」

本を開き、ページを捲る。
人名なら索引順に並んでいるからそれを使い、ある名前を探す。

「・・・・・やはり、無いか」

その名前は縁魔帖（スコア）に載っておらず、現在どうしているかを調べることが出来なかった。

《また見てるの？もういいじゃん》
「いや、一応確認だ。兄貴がいるってことは、もしかすると」
《うん、それはそうだけど・・・・・》
「ま、大丈夫だろう」

本を閉じて、それを俺の内側に還す。
手の上から徐々に透明になって行き、この世界から姿を消した。

「・・・・・さて、明日か」

副会長戦。だが、こちらは出場できる人間が黒神しかいない状況。
善吉、名瀬先輩、人吉先生は出場し、古賀先輩は故障中、真黒さんは戦力にならない（自己主張）。

この状況を打開できるのはある人のみしかいない。

「うーん・・・・・。大丈夫、なのかな・・・・・・」

「何がだ?鳴神」

声をまた背後からかけられる。

その声は俺の予想していた人物だが、おかしいと感じた。

それは存在感。圧倒的過ぎる存在感が、俺の背後から放たれている。

「お久しぶりです。日之影先輩」

「よお、二週間ぶりか?」

そこには、元の髪の色から黒色に変わり、物静かだが存在感を振りまく前生徒会長がいた。

「どうしたんですか?それ」

「ああ、ちょっとな」

もったいぶるように言う。

副会長戦までは秘密にしておきたいのだろうか?

「皆をびっくりさせようと思ってな。悪いが今日のことは秘密な」

「ええ。いいですよ。それにしても、存在感が出ましたね」

「おおよ!ま、お前には存在感も関係ないだろうがな」

大当たり。さすがというしかないな。

「俺を誰よりも、黒神よりも早く見つけ出したお前だからな」

「入学式の日にあれだけ語っていたのは誰ですか?」

「違いない。それでも、お前以外は全員忘れていたんだぜ?やっぱ

りお前は異常だったんだよ。俺の目に狂いは無かった。思い出すぜ、あの日のことを」

日之影先輩が空を見上げ、記憶をよみがえらせていた。
仕方ない、俺も思い出すとしよう。

それは、箱庭学園入学式終了後の話。

俺はぼんやりとクラスに戻ろうとしていた。

「おい、お前」
「ん？どちら様？」
「いや、お前の知り合いじゃねえよ。生徒会に恨みがあるから、ちょっと入院するだけの傷を負ってくれや！！！」

懐から取り出した警棒で頭部を殴ろうと振りかぶっていた。
俺はというと、まあ慣れていたのでそのまま無抵抗で殴られることを待っていた。

「よお、大丈夫か？」

乱入者があらわれ、それを防ぐまでは。

「て、てめえ！日之影空洞！！」
「入学したての生徒に手ぇ出すんじゃねえよ！！！」

警棒を受け止めた右腕を振り、腹に隙を作る。

そこに、巨大な拳を二発打ち込んだ。

「ぐほっっ！！！！」

「これで終わり「ストップです」！？」

もう一度殴ろうと振りかざした片腕を掴み、止める。

「ぐ・・・あ・・・」

「お、おい！どうして庇う？こいつはお前を」

「助けていただいたことは感謝します。日之影空洞生徒会長」

「お、おう・・・・・って？」

「ちょっとすみません。先にあちらの方をどうにかしますので」

吹き飛ばされ、凹んだコンクリートの校舎にもたれかかり座るさっきの人に近づく。

「て、めえ・・・なんで・・・」

「別に。それより、貴方はどうしてこんなことを？」

「・・・・・・アイツに、日之影空洞に俺の仲間だった奴がこの学校から追い出された。それだけだ」

「ふうん。それは、君の仲間が誰かを傷つけたからじゃないのか？」

「・・・・・・ああ。そうだよ」

「憐れだな」

「何だと・・・・！！」

「そこまで仲間を思えていながら、なぜ止められなかった。その優しさを、どうして殴られた側にも回してやらない」

「！」

「悪いことまで一緒にやるのは、友達かもしれない。だがな、止める人間もまた友達だ」

「・・・・・・ああ、そうだったな」

言葉遊びをしたつもりはない。
だが、たかだか会話を交えただけで、人はわかりあうことも、改心することも、堕落することも出来る。
言葉とは偉大だ。

「・・・・・悪かったな。お前に、もっと早く逢っていればよかった」
「別に、出て行く必要は無いだろ。貴方がもし、この学校生活の中でしてはいけないことをしても、ちゃんと謝ればいい。不器用に、けれど、ちゃんと言の葉に心を乗せて」
「ああ」

こうして、入学したての俺はいきなり一人の人間を改心させたのだった。

「・・・・・日之影、悪かったな。これから、謝りに行ってくる」
「あ、ああ。頑張れよ」

あまりの豹変っぷりに生徒会長ついていけず。
ただ呆然と眺めるだけだった。

「・・・・・まさか、そんな方法があるなんてな。いや、それよりもだ。どうしてお前は俺を覚えている?」
「いや、あんなでかくて存在感のありすぎる人物を忘れるのは無理っすよ」

講堂に現れたときはびっくりした。あんな巨大な人間がいるとは思っていなかったからな。

「・・・・・なあ、お前。どうして殴られかけていたのに止めたんだ？」
「無意味な戦闘は避けるべきだと思いまして。それに」
「それに？」
「貴方の人を殴るときの表情は、まるで痛みを堪えるかのようだった」
「！？」
「人を、人として見ていない。そして、それだけではない何かによって、貴方は心に傷がある」
「・・・・・ああ。その通りだ。しっかしすげえな。俺とお前は初対面の癖に、そこまで人を見るなんて」
感心したように顎に手を当て上から覗き込む。
「ま、地味な人間はまず人の観察を第一にするものなんですよ」
平穏に、目立たなく過ごしてきた俺の自慢の特技の一つだ。
「俺もジーミーだがそこまで深くはねえぞ？」
「せ、先輩が地味！？どれだけでかい人間がそろってるんですか！？」
この巨体の人が地味だと！？どれだけでかい人物がそろっているんだ先輩のクラスは！？そしてあの爺さんはどうしてそんなクラスを編成したんだ！？この学校の最上級生はどうなっているんだ！？
「あ、明後日の方向に勘違いしすぎだ！」
あせったように先輩が言う。
ん？違うのか・・・・・。じゃあ残るは。

「もしかして異常とか？」
「なんだ、お前もこちら側なのか」
「いや、知り合いにそういう奴がいまして・・・・・・。そのとき、聞いたんですよ」
「へえ。ま、お前とはうまくやっていけそうだ。なかなか見所がある。生徒会長になるのを頼みたいところだが、入学初日でそれは駄目だな」
「ん？生徒会長の後任をお探しで？」
「ああ。なかなかいなくてな」
「今年の入試一位はどうでしょう？」

俺は講堂で皆の前に堂々と立った美人さんを推薦してみる。

「ああ、あれか。ま、考えておくよ。それじゃあな。俺はこれでも生徒会長だからな。仕事が溜まってるんだ」
「がんばってくださいねー」

これが、出会い。そして、今の今まで俺は日之影先輩を見かけるたび、話しかけ、かけられていた気がする。

「今に思うと、不思議すぎる出会いだったな」
「ですねえ・・・・」
「分かり合う、か。俺も、出来るだろうか・・・・・？」
「出来ますよ。人は向き合った瞬間に、分かり合おうとするものですから」
「お前が言うと説得力があるな」
「そうでしょうか？」

自分ではもう無意識のようなものだ。たとえ過負荷でも、向き合うのを嫌がることさえしなければ、それは一瞬で向き合うことのできる。
向き合わなくなったからこそ、過負荷は落ち続ける。それが過負荷の特徴であり、弱点。
どんな人間であろうと向き合うと決めた。中学時代に、あいつ等とであって、俺はそう誓った。
だからこそ、「俺」は「俺」なんだ。

「いっけねえ。先輩なのに後輩に相談しちまった」
「いいんですよ。別に気にしなくったって」
「そうか？」
「ええ。ジーミー同士、語りましょうよ」
「くっ、あっはっはっはっは！！」

日之影先輩が嬉しそうに天を仰ぎながら笑う。

「おう、やる気出た。明日、俺も向き合うことにするよ」
「頑張りましょう」
「おう。じゃ、俺は修行してくるぜ。付け焼刃だがな」
「はい」

日之影先輩が立ち去った。
・・・・・最近懐かしいことばかり思い出すなぁ・・・・。

『興味深いね』
「そうか？」
《うんうん。あの人、確実に学園最強だよ》
「ああ、そりゃそうだろう」
『僕の封印が少し弱まってきているけど、やはり戦挙が終らないと

転校は駄目のようだ』
「そうか。ま、ゆっくりな」
『そうだね。こればっかりは、めだかちゃんに頼むしかないんだ』
《ふふ、今のなじみは形無しね！》
『調子に乗るなよ？』
《や！迫ってくるなあああ！！》

・・・今日も平和だ。

《締めるなあ！！！》

心に、少女の叫ぶ声が木霊する以外は、とても平和だ。

第五十八箱　副会長戦『前』（後書き）

お久しぶりです。ロサです。
いやあ、夏休みも終わり、学校が始まりました。
宿題も期日までには終りましたので、万々歳です。
夏風邪さえ、引いていなければ・・・！もっと早く、続きがかけたのに！！

今回の話では、簡単な日之影空洞邂逅編を載せました。
そして、この戦挙編が終ると、委員会邂逅をしていきたいと思います。
あ、風紀委員会長は除外です。理由は読み返してくれるとわかります。
それでは、次の副会長戦『壱』でお会いしましょう！

第五十九箱　副会長戦『開始』

「む、今日は早いのだな礼」

黒神たちが恒例の戦挙場所決めの部屋に扉を開けて入ってきた。

と、言うか失礼だな黒神。

「俺がずっと遅いと思ったら大間違いだぜ」

「いつもは私たちの入った後に来るからな」

「言われてもおかしくないんじゃねえか？礼」

この幼なじみーズは結構どストレートに言うのが心に突き刺さる。

「さて、皆様が来てくださいましたところで始めたいと思います。それでは新生徒会側のエントリーは蝶ヶ崎蛾々丸様でよろしいですか？」

「かまいません」

「それでは、現生徒会側のエントリーは？」

「私だ」

「ん？どうしてお前が出るの？」

「もう残っているのは私しかいない。私が出るほか無いだろう」

あ、なるほど。日之影先輩言ってなかったのね。

俺が出てもいいのだがねえ・・・・・・。

「鳴神様。補佐は補佐の役職にエントリーされてしまったら他の戦挙に代表として出馬できないのです」

「左様で」

と、見事なお返事を頂いたので言わない。
想像はついていたしなー。うん。

「本当にいいのかよ？会長戦はどうする気だ？」
「・・・・・ここで試合放棄してしまえばそれでこそ終わりだ。
その後のことは勝った後にでも考えて」
「おいおい、それじゃあ問題を後回しにするだけだぜ」
「！？」

黒神が声のするほうに驚愕の表情で振り向いた。
そして、黒神以外も驚く。

「だからここは引退したジジイに任せな。副会長戦は俺が戦ってやるよ」

昨日と変わらぬ、今までではありえない圧倒的な威圧感、存在感がこの部屋を支配する。
そしてそれに、誰も抗うことなく呑まれた。

「いよう久しぶり蝶ヶ埼くん。わかりあいに来たぜ」
「・・・・・誰？」
「ひ、日之影先輩・・・・・・？いや、でもなんか雰囲気違うくねーか？酷く静かで落ち着いているのにあの圧倒的存在感……」
「あれはめだかちゃんの『改神モード』の更に先と言うべきかな」

ああ、確かに。あの時はしんどくて考えていなかったけど確かにそれが適当だ。

『興味深いね確かに。どうやってあの状態になれたのか』

《あれは普通になったんじゃないね。何か面白いことでもしたのかな？》

本人のみぞ知るとしか言いようが無いな。しかし、本当に変わったよな。

「そういうわけで副会長戦は俺が出るぜ長者原君。先代の生徒会長には出場資格が無いなんてことはないはずだよな」

「はあ。まあ確かに問題はないと思いますが」

「おおっと！ちょお～～～～～～～～～っと待ってくださいよお選挙管理委員会『副』委員長の長者原君！万が一にも出場資格が無いなんてことになったら大事ですからねえ～～～。そういうことはちゃあああああああんと上のかたに確認した方がいいんじゃないですかあ？」

おお、性格激変してるな蛾々丸先輩。理性でも捨てたか？

「……そうですね。ではやはり確認を取りましょう。その間に蝶ヶ崎さまは選ぶカードを決めておいてください」

長者原先輩が携帯電話を取り出し電話を掛ける。

……意味が無いと思うのだが。

「……やはり繋がりませんか。仕方ありませんね」

長者原先輩、ご苦労様です。

電話が通じないので直接確認を取りに行った。

「鳴神。お前と一緒に戦うのは初めてじゃねえか？」

「そうですね。入学式は共闘ではありませんでしたし」

「れ、礼!?お前日之影先輩覚えていたのか!?」
「ああ。入学式からずっとな」

今思うと、親しくしてもらっていたな。てか仕事の手伝いもしてたし。

「今度は、俺がアイツらと向き合う番だ。お前みたいに言葉だけとはいかねえが、まあ俺は殴り合いでわかるほうがしっくりくるぜ」
「ふふっ」
「ん?どうした?」
「出会った頃の先輩に見せてあげたいな、って」
「だな。それもこれも、お前らのおかげだ。だから任せろ」

日之影先輩が右手を差し出した。俺は、何も言わずに、ただしっかりとその手を握り返す。

「大刀洗委員長に確認が取れました。日之影さまは問題なく戦挙に参加していただけます。それでは、向かいましょう」

長者原先輩が先導する後ろについていく。
黒神が隣に並び、耳元に話しかけてきた。

「礼、お前の方は疲れていないか?」
「大丈夫だ黒神。会長戦には胸を張って出場させてやるぜ。だから信じて待ってな」
「……ああ。わかったよ。私はお前と日之影前会長の活躍に、胸を躍らせて待っているさ」

黒神が微笑みながら俺を見る。
それを俺は、同じく微笑みながら返した。

「それでは、今回の会場はこちらでございます」

長者原先輩の指し示す方向を見えう。

それは前に学園長から聞いていた建設中の校舎が俺たちの視界を埋め尽くした。

「蝶ヶ崎様が選ばれた『戌』の試合形式、『狂犬落とし』でございます。ルールは単純明快。相手を地面に突き落としたほうの勝ちとなります。もちろん参加者の安全を第一に考えセーフティーネットを張っておりますが、そのセーフティーネットも地面の一部だとお考えください」

選挙管理委員会の人たちに連れられて鉄骨の上に立つ。

うわ、結構高いし不安定だな、これ。

「そして、補佐の方はプレイヤーが地面に落下しないように助けることが今回の役割でございます。もちろん、補佐の方も地面に落下した場合は失格となり、落下した後はこの試合に参加できませんのであしからず」

うわ、これって結構不利じゃね？

日之影先輩は身体が大きい上に体重も重い。そして何よりこの足場の悪さ。バランスが取りづらいはずだ。

そして何より、補佐の役割が日之影先輩に対して機能しづらい。

先も先述した通り、体重が思いということは支えたり、持ち上げるのにも時間がかかる上にその体重を持ち上げるだけの力が必要とされる。

結構なんて甘い考えなどではなく、どう考えてもこちらが圧倒的に不利だ。

「そうですよお鳴神くん！！私も書記戦のときの名瀬さんを見習って、予習してきたんですよおおおおおお！！！」

用意周到だな、蛾々丸先輩。確実に日之影先輩を封じるためのルールだよね、これ。

「悪く思わないでくださいねえ、日之影先輩！貧弱な私があなたに勝つにはこれしか方法が無いですからねえ！！」

「……蝶ヶ崎くん、鉄の塊である飛行機がどうして空を飛べるか知っているかい？」

「は？」

この質問に対し、俺も蛾々丸先輩と同じで日之影先輩の意図がつかめなかった。

この状況下でなんでそんなことを言うのだろうか？

そう考えていた矢先、日之影先輩が目の前から『姿を消した』。

「え？」

「！！！！！」

目の前から消えた瞬間、蛾々丸先輩の方からパン！という音が聞こえ、そちらを見ると日之影先輩が尻餅をついている蛾々丸先輩の背後に堂々と立っていた。

「がっ……はっ……！？」

「……矛盾するようなことを言うようだが、飛行機は飛んでいるから飛べるんだよ、蝶ヶ崎君」

「！？」

「大きさも重さも関係ない。高速で動く物体は、決して落下しない

んだ」

まさか、今の攻撃は蛾々丸先輩も気づいていなかった？
それを蛾々丸先輩の表情から悟る。あれは、どう見ても攻撃を無意識のうちに与えられた表情だ。

「ぐっ……」

見えなかった。気がついたら蛾々丸先輩が殴られていた。『知られざる英雄（ミスターアンノウン）』とは違う認識の出来ない異常性？いや、それでも明らかに次元を超えている。

「黒神、俺の戦いをよく見ておけ。会長戦でお前がお前らしく戦うための参考になるはずだぜ」

「……」

「くっ、まさに失笑ですね！よく見ておけも何も、結局あなたは見えないんじゃないですか！！」

「その通り。誰にも見えない日の光と化し、影も残さず静かに翔る。これが日之影空洞の新しい異常性（アブノーマル）、『光化静翔（テーマソング）』だ」

「……謳ってろ。それがあなたの鎮魂歌です」

副会長戦の火蓋が、誰もが想像しなかった、いや、できなかった速さで切られた。

第六十箱　副会長戦『弐』（前書き）

悪い点を指摘してくださったので少しだけ変更。ストーリーの流れは変えていないつもりです。

変更：一部善吉視点に変えました。

内容の変更。流れに問題はありません。

第六十箱　副会長戦『弐』

「『高速』ならぬ『光速』で動く異常性（アブノーマル）、か」

『確かに、「大きい」「堅い」「重い」のどれもを兼ね備えている日之影君の弱点は「速度」だったのに、それが解消されたというのは脅威以外のなんでもないね』

そういえば、あの病院の時なんか面白いことがおきてたな。記憶に無いけど。

確か、そう確か……。『恐怖』を流し込まれたような感覚があった。

「それじゃあいってみようか次のナンバー！！奏でるぜ！！」

そんな思考をしている間に、日之影先輩がまた視界から姿を消した。

「『光化静翔（テーマソング）――――――フルコーラス！！』」

その言葉と共に、蛾々丸先輩の身体を押し潰すかのごとく全身を一瞬で殴る。

あれ骨なんか確実に折れてるんじゃ……。

「悪いな、ちょっと殴りすぎちまったか？この新テクまだ使い慣れてねーからまるで加減が効かねーんだ」

「……いえ、どうか気になさらず。こんなのはただの不慮の事故ですから」

……変だな。あれだけ殴られたのにノーダメージなんだ？どうしてあんなに平然としていられるんだ？

「……へっ！あの野郎強がってやがるぜ！わっかんねーな、まるで的外れだぜ！今や日之影先輩は学園最強を通り越して宇宙最強だってのによ！！」

善吉がこちらに向かって叫ぶ。そして、今回『参加をしていない』兄貴はその善吉を憐れむ視線で眺めていた。

「……こちらこそわかりませんよ」

そこまで言うと、平然と立ち上がって両手をズボンのポケットに入れた。

「宇宙最強ごときが、どうしてこの『不慮の事故（エンカウンター）』を屈服させうると思うのかね」

「……？どうしてポケットに手を入れた？何か武器でも隠してるのか？」

「別に。負けるときはよく負けて、勝つときは態度悪く勝つのが私の主義なのですよ」

……。

べ、別にかっこいいかもなんて思ってないぞ？

真似させて欲しいとも思ってないからな！

「ま、過負荷（マイナス）ゆえに勝ったことなんてほとんどありませんが、ね」

「……ふん、しかし俺は別にお前を屈服させようなんて気はねえよ。最初に言ったろ？俺は過負荷（おまえ）とわかり合いに来たんだ。だからわかんねーとか簡単に言うなよ」

「わかり合いに来た、ねえ？」

日之影先輩を嘲け笑うかのように言う。

そんなことは無駄だと、無意味だと。

「他人事ながら正気の沙汰とは思えませんね。もしも江迎さんを改心させたことで調子づいているのであれば、あれはたまたまのことだと思い直した方がいいですよ」

その言葉に、黒神たちが息を呑んだ。

そして、拳を握り締める。

「大体、改心はあなたがたの手柄じゃない。『物体を腐らせる能力』を『植物を育てる能力』に進化させたのは球磨川先輩ですし、最終的に『荒廃（ラフラフレシア）した腐花』をコントローラブルにしたのは『大嘘憑き（オールフィクション）』じゃないですか」

結果的にはその通り。蛾々丸先輩の言うとおりだ。だが、球磨川が手を出したのは善吉に改心されて欲しくなかったという感情が揺り動かしたからだ。

善吉が、善吉達が改心しなければ球磨川はあんな風に手を出さなかった。

過負荷を変えるのは結果じゃなく、過程だ。それだけが物を言う。

その過程を積み重ね、そして、最後は改心できるものだ。

「……それでも、江迎の心を変えたのは黒神達だし、変わったのは江迎自身だろう」

「はは！苦しい解釈ですね。まあ確かに江迎さんの過負荷（マイナス）は究極的には両腕を切り落とせば無効化できる代物ですから、手柄の全てを球磨川先輩にあるとするのもおかしな話かもしれません。しかし」

そこまで言うと、蛾々丸先輩は日之影先輩を値踏みし試す目で見つめる。

「しかし、志布志さんの『致死武器（スカーデット）』や球磨川先輩の『大嘘憑き（オールフィクション）』、礼君の『孤苦零帖（ロストワールド）』、靖人先輩の『下手横好（トレーサー）』のように、内心に密接に絡みついた過負荷（マイナス）はどう処理します？それ系の過負荷（マイナス）は外科手術はおろか薬物治療では治らないのは書記戦でもやりとりでおわかりでしょう？」

「……礼、本当か？」

「そのとおりとしか言いようがありません。もう十年以上も俺は付き合ってきましたから」

そして、俺は別にこの過負荷（マイナス）は治らなくてもいいものだと思っている。

「そして過負荷（マイナス）が絡みついた心で改心なんかしたら、その先に待っているのは身の丈に合わない地獄の苦しみですよ。それともあなたがたは私たちに、しかも仲間である礼君に苦しめと、そう言っているのですか？」

俺は零華と同調（ユニゾン）してるとはいえ、問題を解決したわけじゃない。逆だ。

過負荷（マイナス）を消すことを恐れただけの行動。

零華が消えることを、恐れたための行動。

「……その通りだよ蝶ヶ崎君。俺達は苦しめと言っている」

日之影先輩の言葉に、俺も蛾々丸先輩も少し顔を上げる。

「苦しんで悲しんで、悩んで悔やんで、失って償って、やり直せと言っているんだ！！」

「……わっかり合えね～～～～。だから！やり直すとか無理なんだ

って！」
「やり直せるさ。人生に、リセットボタンはあるんだぜ！」
「……現実とゲームの区別くらいつけろ、ボケ」

やり直す？リセットボタン？
そんなもの、『存在しているわけが無いじゃないか』。
やり直そうとしたって、神様は聞き届けてくれなかった。
どれだけそんなものを押したくても、やり直したくても、存在しないものをどうすればできる？

鉄骨の上にへたり込んでしまう。今までの、病院時代から中学時代までのことがフラッシュバックして、この戦挙に集中できない。

「礼君もあなたの後ろで悩んでいる通りです。もし、今の状態で礼君を改心などさせてみたら、礼君はこの十年以上を無駄にするんです。わかりますか？礼君は私たちと同じ過負荷（マイナス）でも、後天的に造らされた過負荷（マイナス）ですよ？被害者面をするのはあなた達ではない。礼君ただ一人です」
『礼』

地上から、兄貴の声が聞こえる。

「兄貴……。俺は、やり直せるのかな……。この、この十年以上もの願い、約束は間違っているのかな……？」
『……礼、もうあのことは忘れろ。そしてお前は、過負荷（こちら）側に来るんだ』
『てめえ！なんてこと言いやがる！！』

善吉が激昂する。それだけじゃない。黒神たちも、兄貴を睨みつける。

『お前に！お前に礼の何がわかる！！』
『逆に問おう！お前達は礼の何がわかる！！』
『！？』
『俺は、俺はずっとアイツを見守ってきた！病院時代は親父達に止められて無理だったが、中学時代はアイツを見守ってきたんだ！！アイツがどうなっているか！影で見守ってきたんだ！！それを、お前らは知らないくせに言うなぁ！！！！』
「全く持ってそのとおりですねぇ日之影先輩。鳴神君はこちらなら、いえこちらの方が幸せになれる。それを思うのならあなたは彼を私たちに譲るべきなのですよ！」
「鳴神はなぁ！戦い続けていた俺に新しい道を見せてくれた恩人なんだよ！！だから、俺が今度は恩返しをする番なんだ！！」

俺をかけての争いは目下でも行われていた。
今や時の人である俺は、何もしていない。
ここで『俺のために争うのはやめて！』なんて茶々の一つも入れたかったのだが、みんなの気持ちが凄く嬉しかった。
涙を流すほどに嬉しくて、たまらなかった。
異常者でも普通でも過負荷でも、俺をそんなふうにしてくれるのがとても暖かくて。

「……もう、いいや」

だからこそ。俺は、諦めた。

「……そうだよ。受け入れてしまえば楽なんだ。何が美しくて何がつまらないかを本当に受け入れるんだよ」

拒否を起していた俺の心ごと全て受け入れるんだ。そうすれば。

「もっと駄目になれる、か？」
「！？」

背後からの声に驚く。それは、ありえないはずの声。

「久しいな、礼」
「お、やじ！？」

鉄骨の上に、昔と同じ姿をした俺の親父が立っていた。

『馬鹿な……！！どうしてお前が生きている！！！』
「生きていて不思議か？そうだよなぁ、お前がその手で俺を殺したはずだものなぁ」

親父を、殺した？兄貴が？どうして。

「ん？礼はわからないって顔をしているなぁ。教えてやろう。実はな？お前の元兄貴は俺と母さんがお前に再び再会して殺すんじゃないかと思っていたみたいなんだ」
「……へぇ」
「それで、お前を殺させないと努力して俺と母さんを殺したつもりだったんだけど。殺せたのは母さんだけだったんだよ」
『嘘だ……！！俺は確実に、アンタの心臓を貫いた！！』
「幻でも見ていたんじゃないのか？」
『どういう、ことだ……！？』

違うよ、兄貴。
この男は、兄貴が殺すことを知っていて逃げたんだ。
母親を殺させるように仕向けてまで、自分の保身に走った。

「兄貴、それは駄目だぜ。流石に殺しは駄目だ」
『お、俺は！！』
「どんな理由でも、兄貴は殺してしまったんだ。言い逃れは出来ないよな」
『……』
「安心しなよ。兄貴。俺が何とかしてやるから」
『え……？』

兄貴だけではなく、生徒会役員全員が俺を見る。

「そんな事実、全部なかったことにしてやるよ」

俺は、この時だけ、前を見るのを諦めた。

「させると思うか？」

だが、俺の左胸を食い破って、銀色と赤色の光を浴びた物が出現する。

「お前は、本当にいい子だった」
『れ、い？礼、礼！？』
「……ぁぁ」

おいおい、俺何回死ねばいいんだよ。
そう感じながら、俺は緩やかに鉄骨の上から落下した。

善吉ｓｉｄｅ

一瞬だった。

俺たちと礼の兄貴が言い争っている間の、ほんの一瞬の出来事。

『もっと駄目になれる、か？』

誰も聞いたことのない声が、鉄骨の上から聞こえてきた。

「え……あれって！？」

「母さん、知っているのか？」

「馬鹿な……！！どうしてお前が生きている！！！」

靖人が鉄骨の上にいる人物に驚愕を漏らしながら、叫ぶ。

どう考えてもありえない、といった目だ。

「雅樹、さん」

「雅樹？」

「礼君の、お父さんよ……」

『！！』

ここにいるメンバーが驚く。

驚きを隠せるはずがない。なぜなら、アイツは……！！

「お、おい。どうしたよ人吉。礼の親父殿だろ？確かに何のアクションもなく現れたのには驚くが、それだけじゃねえか」

「……名瀬先輩は、そういえばいらっしゃいませんでしたね」

「？」

「アイツは、礼の親父は、自分たちが生き残るために、礼を売りやがったんです」

「！！！」

名瀬先輩は何かを思い出した顔をする。

「そうか！！アイツが理事長が言っていた！！」

名瀬先輩の目に、怒りのようなものが見える。

一人だけ、志布志だけが良く分からないという顔をしてる。

『生きていて不思議か？そうだよなぁ、お前がその手で俺を殺したはずだものなぁ』

「くっ……！！」

殺した。その言葉はどれだけ俺たちの常識を覆したか。

家族内での殺し合い。

『ん？礼はわからないって顔をしているなぁ。教えてやろう。実はな？お前の元兄貴は俺と母さんがお前に再び再会して殺すんじゃないかと思っていたみたいなんだ』

『……へぇ』

礼の声は、底冷えするように俺の耳に流れ込んできた。

感情を、表に出さないようになんてレベルじゃすまない。

感情が無いような、そんな恐怖。俺の幼なじみが、怖くて仕方が無かった。

『それで、お前を殺させないと努力して俺と母さんを殺したつもりだったんだけど。殺せたのは母さんだけだったんだよ』

「嘘だ……！！俺は確実に、アンタの心臓を貫いた！！」

『幻でも見ていたんじゃないのか？』

「どういう、ことだ……！？」

靖人さんの声が、どんどんと沈んでいく。

それなのに、礼の声は、やたらと明るかった。

『兄貴、それは駄目だぜ。流石に殺しは駄目だ』

「お、俺は！！」

『どんな理由でも、兄貴は殺してしまったんだ。言い逃れは出来ないよな』

ありえない。自分を助けてくれた人間、しかもこともあろうに礼ならば、どうあっても自分の兄貴を弁護するはずなのに、追い討ちをかけた。

「……」

『安心しなよ。兄貴。俺が何とかしてやるから』

「え……？」

靖人さんの疑問の声は、俺たちを代表するかのようにこの会場に響き渡る。

そして、礼は。俺たちを見下ろしている礼は、この場にいる誰よりも嫌悪感を撒き散らし、何もかもをぐちゃぐちゃにするような雰囲気で、言った。

『そんな事実、全部なかったことにしてやるよ』

まるで、それは。

「礼……！？」

この場にいる過負荷の誰よりも、罪の意識を腐らせる言葉を吐いたのは、紛れも無く、俺の知る礼だった。

信じたくは無かった。いつも一緒に笑いあってくれる仲間が、親友

が、幼なじみが。堕落するところなんて見たくなかった。

『させると思うか？』

その雰囲気を殺すかの如く、礼の左胸から赤い液体を撒き散らし、太陽の光を浴び銀色に輝く物が現れた。

『お前は、本当にいい子だった』

「れ、い？礼、礼！？」

誰かの叫びもわからないほどに、俺は、目の前の光景に気を取られた。

鉄骨から落ちていく礼が、スローモーションに見える。

だからこそ、だからこそ。

「善吉！？」

「礼イイイイいいいいいいいいいいいい！！！！」

俺は、礼の落下地点へと走り出した。

礼ｓｉｄｅ

俺は一つの約束を交わすまでの会話を、思い出していた。

これが走馬灯ってやつか。何度もみているようで、見ていない気がするのは慣れてしまったせいからなのだろうか？まあいいさ。

『お前を家族のために売る。その代わりお前の願いを一つだけ叶えよう』

『……温もりが、ほしい』

『いいのか？それで』

『一度だけでもいい、父さんの、温もりが欲しい』
『わかった。お前が高校生になったら、俺はお前の元に現れよう。そして、お前がいい子にしていたら、お前の望むもう一つの願いを叶えよう』
『約束だよ?』
『今回は、裏切らないことを誓う』
『うん!』

初めての、親父との約束。
これが、お前への最初で最後の感謝の気持ちだと言って、俺の手を掴んで歩き出した。

第六十箱　副会長戦『弐』（後書き）

ロサです。
今回、オリジナル要素を足したので自分でも、書いてて少し自信がありません。
なので、感想に「こういう内容より～」みたいなのがあれば書き直します。親父の件を重点的に。
これでもいいという方は一言コメに「次回も頑張れ」といったような内容を書いていただけると幸いです。
それでは、お待ちしております。

第六十一箱　副会長戦『参』（前書き）

変更点：前話の修正にあわせてこちらも変えました。
　少し書き足しもあります。

第六十一箱　副会長戦『参』

靖人ｓｉｄｅ

『お兄ちゃん！』
『あ、礼！』
『あのね？僕ね、皆を守るから！』
『礼？どうした？』
『僕ね！お父さんと約束したの！家族（みんな）を守ってほしいって頼まれたの！』
『れ、礼が！？そんな……！』
『お兄ちゃん？』
『じゃあ、礼は俺が守る』
『え？』
『俺は礼の兄なんだ！だから、俺が礼を守るよ！』
『本当？じゃ、じゃあお願い……します』
『任せろ！』

礼が刺され、落下している瞬間、俺は『礼を守る』と約束したことを、思い出した。
俺は、何も果たせずに終わったのか？

「礼イイイイいいイイイイいいイイイイいいイイイイ！！！」

善吉君が、礼の落下地点に向かう。
そして、落ちてきた礼を受け止めた。

「礼、礼！！」

「……」
「くそっ！畜生！！俺は、この目が有りながら、俺は！！」
「これで、出来損ないとの禍根は絶ったな。演技というものは疲れる」
「この、クソ野郎！！！」
もう、駄目だ。俺のほうで加減がきかない。
殺す、殺す。殺してやる。
そんな感情が、俺を満たす。
「がぁあああ！？」
だが、俺の身体に、大量の鋏が突き刺さった。
「駄目駄目。靖人」
「礼！？」
善吉君のほうを見ると、口を血で濡らしながら、笑顔でこちらを見る礼の姿があった。
「殺す、なんて行為は仮にも過負荷に所属しているならやっちゃいけないんだって」
「礼！？何を言ってるんだ！？」
「あ、善吉君だっけ？初めまして」
「！？」
礼の言葉に、誰もが騒然とする。
一人、親父だけは青い顔をして礼を見ているが。
「き、さま……！零華か！！」

「ピンポーン！大正解！流石だね」

零華……？安心院なじみが言っていた別人格か？
それにしても、零華とやらが現れた瞬間に全身を震わせるような気持ち悪さが俺を包み込んだ。
これは、さっきの礼と同じ……？

「やはり、この出来損ないの中にいたか……」
「当たり前。お前が礼を殺したがっているのは知っていたからね。って、まぁ殺されちゃったけど」
「だ、誰だ……？礼じゃないのか……？」
「うん。それとその他大勢の皆様！やあやあ初めまして！私、鳴神零華というものです！よっろしくねー☆」
「！？」

零華ｓｉｄｅ

んっふふ～！みんなの驚いた顔、面白いな～！流石は私！伊達に勇者は名乗ってないよ！
礼は私を魔王というけれどそんなことはない！はず。
それに、黒神めだかちゃんの迫力が凄いこと凄いこと。本当に気持ち悪いなぁ～。

「零……華……？」

靖人が良く分からない顔をして私を見ながら言う。

「久しぶりだね？元気してた？」
「ひ、久しぶり！？」
「あ、そっか！知らなかったね」

そうそう。私って『礼が生まれて』直ぐに死んじゃったから忘れてるのか。
そりゃもう十年以上も経ってるわけだし？忘れていても仕方ないよね。
「酷い！私のことを忘れるなんて酷いわ！」は今回だけ我慢してあげよう。

「身内でも覚えてない人がいるので付け足してあげよう。私は礼の『姉』だ」
「姉！？知らないぞ俺は……！」
「忘れてるだけだって。まあ仕方ないよね～！そこのナイフ持ってる男に殺されちゃったわけだし」
『！？』

あ、状況の移り変わりが速すぎてついていけていないって顔してるね。
しょうがないな。順を追って説明してあげるよ。読者様もついてきているか怪しいしね。

私の生い立ちを語るなら。
私は礼の生まれる二年前、つまり靖人と同じ時間に生まれた所謂双子。親父殿に殴られて蹴られての連続だったんだ。で、その二年後に礼が生まれた。
まあ、礼が生まれて一年後に、私は「気持ち悪い」という理由で親父殿にナイフで心臓を貫かれました。
靖人は恐怖ゆえかその記憶を失くすことにしたみたいだね。偉い偉

い。
まあ話を戻して、死んでしまう寸前に一歳だった礼が私の手を掴んで、私自身の自己防衛本能かわからないけど勝手に能力が働いて礼の心の中に魂を残して入ったってわけ。
すっごいでしょ私！いや、礼の能力かもしれないけどね？
まぁ、その後の私は礼の中で眠っていたんだけど……。
で、その後私の代わりに礼が親父殿にいわれなき暴力を受けていたら、徐々に私が目覚め始めてきて。
決め手は礼を殺す実験だったけどね。
それから、目覚めてからずっと私は礼を見守ってきたのだ！

「てな感じ？」
「子供を、二人も殺していたのか……！」
「あ、黒神めだかちゃんだっけ？変な同情はやめてよね、恥ずかしい。死人に同情するのは最後の遺骨の姿になる前の焼かれている時で十分だから」
「……」

あ、黒神ちゃんの目が鋭くなった！きゃーこわーい！

「さてと、親父？私に言うことは？」
「無い」

笑顔で私に語りかけるように言う。
ひっどーい。私を殺しておいて何も言うこと無いの？

「お前は俺のおかげで生まれてきたんだ。礼もそうだ。俺の所有物を何かしたところでかまわないだろう？」
「うわー。礼が過去を語った時の靖人と同じ暴君（笑）。もしかしてぇ、あの頃から入ってたの？」

「ああそうだ。靖人が母親を殺したのと同じように、俺のスキル『凶過衰月（イリュージョン）』は強制催眠。俺を靖人だと思わせていたんだよ。母親を俺に思わせることも出来る」

「そっかー。だから今の靖人と性格がこんなにも違ったんだねー」

納得したかな、なじみさんや？これが全貌だよ。

それに、母親を殺したというのも聞いたけど、本当に下種野郎だねこいつ。

『ああ理解した。でもやっぱりどっちでもいいや。どうせ同じだし』

「言うと思ったよー。このドSチート女」

『さらっと暴言吐くのはやめてくれるかな引きこもり』

「やるか？」

『先にあっちを片付けたらね』

なじみさんの言うとおり、先にこっちの用件を片付けたほうがよさそうだね。

「じゃ、とっとと終らせようか赤の他人」

「お前は俺の所有物だと「いやいや。これから本当にそうじゃなくなるから」……なんだと？」

「『孤苦零帖（ロストワールド）』なんて本気で思っていたの？馬鹿じゃないの？死ぬの？そんな優しい能力なわけがないじゃない。」

「何……？」

「孤独に苦しむ奴なんていないわよ。本当に苦しむのは『全てを綺麗さっぱり打ち切られた』人間だけだよ。塵芥一つ残さず世界と縁を切られた人間のみ」

「ま、さか……」

お、理解したみたいだね。無駄に頭がいいのだから困ったものだよ。

うん。

「因果も、時間も、全てを、この世界から消し去るの。ああ、礼のように『縁を切る』はその延長線上ね？縁を切るだけの簡単な能力なら礼が押し殺している意味なんて無いでしょ？」

そう言って、礼が今まで縁をつないできた人たちを見る。いやー、やっぱり礼は皆から大事にされてるんだね。お姉ちゃん感動だよ。そのうち、面白い視線を送ってくる善吉君を見つめる。ん？どうしたのかな？顔が青ざめてるけど？

「アンタ、どうしてそんな世界を見続けられるんだ……！」

「善吉？」

黒神めだかちゃんが善吉君の肩に優しく手を乗せて、心配するような表情で見ている。

どうして？って、またアバウトな。

「アンタ、なんでそんな世界しか見ないで、どうして飄々と立っていられる！」

ああ、『欲視力（パラサイトシーイング）』でも使ってるのかな？

馬鹿だねー。私なんかの視界を覗いたら気持ち悪いことこの上ないのに。

「そりゃあ、教えられたからねー。どう？私の視界は？」

「く、狂ってる……！」

「あ、やっぱりー？そういうと思ったー（棒読み）」

『あはは、ご愁傷様だね善吉君』

明るく笑うなじみ。
どういう意味かは後できっちり問いただしてやろう。

「さて、と。話を戻すね？私の能力、なんて些細なジャンプ的要素はいらないんだよ。問題は、親父殿がこれからも真面目に改心して生きていくかなんだよねー。それ次第では助けてあげなくもない」
「俺はいつでもいたって真面目だが？」
「ですよねー。その濁った目は自分が正しいと信じてやまない目だ。いい目をしている」

目を、右手に構えた『鋏』で突き刺した。
どうやって鉄骨の上に上ったかだって？間合いは？そんなもの、私の前では存在しない。
禊のように、できないことなんて私の前ではそれこそ無いんだよ。

「が、あああああああああああああ！！」
「んっふふー。濁った目をしているくせに、眼球は綺麗だねー」
「礼！もう止めろ！！」
「だから、私は零華だって」

うわー、さっき見た濁った目とは思えないほど瞳が澄んでるよ。
眼球ってさ、綺麗だよね。これだけは、人がどんなものを見ていたにもかかわらず美しいままなんだから。

「まあ、もう元には戻らないけどね。私が戻さない以外」
「も、戻せ……！」

おお、こんな状況でも優位に立っていると思ってるんだ。自意識過剰すぎー。

「目をくり抜かれてもまだあなたが優位だと思ってるの？」
「当たり……前だ。お前は、負けることしか出来ない……！俺が、勝者だ……！」
「残念でした。私は確かに過負荷（マイナス）だけど、礼という元々異常者（アブノーマル）のおかげで勝ち負けは問題という枠組みの外。そ、れ、に、世界の醜さは私がこの世界で一番良く知っているからねー」

礼が美しいと感じるようになったのは世界の醜さを見続けたための逃避行さ。
礼は知っているよ。親父殿に裏切られる前からその澄んだ瞳で見続けた『醜さ』を。
だから、礼は『美しさ』にこだわるんだよ。
知ってる？礼の大好きな言葉を裏返せばどうなるか？

『世界は醜くて面白い』

その通りだよねー。人間醜くてなんぼでしょ？え、そう思わない？
それはまだあなた達がマトモな証拠よ。誇ったほうがいいわね。
でも礼は過負荷でも、人間が大好きだった。どれだけ裏切られても、どれだけ殴られても、『縁がある』という理由で世界を愛していた。
勿論、この親父殿も。
そういう意味では、礼は過負荷（マイナス）なんだろうね。

蹲る親父殿の背中に腰掛けて、言う。

「可哀想よね。礼。アンタなんかの息子になっちゃって」
「……」
「あ、言っておくけど、今の状況で私は悪くないよ？だって、こんなの偶然じゃない。偶然よ、偶然」
「き、さま……」

親父殿怒ってる？どうしてー？
偶然起こったことに対してなんでそんなに怒り浸透しているの？

『零華、もう止めてやろう。と、いうか飽きた』
「ええ～、もうちょっとやらしてほしかったな～。まあいいや」

蹲る親父の背中から腰を上げて、靖人達の下へ向かう。
すると、善吉君が私の胸倉を掴み上げて睨みながら叫び始めた。

「礼……！お前、なんであんなことをしたんだよ！！」
「善吉君は学習能力零かな～？私は零華だって言ってるじゃないか」
「零華といったな。貴様、どうしてそこまでするのだ？」
「偶然偶々私の手に握られていた鋏を下に降ろしたらあの人の目に偶々突き刺さって、抜こうとしたら偶然目玉がついてきただけよ」
「……！」
「それに、もう目玉は戻っているからいいでしょ？」
「何！？」

皆が親父殿のほうを見ると、目を開けて私を睨んでいるのに今頃気づいたようだ。
睨むだけで殺気がすごいねえ。どうでもいいか。そうだね、どうでもいいや。

「何だ、お前のその能力……！！」
「そうだねぇ……、この能力を礼風に言うと、『版劫逝謎（デットライン）』かな」
「『版劫逝謎（デットライン）』……？」
「そう。能力は因果も、時間も、全てを没（なかったこと）にする能力さ」

これは禊のような大嘘じゃない。起こった現実も、私が没として斬

り捨てるだけ。現実さ。
禊のように不完全な甘い能力じゃないよ？私は確実に消すからね。
生涯ずっと一緒にいた過負荷も、人の命も、何もかも。

「さて、親父殿。そろそろ原作崩壊も近いんで終らせようか」
「何を……言っている……？」
「いやね、なるべくそのままの物語ですすめたいじゃない？でもやっぱり不安定要素って存在するのよ。なので、そういうのは没にしてやろうかなーって？」

まぁ、私が言う原作ってのは、なじみさんの思っている台本の話だよ。
赤の他人が出てくるまでは予想できていなかったみたいだから、早く修正しないとね。

「俺を消す気か！！」
「え？いやいや。私たちとは何の関係も無い一般人にするだけだよー。安心して？」
「貴様、それでも俺の娘「え、違うよ？所有物だし」……！！」

今更何を言っているんだろうねこの赤の他人は。
全く意味がわからないよ。

「それじゃ、ばいばーい。記憶も失って、能力も失って、キャラもただの普通な人としてゆっくり幸せに暮らしてね」
「止めろ……！止めろ……！靖人！！助けてくれ！！悪かった！！だから！！」

ほら、今まで自分がやってきたことなんて忘れて、命乞いだ。
醜いったらありゃしない。改心もする気も無い目だ。この難を逃れ

たら、また元に戻り同じ過ちを繰り返す。わかるんだよ、私は今までそんな人間を見てきたから。
もし、そんな風に怖がる気持ちがあるのなら、昔の礼にも愛情を注いでやるべきだったんだよ、お前は。
礼が、私を救ったんだ。本当の意味でしにかけていた私を、礼が救ってくれたんだよ。
その才能にあなたは恐怖した。無意識に感じ取った礼の才能に。
だから、だからこそ。

「さようなら」

私は、鋏を親父殿の脳天に突き刺し私たち家族の記憶も、スキルも、何もかもをすべて切り落とした。

礼に怒られちゃうかなー、私。
嫌だなあ、大好きな弟に怒られるの。

第六十一箱　副会長戦『参』（後書き）

「安心院なじみの能力講座！」
「やあ、みんなの人気投票の結果裸エプロンにされた安心院なじみだ」
「マジで！？サービス精神凄いわね」
「今日はユカイな引きこもり（笑）、零華に来てもらってるよ」
「（笑）をつけるんじゃない」
「それでは、礼君のスキルも含めて解説をしよう」

『縁結神礼（コンダクター）』：礼君自身の異常性だ。前に解説したと思うが、これは『縁を結ぶ』という能力だ。しかし侮ってはいけないよ？これは縁を結んだ数が多ければ多いほど、礼君の性能は上昇する。ジャンプ三大原則を体現したような能力といえるだろう。しかもこのスキルは僕にも効果絶大で、コレが無かったら僕は礼君と中学時代に出会うことは無かったのかもしれない。そして現在進行形で僕のデレ具合を見たらわかるだろう？
全く、罪作りなスキルだね。

『孤苦零帖（ロストワールド）』：これも言わずもがな。僕に有効なスキルの一つだ。
『縁を断ち切る』という言葉だけでは怖くないスキルだが指定幅が大きいのが特徴。『その人に縁がある』といえば『スキル』、『友人』、拡大解釈をしたら『生』そのものの縁を断ち切ることが可能だ。
僕にとって、これほど恐ろしいスキルは無いだろう。
まあ、これの弱点は自身の縁をも断ち切ってしまうことだ。
礼君のジャンプ三大原則を体現した異常性も、このスキルの前では意味を成さないのさ。

『版劫逝謎（デットライン）』：〆切をあらわすルビだね。全世界の作家や漫画家に喧嘩を売っているのかい？

これは確かに怖い能力だよ。僕がスキルを使う間もなく、そのスキルを『没』扱いで捨てられる原稿のように切り捨てられるのだから。しかもこれの特徴は『縁を切る』なんて甘いものじゃない。人間の性格、存在すらも没として扱い切り捨てることが出来るんだ。『人の生きてきた道は長い文章で書かれている』と言った喩えがあるとしたら、これはそれを『読者にうけなさそうなので没』といった感じで台無しにしてしまうことができる。なんてことを。

そういう意味では、禊ちゃんの『大嘘憑き（オールフィクション）』よりも怖い過負荷（マイナス）だ。

ちなみにこの漢字の読みは『はんこうせいめい』だ。

犯行もなにも全てなかったことにされるのなら声明なんてあったもんじゃない能力だけどね。

「これぐらいかな。次回の講座では礼君の親父さんの能力についての解説をしていこうかと思っているよ」

「おつかれー。水飲む？」

「いや、いいさ。それよりも君はどうしてこんな凶悪な過負荷を生み出せるのかな？」

「いやー、私って勇者ですから！」

「魔王のほうがぴったりだね」

「どういう意味？」

「それじゃあ、また次回にでも会おう」

「どういう意味ー！！！」

第六十二話　副会長戦『終了』

「さて、これにて少しの逸脱編は一件落着。それじゃ、日之影君の試合を見に行きましょう」
「待て！この超展開について来れているのか！？俺たちもだが主に読者が！！」

え？そりゃあ、ついて来れていないんじゃないかな？
だってねぇ、こんな急転直下の展開なんてついていけるのは作者ぐらいよ？
え、メタ発言？気にしない気にしない。今に始まったことじゃなし。その程度で読者様は驚かないわよ。きっと。
ま、もう赤の他人となった人をこの舞台に上げるのは気が引けるしねー。ゆっくーりわかり易いか難いかは人次第で説明していくとしましょうね。
まずキャラのブレ具合。これは簡単よ。
最初に出てきた靖人＝元親父殿ってだけだから。本当の性格は後から出てきた靖人が正しいのよ。礼に優しい靖人が本当のキャラよ。
元親父殿が靖人に成りすまし、自分自身の性格は変えずに登場したってわけ。
あとは礼に優しかった理由かな？
これも簡単。礼との最後の約束である『家族の愛』を教えるために芝居を打ってただけだから。
礼を殺した後礼のことをこう言っていたでしょう？『出来損ない』って。礼を虐待していたときと同じ礼への扱いだからキャラはあまりブレていないはずよ？
そして最後の命乞いは、まあよくあるテンプレってやつよ。『今この瞬間さえ押し通すことが出来たら後はやりたい放題だー』っていう感じ。

親にこういうときだけ謝っておいて、『もういいわ』って言われたら謝ったことなんて忘れて同じ過ちを繰り返すのと同じことよ。
あとは、まあ私のキャラは自由自在だから。なんてったって勇者ですから私。
メタ発言もしたい放題だし。元親父殿と礼への扱いは天と地なんて甘いものじゃないわよ?塵芥と天使レベルで差があるわ。もちろん天使は礼よ?
え?何?『お前ブラコンだろう』って?失礼な!その通りよ。
ちなみに私が姉というか『身内』だってことはなじみが言っていたはずよ?『鳴神零華』って紹介していたはずだから。靖人に。
私が礼から生まれたなら、なじみは『零華』としか言わないからね。

「これでいい?」
「俺たちに地の文を読むスキルはないんだが?あとツッコミどころが多いと思う」
「いいじゃん。これアップされたら携帯電話かパソコンで確認しな」

それで万事解決よ!

「礼……、礼は無事なのか……?」

黒神ちゃんが心配そうに私の元に歩み寄る。
あ、メタ発言やギャグをスルーされたのは悲しいかも。

「だいじょーぶ、だいじょーぶ。礼はこの程度どうってことないよ。またもうちょっとすれば元気な顔を見られるから」
「な、ならいいのだが」
「あのさ、わかるなら教えてくれないか?」
「今度はなんだい?善吉君」

「礼は、俺達と出会って幸せだったのかな……？」

善吉君がそういうと下を向いて少ししょんぼりしている。
それにあわせて黒神めだかちゃんもしょんぼり。
そんな顔しないでよ。話の腰を盛大に折りたくなるじゃない。
でも、本当に、いい仲間を持ったね、礼。お姉ちゃんは嬉しいよ。

「不幸せなわけがないじゃない。逆に、そう言われた方が悲しむわよ？」
「！！……そうだな。何を言っているんだ、俺は！」

善吉君の目に、しっかりとした芯が見えた。
醜いものだけを見てきた私には、それは真っ直ぐすぎて美しすぎる。
なるほど、礼はいつもこんな美しいものを見てたのか。

「れ、零華でいいのか？」
「何かしら靖人。双子なんだから堅苦しいのは抜きでいいじゃない」
「い、未だに実感が沸かないものだな」
「酷い！私のこと忘れるなんて酷いわ！！」
「ええっ！？」

ごめん、言っちゃった。謝りはしないわよ、って謝ってるじゃん。
本気で驚いている双子を見る。まあ、私は現在礼の顔だから似ているとか似てないとかわからないだろうけどね？
ちなみに私と靖人は双子だけれど全然似ていないわ。
『私＝母親』で『靖人＝父親』というような感じよ。

「礼は『私似』よ」
「『母親似』じゃなくて！？」

「えーっと、うん。私が母に似ているから母に似てるわね」
「面倒くさい！！」
うにゃ～、このからかい具合最高だね～。
私も現実にいたら絶対一日に5回はからかってる自信があるわね。
「今、凄く不穏なことを考えなかったか？」
「考えてないわよ？」
嘘だけど。
「それにしても、私のことが印象強すぎて日之影君の試合応援してる人いたの？」
「ああ、それについては大丈夫だ。日之影空洞前会長には私達がいなくても」
『頑張れーーーーーーーーーーー！！！！！日之影先輩！！！！！！！！』
強大な応援のコール。そして、圧倒的な人の数。
地面をも揺らすことができるのかと思ったほどに強烈な応援が私たちの目の前に広がっていた。
「私達がいなくても、日之影空洞前会長にはこれだけの当たり前の人望がある！」
なるほど。私のほうに安心してついてきていたのはこれか。

「そうか……。『知られざる英雄（ミスターアンノウン）』がなくなったから……みんなが日之影君を思い出したんだ」

すばらしい人望だね。流石はずっと学園を守ってきた英雄といったところか。

人知れず、何の見返りも感謝の言葉も求めずに戦ってきた英雄に対するご褒美と言ったところかな。

「ククッ……いいだろう！踊ってやるよ、不知火！こんな応援されちゃあ頑張るしかないもんなぁ！！！！」

日之影君が立ち上がる。

それにより、日之影君の黒い髪からもとの髪の色に戻っているということにより今の状況を理解した。

それはつまり、『光化静翔（テーマソング）』を使い切った、もしくは使える時間が切れたことをあらわしている。

見れば馬鹿でもわかるようなこの『全ての』鉄骨が崩れ落ちている状態。

そしてバトルフィールドが鉄骨の上からクレーンの上に移動している。

見ていない間に、こちらも絶体絶命だったんだね。

しかも日之影君はどう見ても重症だ。身体の所々に血が滲んでいれば、打撲による青い跡も見受けられる。きっと鉄骨が全部崩れ落ちる時にそれに巻き込まれてしまった故の傷だろう。

それに対して相手側は全くの無傷。絶体絶命とはこういう状況を示すのにぴったりの言葉だ。

それでも、この応援によって彼は立ち上がった。

英雄は負けないと。絶対に勝つといわんばかりに。

「不知火……？クッ！だからなんだと言うのです！確認するまでも

なく！『知られざる英雄（ミスターアンノウン）』がないということは！以前ほどの強さもないということでしょう！！強さも速さもなしでどうやってこの私に！この『不慮の事故（エンカウンター）』に勝つというのです！？」

言うほど難しいことじゃないよ。だって、彼はいつもたった一つでこの学園を守ってきたそうじゃないか。

「はっ！いらねーよ！『知られざる英雄（つよさ）』も『光化静翔（はやさ）』も！そんな異常いつだっていらなかったぜ！！」

彼は天高くそれを掲げ、

「なぜなら俺はいつだって！強さでも速さでもなく！拳骨一つで戦ってきたんだ！！」

今足場となっているクレーンに叩きつけた。

その一撃、たった拳骨一発がクレーンを支える鉄柱を砕いた。

「……馬鹿みたいな拳だねぇ」

「あれを真似ていたのかと思うとゾッとするものがある」

双子仲良くそんな会話をしていた。

現実離れしすぎて私達が現実逃避していたよ。

「！！て、鉄柱を折り……いや砕き……！？」

蛾々丸君が私たちと同じで信じられないといった顔をしている。

うん、私も信じられないから。

その落下中の無防備さを狙い、日之影君が背後から蛾々丸君を捕まえる。

「お前の過負荷(マイナス)で押し付けられるのは自分のダメージだけだろう？押し付けるばかりでたとえば鉄柱のダメージを肩代わりしてやることは出来ないんだろう？」
「！！」
なるほど、『不慮の事故(エンカウンター)』は自分の受けたダメージを何かに押し付けることが出来るのか。
それはまた便利な能力だねぇ。たとえいつも礼がいる屋上に近い高さからの落下でもそのダメージを何かに押し付けられる。
「そんなお前の過負荷(マイナス)は黒神よりも完全で、球磨川よりも最低だ。だけどこれはスキルを競う戦闘じゃなく、志を競う戦挙だぜ？お前は他人のダメージに無頓着過ぎる。ほら、覚えてるか？この『狂犬落とし』のルール」
そこまで言いながら、日之影君は体制を少しずつ変えていく。
確か『狂犬落とし』のルールは『相手を地面に突き落とした方の勝ち』だったよね。
「てめえ！まさか自爆覚悟の引き分け狙いか！！」
「引き分け？ははっ！過負荷(おまえたち)じゃないんだ。狙うかよそんなもん！お前達もいい加減俺達って奴がわかってねーよなあ。ま、その辺もおいおいわかりあっていこうや」
二人が地面に到着する。それと同時に、爆発でもしたかのような砂埃が舞い上がった。
そして、砂埃が収まっていくと同時に二人の姿が見えてくる。
「くっ……、くそ！落下のダメージは地面に押し付けたものの……」

「そうですね。ダメージの有無は勝敗に関係ございません」

そして、砂埃が完全に晴れた瞬間に二人の体制が目に飛び込んできた。

うわ～、無茶するなぁ。

「一方、日之影さまは蝶ヶ崎さまの『身体の上』に一方的に乗っており、地面とは接点を持っていません。よって副会長戦は日之影空洞の勝利！生徒会戦挙はこのまま会長戦へともつれこみます！」

長者原君の言葉に、観客が一斉に沸きあがった。

『いつも通り！！日之影先輩の勝ちだあああああ！！！！』

英雄を讃える賛美歌のように、その言葉はこの会場を盛り上げる。

「大丈夫ですか、日之影前会長。この状況から察するに、二度の落下は如何にあなたと言えど……」

「黒神……。俺は……、生徒会長としてよ。人知れず学園を守っていたことを誇りに思っていた。常に誰にも気づかれず、誰にも理解され……いや、礼だけがこんな俺を見ていてくれたんだったな」

懐かしむように少し否定しながら私を、いや、礼を見た。

「それでも、俺はそうやって人知れず戦って守っている自分が好きだった」

そして、そこまで言うと彼は涙を流しながら言った。

「だけど、やっぱいいもんだな。みんなに応援されて、みんなに感

謝されるって」

「……はい！勉強させていただきました」

そんな彼に、めだかちゃんは嬉しそうに応えた。

これにて、副会長戦＋逸脱編閉幕。

第六十二話　副会長戦『終了』（後書き）

「安心院なじみの能力講座！」
「今日は予告していた通り、礼君のお父さんである鳴神雅樹の能力についてだ」

『凶過衰月（イリュージョン）』：相手に気づかれることなく、強制的に催眠をかける能力だよ。しかも催眠中は自分の好きなように相手の五感を操ることが出来る。
例を挙げるならば簡単さ。靖人君に見えるよう催眠をかけていたことだよ。しかも、礼君にも気づかれることなくね。
この強制催眠の解除法は普通の催眠と同じで、かけた本人がいいというまで解けないことさ。

「こんな感じかな？」
「おつかれさまー」
「やあ勇者（仮）」
「（仮）つけるな」
「じゃあ（狩）」
「モン○ン！？」
「それじゃあ、またねー！」
「あれ、ボケはそのまま置いていくの？ねえ、なじみさーんがいない！？え、えっと、それじゃあまたねー！感想や誤字脱字の指摘などなどお待ちしてまーす！！なじみ、この状況で私を放置しないでーーーーー！！！！」

第六十三箱　副会長戦『後』

「さて、なじみのほうはどうかな？」
『なにがだい？零華』

あら、会話できるようになったのかな。

「いやいや～、さっきあまり話しかけてこなかったからさ」
『取り込み中だったんだよ。全く、早く礼君と会話させておくれよ』
「うーん、今精神世界で眠っているから会いにいけると思うよ」
『そう？それなら遠慮なく行かせてもらうとしようじゃないか』

なじみの声が途切れる。
お金でも取ればよかった……いや、やめよう。ホントに持ってきそうだから。

「さて、礼はどこに……あれ？いない？」
『ねえ零華？礼君いないんだけど』
「いや、私も今気づいて……」

れ、礼！？どこに行ったの！？

そのころ、精神世界に警察がいるとしたら捜索願を出されそうな勢いで二人に探されている我等が主人公は……。

「……いや～、凄いの聞いちまった」

『球磨川』の心の中、つまり黒板に背を向けて教壇にもたれかかっていた。

「眼が覚めた瞬間にここにいるなんて思ってもいなかったぜ。よっこらしょ」

教壇を支えにその場から立ち上がり、背伸びを行う。

「ぬおお～～～～！背骨がなる音が心地いい～！！」

それにしても、と少し悩ましげに顎に手を当てる。

「流石に、盗み聞きは良くなかったな」

球磨川となじみの会話を少しずつ思い出していく。

「『……』『なじみちゃん』『いや、安心院副会長』『そろそろ意地悪しないで返してくれないかなぁ』『僕の』『始まりの過負荷（マイナス）』『嫌だね。それと僕のことは親しみを込めて安心院（あんしんいん）さんと呼びなさい」

疲労しきった球磨川の声と、教室中に響き渡るようなななじみの声で、俺は目が覚めた。

「十六世紀に貴族の間で行われていた面白いゲームがあってね。奴隷の骨を身体の端から一本ずつ順番に！ハンマーで砕いていくんだ」

なんだその怖いゲームとも呼べない残虐行為は。初めて聞いたぞ。

「骨を砕かれる奴隷は『助けてくれ』と涙ながらに頼むのだけれど、最後には『殺してくれ』と言い出す。果たして何本目の骨でそう言うかをみんなで仲良く賭けるのさ」

昔の俺みたいなものだな。あれは賭けが行われていなかったぶんマシ、いやどちらにしても最悪か。

「ところで君はまさに今その状況なんだけど」

「（！？）」

なじみの言葉に耳を疑った。

今まさに球磨川がなじみの言っている『ゲーム』の状況にいるのか！？

「どうかな？『僕の過負荷（マイナス）を返して欲しい』ではなく『僕の過負荷（マイナス）なんていらない』と頼む気にはならないかな？」

「『……』」

なじみの提案に、球磨川は無言だった。
だが、わかる。背中越しに感じる球磨川の迫力が。
諦めていない、その意気込みのようなものが感じ取られる。

「あは！まだ諦めはつかないって顔だね。よろしい、ならばもう一度かかってきなさい。僕が貸してあげた『手のひら孵し（ハンドレッド・ガントレット）』を下敷きにした君の『大嘘憑き（オールフィクション）』は確かに恐ろしいスキルだ」

なじみの足音が初めて聞こえた。
今まで教壇に座っていたのだろうか。
そして、『恐ろしい』と言っているのに全く焦っていない。

「７９３２兆１３５４億４１５２万３２２２個の異常性（アブノーマル）と４９２５兆９１６５億２６１１万６４３個の過負荷（マイナス）、合わせて１京２８５８兆５１９億６７６３万３８６５個のスキルを持つ僕にだってひょっとしたら勝てるかもしれないぜ？」

……なんていうインフレ？
というかチートすぎるだろうこの女。

「おっと！きみと人吉くんに一つずつスキルを貸し出しているし、それに礼君にもまだ一つ貸しているから今はたったの１京２８５８兆５１９億６７６３万３８６２個かな？やったね！これは大チャンスだよ禊ちゃん！」

どこがだよ！たった三つ減っただけじゃないか。
このチート女はやはり底が知れない。てか底なんてあるのかが気になるところだ。

「『……やれやれ』『ものには限度ってものがあるでしょ安心院さん』『少年ジャンプのバトル漫画も真っ青なインフレだよ』」
「（その通り過ぎて何も言えん）」
「うん？ああそう言えば禊ちゃんは今時珍しい女の子の少年漫画好きだったね。僕はそーゆーのは小学校よりも先に卒業したけど」
「『はは』『そうなんだ』『やっぱり僕みたいなボーイッシュ系とは違って少年漫画は幼稚に映るのかな？』」
「いやいや、とんでもない。むしろ少年漫画は僕みたいな甘ちゃんには高尚過ぎてね。なぜなら少年漫画が教えてくれるのは『友情・努力・勝利』じゃなく、『最後に勝つのは能力のある奴』だという、極めて残酷な現実だからだ」

その言葉に、球磨川が少し息を呑んだ。
俺も、なじみの纏う雰囲気の変わりように何も考えられなくなる。
そして、さっきの言葉。それは球磨川の大好きなものを完全に否定し、更には『お前は勝てないよ』という現実を突きつけた言葉だった。

「能力があるから友達ができて、能力があるから努力ができて、能力があるから勝利ができる。そんな救いのない現実を、能力のある僕としては見ていて忍びないんだよ」

追い討ち。
球磨川が持つコンプレックス、またはそれに近いものを滅多刺しにするかの如く投げかけられた辛辣な言葉。

「ま、禊ちゃんはいーんじゃない？一生、少年漫画を読んでいれば」
「『……』『ふふっ！』『そうだね、その通りだ！』『いやー、安心院さんにはいつも教えられるなあ！』『なにをどうしたところで』『僕達がめだかちゃんに勝てるはずがないよねえ！』」

「「……」」

球磨川の空元気のような格好つけの言葉に俺は黙り込んだ。
なじみも俺と一緒になって黙り込んではいるが、不機嫌そうなオーラが立ち込める。

「『あーあ、馬鹿馬鹿しい』『らしくもなく頑張っちゃったなー恥ずかしー！』『諦めた諦めた！』『さーて、家に帰って大好きな少年漫画でも読もっと！』」

球磨川が教室の扉を開き、出て行こうとする。

「待てよ」

だが、なじみはそれを許さなかった。
とりあえず、俺は球磨川に見えないよう、ドアとは反対側の教壇の死角に移動する。
それにしても……。

「僕なんかに言いたいことを言わせるなよ。大好きな少年漫画を侮辱されたんだぜ？怒って言い返せよ腰抜け」
「『……』『言い返すことなんてないよ』『「能力者（プラス）が無能力者（マイナス）に勝つ」』『君の言うとおり』『それが世界の現実だ』」
「そうやって結論を投げ出すのは感心しないな。追い詰められたら格好つけたがるのは
悪い癖だぜ？」

このチート女。最初から素直に言えばいいじゃねえかよ。

「どうせここは夢の中で心の中だ。きみの本音なんか誰も聞いちゃ

いないさ」

そうさ、気になっていたのなら最初から言えばよかったんだよ。

「だから」

「格好つけずに、括弧つけずに言ってごらん？」「（格好つけず、括弧つけずに言えよ馬鹿）」

本音が聞きたいなら、最初からこんな面倒なことをしなければよかったのに。

「……あいつらに、勝ちたい」

球磨川の心からの言葉が、俺たちの耳に届いた。

「格好よくなくても、強くなくても正しくなくても、美しくなくても可愛げがなくても綺麗じゃなくても、格好よくて、強くて正しくて、美しくて可愛くて綺麗な連中に勝ちたい」

球磨川が、少しずつ少しずつ、がんじがらめにしていた自分の気持ちを紐解いていく。

「才能に恵まれなくっても、頭が悪くても性格が悪くても、落ちこぼれでもはぐれものでも出来損ないでも、才能溢れる頭と性格のいい、上り調子でつるんでるできた連中に勝ちたい」

球磨川の本心が俺の耳に届くたび、笑みがこぼれた。

アイツの真っ直ぐな思いが聞くたびに面白い。

「友達ができないままで友達ができる奴に勝ちたい。努力できない

まま努力できる奴に勝ちたい。勝利できないままで勝利できる奴に勝ちたい。悲しくてつらくて泣いているのに明るく朗らかに笑える奴に勝ちたい。不幸なままで幸せなやつらに勝ちたい！」

球磨川の声が、少しずつ大きくなっていく。

抑えていた気持ちが、張り裂けんばかりの声で教室中に放たれる！

「嫌われ者でも！憎まれっ子でも！やられ役でも！主役を張れるって証明したい！！」

教室全体を震わす、今までの球磨川では考えられないほどの主張。

「やれやれ。まったく何を言うのかと思ったら、はーあ。滅茶苦茶だし支離滅裂だし自分勝手だし荒唐無稽だし。禊ちゃん！君の言うことは括弧が取れてもわけがわからないよ」

少し嬉しそうなななじみの声。

なじみの足は球磨川の元に向かっているみたいだ。

「だけど惚れたぜ？」

「！？」

球磨川の驚愕の声。いや、声にならない驚きといった方が正しい。

それから数秒間、誰の声もしなかった。

「（何がおきてるんだ……？）」

「ぷはぁ……。うふっ！よりによって禊ちゃんに僕の大切なファーストキスあーげちゃった☆」

なじみの少し照れたような声が聞こえた。

球磨川はいまだ無言。

「なーんてね。今の『口写し（リップサービス）』で確かに返したよ禊ちゃん。君のはじまりの過負荷（マイナス）」

「――――――！」

照れたと思えばすぐに元の口調に戻るなじみ。こいつはキスに躊躇いがなくていけない。

そして、球磨川の方はやっと現実世界に戻ってきたのかブレザーの袖で口を拭っている音が聞こえてくる。

「引き換えに『大嘘憑き（オールフィクション）』は『手のひら孵し（ハンドレッド・ガントレット）』として返してもらったけど、今の君にはもうあれは必要あるまい？その無能力（マイナス）だけでもめだかちゃん達には十分に対抗できるだろう」

「……対抗できちゃっていいの？きみはてっきりめだかちゃんや善吉君の方に肩入れしていると思ったけれど」

「僕は礼君以外には平等なだけの人間だよ。人吉くんに視力を貸してあげたのと君に過負荷（マイナス）を返したのでイーブンだ。それに対抗しようが抵抗しようが僕は結局君の負けは避けられない運命だと思っているしね」

「……」

球磨川のムッとした雰囲気が伝わってくる。

そりゃ、面と向かって「君は負ける」なんて宣言をされたらなぁ……。

「とにかく返してくれてありがとう。これで『僕』は『私』になれる。お礼に見せてあげるよ。不幸が幸福を凌駕する歴史に残る衝撃映像を」

扉の閉まる音が静寂する教室に響き渡る。

「括弧つけないままで行っちゃったか。ふふっ、まったく禊ちゃんも人吉くんもめだかちゃんも昔っから手がかかるったらないよね」

そして俺は、この後のなじみの言葉を忘れない。
それは、あまりにも人離れした言葉。
自分を『人外』と名乗るにふさわしい、言葉を。

「まったく。どーでもいいことでいつまでモメてるつもりなんだか。僕から見れば全員平等にただのくだらねーカスだってのに。光も闇も、正義も悪も、毒も薬も、勝ちも負けも、強さも弱さも、黒も白も、成功も失敗も、幸福も不幸も――――本当は全部同じ物だって、どうして礼君や零華以外のみんなは気づかないのかなあ……」

……心底、コイツが怖いと思うときはこの言葉を放つ時だ。
全てが等しく平等。それは確かに俺の価値観に似ているかもしれない。しかし、方向性は真逆だ。
逆だからこそ、俺はなじみと同じ考えではいない。

「さて、僕も準備を始めるとしよう」

そういうと、なじみは教室から姿を消した。

そして、今に戻ってくる。

「しかし、どういったスキルだよこれは。他人の心に入れるスキルなんてなじみの『腑罪証明（アリバイブロック）』を除いて知らなかったしな……。しか

も俺が使えるのも不思議だ」

俺にも全く良く分からないが、どういうことか俺の元々の異常性と過負荷が無くて、この良く分からないスキルのみが残っている。しかもなじみから貸し出されたものではなく、俺が持っていたスキルのようだ。いや、もしかすると……、零華が持っていたスキルか？

「わけがわからん。とりあえず、俺の心に戻るとしよう」

意識を集中させる。

身体が一瞬だけ浮いた感覚に陥ったかと思うと、すぐに地面に足がつく。

「……戻ってきたのか？」

《礼！聞こえる！？聞こえたら返事を！！》

教室のスピーカーから零華の声が大音量で聞こえる。

う、うるせえ……！

「零華。ボリューム下げろ」

《れ、礼！！どこに行っていたのよ！！心配したんだから！！》

「いや、俺にも良く分からないんだが……。あ、親父は？」

《私が普通にしておいた。私を殺した罰よ》

「了解。これで、本当に赤の他人だな」

《ね、ねえ……怒ってる？》

少ししょんぼりとした声がスピーカーから聞こえてくる。

「別に。そんなんで怒るわけがないだろ。で、表はどうなっているんだ？」

《うん。日之影先輩の勝利で副会長戦は締めくくられたよ。で、今現在手当て中》
「了解。どうする？俺が出ようか？」
《うん、お願い。あ、それと礼》
「どうした？」
《なじみに気をつけてね？そろそろ「いた！礼君！！」ありゃりゃ》

なじみの声が聞こえてきたと思うと、零華は失敗したという声を出した。
何だ？どうしたなじみ？

「『どうした？』じゃない。一体どこをほっつき歩いていたのか教えてもらえるかな？」
「え？いやなんで？」
「君の夢の中に来てみれば誰もいないから探し回ったんだ。色々使ってね」
「あ、そうか……。悪かったな」
「よろしい。ああ、それと礼君」
「ん？どうした？」
「君の『縁結神礼（コンダクター）』に何か隠された能力が眠っている気がするんだ」
「これに？零華が死ぬ前に使ったっていうスキルでも隠してあるのか？」
「……きっとそれだ。礼君、縁魔帖（スコア）を出してくれ」

なじみの言われたとおり、縁魔帖（スコア）を取り出して渡す。
なじみはそれを受け取ると、最後のページを開いた。

「……これだ。見つけたぞ零華」
《マジで！？やっほう！》

何かを見つけたかのように眼を少し見開くなじみ。俺は横からそのページを覗き込んだ。
そこには俺の名前が書かれている。

「これが何かあるのか？」
「礼君、君はこの縁魔帖（スコア）はもしかして『縁結神礼（コンダクター）』によるものだと考えているんじゃないかな？」
「あ、ああ。確かにそう考えているが……。違うのか？」
「これは別物だ。これこそが零華自身のスキルの源だと思って間違いはないだろう」

これが……？この本が零華の本当のスキルだったのか……？

「これは、この本に書かれている人の心に自由に飛べるスキルと考えて間違いないだろう」
《おお！私のスキルはそんなのだったのか》

零華の感動した声が響き渡る。まあ嬉しそうな声だな。

「礼君とは最高の組み合わせだったから気づかなかったんだ。そうだねぇ……『関交盟緒（ブックマーク）』とでも名づけるとしようか。礼君が縁をつなげばつなぐほど、零華のこのスキルは効果を発揮する」
《あ、だから私がナイフで刺されて死ぬ寸前だった時、礼の心の中に入れたのか》
「そうだね。礼君と関係性があったからこそ君が今存在しているということだ」

……あれ？今衝撃的な台詞が聞こえたような？

「零華、なんでお前が死にかけている時に俺はお前の傍にいたんだ

？」

《あ、言ってなかったけ？私はアンタの姉よ》

「……冗談だよな？」

《マジよ》

「なじみ？」

「マジだよ」

……えええええええええええええええええええええ！？

こんな、こんな引きこもりで自分のことを勇者という奴が姉だったのか！？

《失礼ね》

「どこが？」

《なじみも失礼よ！私のどこに不満があるのよ！》

「「性格」」

《胸に何か突き刺さったわ……》

スピーカーから少し涙声が聞こえてきた。

俺となじみの二人同時に言われたから心を痛めたのだろう。

《礼～、そろそろ戻って～。お姉ちゃん疲れた～》

「了解。じゃ、なじみ。また後で」

「わかったよ」

「……おお、戻ってきた」

いや～、体感時間にして二話ぶりの空気はうまいなぁ……。

『けっ！お前らこそ思い上がってんじゃねーよ！』

『盗人猛々しいとはこのことだぜ！改心しようがしまいが関係ない！お前らは次の会長戦で負けて！箱庭学園から出て行くんだよ！！』

「おおっ？何この状況？そしてなんだこの大人数！？」

今回は会話の流れ全く聞いていなかったから理解できないのだが。

「……」

ん？なんか知っている気配が近づいてきているような……。

「どいて。」

たった一言。

それだけで、先ほどまで騒いでいた観衆達の声は恐怖に変わり、通る者の邪魔をしまいと道を開けた。

「ん。ありがと」

そじて、生徒会メンバーだけではなく過負荷側の人間も驚いた表情で悠々と歩いてくる人物を見る。
その人物は俺たちの前に来ると歩みを止めた。

「初めましてめだかちゃん。そして久しぶりだね、礼君。私だよ」
「……ああ、そうだな。貴様の言葉に、貴様の心に、ようやく会えた気がするよ。球磨川」

紙一重にして真逆の二人が、本当の意味で向かい合った瞬間だった。

第六十三箱　副会長戦『後』（後書き）

「「安心院なじみの能力講座！」」
「今日は礼君復活記念みたいなものだね」
「そういや、俺あんまり活躍してないんじゃ……」
「ま、そういう時もあるよ」
「それじゃあ、今回は零華のスキルについてだ」
「勇者のスキルよ！心して聞け！」

『関交盟緒（ブックマーク）』：関係を持った人の心に自由に飛べるスキルだ。僕の『腑罪証明（アリバイブロック）』とはまた違って、魂のみの移動を可能とするスキルだね。そして何より、礼君の異常性との相性の良さが抜群だ。これさえあれば、礼君が縁を結んだ人の心の中にも移動可能とするんだよ。まあ、魂だけという難点はあるがそれでも使い勝手はいいスキルだと思うよ。

「こんなところかな？それでは、この後は作者のあとがきだ」

ロサです。
元気です。風邪も最近引いてなく、いやいや引いていたらそれはそれで問題なのですが……。
学校が始まってもう一ヶ月がたとうとしています。そして、小説を書くスピードがどんどん遅くなる一方……。
それでも、更新は早くできるように頑張ります！

それでは、感想、誤字脱字の指摘、もっとこうしたら面白くなるの

では？といいたようなコメントをよろしくお願いします！

第六十四箱　会長戦＆補佐戦　『開始』　（前書き）

誰か、誰か・・・・！！戦闘描写の書き方を教えてくれ・・・・・！このままでもいいのか少し不安なんだ・・・・！

と、葛藤しているロサです。
明日から修学旅行で四日間ほど小説を一文字も書けない状況になります。

ただ、感想等を書いてくれていると、帰ってきてＰＣをつけ、感想ページを見ると嬉しく思います。

できれば感想を書いていてくれると嬉しいです。

それでは、行ってらっしゃい！

第六十四箱　会長戦＆補佐戦　『開始』

七月十七日　リコール発動及び生徒会戦挙か開催決定日
七月二十五日　庶務戦　『毒蛇の巣窟』
八月一日　書記戦　『冬眠と脱皮』
八月八日　会計戦　『火付兎』
八月十五日　副会長戦　『狂犬落とし』

そして、本日八月二十二日　会長戦。

「それでは、時間になりましたので生徒会戦挙会長戦を執り行います。生徒会側から出馬されるは黒神めだかさま。そして新生徒会側から出馬されるは不知火半袖さまでございます」

長者原先輩の紹介された不知火を俺は少し信じられない気持ちを乗せて視線を送る。
善吉も俺と同じく不知火に視線を送る。

「もぐもぐ……あ、礼君も食べる？」
「いや、大丈夫だが……。お前が裏方から表舞台に出てくるのが珍しくてな」
「うん。『喰い』の残らないようにしたいからね～」
「ねえ、礼君」

隣にいた古賀先輩が声をかけてくる。

「あの不知火ちゃんだっけ？どういう子なの？過負荷だけど強いとか？」
「いや、あいつは弱いですよ。それでも、俺はアイツと何年か居候

として付き合ってましたが、負けるところを見たことがありません」
「それって……三年の鍋島先輩(はんそくおう)みたい、もしくは同じタイプなのかな？」
「そうですね。でも決定的といっていいほど違う」
「そうなの……？で、でも、球磨川を相手取って戦うよりかは幾分かマシなんだろうけど」

まぁ、その通りだ。
一週間ぶりに出会ってわかる。今の球磨川は病院で出会った頃と同じ匂い、いやそれ以下のものを感じる。

「それでは、恒例のくじ引きでございます。不知火さま。会長戦のルールを決めていただきますので用意された十三枚からお好きなカードをお選びください」
「……いえ。『選びません』」
「……は？」
「あたしは、戦うつもりはありませんから。そして、あたしの代理で会長戦を戦う生徒として、黒神めだかと戦う過負荷として、マイナス十三組のリーダーである球磨川禊先輩を推薦します」

不知火の言葉に、この会場全員が息を飲んだ。

「ざ……ざけんな！そんなの認められるわけねーだろ！！」
「そうだよ！球磨川は最初の庶務戦で戦ってるじゃん！確かにこっちも何人か代理を出しちゃいるけど……一度出馬した生徒がもう一度出馬するなんてことありえないよ！」
「（……あれ？よく考えると俺たちって何人かじゃなくて、今回の黒神と善吉以外全員代理じゃね？）」
『そこは触れないであげるのが優しさだよ』
「（そうか？）」

なじみにそうだよと言われたので口にチャック。ツッコマない。俺はツッコマナイカラナ。

「……じゃあ古賀先輩、あなた達は納得できるんですか？黒神めだかと戦えばあたしはたぶん負けますけれど、その時あなた達は『マイナス十三組に勝った』って心から思えますか？それにあたしが負けたせいで生徒会戦挙に負けたからって、マイナス十三組が引き下がると思いますか？」

その言葉に、誰もが反論しない。
反論ができないほど真っ当過ぎる言葉。正論。
その言葉は誰も口を挟ませない。

「逆に言えば、万が一あたしが勝ってマイナス十三組が生徒会執行部に成り代わったとしても、それで負けを認めて黙って引き下がるあなた達でもないでしょう」

「……」

古賀先輩が不満そうだが、頷いた。

「どーせ、生徒会戦挙なんて建前であり口実でしょ。突き詰めたところで生徒会役員のポストに固執している人なんて一人もいない。だから、あなた達がマイナス十三組から学園を守るためのこの戦いは、黒神めだかと球磨川禊が決着をつけない限り、終わらないんですよ」

不知火の言葉に、善吉が「ふぅ」と息を漏らした。

「……それが今回のお前の企みかよ。めだかちゃんと球磨川を戦わ

せるためだけに、お前は色々裏で動いていたってわけだ。しかし、それにしたってここに来て随分勝手なことを言ってくれるじゃねえかよ」

「まーねー。結局、人間が我侭を通すのにこれ以上の手段はないよ。ちゃんと話して、伝える。『正喰（しょーじき）』に、ね☆　そうだよね、礼君？」

「……俺に振った意図はわからないがその通りだと思う。人間正直が一番だ。お前のは横紙破りだがな」

「そうそう♪あと、一言多いよ礼君」

俺と不知火の間に火花が散る。

「……お待ちください不知火さま。貴重なご意見は承りました。しかし、選挙管理委員会としてはあくまで、鳴神さまの言うとおり横紙破りを認めるわけにはいきません」

長者原先輩が火花を鎮火させた。

「……でしょうね。いや、冗談抜きで。あたしはあなたが一番の難関だと思っていましたよ。選挙管理委員会副会長長者原融通先輩！」

漢字だけ並べると意外と格好いいな。

「だから当然、手は打ってあります」

不知火がスカートのポケットから一枚の紙を取り出し、長者原先輩に叩きつけた。

「なっ……！？それは委任状！？選挙管理委員会会長大刀洗斬子からの……！？」

……えっ？マジで！？

「不知火、ちょっと見せてくれ」
「いいよ～」
『？』

不知火が俺に委任状を手渡してくれた。
その行為にみんなが頭に？マークを浮かべている。
俺はその視線を無視して、それを食い入るように見る。長者原先輩も俺の横から委任状を見つめた。

「嘘……。マジであの人の字だ……」
「た、確かに。これは会長の字ですね……」
「「（あの人、起きていたのか……）」」

俺と長者原先輩の考えていることがシンクロした気がする。

「確認してもらったとおりです。彼女は彼女で堅物ですから口説き落とすのに一ヶ月以上かかりましたけれど、生徒会戦挙に関してのみこの通り。この不知火に全権を委任させていただきました！」

不知火が自慢げに語りかける。

「長者原先輩、期間限定とはいえ上司の立場からお訊ねしますが、球磨川先輩の会長戦における代理立候補、認めていただけますね？」
「……それが委員会の決定であれば、副委員長の私は従うだけです……」

不知火の満足げな笑みと、したり顔が混ざりあくどい顔になっている。

「一ヶ月以上って……。あいつ俺達が過負荷と戦っている間ずっと、選挙管理委員長を相手取ってきたのかよ。暗躍どころじゃねえ。そんなの、立派に一つの戦いじゃねーかよ」

そう。そしてこれが鍋島先輩と不知火の違うところ。

鍋島先輩はルールの裏をかくけど、不知火はルールそのものを変えてしまう。

「さて、あたしからは以上でーす。とはいえ？当人の意思確認はしないとね。どうですかお嬢様？私の提案に乗っていただけますか？」

「……貴様の提案というのが気に入らんが、しかし確かに貴様と戦っても始まらん。そそのかされてやるよ、好きにしろ」

黒神のため息交じりの声が聞こえる。

こいつらは本当に犬猿の仲だな。いや、それでも言うほど悪くはない、のか？

「ただしもちろん。もう一人の当人である球磨川が同意するのならの話だ」

「だ、そうですが。どうしますか球磨川先輩？戦いますか？戦いませんか？」

「決まってる。戦うよ。私は、めだかちゃんと戦う。そのために、私はこの学園に転入してきたんだ」

俺と同じような眼をした球磨川が、黒神めだかという自分の裏側を見つめた。

「……さいですか☆」

球磨川の表情とは逆に、不知火は嬉しそうに笑う。

「んじゃ、これで決定って事で！長者原副委員長。あたし細かいことわかんないからあとの仕切りはよろしくねー☆」

「は、はぁ……」

嵐が通り過ぎたかのような長者原先輩の顔。

ま、そうなるわな。

「あたしの出番はこれで終わり、さ。ごちそうさまでしたっと！」

不知火は善吉と顔を見合わせ、二人とも笑った。

そして、俺の前に不知火が並ぶ。

「あ、礼君。報酬は夏休みに入る前に言っていたすき焼きね？」

「いいぜ。焼肉もつけよう」

「話がわっかる～☆」

ま、今回は不知火さまさまだからな。

出費はいとわないで置こう。まぁ、全て食べ放題だが。

「……じゃあ長者原君。時間も押していることだし早速始めようか。私は『人』のカードを選ぶよ。めだかちゃんと話の決着に、それ以上ふさわしい一文字はないだろう」

十二枚の並べられたカードの頂点に君臨するかのように置かれている、黒塗りのカードを選んだ。

長者原先輩がそのカードを捲ると、そこにはいつも書かれている文字など存在していなく、全くの白紙だった。

「ええ。つまり『人』カードはジョーカー、所謂ワイルドカードでございます。生徒会戦挙は性格上、常に挑戦者側に有利なレギュレーションで行われてきましたが、会長戦の『人』のカードに限り、現生徒会長……この場合は黒神さまに自由に戦挙のルールを決めていただくことになるのでございます」

へぇ……。そんなカードがあったのか。

「……敵側の出す条件に無条件に従って戦う羽目になるわけだ。やれやれ、最後の最後で私らしいカードを引いちゃったなぁ」

球磨川が天を見上げる。そして「よかった」と呟いた。

「よかった。不利(そう)じゃなきゃ、過負荷(わたし)が勝ったことにはならない」

「異存はないようだな。ならば会長戦のルール、好きに決めさせてもらうぞ」

さて、不知火ではないがこれは見ものだ。

マイナス十三組と完璧な決着をつけるルールとなると……。

「名づけて『人間比べ』。ステージは箱庭学園全域。スタートはたった今この場所から。ファールはなし、武器を使おうと何をしようと構わない。タイムアップもなし、決着がつくまで永遠に戦い続ける。そして、ルールは唯一つ」

ここまで一息に言うと、黒神は高らかに宣言した。

「『負けた』と思ったほうの負けだ」

……流石！

「裏をかくも変えるもない。これ以上に禍根の残らんルールは他にあるまい」
「……あひゃひゃ！やっぱ敵わないなあ。それでこそお嬢様だよ！」
「それでは、鳴神靖人さまもカードをお選びください」
「俺も？」
「はい。今回、補佐は会長戦のルールに更に一つ、ルールをつけて戦います。それが、今回の補佐の戦いでございます」
「……そうか。では俺は『亥』のカードを選ぼう」
「『亥』のカードでございますね。わかりました」

兄貴の選んだカードを捲る。そして、カードかかれている言葉は。

「それでは、補佐戦の試合形式は『人間比べ』と『猪突猛進』に決定いたしました」
「『猪突猛進』……。ルールはどういった内容なのですか？」
「『猪突猛進』のルールはいたって簡単でございます。『防御をしたものの負け』という試合形式です。直接拳を受け止めず、避ける行為のみ許されます」
「それって……！！」

善吉だけではなく、こちら側の皆の顔が青ざめる。
それにしても兄貴の能力が十全に生かされる試合形式だな。

「なお、補佐戦には私自らが審判となり、お二方についていきます。異存はありませんか？」
「ない」
「俺もないです」
「だ、大丈夫なのかよ礼！！お前書記戦の時！！」
「問題ないさ。それに、この試合形式は願ったりかなったりだ」

「え……？」

そう、兄貴もきっと同じ気持ちだろう。

「過負荷に対して失礼かもしれないが、それ以前に俺の兄貴だ。考えることは嫌でもわかる」

「礼、待ちに待った兄弟喧嘩の時間だ。ここで止めるとか言うなよ？」

兄貴が嬉しそうに拳を構えた。

……愚問だな、兄貴。

「誰が止めるって？親父との願いよりもずっと待っていたんだ。この時、この瞬間を！！異常も、普通も、過負荷も！！何も関係のない！！この喧嘩を！！世界は、こんなにも美しいのだから！！」

「それじゃあ球磨川、俺たちは先に始めるぜ？」

「……うん。私はもう少しめだかちゃんとお話したら始めるよ」

「それでは、補佐戦開始します！」

長者原先輩の言葉が放たれた瞬間に、俺と兄貴は同時に互いの顔面を全力で殴り飛ばした。

「……！！」

「ぬぁっ！！」

全力で殴ったために、お互い隙ができる。

そこを狙い、また拳を突き入れた。

「うらあああああああああああ！！」

「ぬあああああああああああ！！」

お互い、避けることも捌くこともせず、ただ純粋に殴り続ける。
拳同士がぶつかる瞬間に、俺たちを中心とした風が狭い一室を震わす。

「礼!!ここじゃあ狭すぎる!!場所を変えるぞ!!」
「ああ!どこがいい!?」
「見晴らしのいい場所がいいなぁ!!」
「それじゃあ、一つしかないな!!」
「「時計台!!」」

殴り合いの舞台を変えるべく、お互い殴り続けながら窓を割り、地面に到着。そして時計台を目指しながらの殴り合い。
それにしても、一撃一撃がまぁ重いこと。受け続ける身にもなれってんだ!

「「ウオらあああああああああああああああああああああ!!!!」」

殴り合いながら、拳を見切り、避ける。
それでも避けきれない拳によってお互いの制服がボロボロになり、身体には痣や傷が増えていく。
たとえどれほど痛くても、今このとき、この瞬間!!

「ちくしょう!!楽しいなあ!!」
「全くだ!!兄弟喧嘩も悪くない!!ずっとこうしていたいと思うほどだ!!」

時計台を駆け上がりながら、俺たちは笑顔で殴りあう。
兄弟喧嘩は初めてだが、学園を背負っているとか、負けたら学園が

終ってしまうとか、そんなのは些細な問題に感じるほど充実した喧嘩。

「ん？下からなにか……」
「礼いいいいい！！どけえええええええ！！」
「黒神いいいいいいいいいいいい！？」
「靖人君！！そこをどくんだあああああああああ！！」
「球磨川までもかあああああああああ！！」

下から俺たちと同じように戦いながら駆け上がってくる二人を避けながら、兄貴と殴りあう。
すげえ、あいつら後から来たのに頂上に到着しちまった……。
そして俺たちも、頂上に到達する。

「なんだ、もう頂上か！！」
「本気でお互いを同時に殴るってのどう？」
「いいなあ！それじゃあ行くぞ！！」
「「せーーーーーのっ！！！！！くたばれえええええええええええええ！！！！」」

時計台頂上にたどり着き、真上から見下ろす太陽に見せつけるように拳を振るう。
お互いの顔面に、まじりっけのない本気の拳が飛んできた。

「ぬおおおお！？」
「うおおおお！？」

お互い殴られた方向に吹き飛んだ。
つまり、時計台頂上から校舎の屋上、体育館の屋根へと吹き飛ぶ。

「「うおおおお!?死ぬうううううう!!」」

そんなことを叫びながら頂上から落下し、背中を叩きつけられた。
落下の衝撃でコンクリートが凹む。
うおおお……背中というか背骨まで痛えええ!!

『礼いいい!!今いくぞ!!』

兄貴の叫び声が俺のいるところから対角線上に聞こえてくる。

「げっ!もう叫べるのかよ!!回復はっや!!」
『日之影空洞の耐久力に感謝ってところだ!!』
「少し羨ましい!!」
『だがなあ!俺も過負荷という縛りを超えてお前と戦う!!見せてやるよ!!俺の本当のスキル!!』

猛ダッシュで俺のところまで駆けてくる兄貴の叫び。

『行くぜええ!!「剰々尺猟(アップダウン)」!!!!』

兄貴の声が聞こえたと思った瞬間、兄貴の姿が屋上のフェンス越しに見えた。

「うっそ・・・!!??」
「残念ながら、現実だあああ!!!」

フェンスを掴み、飛び越える要領でとび蹴りを放ってくる。わかりやすく言えばライダーキックだ。

「うおおおお!!回避!!!」

転がるようにしてその場から離れる。
兄貴の蹴りが俺のいた場所に寸分たがわず放たれると、屋上のコンクリートが破壊された。
そして、また落下。

「何しやがった兄貴！？落ちるううううううううう！」
「これはなぁ！自身又は他人の攻撃力から耐久力などを最大限または最小限までいじることができるスキルなんだよ！！」

落下しながら、兄貴の嬉しそうな声が聞こえる。
そして、はぁと息をつくと兄貴はなにかを悟ったような顔で眼を細めて言い放った。

「今日は落下が多いなー……」
「しみじみ語るな馬鹿兄貴いいいいい！！」

第六十四箱　会長戦＆補佐戦　『開始』　（後書き）

「安心院なじみの能力講座！」
「やあ。前書きから作者の申し訳ない言葉を聞かせてゴメンね」
「いや、もうほんとうにごめんなさい」
「作者出てくるんじゃないよ。礼君は？」
「現在落下中」
「……仕方ないね。それじゃあ、今日の能力はこれだ」

剰々尺猟（アップダウン）：自身又は他人のステータス、つまりゲームで言う攻撃力、防御力などを自由に変えられるスキルだ。
ただし、幾ら上げれると言っても自身の限界以上は上がらない。
使いこなすにはそれ相応の努力が必要ということだよ。
ちなみに、下げることに対しての限界は赤ん坊までだ。それ以上は下がらないみたいだね。

「今日はここまでだよ」

第六十五箱　会長戦『弐』、補佐戦『終了』

「前回までのあらすじいい！！！！」
「お前誰だ！？」
「俺にもわからん」
「気にせずどうぞーーーー！！」

兄貴の蹴りが屋上に炸裂。蹴りぬかれたコンクリートは崩壊し、現在落下中☆
そして、今の声は誰だ！？

「てなわけでぇ、空中での殴りあいだあああああ！！」
「兄貴テンション高すぎるよねぇ！？どうしてそんなに高いのですか！？」
「人は過去の英雄にあこがれるんだよ！！仮面ライダーにな！！」
「もう兄貴のキャラが掴めねえよ！！どうなってんだよ！！」
「見ろー！！礼――――！！今お前のお兄さんは立派なヒーローだぞー！！」
「破壊した張本人な上に現在進行形で殴り合っている人間が言う台詞じゃないよねぇ！！どちらかっていうと悪役じゃね！？」
「はっはっはぁ！！そんなことは些細なことだあああ！！！はげるぞ？」
「いきなりクールダウン！？兄貴のテンションがおかしいよおおおおおおおおおおおお！！！」

殴りあいながら叫ぶ。ここまで喋れるのはお互いの攻撃をいなし続

けているからだといっておこう。

「そっれにしても、礼強くなったなぁ！だが、兄としては負けるわけには行かないんだよ！！」

「うっっっおおおおおおおお！！？？」

兄貴の拳の重さが上がる。いなしている腕が痺れるほどの威力。

それを、腹に一発頂いた。メリメリと音を立てて俺の腹に食い込む。

そして、兄貴が腕を伸ばしきった瞬間、俺は教室の窓を突き破りグラウンドへ一直線に吹き飛ばされた。

ゴオオオオオオッ！と音を立て風圧が俺の背中を押し返そうとするが地面への直線運動はとどまることをしない。

そして、背中に衝撃を受けて血を吐き出す。

「がっ……ぁ！！」

「礼、お前に一つ言っておくことがある。お前はまだ負けてはいない。だから、同じ舞台に立つ弟に、俺は言う」

あの高さから、何事もなかったかのように着地して、俺の下まで来ると兄貴は太陽を背に話しかけてきた。

「……な、に？」

「俺は、お前のことを一度も忘れはしなかった。親が虐待していたときも、俺は自分の非力さに腹が煮え繰り返りそうだった。礼が殴られているのを見て、自分の弱さを嘆いた。だから、俺は鍛えに鍛え続けた。あんな奴に負けないように、ただひたすら、鍛え続けた。誰にも負けぬように、誰にもお前を殺させないように」

拳を握り締め、顔を怒りと情けなさに歪めながら語る。

「球磨川と手を組んだのはこの理由だ。お前が球磨川たちといれば、心はそのままでいられる。心を腐らせていくとしても、それでもお前は笑顔で幸せになれる」
「そう、だな……」
「それでも、お前は諦めなかった。それどころか、腐ることを拒み、一番苦難な道を選んだ。俺は、それがたまらなく嬉しかった」
「……」
兄貴が拳を握り締め、決意に満ちた顔で言う。
「俺は、そのときに決めたよ。『絶対に、お前を改心させる』って」
「……」
「幾ら喧嘩しようと、俺はお前のことを大事に思っている。だから、書記戦のときのような目をしないように、今度こそ、俺はお前に生きる意味を見出させる」
「……ぁぁ」
兄貴が、本物の兄貴が、俺に向かって言う。
黒神のように凛っ！としていて、この人は、俺の大事な家族は俺に向かって言い放つ。
そして、あのときの球磨川とは違ったアプローチで、俺を救おうと画策してくれている。
「それに、見て聞いてみろ」
「……？」
『そんな奴に負けてんじゃねえぞ黒神――――――っ！お前を倒すのは、この俺だあああああああっ！！』
新校舎の屋上で、何人、いや、数えるのも失礼なほどの人が、そう叫んだ。

あれは、まさか……。

「……そう、か」

先頭を飾っているのは、都城先輩、行橋先輩を始めとする『十三組の十三人』、雲仙冥利率いる『風紀委員会』、その他十三組の生徒に剣道部、特待の競泳部。
つまり、黒神の敵だったものが、黒神のピンチに駆けつけたのだった。

「あれが、お前のスキルを完成させた結果だ。お前も、ああなれるんだよ。敵も、味方も関係ない。絆なんてそんなものだ」
「そうか……」

黒神、お前ほど羨ましく、格好いい人間はいない。
俺は、お前に出会えて本当によかった。
だが、その大人数は黒神を見てから今度はグラウンドにいる俺たちの方向を見た。

「次はわかっているな？」
「当たり前だろぜぇ？ここにいる人間は全員、言わなくても言いたい事は同じだろ？」
「当たり前だ！それじゃあ、いくぜ？」
『礼――――――――――――！！勝って祝杯挙げさせせろおおおおおおおおおおお！！今までの分の「礼」を、ここでさせやがれ――――――――――――――！！！』
グラウンドどころか、学園中に広がるほどの、声援。
名前と感謝を掛けたつもりか。この状況ではあまり笑えないぞ？

「……ああ、兄貴」
「なんだ？」
「わかったよ。神様が、俺にこのスキルを与えてくれた理由が」
「……そうか」
「ああ。だから、申し訳ないかもしれないが今回の喧嘩、絶対に俺が勝つ！！」
「ああ！遠慮はしなくてもいい！！この喧嘩、負けることはたった一つだ！！いいなぁ！？」
「当たり前だ！！防御なんて、もう俺たちには必要ない！いなすことも、避けることもしない！！」

俺は、負けない。皆の為じゃない。自分の、自分自身の大切なもののために！俺は勝つ！！

『礼――――――――――――！！！さっさと決めろ――――――――――――――――！！』
「兄貴として、負けられねえんだよ！！！『剰々尺猟（アップダウン）』！！耐久性の数値を！全て攻撃力に回せ！！」

兄貴が一撃にかける。だからこそ、俺も一撃にかける。
この学園で繋いだ絆が、俺の力になる！
だからこそ、負けない！！

「うおおおおおおおおおらああああああああああああああああああああ！！！」
「いくぞおおお！！『縁結神礼（コンダクター）、祈願終了（フィナーレ）！！』」
お互いの拳が、振りぬかれた。
そして、グラウンドを中心とした暴風が、観客を襲った。
砂埃が舞い、俺たちを覆う。

その中に、長者原先輩が入ってきた。

「お二方!!大丈夫ですか!?」

「……長者原君」

「靖人さま……？どうなされました？」

「……俺の、負けだ」

砂煙が晴れると、弟(れい)を抱えた兄(やすと)の姿があった。

「……よろしいのですか？」

「ああ。最後の最後で防いじまった。両腕を見てくれれば、良く分かるよ」

「それでは、礼様は私が。袖を捲っていただけますか？」

「ああ。よっと」

両袖を捲り腕を防ぐ形で重ねると、拳の赤い跡がくっきりと残っていた。

「情けねえ、殴って決めるつもりが、防いじまうなんてな」

「……それでは、この証拠を元に補佐戦『人間比べ&猪突猛進』は鳴神礼さまの勝利と正式に認定いたします!!続いて、会長戦の方の勝敗へと移らせて頂きます!!」

『よっシャアアアアあああああああああああああ!!!!!』

礼の勝利を聞いた瞬間、観客が一斉に沸いた。

「……あぁ、兄の面目丸潰れだな」

《そんなことはないよ、靖人》

「なんだ、零華か。俺の心の方に着たのかよ」

《アンタとおしゃべりするのなら、こっちのほうが都合いいのよ》
「左様か」
《……どうだった？礼は》

零華の言葉に、靖人は「クッ！」と笑って、涙を流した。

「俺は、最高の弟を持って幸せだよ」
《よかったわね、靖人》
「ああ。でも、お前も幸せなんだろう？」
《まあね。礼が生まれてきてくれて、そして、ずっと一緒にいたから、幸せではない時間なんてないに等しかったわ》
「そうだな。それじゃあ、これからは」
《うん》
「《礼の幸せな時間を作るとしよう》」

生き別れ、死んでいった片割れの双子が、たった一人の不幸な弟のために手を取り合う。
そして、二人の眼に映る礼は、絆を繋いできた友人達に囲まれて幸せそうな顔をしていた。

球磨川ｓｉｄｅ

私は、鳴神兄弟を通り過ぎた後、めだかちゃんに思いっきり殴られて校舎の天井に叩き込まれた。

「（……やっぱり、めだかちゃんは強いや）」

そう思ったと同時に、めだかちゃんが同じ校舎の天井に着地する。

「（……私とは本当に正反対で、強くて可愛くて綺麗で気高くて、嫉妬したくてもそんな気持ちすら起きないほどに清々しいほど圧倒的に絶対的だ）」

「ははっ！球磨川、楽しいなぁ！！本当に貴様と戦うのは楽しい！！！」

こっちの気持ちなんて知らないくせに、よく言うよ。

負けることしかできない私の気持ちなんか知らないで、本当によわっちい者の気持ちなんて知らないで嬉しそうに言う。

だからこそ、私は憧れた。年下に、恥も外聞なんかも気にせず、本当に憧れた。

私にないものを全て持っているめだかちゃんが、とても羨ましかった。友達になりたかった。

だけど、彼女が礼君を見たら、阿久根君のように私の下から取っていくかもしれないと思うと、本当に怖かった。

だから、私は彼女を嫌った。憧れを押しつぶして嫌った。

「（……でも、もうそんなことを気にしなくてもよさそうだ）」

「どうした球磨川？まさかもう負けを認めるつもりではないだろうな？」

「いやいや。ちょっと気づいたことがあってさ。いや～、わからないものだね！自分の気持ちって」

だからこそ、私は彼女に伝えなければならない。

気持ち悪がられても、伝える。

悲鳴を上げる身体を、少しずつ起き上がらせる。

『ちゃんと話して伝える。「正喰（しょーじき）」に、ね☆』

頭の中で、不知火ちゃんの言葉がリピートされる。

これは結局、不知火ちゃんのほうがマイナスとしての役者が上だったってことかな？

どうやら最初から最後まで君の手のひらの上で踊らされていたのか。

まったく、感謝してもしたりないじゃないか。

「めだかちゃん、私からの相談を受け付けてくれないかな？いや、受け付けて欲しい」

「！！……」

「このまま戦い続けても、おそらく決着はつかない。どれだけ叩き伏せられても私は絶対に負けを認めない。だけど、それはめだかちゃんも同じだと思う」

「そんなことはない。少なくとも私は、貴様に勝つために最後まで全力で頑張るつもりだ」

「光栄な限りだけどね？まあ聞いてよ。そこで、この相談だ」

私は、一本の螺子を取り出す。正し、いつもと違うのは、プラス螺子ではなくマイナス螺子。

「私が『大嘘憑き（オールフィクション）』を捨ててまで取ってきた過負荷（マイナス）、私の始まりにして禁断の過負荷（マイナス）である『却本作り（ブックメーカー）』を、避けずに受けてくれないかな？」

私の持っている螺子が、伸びる。

それに反応して、善吉君たちが気持ち悪がった。

「『大嘘憑き（オールフィクション）』が現実（すべて）を虚構（なかったこと）にする過負荷だとするなら、『却本作（ブックメー）り（カー）』は強さ（プラス）を弱さ（マイナス）にする過負荷だ。具体的例を挙げると、この過負荷の被害を受けた者はみぃーんな！不完全（わたし）と完全に同じになるんだ」

礼君も言う『チート女』こと安心院さんが封印せざるを得なかった、曰くつきの過負荷。

肉体も、精神も、技術も頭脳も才能も！ぜーんぶわたしと同じところまで落ちてしまう。

「それでも、君の心が折れなかったら、私は負けを認めるよ」

「めだかちゃん！そんな提案聞く必要はねーよ！どうせ何か企んでいるに決まってる！今までコイツがしてきたことを忘れるな！！」

「五月蠅いよ善吉君。二歳からの幼なじみかどうか知らないけどね、忘れないで。めだかちゃん、そして礼君に最初に出会ったのは私で、そして二人に憧れたのも、私だ」

譲れない。後から掠め取ろうとした君に、私を否定なんかさせない。

「さあ、決めてよめだかちゃん。君は、私の過負荷（きもち）を、受け止めてくれる？」

「そんなこと、言うまでも無い。２４時間３６５日、私は誰からの相談でも受け付けるし、どのような気持ちも受け止める！！」

「……嬉しいよ、めだかちゃん。そんな君が、大好きだ」

「そうか、もちろん私も、貴様のことが大好きだぞ」

「ありがとう。だけど」

『私を』じゃなくて、『人を』でしょ？

私は、めだかちゃんの胸めがけて、螺子を投擲し、貫いた。

第六十六箱　会長戦『終了』

球磨川ｓｉｄｅ

「めだかちゃん！！」

善吉君が、めだかちゃんの胸を貫いた螺子を見て叫ぶ。

「騒がないで。見た目はショッキングだけど肉体へのダメージはほとんどゼロだよ。『却本作り（ブックメーカー）』はあくまでも、心を折る過負荷なんだから」

「クッ……！！」

まぁ、そうは言ってもショッキングすぎるよね。心配する気持ちはわからなくもないよ。

「『……あー』『なんかもうどーでもいいやあ』」

めだかちゃんから、今までのめだかちゃんからは想像もできない言葉が発せられた。

「『私の負けだ』『許してくれ』」

めだかちゃんの髪の色が真っ白になり、前の私の口調になる。

そして、今の台詞。

……勝った！！

「とでもいうと思ったか？」

「！？」

私だけじゃなく、めだかちゃん側の人たちにも衝撃が走る。

ど、どうして……？

「プラスをマイナスにする過負荷、か。確かに恐ろしい。『大嘘憑き』や礼の『版劫逝謎』よりよっぽど恐ろしい」

ゆっくりと、地面に四肢をつきブリッジのように起き上がる。

「だけどそれは、球磨川。基準となる貴様が本当に弱かったらの話だ」

そして、その相貌は私を見つめ、いつもどおりの覇気を感じさせるほど、鋭い。

「過負荷のために戦い、過負荷を胸に戦い、過負荷の立場に立って戦う。なにより！過負荷のためにも戦っている貴様が、そんな心が弱いわけがないだろう」

地面に突き刺さった螺子の先端を折り、自分の足で立った。

ありえない……！

「私はそんな貴様が今も昔も大嫌いで、そして大好きだよ」

「そ、んな……！私の立場に下がってまで！！どうして君はそんなことが言えるのよ……

わからない！！」

「わかってください、球磨川先輩。私はあなたを敵視こそすれ、下に思ったことなど一度もないのです」

そ、そんな言葉は、いい！
私と、私と同じ立場まで下がっても心が折れないというの！？
そんな……馬鹿な！『却本作り（ブックメーカー）』が通じない！？

「おい球磨川！見ての通りめだかちゃんにはお前の禁断（はじまり）の過負荷（マイナス）は通じなかったぜ。さあ！約束どおり負けを認めてもらおうか！！」

善吉君が叫ぶ。
負けを、認める？
そんなことをしたら、私は、私は二度と！礼君と一緒に、礼君を、礼君を助けられなくなる！！

「嫌、だ！認めない！！私は、負けてなんかいない！！」
「！？」
「そんな約束した覚えがない！！何を言ってるのかわかんないよ！！さあ！戦いを続けよう、めだかちゃん。私と君の！三億年待ち焦がれた決闘だ！！」
「……ふざけんじゃねえ！いい加減にしろよ球磨川ぁ！！潔く負けを認めやがれ！悪あがきにもほどがあるぞ見苦しい！！」

見苦しい？知らないね！！私はそんな約束した覚えはないし負けてもない！！

「善吉」

めだかちゃんが視線を後ろの善吉君に向ける

「負けたくないと思う気持ちの、どこが見苦しい」
「……めだかちゃん……」
「球磨川、貴様は正しい。それでいいのだ。約束なんて守らなくて

いい。そうやって心を守る貴様こそが、やはり十分に強いのだ。勝つものが強いのではない！負けて這い上がる者が強いのだ！！」

ははっ、誰が……。

彼女の顔を、殴った。

「だから、負けていないってば」

そこまで言うと、今度はめだかちゃんが殴り返してきた。

「だったな」

「そうだよ……ふふっ！」

「「ははははははははははははは！！！！！！！」」

先ほどの礼君たちの喧嘩のように、殴りあう。

他の人の声なんて入ってこない。

ただ、私とめだかちゃんの笑い声だけが聞こえてくる。

なるほど、礼君たちが楽しそうに殴り合っていた理由が、わかった気がする。

確かに、面白い。礼は、いや靖人君もか。二人はこんな楽しい戦いをしていたのか。

まあ、それでも限界は来る。

私と同じになっためだかちゃんは、心は折れなくても肉体的な面に関しては完全に同じになったわけだから、

「う、わ……！」

「う、ぬぅ……！」

お互い、同時に膝が崩れた。

さ、流石に、体力ない私では頑張った方なの、かな？

「おー、やってるやってる」
「あらら……黒神さんたちなんだかボロボロじゃありません？」
「どーせいつもの露出癖でしょう。どれだけ脱ぐのが好きなんですか、あの女は」
「しかし相変わらず身体張ってるなあ、あいつは」
「ひゃは――――バケモン女は手ぇ抜くってことを知らないのかねぇ」
「そういえば聞いたか？この戦いは私たちを守るための戦いらしいぞ？」
「そうなの？それはとっても感動的ですねー（棒読み）」
「でも、確かに苦戦は苦戦みたいだな。このままだと引き分けっていうか、黒神のことだから『今のコイツになら負けてもいい』とか思ってんじゃねーの？」
「おいおいそれは困るぞ。一人だけ特別扱いはズルいぜ。よし！ここはどうだ皆の衆。全員声をそろえて黒神に「あのセリフ」を言ってやるというのは」
「「あのセリフ」？ああ！一度入ってみたい「あのセリフ」か！よかろう！黒神のことは呼び捨て！一人称は「俺」、二人称は「お前」で統一だぞ？せーの」

『そんな奴に負けてんじゃねえぞ黒神――――――っ！お前を倒すのは、この俺だあああああっ！！』

隣の校舎の屋上から、男女入り混じった叫び声が聞こえてきた。

「だ、誰なの……？箱庭学園の生徒みたいだけど、見たことのない

顔がいっぱいいる……？」

「おやおや『見たことない』とは冷たいね、禊ちゃん。その『見たことない』彼らこそ君が抹殺しようとしたエリート軍団、君がクーデターを起してまで召集しようとした登校免除組、異常選抜特別特体生、箱庭学園十三組の面々だというのに」

「ーーーーーーーーーー！！！」

「けっ……。それがどうしたんだってんだ。日之影先輩の応援の時はもっといっぱい生徒が集まっていたし！邪魔にならないように控えているだけで！球磨川先輩のためならマイナス十三組だって一人残らず集まるぜ！」

「……違うんだよ、志布志。あいつらは、そういうのとは違うんだ」

「あ？」

「あいつらは全員、めだかちゃんの敵なんだよ」

「！？」

そうか。これが、これこそが、彼女と僕の、決定的に違う場所。

礼君の夢を無意識的にしろ意識的にしろ、胸に抱いて、戦っていたのか。

私は、礼君の真似をしてただけで、めだかちゃんとはそういうところも違っていたのか。

「そうさ、ピンチの時に敵が駆けつけてくれるのは、この世でめだかちゃんだけだ」

彼女は、声援というか、激励というか。ともかくそんな言葉をかけてくれた生徒に恥じぬよう、凛ッ！っとした姿で背を向け、立ち上がった。

実に、彼女らしい、綺麗な立ち姿だ。

『礼ーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！勝って祝杯挙げさせろおおおおお

おおお！！今までの分の「礼」を、ここでさせやがれ――――――――――！！！！』

そして、声援は礼君にも向けられた。

『……ああ、兄貴』

『なんだ？』

『わかったよ。神様が、俺にこのスキルを与えてくれた理由が』

礼君の、嬉しそうな声がグラウンドから聞こえてくる。

そうか、私は、いや。これも、不知火ちゃんのおかげかな？

「勝たせてもらうぞ、球磨川。私は味方のみならず、敵の思いも背負っている。何より、礼が、私の大切な幼なじみが教えてくれた誇りを、私も憧れ、それを極めたいと思うがゆえに！」

私も、抱けるかな？君たちのようなものを胸に……。

「何を言う。貴様はもう少しで抱けるのだ」

「そっか。……めだかちゃん、私もいつか、あんな風に君のピンチに駆けつけてもいいかな？」

「……もちろんだ」

そして、私の顔面を、とても重い一撃が捕らえた。

「這い上がれ、球磨川禊！貴様に助けられるその日を、私は楽しみに待っている！！」

ふふっ、めだかちゃん。

やっぱり君は、礼君みたいで格好いい。

あの時、あの病院で私に、礼君が私にかけてくれた言葉。
それが、今このときになってふと、頭に浮かんだ。

「君の生きる意味になってあげる」

それは、彼がしゃべられないからこそ、冗談のつもりだったんだ。
礼君は覚えていないかもしれない。でも、私はあの言葉を覚えている。
彼はたった一言、『さよなら』というお別れの挨拶ではなくこう言ったんだ。

『ありがとう』

初めて、感謝の言葉をもらった。人に、初めて感謝された。
植物人間であった彼が、言ってくれた言葉。
それが何よりもくすぐったくて、そして、胸の奥が温まる言葉で、
それでいて、涙を流させる言葉だった。

そして、気づいたんだ。
この言葉を何度も脳内で再生しているうちに、また、彼の声が聞きたくなった。

一言、たった二文字でもいい。
彼の声が聞きたかった。

そして、気づいた。
ああ、これが、本当に人を好きになるっていうことなんだと。
ずっと、彼のことを思い続けてる。
これが、人を好きになるってことなんだ。

「『ああ、ずるいよ……』『冗談のつもりだったのに』『本気に』
……本気になっちゃったじゃないか」

私は、彼を忘れない。
絶対に、彼を忘れない。
私は彼の、生きる理由になるんだ。どんな些細なことでもいい。彼が私を見てくれるように。どんな感情でも一緒にいたいと思ってくれるように。

「私は、彼と一緒にいたい」

ああ、ダメだな、私は。
やっぱり、負けてるじゃないか……。

「球磨川さま、大丈夫ですか？」

上からかけられる言葉で、意識が戻ってきた。

「長者原、くん……？ごめんね、ちょっと待ってて……」
「そのままの体制でも構いません。さて、会長戦のルールである『人間比べ』は『負けと思ったほうの負け』という規定でございます。

ですので、現状でも球磨川さまが負けを認めておられないのであれば、決着がついたと見做されません。さて如何でしょう。球磨川さまは黒神さまに、負けたと思いましたか？」

……あぁ。全く、聞くまでもないことを。

「私の負けだよ。ああ、ちくしょう。悔しいなぁ、幸せだなぁ！」

「それでは、会長戦は黒神さまの勝利で正式に認定いたします！そして、補佐戦は礼さまの勝利！つまり通算成績は現生徒会側の四勝一敗一分！よって本生徒会戦挙は現生徒会側の勝利！箱庭学園の生徒会長は！引き続き黒神めだかさまに勤めていただくことに相成りましてございます！！」

そうだ、礼君ならなんていうんだっけ？

えっと、あ、そうだそうだ。

「お疲れ様でした」

「うぬ。お疲れであったな球磨川！どれ、手を貸そうか？」

髪の色が元の黒色に戻っているめだかちゃん。『却本作り（ブックメーカー）』の効果が切れちゃったか。

「大丈夫だよ、もうちょっとしたら立てるはずだから」

「そうか」

めだかちゃん、やっぱり君は格好いいよ。

……あれ？

「め、めだかちゃん」

「ん、どうした？球磨川」
「れ、礼君は？」
「礼君はこっち」

人吉先生が私の頭を膝に乗せてくれると、私の寝ている隣に礼君が眠っていた。

「あれ……？礼君どうしたのかな……？」
「久しぶりに本気で殴りあいしたから疲れたんだって」
「そう、ですか」

少し荒いが、安定した寝息が耳元をくすぐる。
大丈夫みたいだね。

「でも、よかったわね。禊ちゃん。やっと、ちゃんと負けられたね」
「……どうせなら、ちゃんと勝って礼君に自慢したかったんですけどね」
「大丈夫だよ。その気持ちを忘れなければ、いつかきっと勝てる日が来るよ。皆そうやって負けたり勝ったりしながら、強くなっていくんだから」
「……球磨川さん」

飛沫ちゃんと蛾々丸ちゃんが歩いてくる。靖人君は、礼君の傍で私を見ている。
言わないと、一緒にいてくれた三人に。

「ごめんね、負けちゃった」
「「「……」」」
「だけど、安心して。これから君たちがどうなるかはわからないけれど、君達のことは、マイナス十三組の皆は私が、身を挺してでも

守るから」
「身を挺してでも守る……？ケッ！今更ふざけたこと言ってんじゃねーぞあんたは」
そう言って頭を掻いたあと、飛沫ちゃんは片膝をつけて、私の手を握った。
「球磨川さんは、そんなことずっとやってきたじゃねえか。だから今度はあたし達が、あんたを守る番だ」
その後、『私が改心していい奴になった』だの、『誰よりも最低だと思っていた』とか、『私たちも改心しないわけにはいかない』など言われてしまった。
えっと、途中のセリフは少し酷いんじゃないかな？
「ま、いきなり変わるとか無理だけどさ」
私の両腕を肩にかけ、立たせてくれる。
「あたしたちも勝ったり負けたりしながら、ちょっとずつ変わっていこうぜ」
「待ってよ。あなたたちどこへ行くつもり？」
「え、いや……。どこってわけじゃないですけど、戦挙戦で負けちゃいましたからね。とりあえず箱庭学園から出て行かないと」
そういうと、人吉先生は書記戦の約束で破棄されたし、生徒会長を決める勝負でしかなかったと言ってくれた。
そ、そりゃそうですけど。居座るわけにも行かないし、教室もいつまでも間借りしているわけにはいきませんしね。

「そりゃ殊勝だね。だけどうちのリーダーはそう考えていないみたいだよ？まぁ折角だから聞いていきなさいよ。驚くから！」

「長者原二年生。戦挙が終ったばかりのタイミングに恐縮だが、新たなる九十九代目の生徒会長として早速選挙管理委員会に報告がある」

ん？めだかちゃん？

「報告？はあ、何でございましょうか？」

「生徒会執行部副会長に球磨川禊を任命する。受理と手続きをよろしく頼む」

え？

『えええええええええええええええええええええっ！？』

私だけではなく、その場にいるめだかちゃん、人吉先生、眠っている礼君以外のみんなの叫び。

「く、黒神さま。正気でございますか……？」

「ん？何を驚く？副会長といえば私の対抗戦力だぞ。ならば球磨川以上の適任は他にはおるまい。もとより副会長の不在から今回の戦挙は始まったのだ。要するに私の不始末だな。なんであれそこは大いに反省しなければならないだろう」

い、いやいやだからって！！

「ならば私は副会長の任命をもって、この一連の騒動にピリオドを打ちたい」

めだかちゃんが、腕につけている副会長の腕章を外し、私に向けた。
「球磨川。貴様が必要だ。助けてくれ」
「な……」
「どうした？さっきはピンチの時に駆けつけてくれると言っていただろう。今がそのときだぞ？」
「……馬鹿言っちゃいけないよ、めだかちゃん」
流石に、それはやりすぎだ。
「敵も味方も大切にするとはいえ、私を副会長にするのは幾らなんでもやりすぎだよ。少しは善吉君の気持ちも考えてあげないと」
「……貴様はさっき、私と礼に会ったのは善吉よりも自分の方が先だと言っていたな。礼はいいとしても、私ではなく先に善吉に会っておくべきだったのだ。あの病院に善吉がいると知っていたならそうするべきだった。そうすれば、礼と同じで貴様に生きる意味を教えてくれていただろう」
それは結果論だよ。
めだかちゃんだからこそ、成立した結果。
私だったら、きっとめだかちゃんのように上手くはいかなかった。
「そして今からでも遅くはない。善吉、貴様だってそうしたいはずだよな。貴様の気持ちは私が一番よく知っているぞ！」
「……いいよ！わかった！！考えてみりゃそんな奴、野放しにしておくことよりよっぽどマシだ。球磨川！お前なんか俺たちの仲間になっちまえ！！」
「……」

全く、君たちは良くも悪くも礼君みたいで困る。
だから、私は君たちに、礼君から教えてもらった言葉を使うんだ。

「『ありがとう』だけど油断しないでね？めだかちゃん。私はあくまで過負荷（マイナス）だから、いつか君の寝首をかくかもしれないよ」
「それでいいしそれがいい。私の寝首をかくのが、貴様の一番大切な仕事だ」

全く、彼女は本当に礼君のいいところだけを持って行っちゃったみたいだ。

『もしかして、揃った……？』
『あ、ああ！揃ったんだよ！！』
『会長・副会長・会計・書記・庶務・補佐！永遠に揃わないと言われていた生徒会執行部が全員揃ったあああああああ！！』

……めだかちゃん、君は副会長にどれだけのモノを求めていたのさ。
皆にここまで言われるなんてよっぽどのことがないと無いよね。

そんなツッコミを入れていると、私の肩に優しく手が置かれた。

「めだかちゃんの我侭に付き合ってくれてありがとう、禊ちゃん。お礼と言っちゃあなんだけど、マイナス十三組の教室は僕が責任を持って用意するよ」
「元々軍艦塔（ゴーストバベル）は空き教室ばっかりなんだから、普通に頼んでくれたら幾らでも提供してあげたんだけどね」
「……敵わないな。『理詰めの魔法使い（チェックメイトマジシャン）』に「ごめん、できれば中学時代の呼び名で」ごめんごめん。真黒ちゃんは、本当に格好いいよね」
「いやいや。妹の君に「ごめん。その認識は同級生の私にはちょっ

と」ごめんね。ついいつもの癖で。それで話を戻すけど、僕は格好悪いよ。めだかちゃんが何と言おうと、誰が何と言おうと、もとより僕は禊ちゃんには残ってもらうつもりだったんだから。だって」

そこで区切ると、私を優しい眼から真剣な眼差しで見た。

「『遅れてくる二人』と戦うためには、君の力が必要不可欠だからね」

「!?」

思わず、彼から少し身体を離す。

「くじらちゃんがね、僕にだけは教えてくれたんだ。君があの子に見せたリストの内容をね」

「真黒ちゃん……じゃあ君はひょっとして……」

「そうだね、僕は憶えているよ。めだかちゃんや善吉君はどうしてか忘れているみたいだけど、彼女のことを僕は覚えている」

球磨川ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

???ｓｉｄｅ

「ふぅ、やっと来れた」

僕は部屋に入り、ソファーに座る。
そして、対面に座っているのが僕に話しかけてくる。

「……どうやら戦挙戦の決着は着いたようですな。そして首尾よくマイナス十三組の設立も完了したようです。一時はどうなることかと思いましたが、全ては落ち着くところに落ち着きましたかな」
「そして、フラスコ計画的に言えば、戦挙戦でめだかちゃんのデータがいっぱい取れて万々歳って感じかな?不知火くん」

そう、僕は今、対面に座っている現箱庭学園理事長である不知火袴くんとしゃべっている。
そんな些細なことは説明しなくても、わかっているのかな?
そして、僕の後ろには背中を向けている男の子がいる。

「ま、万々歳なのは僕達も同じだけどさ。めだかちゃんが禊ちゃんの心を救ってくれたおかげで、『却本作り(ブックメーカー)』による僕の封印も多少は弱まったけどね。今までは色んな奴の、特に礼君の夢の中をちょろちょろするだけだったけど、ようやく約束どおりに転校してこれたぜ」
「いやいや。ではおふたりはこのままマイナス十三組に入っていただくということでよろしいですかな?」

う〜ん。どうだろうねぇ。

「それは遠慮しておこうかな。正直、今更マイナス十三組?って感じだし。そもそも僕達は別にマイナスじゃないんだしね」

あ、礼君を入れるのはいいかもしれないね。僕達に。

「劣等感(マイナス)なんてくだらない。優越感(プラス)でも全然あがれない。だったら

そんな差別は無意味極まる。要するにプラスもマイナスも僕達の前では、おしなべて普通に平等なんだよ」

さて、夢の中で礼君に言った名前でも出すとしますか。

「僕達は悪平等（ノットイコール）だぜ」

それにしても、後ろの半纏君はしゃべらないね。格好つけて欲しいよ。ポーズ以外もね。

なじみｓｉｄｅ　ｏｕｔ

一方、球磨川たちは

「いやぁ、それにしても」
「どうしたの、蛾々丸ちゃん？」
「本当に、よく寝ていますね。鳴神くん」

眠っている礼君を見る。靖人君は礼君の頭をなでながら、ゆっくりと空を見上げている。
すると、人吉先生が礼君に膝枕しようとしていた。

「だ、ダメーーーーー！！礼君に、礼君に膝枕は駄目です！！」
「だ、だって！頭を痛めそうじゃない」
「そそそそ、それでもダメです！私がしますから！」
「球磨川。貴様身体を痛めているだろう。どれ、私がやってやろう」

「めだかちゃんはもっとダメ！！！」
「何故だ！？今回だけではなく今までの分の礼も込めてだな」
「いいから！！」
「いいや！よくない！！」
「「ぐぬぬぬぬぬぬぬぬ！！！」」

喧嘩しています。はい。
そして、我等が色男主人公の礼は。

「……う、ぉぉぉ……。やめてくれ……球磨川、黒神ぃ……黙ってないで助けろ善吉ぃ……」

うなされていました。
右手を空に向かって伸ばし、助けを求めていますが、二人の喧嘩に夢中で誰も握り返さなかったそうな。

「……礼君。お疲れ」

ただ、誰にも気づかれずに一人だけ、しっかりと握り返していた。
誰が握っていたのかは、誰も知らない。

第六十六箱　会長戦『終了』（後書き）

戦選編終了！！
お疲れ様でした！！今回なんと８千文字。いや～書いた書いたｗｗｗ
まあそれはさておき。
ここにきて今度は『人気投票』をさせていただきたいと思います！
というかさせてください！

これを読み終わった後、
感想の一言欄にこの小説内で今まで出てきた好きなキャラの名前を
書いてください！一人・・・そうですね、三名までとします。
そして、人気投票上位五名のお話を書きます。投票結果話も含めて。

〆切は今月の金曜日、つまり十五日までとさせていただきます。

もちろん、前に書いていた『委員会邂逅編』は書きますので。
そちらの方を書き進めながら、人気投票の結果を楽しみにしており
ます。
人気投票のキャラの名前以外も、面白い、頑張れ、もっとここをこ
うしてみたら？という感想もモチのロンお待ちしています。

以上作者のあとがきでした
それではー！

第六十七箱　復活の日常編

生徒会戦挙も終了し。ほんのわずかな夏休みが訪れた。
つまり、勉強が本分の俺達学生は夏休みの宿題消費期間。さらに、生徒会に入っている者としては勉強は疎かにはできない。これは黒神の方針である。
そして、八月十六日から八月三十一日までは学園側からも休みをいただける。
そして、今日は八月十六日。つまりは本当の夏休み初日だ。
なのだが。

「礼君、宿題しようよ！」
「礼、宿題を終らせよう」

箱庭学園のとある自習室。そこで黒神＆球磨川が入ってきた。

「お前ら、どうして……？」
「いやぁ～、そこでばったり出会っちゃって」
「ふむ、別に悪いことはないだろう？敵同士とはいえ今回の目的は『宿題』だ」
「ま、まぁかまわないが」

二人を部屋に入れてドアを閉めた瞬間、また勢いよく開かれる。

「あ、礼君～！鍋食べに行こうよ～！宿題終らせてから～！」
「礼！不知火と飯食いに行こうぜ！ま、まぁ宿題やってからな！」

……だけでは済まなかった。自習室大賑わい。

「あ、球磨川？お前は学年が違うじゃねえか」
「うん。だから礼君やめだかちゃんに教えてもらえるな～って。結果オーライ」
「そもそも十三組は宿題なんてないのでは？」

一応、俺も爺さんから十三組に異動することになったのだが、一組の宿題が提出された後のことだったので、爺さんに頼んで終らせてから本格的なクラス替えをすることになった。
なので、俺は登校義務が免除されるわけだが、まぁ家にいても何もすることはないし、生徒会補佐職に就いたわけだから生徒会には顔を出さないといけないので、学校に登校することに決めた。
暇は人を殺してしまう。読書もいいが、学校に登校していたリズムを狂わせるのはいけないだろう。

「いやあ、真黒ちゃんから『妹学』での宿題出されちゃって」

妹学？新しい名前だ……。爺さんなら知っているのだろうか？
いや、知ってるわけ無いか。なんせ妹大好きの真黒さんがマイナス十三組の教師なわけだし。
そんなことを考えていると、背筋に悪寒が走った。

「……礼、先に宿題始めていてくれ」
「黒神、『改神モード』で愛しの兄のところに向かうのはやめてくれ」
「一発殴るぞ？」
「どうぞ行ってらっしゃいませ」
「「「（保身のために人を売った！！！）」」」

気がつくと、俺は知り合いが殴られるというのにそれを黙認してしまっていた。

これは、まあ仕方が無い。本能が察知して言ってしまったことだ。
取り消すのは男じゃない。

「なに、すぐに戻ってくる」
「行ってらっしゃい」

黒神が自習室の扉を開いた瞬間、その場から消えた。

「あ、相変わらずだね。あの兄妹」
「あれは、まあ相変わらずなんだよ」
「きゃははっ！おもしろいねー！」

球磨川、善吉は少し引き気味で、不知火は流石と言うべきか、笑っていた。

「さて、宿題に取り掛かろう」
「そして何事もなかったかのように始める礼君はもう流石と言うべきなのかな？」
「今年一番変わったのは、間違いなくお前だよ。礼」
「そうだね～♪」
「そんなことはないさ。黒神だって本気で『ぎゃあああああああ！！！』……」
「『本気で～』の後が言えるか？礼……」

知っている男の人の叫び声が聞こえてきたかと思うと、何故か背中からいやな汗があふれ出してきた。

「……本気で殴ってないよね？」
「いや、あの叫び声はマジかも……」
「ふう、戻ってきたぞ」

「黒神、その制服についた赤いものは何だ？」
「ケチャップだ。兄貴の部屋に突撃したら足元に転がっていたケチャップを踏みつけてしまってな」
黒神が何事もなかったかのように言い放つ。
ちょ、まちんしゃい。

「どうした？礼」
「みょーに鉄臭いのは？」
「その後で兄貴に鼻血をかけられた。洗濯の大変さを知らない困った兄だ。お仕置きが二発に増えてしまった」
「「「「あは、ははは……」」」」

ご冥福をお祈りいたします。

「さて、宿題はどうなった？」
「お前、行ってから数分で戻ってきたくせに終ってるわけないだろう」
「ふむ、ならば早速取り掛かろう。時間は有限だ」
「オーライ。それじゃ、始めるか」
「「「いえーい！」」」

机にノート、冊子を取り出し学習スタート。

数分後。

「れ、れいくーん！教えてー！！」
「め、めだかちゃん！体罰は！！体罰だけは！！」
「『身体で覚える』という言葉を私は最近知ったのでな。間違えるたびに一回ずつだ」
「きゃはは☆お嬢様本当に楽しそうだね！ねー！礼君！」
「ま、昨日まで戦ってたんだ。二学期までの『日常編』は楽しく行きたいんだろ？」
「そっかー！あ、でね？このｓｉｎＸのところなんだけど……」

不知火が数学ドリルを持って俺のところに来る。
ここは……確か……。

「ｓｉｎθ＝ｙ／ｒで当てはめるんだ。グラフかいてみるとわかりやすいぞ」
「そっか！そうだったね～！さっすが～！」
「む、三角関数か。私もやったな！どれ、見せてみろ」
「これ、高校１年が知ってる問題なのか？俺にはさっぱりなんだが」
「いや、これは高２で習うところだよ……」

何で知ってるかって？

「私は知っているだろう？善吉」
「ま、まぁ……。めだかちゃんはな。二人は？」
「私達が『箱庭学園理事長』の娘・義理の息子ということを忘れてるね善吉～♪」
「つまりは、英才教育だ」
「な、なるほど……。通りで学年トップ１０に名前が入るわけだ……」

ま、爺さんの趣味も入ってるんだろうな。英才教育には。

天才を作る。その過程で頭脳を作り上げる。みたいな。
爺さんの教育者としての思想、行動は確かに異常に近い気がする。

「さて、善吉よ。あと少しだぞ？」
「お、おお！気づかぬうちにもう終わりが見えてきた！！すげえ！俺初めて一日で夏休みの宿題を終らせるって言う偉業を成し遂げそうだ！！」
「私もだよ！！宿題なんて今の今までやってこなかったというのに！！」
「それはどうなんだよ球磨川……」

さて、俺のはもう終わりだな。

「礼くーん！あたし終わったー！」
「お、俺も終った！！やっほう！！」
「な、なんとか……」
「うむうむ、これで心置きなく夏休みを満喫できるな！」

黒神が扇子を取り出して嬉しそうに言う。
ふう、明日から本当に自由な日々だ。

「と、言いたいところなのだが。礼よ」
「ん？」
「選挙管理委員会会長から、貴様を貸してくれという申し出が出てきたので明日、そちらに向かえ」
「ちょ、待て！なんであの人からそんな申し出が来るんだよ！」
「わからぬ。だが、今回の戦挙で大分貸しを作った。それを言われてはこちらも手が出せぬ」

……あの人は何故俺を？

仕事なら長者原先輩がいるし、それにあの人なら自力でできる天才さんだ。

ま、いいか。長者原先輩には大分お世話になったしな。

「了解」

「それでは、鍋を食べに行こう！今回は私のおごりだ！！好きなだけ食え！！」

「いやっほう！お嬢様のおごりなら遠慮はしなくてすみそうだ！！」

「不知火？お前食べ放題の店でどれだけ食い散らかしたと思ってる」

「それはそれ、これはこれ」

「でも食い放題の店なら確かに遠慮はいらねえな！」

「さっすが善吉♪それじゃ！れっつごー！」

「礼君。隣に座ろうね～！」

こうして、初日が過ぎていった。

明日から、俺は選挙管理委員会の方でお仕事か。

食い放題の店のワンシーン。

「も、もうやめてくれ！！これ以上食われたら俺の店は赤字になっちまう！！」

「まだまだ『喰い』足りないよ！もうあと一皿追加―！」

「いやあああああああああああああああああああ！！！」

店員さんの叫び声が、響き渡る。

「礼、不知火ってこんなに食うのか？」

「まあ、な。だから俺はいつも食べ放題やら食べきったら一万円みたいな店に行くんだ。しかし、何時にも増してよく食うな」

「……めだかちゃんだから本当に遠慮が無いんだな」

「……みたいだな」

そして、また一つの店が涙を流した。

第六十七箱　復活の日常編（後書き）

ロサです。
人気投票ありがとうございます！
表を見いていて流石としか言いようがありませぬ。
う～ん、でもあんまり投票してくれる人いなかったな……こんなものなのかな？
延長してもうちょっと様子を見てみたい。
なので、作者の勝手で延長します。〆切は来週の月曜日まで。

そして、『三名』と書きましたがすみません、『三票』に変更します。
入れてくださった方はすみませんが、『取り消しでこの人に～』と書いてくだされば、そちらの票にいたします。
そのままでよければ感想にそのままで、とお書きください。
投票してくださった方にこんな変更をして本当に申し訳ございません。
そして、上位五名は流石に難しいので『三名』にします。
行き当たりばったりでこんなことを書いて申し訳ありませんでした。

作者の興味、というか、どのキャラが人気なのかを知りたいだけなのでスルーして下さってもかまいませんが、協力してくださると嬉しいです。

それでは！

人気投票結果発表（前書き）

改稿点

投票が一つ、遅れて入ってきましたので変更です！

人気投票結果発表

ロ「はい！作者のロサです！！この小説でキャラとして出れたのはこれが初めてですね！！」

今回は箱庭学園の放送部、ならびに理事会の提供でお送りしています！！

ちなみにスタジオですよー！！

礼「そして、これが最後である」

ロ「そうですよねぇ……。人気投票なんてそう何度もしませんしねぇ」

礼「と、いうかだな。六十話にして人気投票するなら最初の日常編でやっておけよ」

ロ「だって、あまりキャラ出してなかったし……。人気投票してみようなんて最近思いついたばかりだったし」

礼「ま、お前はいつでも行き当たりばったりだよな」

ロ「否定できない自分が恨めしい」

礼「さ、雑談もこれぐらいにして早速結果発表といこうか。待機させ続けるのも悪いしな」

ロ「そうだね！それでは、第一位！！」

ロ「第一位！安心院なじみ！！」

僕達の上空からいきなり降ってくる安心院なじみさん。

安「やっぱりね。そして作者。僕のことは親しみを込めてあ」

ロ「同率一位！！」
安「え？」

ロ「球磨川禊！！」

禊「あれ、私？やったよ礼君！！安心院さんと並んだ！！」
礼「うおっ！！いきなり抱きついてくるな！！」

礼に抱きつく球磨川。ちょっと待て。あんたはあんたでどこから出てきた？

安「あっ！ずるい！！」
禊「へへーん！どうせもう僕達二人しかいないんだし思いっきり抱きついて」
ロ「さらに同率一位」
禊・安「へ？」

ロ「鳴神　零華！！」

零「やあ、みんなの引きこもり勇者、零華おねーさんの登場だ！！あがめろー！！！」

スタッフさんたちのほうから出てきた！？
何でもありかこの三人は！！

安・禊「作者！！これはどういうこと！？」

ロ「人気投票の結果だ。諦めな」
禊「きゅ、急に口調が変わった……！？」
零「作者は気まぐれだからねー」
安「君も納得しているのはおかしいんじゃないか？」

さて、最初は安心院なじみがトップをつっぱしっていたんだけどね？
途中から球磨川、零華の追い上げが凄くて凄くて。

礼「んで、主人公の俺はどうなったんだ？」
ロ「うん。四位、でいいのかな？」
礼「な、なんか主人公が負けるというのは悲しい気も」
ロ「さて、それでは五位の発表だ！！」
礼「スルーですか！？って同じくじゃないの？」
ロ「どうしたの？平行正解の話でもしているの？」
礼「い、いや！確かにここは俺と同表の」
ロ「礼、しっかりと、前書きを見てね」
礼「どう見ろと！？」
ロ「じゃ、いっきまーす！第五位は」

ロ「人吉善吉！！」

善「マジで！？いやっほう！！」
礼「やったな！善吉！！」
善「おお！マジでやった！！」
ロ「さらに同率五位！！」
礼・善「へ？」

ロ「不知火半袖！！」

不「はーい！この世で知らぬことなし！一文字流不知火ちゃんでーす♪」
礼・善「気に入ってるんだな！それ！！」
不「まあね～☆」
ロ「仲がいいよね、三人」
不「ま、礼君とは長い付き合いだからねー」
善「そういう意味なら、俺もそうだな。それに、不知火は友達だし。てかよ、実質三位じゃね？やったぜ！！」
不「と、いうことはあたしも三位だって♪みんなありがとねー！」
礼「そういう意味では俺もニ位だな。サンキュー！」

カーテンから登場した二人。
この二人はいつでも仲がいいねぇ。

ロ「いやぁ、流石だね」
礼「ま、いつものメンバーに近いな」
善「ん？めだかちゃんは？」
ロ「……では、七位の発表です」
善「おい！答えろ！！」

ロ「喜界島もがな！！」

喜「え、私！？」
ロ「はい、あなたですよー！」
喜「あ、ありがとう！！感動だよ！！」
善「い、意外っちゃいがいかも」

礼「そ、そうだな……」
喜「わーい！わーい！」
ロ「嬉しそうだしいいじゃない。それじゃ！同率七位！！」
礼「もう驚かねぇよ……」

ロ「人吉瞳！！」

瞳「え、私も！？」
善「お母さん！？」
礼「すげえな……」
ロ「凄いですね」
瞳「ふふ、嬉しいわ。球磨川ちゃんの時かしら？」
礼「なんだそれ？」
善「お前は疲れて眠っていた時にいろいろあったんだよ」
礼「そうなのか！？」
喜「みんなありがとー！で、作者さん！お金もらえるの？」
ロ「いや、そういうのは無いから」
瞳「みんなありがとね！」
ロ「さて、同率七位」
礼「まだいるのか！？」

ロ「鳴神　靖人！！」

礼「兄貴！？」
零「おお！靖人が入ってきた！！」
靖「どうも、礼の兄貴で零華の双子、靖人だ」

ロ「よかったね。ハブられなくて」
靖「全くだ」
ロ「では、またまたまた同率七位」
礼「おお！まだいるのか！！」

ロ「日之影　空洞！！」

日「いよっ！前生徒会長、日之影　空洞だ」
ロ「よっ！宇宙最強！」
日「照れるからやめろよ」
礼「何気ない顔で俺たちの背後から現れた」
零「むう、どういう仕組みなのかしら」
靖「深く考えるとしんどいぞ」
安「しかし、僕と出会ってもいいのかな？君たちは」
ロ「ノープロブレム！この話が終ったら記憶は消されます！！」
禊「なんというご都合主義……」
喜「お金ないの～？」
ロ「ないってば！」
瞳「それにしても、ねぇ？」
ロ「ええ。みんなの言いたいことを代弁しましょう」

ロ「『めだかちゃんは零票です』」

善「だが！！ジャンプの人気投票の方ではめだかちゃんは！！」
ロ「それは原作の方だ。そして、もう一つ言おう」
礼「な、何をいう気だ……？」

ロ「僕の予想以上に投票してくれる人が少なかった」

礼「泣き言!?しかもここで言うか!?」

ロ「うーん……。やっぱりだめなのかね、僕って」

礼「いや、わかりきってることだろ」

ロ「そうなんだよねぇ。もう少し早くやっておくべきだったね。反省」

ま、終ったことだしいいか。少し残念だけど。

ロ「さて、言っていた通り上位三名、つまり一位の三人のお話を書きます」

礼「ああ。頑張って書けよ」

安「僕と礼君のラブストーリーを期待していいのかな?」

零「私の姉弟の愛を見せてあげるわ!」

球「『ふふ』『私の話もラブだよね?』」

ロ「それでは!」

全員「人気投票にお付き合いください、ありがとうございました!!!」

投票結果

安心院　なじみ　四票

球磨川　禊　四票

鳴神　零華　四票
鳴神　礼　三表
人吉　善吉　二表
不知火　半袖　二表
喜界島　もがな　一票
人吉　瞳　一票
鳴神　靖人　一票
日之影　空洞　一票

め「わ、私もそこに混ざりたいぞ！！」
ま「めだかちゃんは僕といようね！」
め「れ、礼！善吉！！」
ま「ふふふ！めだかちゃーーーん！！」
め「いやあああああああああああああ！！！」
く「……何やってんだお兄ちゃんに妹は」

作者はこの三人が大好きです。
本当にありがとうございました！

人気投票結果発表（後書き）

皆様本当にありがとうございました！

人気投票の結果は、少し予想外でしたｗ
まさか零華が一位に入るとは……。
そして流石球磨川に安心院。安定してますね。
予想はあまり裏切ってくれませんでした。
ですが、予想外の喜界島に瞳先生。
本当に投票数を見てて面白かったです。

投票してくださった皆様！重ねて本当にありがとうございました！！
一位が三人ということで、この三人の話を書かせていただきます。

これからも頑張って書きますので、応援よろしくお願いします！！

人気投票特別話　『安心院なじみ』編（前書き）

お久しぶりです。お待たせして申し訳ありません。
今回、自己最高にして最長の一万文字。
なじみと礼の二人だけのお話で構成されている、というわけではございませんが、お楽しみください。

人気投票特別話　『安心院なじみ』編

「さて、転校してこられたのはいいのだけど、これからどうするか」
行く当てもないし、人と出会う気も起きない。
なので、僕は時計台の屋上でのんびりと広がる世界を眺めていた。

「半纏君は必ず僕の背後にいるけど無口だし……どうしようか」
『～～～♪～～～～♪』

鼻歌を歌いながら階段を上ってくる人がいた。
……この声、多分きっと。

「～～～♪」
「あら、どちらさま？」

人物については予想できている。
だから。つい、面白そうだったので少し声を高くして彼に話しかけた。口調も当たり前のように変えて。
お嬢様っぽくしてみたけど、案外あうものかもしれないね。

「ああ先客ですか？いえ、ちょっと昼寝……に……」

僕を見たのは男子生徒とは思えないほどに髪が伸びて、男装している女子という言葉がお似合いのこの学園の生徒だ。
そして、その男装女子は僕を見て表情が固まった。
ここまで例えると風紀委員会編を思い出すね。
そして、やっぱり君か、礼君。

「失礼しました」
「逃がすとお思いで？」
礼君が後ろを向いてダッシュで階段を駆け降りようとしていたので、『腑罪証明（アリバイブロック）』で真正面に移動する。
「いえ、そのですね……安心院なじみさんでしょうか？」
「全く持ってその通りだよ。久しぶりだね、礼君。でも、僕のことはフルネームじゃなくて『なじみ』って読んで欲しいな。いつもの通り」
「ああ、ってかお前髪真っ白じゃねえか。どうした？歳か？」
「女性にそれを言うのは失礼というものだ」
「……と、いうか。なんで巫女服なんだ？」
「君は、僕の両手両腕に螺子が刺さっているというのを気にしないのかな？」
「いや、まぁそれも気になるんだが……。中学時代と印象が大分変わったからな。あと夢の中」
それはそうだろう。真っ黒な髪は真っ白になってしまったことでも印象というものは変わるものだ。
しかしまぁ、僕の中で一番の変化はやはりというべきかなんというか。
『夢の中で』ではなく、『現実』で礼君に出会えること。
これが一番ではなくてなんというのか、と考えるほど嬉しさが込みあがってくる。
「礼君」
両手が使えないので、もたれかかるように礼君に身体を預ける。

「な、なじみ……？」
「会いたかった。夢ではなく、現実で」
「え……？え……？」

戸惑ってる戸惑ってる（笑）。
礼君はこういうことは経験が無いから可愛いんだよね。
でもねぇ。

「礼君、君は時々鈍くて困る」
「な、なんだよいきなり」
「僕は人外と言えど君の前では親友の女性なんだ。『会いたかった』と女性が言えば『……俺もだ』みたいなこと言うと好感度はグンと上昇するのに」
「俺はそういうのを狙った覚えは一度も無い」
「そこが君のいいところだ。この天然女たらし」
「酷ぇ！！」

ふふ、久しぶりのこのやり取りは楽しいな。
あ、そうだ。

「礼君、君は暇かな？」
「あ、ああ。昼飯は食ったから午後からはやることが無いな」
「それは好都合。『あの場所』に行こうよ」
「ん？ああ。了解」

『あの場所』。
これで通じるのは僕と礼君、そして禊ちゃんの三人のみ。
さて、久しぶりに出てきたことだし行ってみようか。

「変わってないね」
「そう簡単に変わるもんじゃねーだろ？」
「確かに」
「そういや、お前の後ろにいた奴……誰？」

ん？君は知らなかったのか。いや、そんなはずは無いと思うけど。
ああ、そうか。
確か半纏君は『小さい頃に何度か出会っているけどもう忘れているかも』って言ってた様な言っていなかった様な。まあいいや。

「不知火半纏君だよ」
「はんてん……ああ！！久しぶりだな！！半纏！！」

思い出して嬉しそうに顔をほころばせる。
ま、礼君は英才教育でほとんど外出らしい外出はしていなかったからね。
詰め込む知識が多すぎて思い出が少し薄れていたってところだろう。

「ま、今回だけは無理を言って離れてもらったけどね。君の事を知っているが故だろう」
「いつも一緒なのか？」
「いや。『腑罪証明（アリバイブロック）』で好きなところに行くと、彼は遅れてやってくる。それまでの時間は一緒じゃないね」
「そっか。お前ら二人で『悪平等（ノットイコール）』だったな」
「ああ。それにしても、ここに来ると思い出すね」
「そうか？いや、お前と来るのは久しぶりだから思い出すことは多いな」

礼君が青空を見上げて言う。
僕もそれにつられるようにして同じ空を見る。
そして思い出す、中学時代の一ページ。

「『あ』『なじみちゃん』」
「どうしたの？禊ちゃん」

中学に通っていた頃、僕は生徒会副会長で、生徒会会長の禊ちゃんの隣にいた。
彼女は結構人懐っこくて小動物を連想させられていたので、少し構いたくなったと言うのが本音だ。

「『今日ね』『知り合いが来るから』」
「うん？君の知り合いだと過負荷（マイナス）かな？」
「『う～ん』『どうだろう？』『僕も久しぶりだし』」
「そうか。で、待ち合わせは？」
「『校門前！』」

嬉しそうに彼女は言う。
彼女がここまでうれしそうにするのは珍しいので、僕もわずかながら興味がわいてきた。
そして、彼女に手を引かれるまま校門前に行くと、他校の男子生徒が立っている。
ブレザーの制服。ウチの中学の制服である学ランとは違ったのですぐに禊ちゃんのいう人物だとわかる。これは確かに目印らしい目印だ。
あの制服は、確か『囲川中学』だね。有名な進学校だったはずだ。

「『礼君！』『久しぶりだね！！』」
「……ああ。久しぶり、球磨川。ん？そちらは」
だが、一瞬だった。
彼がこの空間に存在していること自体が変だというような、おかしいような感覚。
故に、警戒心は緩めない。
こんな奇妙な感覚に出会わせてくれた人間への警戒心を緩めることなんてできるはずが無いから。
「ああ、僕は安心院なじみ。親しみを込めて安心院（あんしんいん）さんと呼んでくれ」
「……ああ。安心院さん。初めまして。鳴神　礼です」
間の抜けたような、それでいて、この空間を震わすような声。
そして、いつもの如く僕は『欲視力（パラサイトシーイング）』を発動させて、彼がどんな風に僕を見ているのか見てみた。
初めてであった奇妙な人間の世界はどうなっているのかな？
やっぱり、他の人や禊ちゃんの知り合いの過負荷（マイナス）と同じで僕のことを綺麗とかそんな感……じ……で……。
「……」
「……？どうした？安心院さん」
絶句。
人の声が聞こえないほど、意識を持っていかれそうになるほど、僕は彼の世界にのめりこんだ。
見た感想といえば、『美しい』の一言。
世界全体がキラキラと輝いている。こんな世界を見たのは初めてだ

った。
空が、雲が、木々が、虫が、人が、まるで一級品の芸術だけを集めた美術館のように美しく彩られている。
確かに、僕のことは綺麗に見ている。僕の驚いた顔も、綺麗に思っているみたいだ。
だが、そんな僕の想像をはるかに超えて、彼の見ている世界は美しい。
何より驚いたのは僕と同じだったこと。
僕ではない彼が、僕のように世界を見る。全てを平等に見ている。
こんな人間は、初めてだった。

「い、いや。なんでもないよ」
「……そうか？それならいいんだが」
「『あ、もしかして二人とも見つめ合ってた？』『だめだよなじみちゃん！』『礼君は僕の彼氏なんだから！』」
「……初耳だ」

この二人は漫才でもしているのだろうか？
だめだ、やはり彼の視界から離れることができない。
離れることが勿体無い気がして、離したくないというのが本音だが。

「礼君、だっけ？」
「……ん？どうした安心院さん」
「今日はどうしてここに？」
「……いや、球磨川にメールで呼び出されたもので」
「『ふっふっふ！』『僕にも作戦があるんだ！！』」
「「……作戦？」」

禊ちゃんが腕を組んで悪者のように笑う。
だが、体格と幼い顔立ちが悪の親玉ではなく、背伸びしている女の

子のように見せた。
礼君も僕と同じように禊ちゃんを見ている。

「『ん？』『どうして二人ともそんな保護したいという目で見てるの？』」
「気にしない気にしない」
「……気にするな」
「『ま、いいや』『それでね？』『礼君には外部の学校との交流という名目で生徒会に来てもらおうと思って』」
「……なんだって？」
「いや、いやいや。確かに今の生徒会ならできるかもしれないが外部の人間となると条件が」
「『だから』『なじみちゃんを呼んだんだよ』」
「なるほど」

確かに、僕が許可したなら教師達からの抗議も問題なく通るだろう。
一応、優等生だし。

「『礼君』『どうかな？』」
「……まあ、別にいいが。あ、ちょっと待っていてくれ」
「『いいよっ！』」

そういうと、彼は携帯を取り出して電話をかけた。

「……ええ。それでですね……。ええ。はい。手続きをよろしくお願いします」
「『な、なんか』『凄い上の人と掛け合っている気がするのは僕だけかな？』」
「いや、僕もそう思うよ……」
「……よし。手続きはとりあえず完了したから。もう少しで」

ん？学校の校舎から出てきたのは……校長？

「君が、鳴神礼君ですね」

「はい」

「お話は聞かれていると思いますが、今日からこの学校の生徒会に交流として入っていただきます」

「……よろしくお願いいたします」

「こちらこそ、よろしくお願いいたします」

校長が礼君の手を取り、握手をし始めた。

ど、どうなっているんだ？

君は一体何をした？

「それでは、球磨川さんと安心院さん、よろしくお願いします」

「『は、はい』」

「わ、わかりました」

「……改めて、よろしく」

思いもしない形で、彼はこの学校へ来ることが可能となった。

僕達の手を借りず、いや、借りるまでもなく手段として持っていた。

電話ひとつでの解決法。

僕達は少し戦いていたが、校長は満足そうに帰っていった。

「『れ、礼君』『何をしたの？』」

「……ちょっと、ね」

「その『ちょっと』は『ちょっと』じゃないだろう」

後でわかったことだが、彼は不知火袴君に電話をかけていたそうだ。

戸籍上は息子だし、礼君は確かに袴君に気に入られていたからね。

すぐにOKされた。

「『まあいいや！』」

「いいのかい！？」

「……ま、よろしく」

彼の目が『キラーン』という擬音を立てて光ったような気がした。

表情は全く変化していないのに。

この子、侮れない……！

「『それじゃ』『明日から本格的な活動のために』『生徒会のみんなに紹介しよう！』『今日は三人での交流会ということで！』」

「なるほど、それが今日の本当の目的だね？」

「『あはは！』『やっぱりわかっちゃう？』」

「……多分、誰でもわかるぞ」

「『そ、そうかな？』『ポーカーフェイスには自信があるんだけど』」

「「いや、今の状態では無理だ」」

「『二人とも酷い！！』」

禊ちゃんが泣き真似を始めた。

こういう姿が小動物みたいでかわいいんだよねぇ。

「『とりあえず』『ケーキ屋に行こうか！』」

「彼は甘いもの大丈夫なのかい？」

「……最近は食べていないが、問題はないと思う」

「それならいいよ。じゃ、行こうか」

禊ちゃんを先頭に、ケーキ屋に向かった。

「で、どれを君は頼むんだい？」
「……チーズケーキ、かな」
「『僕はチョコレートケーキ！』」
「そうだね、僕は無難にショートケーキかな」
注文をとってもらい、ケーキが来るのを待つ。
「君は進学校にいるのにいいのかい？放課後を僕達のために費やして」
「……まあ、成績はいいほうなので。あと高校はもう決定しているので問題はないです」
「『どこに行くの？』『やっぱり水槽学園？』」
進学校、ということで日本屈指の名門校の名前を出してくる。
まぁ、確かに進学校なら目指す学校だよね。
「……いや、『箱庭学園』」
「『え』『あそこに行くの？』」
「……ウチの学校の校長にそう言ってあるんだよ。その学園の理事長さんが」
箱庭学園からの直々の推薦希望。
なるほど、彼も光る原石っていうことか。
「ま、確かにあそこも有名だからね。マンモス校にして天才の集まる学園」
「……ああ。だから、俺は学校でも有名でな」
「『ん？』『どうして？』」

禊ちゃんが首を傾け考える。
いやいや、すぐに考えたらわかるだろう。

「禊ちゃん。中学一年、しかも進学校で既に行く高校が決まっている人っていうのは珍しいと思わないかい？」
「……しかも、有名校だ。そんなところからオファーがかかっているのは俺だけ」
「『なるほど』『それは確かに有名になりそうな条件だね』」

彼は嬉しそうに語るが、それはま逆の状態と捕らえていいのだろう。
水槽学園と箱庭学園。どちらも有名で、名高い高校だ。
そんなところから一年の時に『推薦』が来ているのだとしたら、彼は他の生徒の妬みを受けているはずだ。
つまり、それをなんともないように語る彼はどう考えても過負荷（マイナス）。
推理にしては単純すぎる。後は、彼がどんなスキルを持っているかだね。

「『礼君』『君は今幸せかな？』」

僕の考察を中断するかのように禊ちゃんが問いかける。
……視界を除いた僕が言うのはなんだが、彼は幸せなのだろうね。
あんな風に世界を見れるんだ。幸せでないはずがないだろう。

「……いや、全くといっていいほど幸せじゃないな」

耳を疑った。
あんな美しい世界を見ていて、幸せじゃない？

「君は、どうしてそう思うのかな？」

「……単純明快。どうでもいいから」
「なるほど。確かに単純明快だ」
理由になっていないことがね。
「『死にたいの？』『礼君』」
「……流石」
「ふぅん。死にたがりか」
つまらないな。そんな人間は早く死んでしまえばいいんだ。
こんな美しく世界を見れる人間だというのに、興味を持って損をした気分だ。
「……こんなにも、美しいくせに俺を殺せない」
「『それは』『君が死にたくないからじゃないかな？』」
「禊ちゃん？」
禊ちゃんが、あせっている？
顔には出していないつもりかもしれないが、あせっているのが丸わかりだ。
「……さあな。でも、どうやったら死ねるんだろうな？」
「手首を切るとか色々あるじゃないか」
「……それは全部試した。一通りの自殺方は」
「へぇ……」
こいつは、一級品だな。
本当に死にたい人間なのか。
そして、『死にたがり』じゃなくて『死ねない』人間なのか。こいつは最近の人間の中では珍しい。

「どうして死にたいのかな？」
「……まぁ、幼少期にちょっと」
「『やっぱり』『そうなんだね』」
「おや、二人だけの秘密かな？」
「『まあそんなところ』『かな』」

ふむ、少し知りたい気がするけどまあいいや。
そこら辺は調べればすぐに出てくる。

「『それにしても』『ケーキ遅いね』」

禊ちゃんがそう呟きを漏らした。話題を変えるには確かに絶好のネタだな。
少し転換には粗い切り出しだが、上手いと思うことは確かだ。
しかし、禊ちゃんの言ったとおり確かに遅いね。

「……あ、来た」
「本当だね」
「『わーい！』『わーい！』」
「……落ち着け」

礼君が禊ちゃんの頭を撫でた。
どこのカップルだい？見せ付けているのかな？殴るよ？

「『うにゃ～』『礼君は撫でるの上手だねぇ～』」
「……まあ。ほれ、食べるぞ」
「あ、来た来た」

それぞれの目の前に、注文したとおりのケーキが並ぶ。

ここのケーキ屋は僕達と同じ中学の人間ならば、誰しも必ず一度は訪れたことのあるとまで言われるほどお世話になっている場所だ。
故に、知り合いが多くいるわけで。

『安心院さんよ』
『球磨川ちゃんもいるわ』
『あの二人は絵になるわねぇ。少し球磨川ちゃんが気持ち悪いけど』
『それよりも』
『ええ。そうね』
『『『あの男、始末しなければ!!』』』

こうなるわけだ。
完全に僕達のとばっちりを受けるわけで、彼には申し訳ない気もするが。

「『礼君!』『チーズケーキ美味しい?』」
「……美味いな」
「ここのケーキは有名でね。味もしっかりしていて女性なら一度は訪れてみたい場所ベスト5には入っているんだ」
「……すげぇ」
「『僕に!』『僕に一口頂戴!!』」
「……ほれ」

ケーキの一部を禊ちゃんに食べさせる。
俗に言う『あ~ん』という奴だ。
少し見ていて腹が立つ光景「……安心院さんも、いる?」……え?

「い、いや。僕は」
「……いや、なんだ。こっちを見ていたので欲しいのかと」
「じょ、女性に対してがめついようなことを言うのは感心しないな」

「……悪い。それじゃあ、お詫びとして」
「そ、そういうことなら……」

禊ちゃんと同じように頂く。
甘さを控えめにしているが、それでいて美味しいこのケーキ。女性に人気というのもわかる気がする。

「（……って）」
「……満足そうで何よりだ」
「（や、やりこめられた……！）」
「『あれ？』『どうしたのなじみちゃん』」
「な、なんでもないよ」

礼君、君は侮れない子リストの上位を飾るかもしれない。初対面の男子の癖に。
それにしても、チーズケーキ美味しかったな。もう一口……食べてみたい気もしないことはない。

「……ほい」

そんなことを考えてると、礼君が僕のお皿にもう一切れ、チーズケーキを乗せてきた。

「……久しぶりに食べたからか、食べきれない。もう一口、食べてくれ」
「い、いいのかい？」
「……食べてくれると、助かる」
「そ、そういうことなら」

もしかして、彼も『欲視力（パラサイトシーイング）』みたいなスキルを持っているんじゃな

いだろうな？

「……あむ」

「『礼君！』『もう一口！』」

「……あいよ」

いや、そういうわけではなさそうだ。

本当に食べきれないのか、彼の食べるペースが少しずつ遅くなっていっている。

彼の視界を覗いても、チーズケーキを少し見ないようにしているのが良く分かる。

「（……天然の女誑しか？この子）」

「『うん！』『美味しかった！』『ご馳走様！』」

「僕も、ご馳走様でした」

「……ご馳走様。助けてくれてありがとう」

三人でその後、割り勘して店を出た。

そして、僕達三人の思い出の場所へと向かった。

「『美味しかった！！』」

「そうだね。それにしても、ここはいい天気だ」

「……ああ、本当に、綺麗だ」

彼はその風景を見てしみじみと語る。

それは、泣いてしまいそうな顔で、嬉しそうな顔で、見るものの心を切なくする顔だった。

「『うわ』『もうそろそろ帰らないと』『残念だけど』」

「……そうか、また明日」
「『！』『うん！』『また明日！』『愛してるよ！！礼君！！』」
そういって、禊ちゃんは帰って行った。
「だってさ」
「……茶化すな。恥ずかしい」
「君にも、恥ずかしがることとってあるんだ」
「……死にたがりとはいえ、人間だからな」
「ふぅん。それでさ」
さて、僕にとっての本題を切り出すとしよう。
「君は、とても興味深いスキルを持っているようだね」
「……」
沈黙。
夕暮れの風景に似合いすぎるかのように、僕達二人の間に訪れる。
「君のスキルは、とても興味深い。『死ぬ』という概念を『拒絶』したかのようなスキルだ」
「……それで？回りくどいのは好きじゃない」
「僕もだよ。うん、君のスキルを、僕にくれないか？」
「……なるほど」
彼は、頷いた。
普通の人間なら、ここはすぐに否定するところだろう。
しかし、彼は今すぐにでも『死にたい』と考えている人間だ。
しかも、僕はご丁寧に死ぬことを拒絶するとまで言ってあげたんだ。
これなら、手放すはずだ。

「……悪い。まだ手放せないんだ」
「どうして？」
「……このスキルは、確かに手放し他方が俺の幸せになるかもしれない」
「なら」
「……でも。今日、さ」
「？」
「……久しぶりに、人と会話したんだ」

唐突に、少し嬉しそうに語る。
それは、この短時間という長い時間の中で、初めて見た笑顔だった。
淡い、それでいて、やはり切なくなる笑顔。

「……やっぱり、綺麗だな」
「！」
「……球磨川も、安心院さんの笑顔も、凄く、凄く輝いていた。こんなスキルを持っていても、俺はそう思ってしまった」

どういうつもりだ？
ここで僕にいいセリフを言ってはぐらかすつもりか？

「……世界は、こんなにも美しいんだって、実感した」

まずい。直感的に、悟る。
このセリフの続きを聞いてはいけない。
これを聞いたら、僕は僕でいられなくなる自信があった。
変な自信だと我ながら思う。けれど、彼にはそのような気持ちを抱かせる何かが存在した。

「……やっぱり、綺麗だよなぁ。皆、幸せそうだなぁ」
「……！！」

聞いてしまった。
彼の、心からの本音を。
過負荷（マイナス）の癖に、誰よりも、人の幸せを望んでいる、彼の言葉を。
誰をも不幸にしてしまう彼が、誰よりも人の幸福（えがお）を望んでいる。
なんて、皮肉。それでいて、なぜか腑に落ちる僕がいた。

「……安心院さん、ありがとう」
「ど、どうして。お礼を言うのかな？」

まずい、僕のペースが知らない間に彼のものに変わっている。

「……死にたがりの俺を、どう思ったのかは知らない。それでも、こんなふうに、友人として付き合ってくれて、ありがとう」
「あ……」

彼の顔は、先ほどの、人の幸せを望んでいる顔よりも嬉しそうで、満足そうで、それでいて、照れていて、『天真爛漫』という言葉が、異常に似合う顔だった。

「……や～めた」
「……へ？」
「君のスキルを手に入れるのは、もうちょっと君との関係性を深めてからにしよう」

あっさりと、引き下がってしまった。
どうしてかはわからない。でも、それでも。
彼のことを知りたいと思ってしまった僕は、実に、僕らしくない。

こんな人間は何百と見たはずだ。彼のような人間は。
でも、それでも、彼は、彼だけは、目が離せなかった。
その笑顔が、あまりにも綺麗過ぎて。
僕は、この時から彼に惚れていたのかもしれない。

「……安心院さん。実はだな」

急に、少し困ったような顔をし始める。

「ん？どうしたんだい？」
「……俺のスキル、良く分からないんだ」
「は！？」
「……なので、調べてくれると助かる」

お、思ってもいなかった。
まさか、自分のスキルのことについて自分でも良く分かっていなかったという人間が存在することに。

「クッ！アッハッハッハッハッ！！」
「……どうして笑う」
「いやいや。可笑しいに決まっているだろう。自分のものを把握できていない人間がいるなんて！傑作だ！！」
「……そ、そう言われてもな」
「よろしい。僕と君は今日から『先輩後輩』などというよそよそしい関係ではなく、友人、もしくは親友になろう」
「……は？」
「親友なら、なんでも相談できるし、お互いを助け合うこともできる。普通の友人ように気兼ねもする必要なんてほとんどない。どうだい？僕の右手を掴む勇気はあるかな？」

ベンチから立ち上がり、彼の目の前に行き、右手を彼に向かって差し出した。
彼は、一瞬呆けた顔になっていたが、少し、照れたように。でも、とても嬉しそうに。
僕の右手に、そっと彼は手を重ねた。

これが、僕と彼の、友人として、親友となった始まりの日。
そして、僕が、彼という人間の前で、僕らしさをなくした日。

「いやぁ、この女誑し」

回想終了。実に、最後あたりは女誑しの言う台詞だ。

「まだ言うか！？」
「ああ。言うさ。君は天然で女誑しだ」

二人でいつものベンチに座り、漫才のような会話をする。
本当に、回想でも言っていたと思うけど、実に僕らしくない。

「お前だってどれだけの男を落としたんだよ」
「そりゃあ、指の数以上は落としているはずさ」
「お前だって男誑しじゃないか……」

それでも、なかなか落ちてくれない君に僕は執着しているんだけどね。

「礼君は本当に、難攻不落のイメージがあるよね」
「そうか？そうでもないと思うんだが」
「友情などに関しては容易いのに」
「？」

この天然さが難攻不落の城の門なのだろうね。

「それにしても、昔と違ってテンションが変わったよね」
「……ま、それもこれも、お前のおかげだよ。安心院さん」
「こらこら。僕のことは『なじみ』と言えと」
「なじみ」
「ん？どうしたのかな？」
「……お前に、出会えてよかった。ありがとう」

こ、の……！天然女誑し！！
不意打ちにも程がある！そんな、そんな顔で言う必要ないじゃないか！！
いつもみたいに、夢の中のように言ってくれればいいのに！

「そこまで言うということは、わかっているのかな？」
「へ？」
「……お仕置き」

手がふさがれているが、かまわずに、唇を押し付けた。
言うまでもなく、ほぼ全ての体重を礼君に預ける体勢だ。
手が封じられてさえいなければ、彼に抱きついてもっと体を預けたい。が、無いものねだりはやめておくとしよう。

無論、『口写し（リップサービス）』なんて野暮なものを発動しないように『無効脛（ライフゼロ）』を発動させている。
つまり、本当に純粋な、接吻。

「んぅ！？」

彼の驚いた顔が目前にある。
それでも、続ける。
数十秒という時間が、何分ものように引き延ばされる感覚を味わった。
そして、唇を離す。

「……ふぅ」
「おおおおおおい！？」
「さて、昼時だというのに熱々な展開を見せてしまったね」
「い、いいいいやいやいや！」
「ふふっ、礼君」
「な、なに？」

「僕は、君のことが大好きで大好きな親友なんだ。そろそろ、前に言っていた君とのストーリーを本格的に進めるからね」

ここで、善吉君に貸した『欲視力（パラサイトシーイング）』がないことを悔やむね。
彼は、今現在僕のことをどう見ているのか、知れたのに。

人気投票特別話　『安心院なじみ』編（後書き）

礼となじみの出会いを書かせていただきました。
うん、誰得と聞かれたら作者の得だな。

さてと、次は球磨川編を書くつもりです。

感想、誤字脱字、もっとこうしたらというご意見を、お待ちしております。

人気投票特別話　『球磨川禊』編

「やあ礼君！奇遇だね！！」
「……このやり取りは何回目だと、いや、もういいか」
およ、礼君がため息をついている。
だめだよ～？幸せが逃げちゃうよ～。

「でね。今日は礼君フリーかな？」
「ああ。選挙管理委員会の依頼も昨日終了したし、今日は特にやることがないな」

あ、礼君の昨日の話は私達の話が終ってからじっくり書くから安心してね？
書くのは私じゃないけど。

「それでさ」
「ん？」
「なんと！私にしては珍しくこの『日帰り温泉旅行ペアチケット』を昨日の商店街で当てたので一緒に行こう！」
「場所は……。ああ、確かに行けるな」
「うんうん！行こうよ！！」
「……ま、いっか。温泉なんて久しぶりだしな」

や、やった！！やった！！
苦節十年！ついに礼君と『二人だけ』の温泉旅行に行くことができるようになりました！！
しかも、日帰りといっても夜遅くだし！これなら礼君の部屋に泊めてもらえるかも！！

ふふ、ふふふ！

「集合時間は、なるほど、朝の7時か」
「だから、この時間でこの荷物なのだよ～」
「朝の五時。そして、お前の手荷物か。集合場所までの移動時間も考えればいい時間だな」

いやぁ、もう少し遅くてもいいかなと思ったんだけど、ついつい昨日興奮して眠れなかったんだよね。
礼君と二人きりの温泉旅行。興奮せずにはいられないよ！

「了解。荷物を作ってくるから入っていてくれ」
「いいの？」
「ん。朝早くに来てもらって外で待たせるわけには行かないだろ」
「じゃ、じゃあ遠慮なく！」

ま、まさか後にするはずの予定が早まるなんて！これは、これは……！後にも同じことをしていいということ！？
うわわ、嬉しすぎる！

「んじゃ、飲み物飲んで待っててくれ」
「う、うん」

ふわぁ、ここが礼君の部屋かぁ。凄く普通のような気がするけど、ところどころに礼君の個人的な趣味のものが置いてある。例えば……あの仮面とか。
……え、仮面！？どうして仮面舞踏会に出席することの出来るような仮面が！？
……き、気を取り直して。あ、この写真は中学時代の生徒会役員の写真だ。懐かしいなぁ。高貴くん、少し離れたところでそっぽ向い

てるけど礼君を少し微笑んでみているし、真黒くんなんか礼君の肩を抱きに行って！
僕はその反対側で礼君に抱き付いて、なじみちゃんは私と礼君の二人の肩を抱いて後ろで笑っていた。礼君も、嬉しそうにこちらを見て微笑んでいたんだ。
そういえば、高貴君と真黒ちゃんは礼君のことを覚えていないみたいだったね。まぁ、覚えていたら覚えていたで面白そうな状況になりそうだけど。
そして、僕は写真立ての下においてある懐中時計に目が行った。

「おっす、行くか！」
「う、うん！」

礼君が自分の部屋から出てきたので、あわててコップの中のジュースを飲み干す。
そして、洗い場でコップを洗っている時、

「ああ、忘れ物」

そういいながら、彼は懐中時計を自分のポケットに入れた。

「それじゃ、行くか」
「そうだね。そろそろいい時間だし」

時計については、まあ後でも聞けるからよしとしよう。
それじゃ、楽しい二人きりの旅行に出発だ！

「お、おぉ」
「り、立派なバスだね」
「あら、お二方も旅行ですか？」

バスの乗り口前で、バスガイドさんが私たちを見て言う。

「は、はい！このチケットなんですが」
「確認いたします。ええ、間違いございません。確かにこの日帰り旅行のチケットですね」

なんだろう、やけに回りくどい言い回しだな。

「それじゃ、このバスか」
「はい。景色を眺めながらおくつろぎください」

バスガイドさんの紋切り型の挨拶を聞いて、バスに乗り込む。

「球磨川、お前は乗り物酔いはするか？」
「あまり乗ったことがないけど、多分しないと思う」
「そうか。んじゃ、お前窓際の席な」
「いいの？」
「おう」
「それじゃ、遠慮なく」

二人席のバスの窓際に乗る。
その隣に、礼君が座る。
おお、なかなか……。

「座り心地、いいな」
「そうだね～。寝てしまいそうだよ～」

「到着するまでは別に寝てもいいだろうに」
「いやいや！礼君と話をする！」
「ま、俺も景色だけを眺めるって言うことしかしないで済みそうで助かるよ」

ここで礼君と交流を深めて一気に距離を詰める！
なじみちゃんは転校しているかわからないけど、ファーストコンタクトには必ず礼君を選ぶはずだ。理事長への挨拶は抜きにして。
そうなったら、礼君の気をこちらに向けるのは多少なりとも骨が折れるというもの。
この夏休みを上手く利用することこそが！礼君への彼女への第一歩だ！！
と、私は生徒会戦挙が終った後に気づいたのでした。

「さて、友情を深めようよ！」
「深めるって、ねぇ」
「嫌、なの……？」
「そうじゃなくってさ」
「？」

「俺たち、もう十分仲がいいじゃないか。深めるなんてもう見当たらないだろ？」

……忘れてた。
彼は確かに皆と一線を越えないようにするんだけど……。そのかわり、一線を越えて仲良くなった人に対して天然でいい台詞を言うんだった。
まあ、もう一線が残っているのはいるんでけどね。
話を戻して、これのせいで、あのなじみちゃんも本当に恋に落ちたんだっけ……。

「礼君は、天然の女誑しだよね」
「またか！？」
「うん。何度でも言う！女誑し！！」
「お、お前の言葉はなんでギャグとして流せないんだろうな…」
「なじみちゃんは飄々としすぎてるからじゃない？」
「確かに！」

礼君が納得してしまった。うん、ごめんね、なじみちゃん。なんとなくで言ったことがまさかここまでの力があるとは思っていなかった。言葉って怖いね。

「夏なのに、秋の気分がするよ」
「温泉旅行は、基本秋がシーズンだからな」
「露天風呂だね？」
「紅くなった紅葉を見ながら入る風呂というのも格別にいいものだな」
「でも、秋だと人が増えそうで嫌だな」
「そうだな。そういう意味では、球磨川は幸運の持ち主だったな」
「えっへっへっ！凄いでしょ私！」
「ああ。偉い偉い」

頭を撫でられる。
礼君は私を年上と見ていない気がするけど、満足感が胸にこみ上げてくる。
が、少し悔しい。
私のほうが年上なのに年上と見られていない気がする。

「（こうなったら、帰ってきてから礼君を女装させるという計画を進めるしかないかな？）」

「おい、何か今不穏なことを考えなかったか？」
「そ、そんなことないよ！」
「そうか？」
「うん！」
「なら、まぁいいが」

あ、危ない。これは極秘の計画だからなるべく勘付かれないようにしないと。
うん、こういうときこそのポーカーフェイスだよね！

「そろそろ、か」
「うん。箱庭温泉！！」
「爺さんの手が回っている、なんてことはないはずだと思うんだが」
「大丈夫だよ！きっと！」
「まあ、ゆっくりしようぜ」
「そうだよ！いまからネガティブなこと考えてると、怒るからね！」
「そうだな。うん、そうだった」
「わかればよろしい」

そ・れ・に。理事長が黒幕なら引き摺り下ろせばいいし。
もしくは、また頼んでみるとかね。礼君にでもお願いすればいつでもいけそうだね。

「さて、もうすぐつきそうだね」
「おお、もう着くのか」
「そうだね……。もう少しゆっくり出来たら、中学時代の話でも出来たのに」
「思い出話に花を咲かせるのは、老後でも十分だぜ」
「そう言わないことが若さの秘訣だよ、礼君」
「そうか？」

少し嬉しそうに私を見る。こういう話を出来る人間というのは私。
そして、こういう話をすることが出来る人外は彼女だけだ。
そう思うと、私は顔がにやけるのを止められない。
なので、彼の腕に抱きついてみることにする。

「ど、どうした？」
「なんてことはないよ。ただのスキンシップだから」

そういって照れを隠し、礼君との話を到着まで切る。
その代わり、私は礼君の腕をずっと抱きしめ続けた。
大好きな彼への、愛情表現の一環だと考えてもらってかまわないよ。

そして、案内された客室は旅行番組に出ているかのような豪勢な畳の部屋。

「いい部屋だね」
「一泊もしないというのに、これは広すぎるんじゃないか？」
「それに、店員の反応もおかしかったしね」
「やっぱりか」
「うん。でも、これだけ広い畳の部屋だと転がりたくなってくるよ！！」

あの店員さんたちがなにやら黒かったけど、私はそれでもこの畳の上でごろごろするだけさ！！
うにゃ～！ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴツン！！

「……転がりすぎ。壁の端まで転がってなお転がろうとするお前の

諦めの悪さには感動するよ」
「うにゃー！逆回転！！」
「こっちに来るんじゃねえ！！」
「問答無用！！……うっぷ」
「酔いかけてるじゃねえか！！止まれ！！止まって！！」
「嫌だー！！止めれるものなら止めてみろー！！」

礼君に向かってゴロゴロゴロゴロ。
勢いも大分ついたし、受け止めることなんて不可能なはずだ！！
そして、思い出されるのは学園に来て初めて礼君に出会ったとき。

私、礼君の胸元に飛び込んだけど受け止めてもらえずに壁に突っ込まなかった？

つまり、礼君に避けられるかも。

「おっしゃああ！！受け止めてやるぜ！！」
「嘘じゃないよね！？嘘じゃないよね！？」
「任せろ！！今回はしっかり受け止めてやるぜ！！」
「じゃあ言葉を信じて！加速！！！！」

転がるスピードを上げた。
今までがフリーザで言う第二形態ならば、これは第三形態だ！！！

「は、はやぁっ！！」
「うおおおおおおおおおおお！！」
「無駄に格好よくしてんじゃねえよ！！」
「さあ！キャッチの時間だ！！」
「うらあああああああ！！！」

その時、彼が背もたれにしていた襖が、開いた。
後ろに転倒する礼君。そして、それに気づいたけど勢いをとめることの出来ない私。
つまり、礼君にキャッチされないまま、私は彼へと突っ込んだ。
幸運だったのは、礼君が足を伸ばしたまま倒れた時に私が突撃したということ。

「……つ、つまり」
「く、球磨川！大丈夫か！？」
「えっと、その……！」

私が礼君に覆いかぶさるようにしている状況。
これ即ち、キスまで後ちょっとというサービスタイム。

「（こ、これって神様のいたずらにしては少々ハッピー過ぎやしないかな！？）」
「く、球磨川……？」
「み、禊」
「ん？」
「禊って、呼んで……」

な、なんだこの恥ずかしさ！！
私って確かに『球磨川』って苗字でしか言われてなかったから少し距離感はあったよ。だけど、だけどね？
下の名前を呼んでもらうのをお願いするのに、どうしてこんなに恥ずかしいのかな！？

「み、禊？」
「う、うん。これから、ずっとそう呼ぶこと。いいね？」
「あ、ああ」

「あの～、すみません」
「「え？」」

二人で、声のする上を見上げる。
少し照れたような仲居さんの顔が、印象的だった。

「移動でお疲れと思い、お茶を用意したのですが……必要でしょうか？」
「い、いります！ここに来る途中でお茶飲んでいなかったから喉渇いちゃって！！嬉しいなあ！！」
「そうだな！！ありがとうございます！！」

早口でまくし立てる。仲居さんのあの微笑ましそうな目が私には大分恥ずかしいというのが理由だ。
あんな目をされたのは久しぶりだ。あまりにも久しぶりすぎて耐性が出来ていなかった。
なので、手段はこれしか思いつかなかったというのが正しいんだろう。
なんでだろう、負けた気がする。

「気を取り直して。礼君の部屋に初めてお邪魔させてもらったけど、やっぱり思い出の品ばっかりだったね」
「ああ、中学時代の写真立てか。そういえば、どこかで見たと思ったら真黒さんに高貴先輩だったんだな。あれ」
「忘れてたの？」
「ああ。と、いうよりもだな。高貴先輩変わりすぎだろうに」
「そこはまあめだかちゃんの人徳ってことで」
「真黒さんに忘れられていたのもショッキングだったな」
「髪が伸びたからね」

腰まである長い髪。
手入れをしていないのだろうその髪は少し艶が感じられない。
まぁ、男の子でそこまで長い人はあまりいないだろうからね。
いや、真黒ちゃんがいたな。でも相談しに行ったら礼君は妹にされてしまいそうだからなぁ。

「それでは、ごゆっくり」
「ありがとうございました」

二人で目の前のお茶をゆっくりと飲む。
この夏の暑さだが、少し温めのお茶は意外と美味しく感じられた。

「中学時代、かぁ。懐かしいね」
「そうだな。まあ、高貴先輩は荒れてたような気もするけど」
「そうかな?そうでもなかったと思うんだけど」
「お前から見て悪いという奴はお目にかかりづらいだろうさ」

どういう意味かな?それは。

「さてと、風呂行くか」
「そうだね。その後は……お昼まで寝る?」
「ここまで来て寝る一択かよ」
「だって、疲れた」
「いや、疲れたって」

バスに乗ってただけだろうと彼はため息交じりに声を出した。
そうなんだけど、私は昨日興奮しすぎて眠れなかったからね。ゆっくり眠りたいの!

「風呂の中で寝るんじゃないぞ?」

「わかってるよ～！」

れ、礼君は私を本当に年上と見ているのか怪しいなぁ。
ま、いいか。お風呂の中で礼君とこのあとどうやってラブラブするか考えるとしよう！
更衣室でシャツとズボンを脱ぎ、下着をかごに入れてタオルで身体を包む。
めだかちゃんや飛沫ちゃんほど胸はないけど、う～ん、あれだね。なじみちゃんくらいだと思うよ。
……って、私は誰に身体の発達を説明しているのだろう。礼君には説明するべきことだとは思っているけどね。
そりゃ、私は礼君の伴侶になるわけですから、私のことを全部知ってもらいたいじゃない。

湯船にゆっくりとつかる。
露天風呂は後にして、とりあえずは室内の温泉に入った。
外は日焼けしそうだからね。とりあえずは室内で収めたいものさ。

「温まるなあ。でも私ってすぐにのぼせるからなぁ」

それでも、血液が体中を循環する感覚に酔いしれてしまう。
体温が少しずつ上昇し、身体が軽くなってくる。
温泉の醍醐味、といえばやはりこの感覚を味わうことだと私は考えている。

『ちょ、女性はあっち！！』
『俺は男だ！！』
『そんな馬鹿な！！』
『嘘じゃないって！！』

……男子風呂のほうからそんな声が聞こえてきた。
気にしない気にしない。気にしたら負けだ。こういうことでは負けないようにしないと。

「中学時代、か」

私が生徒会長を務めていたあの頃。
なじみちゃん、高貴ちゃん、真黒ちゃん、そして礼君というメンバーで構成された生徒会。
まあ、殆ど仕事をしていなかった気がするよ。
思い出すとしようかな。
いや、思い出は老後まで取っておくのが若さの秘訣だからね。寝ている間に夢としてみる程度でかまわないだろう。

「それにしても、ジャグジーにサウナ、露天風呂、水風呂、電気風呂。いっぱいあるなぁ。これじゃあどれに入ろうか迷っちゃうよ」

う〜ん、電気風呂っていうのはなんか名前が怖いし、やっぱりジャグジーかな。

「それにしても、私って現在進行形で幸せだよねぇ。礼君と二人きり！過負荷で言えば確実に堕落し続けてあがることのない絶頂期だよね！」

背中にジャグジー風呂特有のジェットみたいなのを受けてほころんでいる状態で呟く。
う〜ん、なんだろう。気持ちいいけど少し不快な気分が……。ああ、肩が凝っていないのに肩凝りのつぼに当たっているからか。

「それじゃ、露天風呂にでも行きますか！」

ガラス戸を開け、太陽の光が肌を焼き殺すのではないかと思うほどに強い日差しの中を頑張って歩き、露天風呂のうちの一つである、屋根のついた檜風呂へと駆け込む。

「ぬっく～い。でも外はやっぱり暑いなあ」

「み、みみ……！！禊！？」

あっはっはっ！テンプレかな？テンプレすぎるよねあっはっはっはっはえ！？

「礼君！？どうして！？」

「こ、ここは混浴だったのか！？」

「はっ！！」

そういえば、ガラス戸の手前においてあった看板に、『混浴』と書いてあったような……！なるほど！だから女性は誰も外に出なかったのか納得！！じゃなくて！！

「あ、あああああああ」

「み、禊！？のぼせたか！？」

「ぷしゅ～～～～～～」

「口で言った！？お、おい！！」

ありゃ、身体が本格的にふわふわして……って、ああ。のぼせちゃったのか。

礼君に言われてたのになぁ。うっかりしすぎだよ、私。

「ん……」

目が覚めると、布団の上だった。
日差しがオレンジ色になっているみたいで、部屋の中を綺麗に照らし続ける。

「……そっか、のぼせたのか」

礼君と一緒に混浴のお風呂に入っていて、それで、のぼせて……そこから、どうして布団に？

「お気づきになりましたか？」
「あ、仲居さん」
「『連れがのぼせたので助けてください！！』という鳴神さまの声を聞かなければ大変でした」
「そうですか……ありがとうございます」
「いえいえ。それにしても、大切に思われているのですね」
「え？」

仲居さんの顔がまた綻んでいる。
な、なんでかな……？

「うなされていたあなたの左手を、ずっと彼が握っていらしたので」

左手に視線を移すと、礼君が両手で私の手をしっかりと握った状態で、胡坐をかいて眠っている。
その手は、夏の暑さとは違う暖かさを私にくれていた。

「それでは、和菓子をお持ちいたしますので。お昼は抜かれましたが大丈夫ですか？」
「はい。眠っていたのでそれほどお腹は空いていません」
「そうですか。それでは、お帰りの時間までまだございますのでごゆるりと」
「は～い」

仲居さんが微笑ましそうに出て行った。
あの人、ずっと笑っている気がするけど……気のせいかな？

「礼君、起きて」
「……み、そぎ？大丈夫か！？」
「うん。大丈夫。心配かけてごめんね」
「そうか、ならいいんだ。それより、やっぱりのぼせたな」
「うっ！し、しかたないよ！あれは……」

その、あれは。うん。しかたない。
だから、私は悪くないんだ！

「はっきりせんかい」
「う……うぅ。わ、私は悪くない、よ？」
「疑問系ってことは、少しは悪いと思ったんだな？」
「れ、礼君だけだし。悪いと思うのは」
「いやいや。それは「ええい！五月蠅い！！」んんっ！？」

礼君の口をふさいだ。
片手はしっかりと握られていて振りほどくことが出来なかったし、右手は自分のバランスをとるために使えなかった。
つまり、口で塞いだ。
自分でも大胆だと思うけど、ここまでしないと礼君は気づかないだ

ろうし。
それに、私もキスをもう一度したかったので。
唇を離す。長いような一瞬は、私をまたのぼせさせるのかと思うぐらいに体温を上昇させた。

仲居ｓｉｄｅ

「……すごいね」

その光景をふすまを少し開けた状態から目の当たりにして、少し戦く。

「禊ちゃんも本気、ってことかな」

キスをしている彼女と、礼君を見る。
うん、羨ましい。

「全く、僕が担当していなかったら二人とも大変だったね」
《本当よね。他の人なら苦笑いじゃすまないわよ》
「そうだよ。全く、あの二人は『恋』を知ってはいるけれど、『人目』は知らないようだ」
《ま、まあ。あの状態で人目を知るのは難しいんじゃないかな?》
「そうだけどね。このバカップルルームを他の人に気づかせないようにするのは大変なんだぜ?」
《そりゃそうよ。私達が暗躍しているから、あの二人はラブラブで

きるんだから》
「……」
《なじみ、羨ましいって思ってるのはいいんだけど》
「うん、まあ思っているけどね。君の言いたいことはわかるよ」
暗躍している一人は、中に入っていった。
仲居（なじみ）ｓｉｄｅ終了
そんなこんなで、帰宅途中。
「礼君、今日泊まっていっても良い？」
「あ、ああ。かまわないが」
「うん、中学時代の思い出話に花を咲かせようと思っていてね」
「思い出話は老後に取っておくんじゃないのか？」
「それを言ったのは礼君だよ」
「そうか」
「うん。それで、その懐中時計なんだけど」
「ああ、これか」
右ポケットから取り出された懐中時計は、街灯の光を反射してキラキラと輝いていた。
「それ、まだ持っていたんだね」
「ん？まあな」

「靖人君から聞いたよ。その時計の意味を」
「……そうか」

その懐中時計は、彼の『母親』が唯一彼に渡した思い出の品。
生まれてすぐに、自分の持っていた懐中時計をその時刻に設定して、二度と動かないように細工をし、彼に生まれてきたことを伝える、母親らしいプレゼントだった。

「ちゃんと、これは俺の中で動き続けているから」
「そっか」

壊れた時計は動かない。でも、彼が生きているということを示す時計は、今も動き続けている。
この懐中時計の示す時間から、今の今まで。

「礼君、今日は本当にありがとう。私の我侭に付き合ってくれて」
「俺もいい気分転換になったよ」
「そう？ならよかった」

そうして、彼の家へと足を進めるのであった。

人気投票特別話　『球磨川禊』編（後書き）

遅くなってしまい申し訳ありませんでした！！
学校と塾で忙しくて……すみません。

どうでしたでしょうか？感想をよろしくお願いいたします！

次回は、勇者（笑）こと零華のお話です。

人気投票特別話　『鳴神零華』編

「……は？」
《だ～か～ら～！私も礼と一緒に遊びに行きたい～！！》

俺の姉、零華から思わぬ一言が脳内に流れた。
俺たちは思わぬ条件下で発生した奇跡のおかげで、二重人格となっている状況であるが、もう片方の魂は俺と一緒に遊びに行きたいという。

「遊園地？」
《うん。それに肉体が欲しい！》
「マジで！？」
《大マジよ！だって同じ身体で遊んでも意味がないじゃない！！》
「ま、まあその通りだが……」
《なじみに頭下げれば何とかしてくれるって！》
「……等価交換って、知ってる？」
《鋼の？》
「まあそれで例えるとわかりやすいだろうが、そんな感じだ。等価に何を要求されるかだよなぁ」
「そんなお困りのあなた！是非とも僕達『悪平等（ノットイコール）』サービスなんていかがですか？っていうか買おうぜ」
「《いきなり現れて押し売り文句！？しかも強制！？》」

なじみの出現。それにより俺達姉弟のダブル突っ込み。
駄目だ。今日はなにやら疲れそうな気がする。というか確定条件だこれ。

「やあ、二人とも。二日ぶりだね」
「そうだな。で？サービスって？」
「うん。零華の肉体を用意してあげようって話」
《マジで！？》
「大マジ。僕にかかればちょちょいのちょいさ」
「時代が感じられるセリフだな」
「そんな突っ込みはおいておいて。どうする？」
「……ちなみに、等価は？」
「礼君が僕の命令に一回だけ従う」
《よっしゃ！乗った！！》
「毎度ありー」

あれ！？俺の意見スルーされてない！？人権を売り飛ばされた気がする！！

「さて、それじゃあ僕のマジックショーをお披露目しようじゃないか！」
《よっ！現代の魔女！》
「お前ら、当の本人である俺を差し置いて話とはいい度胸だ」
「《気にするな。いつものことさ》」
「そこになおれ貴様等」

そんな俺の怒りに気づいたのかなじみがそそくさと準備を始めた。
用意されたのは、カーテン？

「それじゃ、礼君。ちょっと失礼」

俺の身体をなじみが自分の右手で触れてくる。
ん？なんだ？

「『肉胎幻誤（ドッペルゲンガー）』」

そして、カーテンの方へ向けた左手から、光が放たれた。
そして、カーテンの後ろに人影が出来始めた。
……どうなってんの!?

「……おっけー。半纏くーん。カーテン下げていいよー」
「……」

どこからか現れた俺の幼なじみかつなじみと同じ『悪平等（ノットイコール）』の不知火半纏は、無言でカーテンを開いた。
そこにいたのは、俺。まごうことなき俺自身が存在していた。
いたのだが……。

《あれ、でも胸があるよ?》
「ど、どうなっていやがる……!?」
「『肉胎幻誤（ドッペルゲンガー）』はね。触れたものの身体を触れていないほうの手を向けた方向に強制的に召喚する能力なんだ。けれど、これの難点は『肉体』は作れても『魂』は作れないって事なのさ。まあ、僕も無駄なスキルの一つの気がしていたが。今回はそれが役に立ったようだね」
「ん?どうしてだ」
《そうよ。なんでよ》
「……零華。君には君自身のスキルの概要を教えてあげたじゃないか」
《へ?……あ、ああ。なるほど!》
「だがよ?どうして女の身体なんだ?それと、その。目のやり場に困るのだが」
「気にするなよ。まあ、そこは色々といじくったのさ。一京分の一のスキルを使ってね」

《わっ！礼よりも少し背が高い！！》
「これもか？」
「ああ。以下略、だ」

今回のなじみさんはサービス精神がありすぎる気が。俺はなじみに下される命令の内容が怖くなってきたよ。

《それじゃあ、これで私も？》
「箱庭学園に普通に通えることが出来るよ。ま、その代わり君が持つスキルは礼君の二つを抜いた状態になるけどね」
《十分！！それに、いざとなったら礼となじみが助けてくれるって信じてるから》
「「勇者（笑）を助けるとでも？」」
《二人とも酷い！！》

あ、零華が逃げた。俺の心の中からいなくなる。
そう思った矢先に、俺の女バージョンの身体から光が放たれる。
部屋全体を太陽の光を跳ね返す勢いで放たれる光に目が眩む。

「なんだ！？」
「入ったね」

だから何が！？って、ああ。納得。

「やっふううううううい！！これで私も一人の人間だー！！っていうか、生き返った気分だよ！！」

光が収まり、真っ裸で俺よりも少し大人びた顔をした人間がはしゃぎまわっているのだから。
揺れる揺れる。何が？聞くな。わかるだろう？

「……なるほど」
「礼君、君の方の違和感は？」
「絶好調、ならぬ絶不調だ。お互いが反発しあっているから問題ないものの。下手すりゃ過負荷（あのころ）に逆戻りだな」
「そうかい。ま、危なくなれば言っておくれよ。対策は考えてあるから」
「ああ、頼む」
「ひゃっほい！！礼！！やったね！！！」

飛び跳ねている勢いをそのままに、零華が俺に抱きついてきた。
……。うん、姉だと思えば大丈夫だな。

「そんなわけあるかあああああああああああああああああああああああ！！！！」
「どしたの！？」
「とりあえず服を着ろ！！」
「え！？ああ、そういや裸だった！失敗失敗！！」
「失敗していることに気がついているなら速やかにシャツでも何でも着てくれ！！」
「りょ、りょーかい！！」

零華が急いで俺の部屋に入り、衣服を探す。
これで、なんとか一時しのぎは出来るはずだ。たぶん。
そして、いそいそとカーテンをしまう奴が視界の隅に映った。

「……」
「よっ。元気そうで何よりだ」
「……」

背中を向ける半纏に話しかける。
こいつはいつも無言なのだが、頭を少しだけ動かすという動作をして俺に伝えたいことを伝えているらしい。

「半纏君、嬉しそうだね」
「……」
「照れない照れない。君の気持ちは良く分かるからね、何も隠すことはないぜ」
「……」
「それにしても、でかくなったな。お前」
「……」
「……ま、まあその意見には納得せざるおえないかな」
「ん？」
「『礼は女らしくなった気がする』だって」
「おい、こら」
「勇者の帰還！！」

ドアが勢いよく開け放たれ、薄いシャツにジーパン姿の零華の姿が俺の目に映った。
命拾いしたな、半纏。もうちょっと聞きたかったというのに。

「こらこら礼君。過負荷を強めちゃだめだよ。バランス的には、君の過負荷のほうが強いんだから」
「悪い」
「勇者の弟が魔王だなんて、お姉ちゃん悲しい」
「笑いながらいうな勇者（偽）」
「偽者じゃないもん！！」
「まあまあ、落ち着きなよ勇者（嘘）」
「嘘じゃないもん！！二人とも酷い！！半纏～！！」
「……」

「ちょ、わざわざ背中向いているのに顔を逸らすそぶりしないでよ」
「「これが、今のお前の現状だ」」
「ふん！いいもんねー！礼に抱きついて幸せ分を補給し続けるから！！」
「な、なんて羨ましいことを」
「羨ましいのか？」

なじみがバトル漫画描写の顔になったと思ったら、急にそんなことを言い始めた。
なぜだろう、半纏も背中がバトル漫画の描写に変化していた。

「……」
「半纏、お前は背中で語るなよ」
「……」
「だからって背中で泣かないでよ。凄く哀愁漂ってるから」
「まあ、それじゃあ零華。楽しんできなよ」
「いえっさー！」

今日は疲れるな。うん。確定だ。

「やってきました箱庭遊園地！！」
「爺さんなんでもありかっ！？」
「ここはねえ、聞いたところによると異常者（アブノーマル）の為に作られた娯楽施設なんだって」
「なるほど。通りで見知った顔がいるわけだ」
「そうだっけ？私は分からないけど礼が言うなら多分正しいんだろ

うね」

そういって俺の右手を握って走り出した。
嬉しそうに顔をほころばせる俺の姉。

「……むっ！視線！！」
「……わかりやすい。うん、妙にこのわかりやすい視線は」
「礼が、二人……？」

茂みから驚愕の顔で現れて何事もなかったかのように近づいてきた俺の兄貴、靖人。
どうして頭や身体に木の葉がついていて何事もなく俺たちの前に現れることが出来たんだいこのストーカー。

「礼のことになると相変わらずの行動力だね」
「礼は大事な弟だからな」
「ブラコン」
「否定はしない。むしろ肯定のほうに全力を注ぐ所存だ」
「同士よ！！」
「零華もか？！」

ガッチリとお互いの手を握り締めあって、士気を高めあっている。
なんだこの二人……。双子揃って変態なのか？

「……むっ！？仲間の視線を感じる」
「そうだね……。これほど強大な変態のオーラは感じたことがないよ」
「あんた達は一体なんなんだ！？」

すげえ、遊園地に来てここまで疲れたのって生まれて初めてだ。

なんだこのカオスな二人は。

「まあ本気はここでおいておいて」

「本気なのか！？」

「三人仲良く遊びましょ！！」

「ここまで来ておいて話題を変えるの！？最後の変態って誰！？」

「「さっ！早く遊ぼう！！」」

「ひ、引っ張らなくていい！歩ける、歩けるから！！」

二人に両腕を引っ張られ、アトラクションに連れて行かれた。

最初は絶叫系のジェットコースター。

「……高い」

「……さ、流石にこの高さはね」

「……まぁ、な」

先に行っておこう。箱庭遊園地のジェットコースターは日本屈指の高さを誇る。絶叫系の大好きな人たちには大人気である。

ちなみに、異常者のリラクゼーションのような施設だといったが、一般のお客も入ってくる。ジェットコースター乗りたさも含めて。

「きゃあああああああああああああああああああああああああ！！」

「うわあああああああああああああああああああああああああ！！」

「はえええええええええええええええええええええええええ！！」

上から順に、零華・俺・靖人だ。
高い、落下速度が異常に早い。さすが異常者の大好きな遊園地だなー違う違う違う早すぎる！！

「わきゃあああああああああああああああああああああああ！！！」
「礼いい叫び声えええええええええええええええひゃあああああああああああああああ！！」
「いい速さダッ！！」

兄貴だけテンションが違う。
俺は、『絶叫』系と呼ばれる理由が、改めて理解することになった。

「……れ、礼―。お姉ちゃん、酔った～……」
「俺は、まあ大丈夫だったけど」
「……兄さん、姉さん。次は？」
「……お化け屋敷」
「礼！？戦闘描写になっているが大丈夫か！？」

だ、大丈夫さ！！俺は男なんだ。お化け、しかも作られたお化けなんて怖いはずが。

「……靖人」
「ああ。行くか」
「えっ！？」

「怖くないんでしょ？」
「そ、そりゃそうだけど」
「なら、大丈夫だよな」
「お、おう」

どうしよう、二人の顔がやたら優しくなっている気が。

「さ、行くか」
「ちなみに、ここのお化け屋敷は日本じゃなくて世界屈指だから」
「……」
「礼、顔が真っ青だぞ？」
「ここは廃病院を上手く使ってね。しかも異常者のおかげで怖さが凄いの何の」
『ひぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！』
「……今のは男も叫んでいたな」
「礼、大丈夫よ。男らしさなんてこのお化け屋敷には通用しないみたいよ」
「……そう、なのか？」
「だから、心置きなく叫びなさい」

ああ、駄目だ。今日はもう逃げられない。
さようなら皆さん、今まで読んでくれてありがとう。俺は主人公としての貫禄と、キャラが今日で死んでしまうことが確定した。
……だから、ちょっと涙流してもいいよね？

「礼、怖かったら勇者のお姉さんを頼っていいのよ」
「怖くなったらいつでもしがみついていいぜ」
「……」

この悪魔二人は嬉しそうな笑顔で俺を見つめてくる。
身長は俺のほうが低いからか、とても二人が大きく見えた。

「「（小動物！！少し震えているのがグッド！！）」」

双子はブラコンだ。今更言う必要はないかもしれないがこの二人も、
ある男と同盟を組めるほどに変態である。

「さっ！行くわよ！！」
「そうだな！ほらっ、礼！」
「……」

ここからは、個人の秘密として何も言わない。

「……」
「最高！！！」
「ああ！！！ここまでテンションがあがったのは久しぶりだぜ！！」

俺はげっそり、二人はつやつや。なんだこの差は。

「……元気だね、二人とも」
「「まあね！！！」」

二人して親指を立てるとは。へし折ってやろうか。

「礼、靖人」
「「ん？」」
「最後に、アレに乗ろうよ！」

指差したのは観覧車。

「礼、行くか」
「ああ」
「やっほい！」

観覧車に乗る。
ゆっくりと景色が見れるこの観覧車の中で、零華は外を見てはしゃいでいた。

「やっぱり、いいわぁ」
「よかったな、零華」
「そうね！」

そして、零華は少ししょんぼりとした顔で、俺たちを見た。

「本当は、さ。こうやって三人でずっと一緒に仲良くいられたら良かったのに」
「……そうだな」
「幼い頃からずっと、仲良く、喧嘩しても、ずっと、楽しい記憶を

作っていけたら」
「これから、作ればいい」
「え……」
「そうだよな。礼の言うとおりだ。俺たちは、こうしてまた集まったんだ。なら、今までの分を取り戻すぐらい楽しもうぜ」
「礼、靖人……」

零華は、俺たちの首に手を回し、抱きつく。
少し泣きながら、それでも、俺たちは零華を抱きしめ返し、ゆっくりと、地面に戻る。

「帰るか」
「そうだな」
「ありがと！楽しかったよ！！」
「……なら、よかった」
「ああ」

こうして、騒がしくも、充実した夏休みの一日が終了した。

追記

「礼、俺も住まわせてくれ」
「靖人も増えるの？やっほい！！」
「いいよ。広さは無駄にあるから」
「じゃあ三人で仲良くお風呂だね！！これやってみたかったの！！」
「えっ！？」

「いいな。やるか」

家族が二人、増えました。

人気投票特別話　『鳴神零華』編（後書き）

ウチの半纏は、背中で語るよｂ

と、言うわけで零華編終了です。

次からは、委員会邂逅編が始まり、そして、第二部が始まります。

それでは、また！！

第六十八箱　君という人間は

「……おや」
「長者原先輩。こんにちわ」
「鳴神さまではないですか。どうなさいましたか？」

黒神の指令があった次の日、俺は選挙管理委員会の部屋に向かって歩いていた。
そこで、大量のプリントを抱えた長者原先輩に出会う。

「昨日、そちらの委員会から『鳴神くんを貸して』という依頼があったそうなので」
「委員長ですか。二時間の間にそんなことまで」
「すみません、それを目安箱に入れろとのご命令だったので」

黒子の格好をした生徒が手を挙げて自分がしたと示す。
いやあ、責めているわけじゃあないんだよ。黒幕はあの人だからね。

「それならば、どうぞこちらへ」
「ありがとうございます」

扉が開かれる。中の部屋を見ると。

「……すぴ～」

抱き枕を抱きながら、布団の上でごろりと寝ている生徒、大刀洗（たちあら）斬子（いきるこ）先輩。
この人こそが、長者原先輩の上司であり、選挙管理委員会の委員

長を務めるお方である。
『はたらかない』と書かれたアイマスクをつけており、いつも二十二時間睡眠をとり続ける『超』がつくほどのものぐさな性格。立ち上がった姿は今だ誰も見たことが無いという、学園史上最も動かない人物。
しかし、今は一組という普通クラスに所属しているが、『それはわかりやすい成果を何も残していない』というだけで恐ろしく有能な人。
爺さんに『学園登校免除』を普通クラスの人間が可能となったのは、彼女が初めてである。

「ん～……あ、やっほー礼君」
「おはようございます」
「堅苦しくなくていいよ～。どうせ私はこの後眠るだけだし～～～」
「そうですか。まあ、敬語は癖みたいなものですから」
「そっか～～～。私と一緒に寝る？」
「どうしてその考えと提案が出てきたのか聞きたいですが、二時間しかありませんしね。どうして俺を呼んだのですか？」
「えっとね～。うん、思い出話に花を咲かせようかなって」

……それだけ？

「うん、それだけ～～～」
「仕事の手伝い、とかではなくですか？」
「あ、そんなことも頼めるのか～～～。それじゃ、私が眠ってからやってもらおっかな～～」
「まぁ、いいですけど……。思い出話なんかでいいのですか？」
「『なんか』という言い方は駄目だよ～～～～。人間始めが肝心なんだから～～～～」

「そりゃそうですが、俺とあなたが出会ったのは」
「そうだよね～」

二人で頷く。
それを訝しげに周りが見てくる。

「な、鳴神さま。どんな出会いだったのですか？」
「まぁ、ねぇ」
「そうだよね～～～～。誰もが予想しなかった出会いだよ～～～～」
「そ、それは……？」

「大刀洗先輩が空から降ってきたんです」

選挙管理委員会室の空気が一瞬、凍った。

「……はい？」
「そうだよね～～～～～。私も落下体験は初めてだったよ～～～～～」
「ええと、冗談では」
「ないね～～～～」
「……委員長、経緯をお聞きしても？」
「いいよ～～～～。と、いうか。聞かなくてもわかるのはあそこに出くわした礼君ただ一人だけだからね～～～～」

そりゃそうだ。

「えっとね、ちゃんと脳内イメージしてね～～～」

それじゃあ、邂逅に至るまでのきっかけとそれからの始まり始まり

礼が入学して、ほんの数週間が経過した。

その数週間は本当に濃い時間であると書き綴るのが一番だろう。

なぜなら、日之影空洞生徒会長と放課後の行動を共にしている時間が多かったからである。『不良撃退』『不良改心』『生徒からの相談』などなど。さまざまな活動を礼は共にしていた。

勿論のことであるが黒神めだかはそのことを知らない。この時期、彼女はまだ日之影空洞を忘れていた時期であり、日之影空洞『生徒会長』として生徒への挨拶のことすらも忘れていた。

それほどに強大な異常性を、礼にだけは通じなかった。

それゆえに、礼は日之影空洞による新しい役職、『生徒会補佐』作りの一環として、行動を共にさせられていた。

これは、唯一自分を認識できる礼の力を信じ、自分の仕事をより楽に、そして何よりも『不良を学園から追い出す』という行為に自ら終止符を打つための措置である。

「……と、まぁこんな感じだ。今日は平和だったな」

「それが一番ですよ。身体を休めるのも、仕事の一環です」

「そりゃそうだ。それじゃ、今日はここまでにすっか」

「はい。お疲れ様でした」

二人はそういって別れ、礼は学園長に呼ばれていたことを思い出して向かった。

「失礼します」
「おお、良く来てくださいましたね。礼君」
「どうしました？俺を呼ぶのは珍しいですね」
「少し、面白い生徒が存在していまして」
「？」

そういうと、不知火袴はとある一人の生徒の情報が書き記された紙を礼に手渡す。
本来ならそんなことをすれば理事長は解任ものなのだが、この部屋にいるのは家内だけ。
ゆえに、問題はない。そういう問題でもないけれど。

「大刀洗……斬子……。二年一組。えっと、これがどうかしましたか？」
「彼女は、恐ろしく有能でして。今では選挙管理委員会の委員長を務めています」
「へぇ……」
「そして、私が彼女を学園に推薦したのですが……」
「ほうほう」
「『登校免除』扱いにするべきか悩んでいるのです」

『登校免除』は、学年を通しても一つだけのクラス、言わずと知れた十三組だけが許される『登校をしなくても良い』という権限のようなもの。
それを、普通クラスの人間に与えるというのは前代未聞。爺さんが悩むのも無理はない。

「本当なら、彼女は十三組に入れても問題はないと思うのですが、他の教職員が『成果』を示せと言い、結局は一組にそのまま在籍さ

せているのです」
「理事長がそこまで言う人物なら、登校免除をしてもいいのでは」
「そこが、現在進行形で私の頭を悩ませる種なのです。そこで、礼君に彼女の成果を記録してきてもらいたいのです」
「それぐらいならお安い御用ですよ」
「そうですか？いやあ、それなら助かります」
「はい。任せてください」
「それと、礼君」
「？」

急に真剣な顔つきになった理事長（じいさん）を見る。

「私のことを、そろそろ『お爺ちゃん』と呼んでくれませんか？」
「学園では理事長ですから」
「いいではないですか。私たちは『戸籍上』という壁が存在していても『家族』なのですから」
「……わかりました。考えておきます」

そう言い、礼はその場を後にした。
……余談だが、後に礼が理事長のことを学園内で『爺さん』と呼ぶときが訪れたのだが、彼はそれを知らなかったままだという。
重ねて余談だが、その報告を受けた理事長は、少し窓の外の空を見ながら肩を落としたそうだ。

「さて、と。普段この人はどこに……」

とりあえず探す。この紙に書かれてある情報を元に当てもなく探

すつもりだった。
しかし、『見つけ出す』という考えは杞憂に終わる。

「……すぴ～」
「……いたよ」

校舎屋上。そこに探そうとしている大刀洗斬子は存在した。
理事長から渡された紙に書かれているとおり、『眠る女子』。怠惰というか、動かないというか、働かないを体現したような生徒の代表格を発見する。
少し、礼のテンションは下がった。

「もしも～し」
「……ん？誰～～～？」

屋上から礼を見下ろす。
いやいや、見れないだろうて。アイマスクしていたら。

「うわっと……」
「！？」

屋上にはフェンスが張ってある。
しかし、彼女は礼を確認するためにフェンスをよじ登り身体をフェンスの頂点でくの字に曲げ見ていた。
そして、寝起きが重なりバランスが取れず、落下した。

「ひょえええ～～～～～～～～～～」
「危ねえ！！！」

落下地点に礼が行き、受け止める姿勢を作る。

受け止めようと身構えた瞬間。
彼女の落下体勢が、一瞬で変化した。
衝撃を殺し、着地を完璧とする落下態勢に変化したのだ。
だが、落下地点までは変更できなかった。

「およ？」
「ちょ！！」

受け止める姿勢になっていた礼と、激突した。
大刀洗が礼の上に乗っかる形で事無く終えたはずだった。

「……」
「い、てて……」
「……」
「大丈夫か？」
「うん～～。大丈夫～～～」

礼が受け止めた大刀洗を見る。
アイマスクに隠されて目は見えないが、大事はないようだ。

「……ぷっ！」
「ん～～～？どうして笑うの～～～～？」
「いや、そのアイマスク……！！」

当時、大刀洗斬子のアイマスクに書かれている文字は『はたらかない』ではなく『うごかない』であった。
それが、なぜか礼のツボに入ったらしく、礼はそのまま笑い続けたそうだ。

「いいでしょ～～～。これ～～～」

「学校に喧嘩売ってます？」
「心情を吐露しただけだし～～～～。無問題～～～～」

ケラケラと二人で笑う。
先程のことが嘘のように明るく。
いや、実際気にしていない二人は二人で神経が図太いのだが。

これが、二人の出会いだった。

「と、言うわけです」
「最後に私と礼君の神経が図太いと思った人は私のする仕事の三分の一をしてもらうからね～～～」
『えっ！？』

その驚愕の声は、黒子たち全員の魂の叫びだった。

「……委員長、何をしているのですか。いえ、なんてことをしていたのですか……」
「いや～～～。ついつい気持ちよくて～～～」

悪気のなさそうな声と表情で長者原先輩を向く大刀洗先輩。
あれは俺も驚いたよ。うん。不良撃退の時よりも驚いたよ。

「鳴神さま、本当にありがとうございます」
「いえいえ」

「それにしても、礼君と一緒に寝たら本当に寝心地よさそうだよ～～」

「大刀洗先輩「斬子先輩が私としては嬉しいな～～～～」……斬子先輩、あまりそういうことは言わないでいただけると嬉しいのですが」

「そうだね～。君という人間はこういうことを言う女子に対しての免疫がないよね～～～。可愛い可愛い」

「可愛いはどうかと思いますが、そうですね。免疫はないですねぇ……」

「うん、一緒に寝よっか。やっぱり」

「その結論待って！」

「委員長、いじめるのもそれぐらいに」

「そうかな～？まあいいや～。さてと、ふわぁ」

「……そろそろ二時間経っちゃうね～～～～。それじゃあ、お仕事お願いね～～～～」

「……おやすみなさい」

「うん～～～。あ、理事長のことを『お爺ちゃん』って言ってあげなよ？」

「……善処します」

「うんうん。それじゃ～～～ね～～～～。ふわぁ」

寝た。布団に抱きつくような体制で眠りについた。

こうなると、梃子でも動かない。斬子先輩が自分で言っていたので間違いは無いだろう。

ちなみに、試してみたら本当に動かなかった。

「おや、おかしいですね。まだ」

「構いませんよ、長者原先輩」

「そうですか？それならば、仕事を片付けるお手伝いをお願いいたします」
「はい」
こうして、選挙管理委員会からの依頼は終了した。

◆後日
「他の委員会から『礼君の貸し出しを』『鳴神くんを貸して』という案件が届いた。行って来い」
「え！？」
「最初は、そうだな。図書委員あたりから終わらせていくのがいいだろう」
「黒神、俺はゆっくりしたいのだが」
「委員会との溝が埋まるいい機会だ。橋渡しになってくれ」
「……はぁ」
夏休みは、遠いです。

◆理事長室
「そ、その……」

「どうしました？礼君」
「じ、じいさん……」
「礼君、今日は一緒に晩御飯を食べに行きましょう」
「あ、いいな～！礼君！私も行きたい～！」
礼を交えた不知火家は、平和です。

第六十八箱　君という人間は（後書き）

理事長にデレるお話（違います）

テスト期間中なのに書いてしまいました。
次は図書委員会のお話ですが、これは本当にテスト明けの数日間待って欲しいです。
書いている暇は、テスト最終日を除いてありませんので……。
それではー！活動報告または小説で会いましょう！！

僕は、死なないように頑張ります（テストで）

第六十九箱　君という人間を読ませてもらうわよ

「……今日はここか」

目の前にあるのは、この学園の誇る……こんな台詞を吐くのは何度目か忘れたが話の腰をなるべく折らないように話を進めよう。

俺の目の前にある建物は、箱庭学園の持つ図書館。通称『迷宮図書（ラビリンス）』として親しまれている。主に俺に。

構造は本当に迷宮のように本が置かれていて、国立図書館並みに本が揃っている。本好き、愛書家にはたまらないだろう。実際、俺もたまりません。

「さて、行くか」

俺の身長の二倍はある扉を開ける。

目の前に広がるのは本、本、本。圧巻とした本の山。そして、整理された本棚。

古文書から巻物、現代の出版された本から漫画まで選り取りみどり。

「……さて、委員長は」

「ぅ私がどうしたの？礼君」

「うわっ！」

背後から級に声をかけられ、思わず間合いを開けてそちらを向く。

そこには、右手に一冊の本を、左手に本棚を持った女性がいた。

「……あ、相変わらずですね」

「それよりも酷いわね。ぅ私が声をかけた瞬間に間合いを開けるな

んて」
「す、すみません」
「それで今日はどうしたの？おねーさんと一緒に本を読んで語り合いにでも来てくれたのかな？」
この人こそ、図書委員会委員長「十二町（じゅうにちょう）　矢文（やぶみ）」さん。
いつも本を持ち歩き、それどころか本棚を持ち歩く。
そして、読んだ本の内容を全て覚えていることから、渾名は『移動図書館』。
俺と同じ愛書家（ビブリオマニア）なのだが、俺よりも本を愛している人だ。
「ええと、俺を一日貸し出してくれとの依頼が届いたそうなので」
「あら、聞いてくれるのね。おねーさん嬉しいわ」
本で口元を隠すが、とても嬉しそうに笑っているのが口以外の顔の表情でわかった。
「それじゃあ、あの時みたいに本の整理を手伝ってもらえるかしら。私がいてもこの量は難しい」
『あの時』、それは俺が入学してすぐに起きた地震の時の話だった。
礼が入学してすぐに出会った日之影生徒会長は、本日で空くワークに務めていたために共に行動することがなかった日のことである。
「……いつも一緒にいたからな。うん、少し寂しい」

改めて、一人の寂しさを知った礼は当てもなくフラフラと学校内の見回りを行っていた。
　すると、学校の窓から外を覗いたときに目に飛び込んできたものがあった。

「……本棚が、動いてる？」

　学校校舎二階の窓から見たそれは、本棚がひとりでに動いているようにしか見えなかった。
　故に、礼の足はそちらへと向かっていく。
　興味と好奇心、それらが礼の足を早くさせた。

「ん？ぅ私がどうかしたの？」
「……うっそ～ん」

　人、しかも女性が本棚を片手で移動させているなんて誰が予想できようか。

「ああ、これか。最近噂の七不思議のひとつ。『移動する本棚』」
「『嘘とは何か。それは変装した事実に過ぎない』（バイロン『ドン・ジュアン』）とは言うものの、その物言いは少し酷いんじゃないかしら？」
「事実は『女生徒が本棚を動かしているだけ』というところですかね。そうは言っても常識ハズレだ」
「『でも、常識ではわりきれないようなできごとだって、世の中にはいくらでも起こっているんだぜ』（筒井康隆『時をかける少女』）と言われるぐらいに常識なんて通用しないことが多いのよ」
「いやいやいや、それはファンタジーの中のお話ですから」
「あら？特にこの学園なんて常識では図りきれないわよ」
「ええ、もう目の当たりにした光景から脱することが出来ないぐら

いに常識ハズレですよ」

そもそも、この学園で“常識”という物差しで計ることが出来るのは、甘く見積もっても特待生（スペシャル）までなのだが、日之影空洞生徒会長とあちらこちらを転々としていても入学したての礼にそんなことがわかるわけがないのは明白だった。

「君、本は好きかしら」

「昔から本とは長い付き合いでして。爺さんのおかげですっかり活字中毒者ですよ」

「それなら、ついてきなさい。いいところを教えてあげるわ」

言われるがままについていく。

行く当てもなかった礼にとって、この誘い出を断る理由などサラサラなかったからだ。

ただ、ただ一つ思うところがあるとすれば。

「（……本棚についていくなんて、なんてシュールな光景）」

「さ、ここよ」

目の前に広がる、巨大な建造物。

「ここ、は？」

「箱庭学園が誇る、国立図書館顔負けの図書館よ」

別世界へいざなうような重たい扉を開く。

そして、目の前に広がるは先ほどと同じ圧巻の本の山。

礼はそれをみて、子供のように目を輝かせた。

「い、いいわぁ～。君、おねーさんと絶対に気が合うわ。今のきみ

を見て確信した」

うっとりした表情で礼を見る十二町。それは、彼女も初めてここに連れてこられた時にした表情と一緒だったからだろうか。

礼はゆっくりと、一歩ずつ、本の世界へ踏み出していく。

鼻腔をくすぐる古い本の香り、綺麗に整えられた本棚、机の上に山積みに乗っている本。

それらは全て、礼の心を躍らせるのに十分すぎる役割を果たしていた。

「凄い！！こんなにも、こんなにも本が！！」

「凄いでしょう。理事長の提案でね。『本は人類の知識。故に、色々な人に読んでもらえることこそが最高の価値だ』という台詞にはぐっと来たわ」

「さ、流石だな、爺さん」

「（爺さん？まあいいわ）そういえば君、名前は？」

「俺は鳴神　礼です」

「ああ、君があの」

礼の名前は、有名といえば有名だ。主に委員会から。

生徒会に属していないのに、生徒会の仕事を手伝う変な奴というのが委員会の意見だったのだが、実際に会って話してみると委員長クラス全員で集まっての話し合いで出てきた人物像とは大きく異なるものだった。

「（それにしても、こんなに目を輝かせるなんて、本当に子供みたいね）」

「よ、読んでもいいですか！？この本の山！！」

「ええ、好きなだけ読みなさい。ぅ私も閉館時間までは一緒につき合ってあげるから」

そして、礼と図書委員長の読書時間が始まった。

「珍しい、こんなものまで……」

「この学園には、巻物まで存在しているから。閲覧もぅ私と一緒なら出来るわよ」

「おおおおおお！！」

礼のテンションがこれでもかという程に上がる。

爺さんの本好きに影響され続け、礼も本が大好きなのだから仕方がない。

それは不知火袴という引き取り手に影響された数少ないひとつではあるが、それは礼にとって義父である爺さんと話せる共通の話題であった。

本当の親子ではないという壁を礼も打ち破る方法を試行錯誤していたのだが、上手く思いつかない。が、ここで共通の趣味、話題があれば少しは楽々と越えることが出来るのではないか、というのが幼少期の礼の出した結論だった。

ちなみに余談だが、不知火袴はこの壁についてどう考えていたかというと。

「……おじいちゃんと、呼んでくれませんかねぇ」

の一言だけだったという。

「それじゃ、次はこの本でも……！？」

突如、この巨大な図書室を一瞬でも揺らせるだけの振動が起こる。

そこまで大規模な地震ではないが、しかし場所が悪かった。

ここは巨大な本棚を設置した図書室であり、その本棚には必ず本

が入っている。
振動により、十二町目掛けて本棚に収納されていた大量の本が落下してくる。
そして、十二町の後ろについている礼も例外なく、本の山に埋もれた。

「（……い、たた。あら？でも言うほど痛みも）」
「だ、大丈夫、ですか？」

暗がりでよくわからないが、礼の声が十二町のすぐ上から聞こえてくる。

「き、君！」
「俺は大丈夫ですから。後はこの本の山を崩していかないと」
「ぅ私を、助けて……？」

礼が十二町に覆いかぶさるようにして、本が落下し、与える衝撃をほぼなくしていた。
あの一瞬、されど一瞬。時間は存在した。その瞬間を礼は、守るという行動で活用した。

「まあ。さて、この本たちをどうやって……」
「鳴神！？無事か！？」
「ひ、日之影先輩！！こっちです！！」
「待ってろ！！」

運がいい。礼にとっても、十二町にとってもここで日之影空洞が現れるというのは、実に運がよかった。

今必要なのは本を一冊一冊綺麗にどけていくという愛書家ならではの発想ではなく、ブルドーザー並みに豪快にかき分けていく力の持ち主の存在が必要だ。

礼と十二町はもちろん前者だが、日之影空洞にとっては本<生徒という考え方だ。つまりは、後者。その存在こそが、この二人の命運を分けるといっても過言ではないほどに、必要な存在だった。

そして、数十秒という速さで、日之影空洞は二人を救出した。

「無事か？」
「なんとか」
「ぅ私も、彼に助けられたから大丈夫」
「そうか。よかったよかった！！」

こうして、日之影空洞のおかげで二人は救出された。

本は、図書委員ならびに礼と日之影空洞によって、日が沈むまでにはなんとか全て片づけが終了。

無事、地震で唯一被害のある図書館立ち直った。

「ありがとう、皆。ぅ私から御礼を言うわ。それに、礼君。守ってくれてありがとう」
「俺も、出来ることをしたまでですよ。無事で何よりです」
「また、ゆっくりといらっしゃい。今度は、本について語り明かす気持ち出来てくれると、おねーさんは嬉しいわ」
「頑張ります」
「そ、れ、に」
「？」

十二町の目が妖しく光る。

「君という人間を読ませてもらうわよ。私は君に興味がわいたから」
大好きな書物を読んでいるときの優しい表情で、彼女は礼に言い放った。
これが、礼と十二町の出会い。そして、今の今まで続いている、愛書家と活字中毒者の波乱の出会いだった。

「今思い返してみると、運が悪いのやら良かったのやら」
「そうですねぇ」
地震の被害が出たのはこの図書館のみ。他の教室やら実験室等は何の被害も出なかったらしい。
これについては運が悪かったとしか言いようがないだろう。
しかし、その後に見計らったかのように現れた日之影空洞という存在は、二人にとって幸運以外の何者でもなかった。
『運が悪いのやら良かったのやら』と十二町は自嘲気味に、しかしどことなく嬉しそうにそう呟いた。

「それじゃあ、依頼は私と本の整理をしてもらうことよ。最近、元の場所に返さない生徒が増えてきているのには少し困るわ」
「それは駄目ですね。あの図書館の本はしっかりと管理しないと」
「目の色が変わったわね。好きよ、礼君のそういうところ」

一日をかけて、本を整理する仕事は続いた。
礼の本当の夏休みは、まだまだ遠い。

おまけ

「そういえば、どうして読んだ本の内容を覚えているのに本、本棚を持ち歩いているのですか？」
「愚問よ礼君。本の重さが好きだから。電子書籍は好きじゃないわ」

本を読みながら、そう答える。
現在進行形で、礼たちは本を読んでいた。読書中はあまり話をせず、本の世界にのめりこんでいく二人だが、珍しく礼のほうからの質問に少し嬉しそうで、しかしわかりきった答えを聞かれる不満さが作り出す表情を見て、礼は少し苦笑いのような納得の言ったような顔で彼女の表情を見ていた。

「礼君も、そうでしょ？」
「そうですね。電子書籍は俺も肯定しかねます」
「同士ね」
「そうですね」

お互いに、拳をコツンとぶつけ合うと、お互いの手を強く握り合った。
そして、また黙々と本を読む。そして、語り合う。
『良き読書仲間』『愛書家つながり』『ビブリオマニアと活字中毒者』と図書委員の間で噂さえる二人は、今日も明日も、暇さえあ

れば本を読む。

第六十九箱　君という人間を読ませてもらうわよ（後書き）

ふう、書き終えた！！

十二町図書委員長の口調と、本からセリフを抜粋してくるのは本当に難しいので、この話を書いている序盤で諦めました。

さて、次回。

どの委員会へ行きましょうか……。

残るは……『保健委員会』『食育委員会』『美化委員会』『飼育委員会』の四つですか。

どの委員会へいくか、お楽しみに。

感想、誤字脱字の指摘も待っています。それでは！！

第七十箱　君という人間にさ

図書委員会へ向かった次の日、学校中が大パニックに陥った。
俺は偶々、とある場所に向かっている途中だったためにその混乱に一早く気づいたのである。

「どうした？」
「な、鳴神君！！あ、あああ、あれ！！」

陸上部の諫早先輩と有明先輩が指差す方向を見る。
そこには、なにやら動物園のような光景が繰り広げられていた。

「え？虎に兎に鶏に猫に……」
「檻から逃げ出したみたいなの！！」
「ど、どうにかできないかな！？」

これは、まさか……。

「飼育委員長、見かけませんでしたか？」
「え？委員長？私たち、まだ見ていないけど」
「鳴神さん！！」

グラウンドから何人かの女生徒と男子生徒が走ってくる。
なにやら一大事のような匂いが……。

「すみません！！委員長は現在黒神めだか生徒会長と喧嘩しておりまして……現在、手がつけられません！！」
「畜生！！ウチの会長が一枚噛んでいたか！！」

「檻に戻すのに手伝っていただけませんか？」
「陸上部はとりあえず動物から逃げて待機していてください。これは俺達がやりますので！」
「「は、はい！！」」

陸上部の全員が動物から距離をとる。
よしよし、それじゃあ行きますか。

「檻を用意していてくださいね」
「はい！いつでもどうぞ！！」
「グルルルルルルル！！！ガアアアアアアアアアアアアア！！！」

虎が俺を餌と勘違いして襲いかかってくる。
人間では到底不可能な速度で迫り、鋭い爪が俺を引き裂かんと振るわれる。

「……さあ」
「！？」

しかし、俺の声を聴いた瞬間。虎は振るおうとしていた爪を止め、一歩間合いを取った。

「そのまま来い。抱きしめて撫で回して愛でてやる。こっちに来てその滑らかな手入れの行き届いた毛皮を撫でさせろ撫でさせてくれ撫でさせればいいんじゃない？」

黒神が凶暴な犬の時に使った威圧感を出し、虎に迫る。
本来ならば。俺はこんなものを出さなくてもいいのだが、ストレスが溜まっている俺はそんなこと知らない。ゆえに抑えておく必要

はない。
それに、俺も動物は好きだ。大好きだ。やわらかな毛並みに気持ちのいい体温、そして特有の愛くるしさを持ち、この凶暴そうな虎でもマタタビをあげれば猫のように喉を鳴らし可愛らしさを惜しげもなく撒き散らしてくれる。
甘える時の声なんて俺の心に突き刺すかのように愛おしさが溢れてくる。
ただ、今回はストレスと入り混じって凶悪な気がするのは否めない。

「さあ、こっちにおいで！！」
「ガアアアアアアアアアアアアアアアア！？」
「あ……」

やはり、逃げられたか……！！
虎は先ほど飼育委員の人が開けていた檻に飛び込み、震えだす。
他の動物も、虎と同じように檻へと逃げ震えだした。
動物がそれぞれの檻へと戻ったことを確認して、飼育委員が檻の扉を閉め鍵をかける。

「助かりました！礼さん！！」
「い、いえ」
「どうしたのですか？」
「……な、なんでもありませんっ」
「あ、礼さん！？」

くそう、ここまで怯えられるだなんて！
ストレスを溜めてたのがいけなかった！畜生！次はストレスなんてない爽やかな状態で動物達に触れ合って見せるからな！！
俺は、その場から一目散に走り出し、少し涙を流した。

「さて、落ち着いたな二人とも」

ごめんなさい。一目散にはなっていません。喧嘩している二人の下へと走っていました。涙は本当ですが。

「「……はい」」
「喧嘩の原因は？」
「「パンダとコアラ、どちらが癒し系かです」」
「結論は？」
「「まだ出ていません！！」」

喧嘩体勢に戻る。
俺は、というと。

「二人とも」
「「（ビクッ！！）」」
「喧嘩はいい。俺はそれについて咎めるつもりはない」
「れ、礼君？ならなんで……」
「そ、そうだぞ礼。ならばどうして」
「「どうしてそんな笑顔で凶悪そうな鋏を構えているの？！」」
「知れたこと。俺が言いたいのは」

二人が後ずさる。
俺の顔は今、とてもいい笑顔で二人を迎えていることだろう。
そして俺の手には、普通の鋏の１．５倍ほどの大きさの鋏が両手に装備されている。

「れ、礼！わかった！！すまなかった！！」
「ははっ！黒神からそんな言葉が聞けたのは初めてだ」
「礼君！ちゃんと動物たちの面倒はしっかりと見るから！今回のことがないようにします！！」

二人が肩を抱き合ってフルフルと震えながら俺に懇願する。
そういえば、俺が飼育委員長、上無津呂（かみむつろ）　杖（つえ）先輩に初めて出会った時もこんな感じで説教をした記憶があるなあ。

「今日は、このあたりで終了だな」
「お疲れ様でした」
「おう。お前もお疲れさん！」

図書委員会のあの１件から数日が過ぎた。
礼は相も変わらず日之影空洞の仕事の補佐を努めている。
生徒の自主性を重んじる生徒会の活動は多岐に渡り、校内美化から備品管理、事件調査に事務処理、行事運営まで行っている。
それを、入学して約十日近くしか経っていない人間が補佐するという時点で異常なのだが、そもそもが異常である礼にそれは何の意味も成さない。
しかしながら、日之影空洞は礼が異常であると確信があっても証拠はない。礼が十三組に異動という異例が起きれば、それは確定するのだが未だにそれが起きない。
それでも、礼という存在が近くにいるだけで満足な日之影空洞にそのような文句や愚痴を言うだけの不満が存在しているわけではないのだが。

「それにしても、陸上部は頑張ってるな」
「箱庭学園主催の陸上大会が近いみたいですからね。気合も入っているのでしょう」
「そう考えると、何でもありだなこの学園」
「そうですね」
『と、虎だ！！』
『どうしてこんなところに象もいるの！？』
『鶏が！俺の頭をつついてきてイタタタタタタ！！！！』
「「はぁっ！？？」」

陸上部からありえない生物の名前が聞こえてくる。

「お、おいおい！ここは一体いつから動物園になったんだよ！？」
「お、俺に聞かれても！とにかく陸上部を避難させないと」
「おう！やるっきゃねえな！！」
「生徒会長！！」
「飼育委員会か！どういうことだこれは！？」
「実は、女生徒と委員長が喧嘩していまして……。散歩中だったのですが喧嘩に白熱してしまい、手綱を振り払った様子でして」
「お、おいおい！！とりあえず陸上部の避難！それで残った奴らは動物の檻を全部持って来い！！」
『はい！！！』
「礼は俺と動物の捕獲！行けるか？」
「な、なんとか？」
「よっしゃ！行くぞ！」

そして、俺たちの動物捕獲祭りが開催された。

「礼！虎は檻に入ったぞ！」

「ま、待ってくれ象よ！お前の重さで抱きつかれたら俺が死んでしまう！！」
「畜生！犬が礼の方へとありえないスピードで走り去って行っただと！？」
「うおおおお！！脱出！！」
「象は任せろ！！」
「鳴神さん！犬と猫をこちらの二つの檻に！！」
「任せろぅ！！」
「鶏が、鶏がつついて来てイタタタタタタ！な、鳴神さん！！」
「鶏冠君！！お前はこっちだ！！」
「コケエエエエエエエエエエエエエエ！！」
「すみません鳴神さん！」
「任せて！！って痛い痛い痛い！！」
「礼ーーーーーー！！頑張れーーーーーー！！」
「日之影先輩もがんばれーーーー！！！」

やがて、動物は全て檻に帰し危機は去った。俺たちはボロボロになりながらグラウンドに寝転がる。

「つ、疲れた」
「礼、お疲れだったな……。象強えええええ」
「日之影先輩もお疲れ様です……」

そして、喧嘩真っ最中の二人はというと。

「犬のほうが可愛いに決まっておろう！！」
「いいや猫だね！！あの子達の愛くるしさを君は知らない！！」

「なにおおおおおおおおおお！！！」
「なにさあああああああああああ！！！」
「「……」」

グラウンドまで出てきて、喧嘩をしていた。

「こんのぉ、バカ二人！！」

そして、日之影先輩の容赦ない体罰専用鉄拳（力加減しているだけ）が二人の頭目掛けて振り下ろされた。
ちなみに、礼はもう疲れてその様子を見ているだけでした。

「「う、おおおおおおお」」
「何やってんだ！！」
「生徒会長！聞いてくださいよ！！」
「いいや！聞くのはこっちだ！！」
「何で喧嘩しているんだ！？」
「「犬と猫、どっちのほうが可愛いか」」
「……それで、結論は？」
「「まだ出てない」」
「お前らちょっとそこに正座しろ」

日之影空洞生徒会長が二人をお叱りする様子を、礼は力なく垂れながら見ていた。
途端に、礼の両の頬に少しザラザラとした感触が訪れる。

「にゃぁ」
「わんっ！」
「……！」

犬と猫、2匹が仲良く礼を労うかのように舐めていた。礼は言葉にならない感動を味わい、満足げに寝転がっている。
その光景を、お叱りしている、されている三人は見る。

「そうか」
「どっちが可愛いかじゃない」
「そうだよ、そうじゃないか」
「なんで気づかなかったのだろうか」
「「どっちも可愛いんだ」」

その結論にたどり着いた二人は、お互いの肩を抱きしめあった。
奇しくも、友情が芽生えた瞬間である。
日之影空洞は二人へのお叱りをやめ、礼に近づくと犬と猫に服を引っ張られ、しゃがんで手を2匹の前に差し出すと優しくその手を舐められ、癒されたという。

「それにしても、礼君、だっけ？」

いつの間にか近づいていた女生徒を見上げる。
猫耳が頭に装着されている胴着の女性を見たのは、初めての体験だった。
いや、まぁ。他にも見る機会が合ったのはおかしな話だと心の中でツッコんでいる礼は、少し苦笑い。

「あなたは……飼育委員長ですか」
「うん。上無津呂　杖っていうんだ。よろしくね。それでね」
「？」
「君という人間にさ、興味がわいたよ。動物に愛されている君を、もっと知りたい」

これが、飼育委員長との出会いだった。
そして後に語り継がれる、理事会を震撼させた『動物祭り事件』は幕を閉じたのである。

戻って現在。動物祭り事件リターンズ。理事会再び震撼。

「てなわけだけど」
「「（ガクガクブルブル）」」
「ま、今回は大目に見るけれど、次は駄目ですよ？」
「「はい、肝に銘じます」」
「よろしい」

二人の、特に生徒会長黒神めだかが項垂れる瞬間を見た残りの生徒会役員達は、補佐の必要性を改めて感じるのであった。
ちなみに、討論（論議だけではすまなかったが）の結果、『犬と猫』と同じように『どちらも癒される。それ以外に答えはない』で幕を閉じた。

第七十箱　君という人間にさ（後書き）

ロサです。
今回は飼育委員会でした！

次回は……食育委員会です！お楽しみに！！

感想、誤字脱字の指摘、もっとこうしたらなど、感想をお待ちしております！！

第七十一箱　「「君という一人の人間を評した上で」」（前書き）

今回、『食』というテーマに悪戦苦闘しました（泣）

第七十一箱　「「君という一人の人間を評した上で」」

動物祭りリターンズの次の日、生徒会室に向かった俺は黒神の少し悩ましげな表情が気になったのでつい理由を聞いてしまった。
すると、夏休みだというのに一通、目安箱に投書があったというのだ。

「目安箱に投書？」
「そうだ。それがだな、恒例のように続いていた委員会の人間ではない」
「へえ、夏休みなのに委員会以外の生徒がするなんて、珍しいな」
「そうなのだ。それで、だな」
「？」
「『私は運動部に入っているのですが、今の、特に夏は食堂のメニューでは少し物足りない気がしてなりません。スタミナがさらにつくようなメニューを追加していただけませんか？』」
「それは、その……。管轄が違うんじゃ」
「しかし！投書がされたからには我々がやらねばならん！！」
「ま、そういうと思ってたよ」
「ところで」
「ん？」
「何時になったら私のことを『黒神』ではなく『めだか』と呼んでくれるのだ？」
「……恥ずかしいんだよ。わかれ」
「何を言う水臭い！幼なじみなら恥ずかしがることはないぞ！」
「……善処する。心の準備が出来次第言ってみるから」

「ああ！それでは行くか！！」

少し満足気な黒神と二人で、食堂へと向かう。

今日、生徒会執行部は俺と黒神を除いて二学期への準備に取り組んでいた。

黒神を残したのは、ここまで頑張って働いている黒神へ送る、少しばかりの感謝の気持ちだそうだ。

当然俺はそれを知らなかったのだが、後に善吉達に聞かされ、恐ろしい表情で迫られたことで俺は、あんなことを言ってしまったのはまあ、後で語るとしよう。

「ほう、やはり人は少ないな」

「まあそうだろう。午前十時、この時間帯に人がいるのは委員会の人間ぐらいだ」

「それは私のことかな」

「「！！」」

厨房から声をかけられる。

予想していなかった声に思わず二人でそちらを向いた。

「久しぶり礼君。朝ごはんでも食べていく？有料だけど」

「お久しぶりです。米良（めら）　弧呑（このみ）さん。この時間帯に入っているのは珍しいですね」

制服の上にエプロンをつけ、こちらを笑顔で見る女子生徒。通称

『超理師』の名を持つ食育委員長が厨房に入っていた。

「ロードが材料の調達に行っているのでな。出来る限り今残っている食材を『超理』したいのさ」

米良さんが真剣な表情で言う。そして、黒神を見据えた。

「貴様が箱庭学園史上初のダブル委員長、米良二年生だな」

「そういう君は支持率９８％で当選した黒神さんか。お噂はかねがね」

何故か、それは俺にもわからないがこの二人の間で火花が散っている気がした。

食育委員長としての勘か、はたまた『超理師』としての勘が働いたのかもしれないが、米良さんは黒神に何かあると感づいたのかもしれない。

あくまで俺の見解だが。

「ロードはもうすぐ帰ってくる。その前に、君たちの用件を聞こうか」

「ああ。目安箱にこのような投書があったのでな」

黒神が投書を広げ、米良さんに見せる。

「どれどれ……」

投書を受け取り、読んでいく。

黙々と。そして少し不満そうにその投書を読み終える。

「話はわかった」

「どうだろう？一品追加してもらえないか」
「正直、私は追加せずともいいと考える」
「ほう、どうしてだ？」
「礼君、君はわかるだろう？」
「俺に振りますか。まあ、そうですね。ここの食堂は栄養価重視だけでなく、色々な人の要望に応えられるようにメニューを作っていますから」
「そうなのか？どれどれ……」
「スタミナをつけたいなら、この丼定食だ」

黒神にわかりやすく、米良さんがメニューを書いてる上の看板を示す。示した場所はスタミナ料理を取り上げたメニューで、料理名だけでなく摂取カロリーも横に記載されていた。
ちなみに、値段は学生にとってありがたーいお値段である。

「……確かに、これだけあれば納得だな」
「レパートリーも充実させているつもりだ。牛丼、天ぷら丼、親子丼に鉄火丼……。それに、それだけでは栄養価が偏ってしまうのでしっかりとサラダなどもつけている」

この言葉を聞いて、黒神が少し唸る。
正直、俺もその投書を見たときは疑問を持った。
スタミナをつけたいのならばこういう定食だけでもいいはずだ。
『スタミナ定食』も存在しているし、値段は少し高くなるが量を多くしてもらうことも出来る。
故に、この投書は達成するのかも悩めるところだ。

「ふむ、この投書はなかなかに難題だな」
「メラリー。食材の調達終わったよ」
「ロード。いつも助かる」

ロードと呼ばれる男子生徒が厨房に戻ってきた。
左手には猟銃を下げ、制服の上にコックの服を着ている男子生徒。
この人が、もう一人の食育委員長である飯塚（いいづか）　食人（くろうど）。通称『猟理人』。
この人は主に食材の調達がメインで、『今日が旬の食材』をかき集めてくる。

「おっ！礼君じゃないか！何か食べていってくれよ！旬の食材集めてきたから！」
「この依頼が終われば、そうですね。ちょうどお昼ですし頂きますよ。黒神も食べて行こう」
「礼、先の問題を後回しにする発言は好まんぞ。ふむ、ちょうどいい」
「おや、君は生徒会長の黒神ちゃんか。どうしたんだい？」
「ロード。実はだな」

米良さんが飯塚さんに今までのことを簡潔に話す。

「……それは聞き捨てならないね」
「意見を聞こう」
「僕は最良の食材を旬のタイミングで提供している。それは食べる人に美味しく、そして何より栄養価もいいと考えてだ」
「私も同意見だ。私も食材に敬意を払って、栄養価も味も考えて『超理』しているし、スタミナのことも考えて作っている」
「その言や良し。むしろ私は絶賛したいぐらいに聞きほれる言い分だ。しかし、こうして投書をした者もおるのだぞ」
「……」

ここまで来て、俺は思い出す。

やはりというべきか、なんというべきか。この二人との出会いを。

それは、今の状態となんら変わりないことだった。

動物祭りの次の日、生徒会に一人、いや、『部活動を代表して』一人の生徒が相談しに来たのだ。

相談内容は、『スタミナのつく料理を食堂に作ってくれ』。

礼は入学したてで食堂のメニューを知らなかった。故に、解決するかの判断を日之影空洞に全て委ねた。

日之影空洞生徒会長が悩んだ末に相談しに行くことを決意する。

「……」

「どうしました？」

食堂へと向かう途中、礼は空洞が黙り続けていることに疑問を持って、話しかけた。

「正直、俺はこの相談を解決するべきか悩んでいる」

「珍しいですね」

「礼は入学したてで知らないかもしれないが、ここの食堂のメニューは豊富なんだ」

礼が一度でもいいから食べに行こうと思ったのは言うまでもない。

「今年の食育委員会は有能で、本来ならばそんな相談を受けることがないんだよ」

「そこまで、ですか」

「ああ。そもそも管轄が違う。食育委員会へ言いに行くのなら手伝ってもやれるが、俺たちに放り投げるというのは、なぁ」
「無責任、ですね」
「わからんこともないが、まあやれるだけやってみるか」

食堂へ到着。夕暮れの食堂は夕日が差し込み、人一人いない寂しさを礼に思わせた。

「この時間に来るのは珍しいね」
「おや、食べに来たのかな？」
「よう、委員長二人」
「「……せ、生徒会長！？」」

礼はその反応を見て、思い出したかのように納得する。
このとき、日之影空洞の『知られざる英雄（ミスターアンノウン）』は発動されていた。
礼という存在により、姿は認識できても記憶のほうは思い出すのに時間がかかったようだ。

「め、珍しいですね。食べに来たのですか？」
「いや、ちょっと生徒から相談を受けてな」
「相談？」

飯塚のほうに日之影は歩み寄り、話をしている。
礼は何もすることがなかったので、食堂のメニューを見ていた。

「君、名前は？」
「鳴神礼です」
「新入生か。よかったらご贔屓に」
「そうですね。皆からも評判がいいですし、食べに来てみようかな……」

「ところで、君はどうして生徒会長と？」
「手伝いをしていまして」
「へえ、ああ、私の名前を言い忘れていたね。私は米良弧呑。ここで『超理』をしているものだ」
「超……理……？」
「ああ。『理を越えた』料理を皆に振るまうのさ。一度食べてみてくれれば私の言っていることがわかるよ」

笑顔で礼へと言い放つ挑戦状のような言葉に、礼は興味を示す。
それは、食事という楽しみを知り、食事とは何たるかを知らない反応であった。

「礼君、君には言っておかないといけないことがある」
「なんでしょうか？」
「君は、食事をするとき何を考える？」
「……俺は、どんな味なのかを楽しみにしています」
「いいことだ。しかし、君は食材に対して何を考える？」
「……」
「漫然とご飯を口に入れるときに、自分はどうして生き続けることが出来るだろうと考えたことはないか？」

真剣な顔で、しかし、それを語ることが出来る人間を見つけたような嬉しそうな顔で、彼女の言葉は続いていく。

「……俺は、いただきますという言葉を、食事の一環である動作として流していました」
「そう。それがわかっただけ、君は優しい人間なんだよ。夏に食べるスタミナ料理の一つであるウナギ、クリスマスに食べるチキン。これもまた然りだ」

礼は、彼女の言いたいことがわかる。
そして、自分の生きているという事実を再確認していく。

「生きることは即ち、食べることだ。そして食べることは殺すこと。だからといって、食べるななんてことは言わない。それこそ、食材への冒涜だ。殺した食材への感謝の言葉こそが、私たちの『いただきます』という言葉なんだよ」

言い終えた米良は、礼を見て微笑む。
礼は、彼女を嬉しそうな顔で見返した。

「それにしても、あちらはあちらで討論してるね」
「飯塚先輩、結構怒っていますね」
「それはそうだろう。料理をしている人へ、『最良の食材を旬のタイミングで提供している』ことこそが彼の仕事なんだから。これ、彼の持論な」
「……あの人は、きっと」
「ああ。『いただきます』という言葉は食材にではなく、料理人への感謝の気持ちなんだ」

礼は、二人を見る。
彼女が見た礼の顔は、満足気に、そして、食というものに改めて敬意を感じた人間の顔だと悟った。

「聞いてくれメラリー！」
「事情はわかっている。礼君、君はどうすればいいと思う？」
「……俺ですか？」
「そうだね。礼君、君の意見を聞かせてもらえないだろうか？」
「礼、お前が思ったことを言えばいい」
「……」

日之影空洞は、飯塚の講義を受けて顔をしかめ続けている。
食材の提供、そして食べる人への敬意を払っている彼の仕事に、不満という点は存在しなかった。故に、難題。
礼ならば、もしかすると。という希望に、選択権を預けた。

「飯塚先輩。今日が旬の食材は、どれほどあるのでしょうか？」
「ん？そうだね。見せたほうが早いな。メラリー」
「ああ。こっちだ」

厨房の内部へ案内される。
そして、目の前に巨大な冷凍庫と、その横にあるもうひとつの部屋へ迎えられた。

「これが、俺がかき集めてきた今日が旬の食材さ」
「こ、こんなに！？」

部屋ひとつを埋め尽くすほどの食材の山。
その量は減ってはいるが、それでも、やはり多い。

「三分の一は使ったみたいだね」
「これ、明日の学食にも使うのですか？」
「いやいや。俺がかき集めてきた今日が旬の食材を使いまわしにされたら敵わないからね。最初に集めてきた量の大半はいつも処分しているんだ」
「……！！」
「……」

礼と、日之影空洞は言葉を失う。
しかし、飯塚という人間をさきほど確認した礼は、不満ながらも

腑に落ちていた。
『今日が旬の食材』つまりそれは、『明日になれば旬のピークを過ぎる食材』が多数存在するということだ。
料理人、そして何よりも食べる人へ敬意を払う飯塚にとって、使い回しは度し難い行為のひとつなのかもしれない。
何よりも誰よりも、食べる人のことを思うが故の、最善の措置。

「……」
「（さあ、どうする礼君。私を、そしてロードを納得させる意見を出してみろ。そのために、私は君にダブル食育委員長の掲げる『超理』と『猟理』への信念を教えたんだ）」
「……そう、ですね。米良先輩」
「何かな？」
「定食の量の増加、したことがありますか？」
「「！！」」

礼の出した意見は、あまりにもシンプル。
しかしそれは、食育委員長の二人がしたことのない内容だった。
『栄養価を考え、常に食べる人の健康や体調を考え、美味しいといわれる料理』。つまりそれは、『料理のボリュームも全て考慮し、最適な量だけを用意する』ということだ。
礼の考えはいたってシンプル。しかし、彼等の思想では想像もつかない提案。

「しかし、スタミナをつけるために量を多くしては」
「野菜系統など、栄養価を偏らせない一品をさらに追加するというのではどうですか」
「……礼君、君は食材への供養も考えているのかい？」
「はい」
「……参ったな。これは僕にはなかった発想だ。食材の消費を増や

し、捨てる量を減らすというのは、僕の中にはなかった。メラリー、君はどうだい？」
「……私も、食材をもっと使うことが出来ればとも考えていたが。やはり食べる人のことも配慮していた。いや、し過ぎていたのかも知れない」
二人は、嬉しそうに礼を見る。
「礼君。参考になったよ。明日からそれを試そうと思う」
「是非明日、食べに来てくれ。いや、労いも兼ねて今食べて行ってくれ。生徒会長も」
「お、俺もか？」
「ああ。いつも学園を守ってくれているじゃないか。私たちに、その礼をさせてはくれないか？」
「……食べましょう、日之影先輩。ここ数日、波乱万丈でしたし」
「……そう、だな！よっしゃ！！食べるぞ！！」
こうして、食育委員長も混ぜた食事会が始まった。
「礼君」
「はい？」
「「君という人間を評した上で、君に興味がわいた。また、食べに来てくれ」」
「もちろん！」
「ところで礼君、君は料理が出来る？」

「一人暮らしなものですから、一応は」
「ふむ、一度、振舞ってはいただけないか？」
「お、俺がですか！？」
「そりゃーいい！礼の手料理は食ってみたいもんだ！！」
「僕も、大食いで鍛えたお腹がなるってもんだよ！」

その後、米良に続いて礼も手料理を振る舞った。
皆が食べているとき、一番緊張していた礼だったが、『美味しい』という言葉を聞いて、礼が顔をほころばせたことに、米良と飯塚は優しい顔で見ていたそうだ。

これが、食育委員長との邂逅である。

「礼、どうする？」

黒神の言葉で、記憶の海から戻ってくる。

「……」

悩む。
前と違って、ボリュームアップは確実に使えない。
時期が夏、それは食材の足が早くなることも示している。
飯塚さんの言い分は今の時期ほど正当化されるものだ。それは米良さんもわかっている。

「……夏のメニューなどはどうでしょう？」

「季節でのメニューにする、ということかい？」
「そうです。まあ、一品足すだけならば夏のスタミナ料理を出す、『夏定食』のような感じで」

うな重などの定番スタミナメニューや、レバニラ炒め。夏バテ予防の料理を定食として出せばいい。

「……ロード。確かにこれは一理ある。夏のスタミナ定番メニューを作ればいいんだ。食材の足が速いという夏の苦しさもこれで抑えることが出来る」
「……僕は食材に対してはあまり何も感じないが、痛むのだけは勘弁だな。メラリー、作ってもらえるかな？」
「任せろ。ロードの努力を無駄にするほど私は愚かではない。礼君、黒神さん。よければ試食してもらえないか？」
「私は一向に構わんぞ！初めての食堂デビューが新たなメニュー追加に携わるなど、感動でお腹がいっぱいになりそうだ！なぁ礼！」
「そうだな。それに昼時に近い。いい時間帯だろう」
「メラリー、僕の分も頼めるかな？お腹空いちゃって」
「ここは、黒神さんと大食い対決でもしてみるか？」
「お、いいね！と言いたいんだけど、やっぱり普通に食べよう。それはまたの機会にとって置くよ」
「礼、部活動をしている者達にも、これを食べ終わり、満足次第伝えに行くぞ」
「おう」

試食結果は、言うまでもなかった。美味しく、そして身体全身に力が増していくような、そんな料理。
黒神なんて、食べた後に『力が漲る！』などのセリフを言いながら完食し、飯塚先輩は嬉しそうにガツガツと食べて行き、全部食べ終わる頃には『おかわり！』と米良さんの料理をアンコール。

俺は食べきった後に、米良さんの超理を見て勉強させてもらった。
うん、満足満足。
こうして、箱庭学園食堂に「季節のスペシャルメニュー」が追加された。

追記

「黒神ちゃんも作ってみる？」
「いいのか！？」
「お、万能生徒会長、めだかちゃんのお手並み拝見ってとこだね」
「頼むぞー、黒神―！」
「任せろ。これ以上とないほどの大盤振る舞いをしてやろう！」

……不知火がいないことを後悔しました。

第七十一箱　「「君という一人の人間を評した上で」」（後書き）

ロサです！
前書きの通り、本当に悪戦苦闘でした。
食に対する思いを表現する。それは普段からしていることを見返して、どれだけのことを感じているか、または感じていなかったのかを改めて省みたお話でした。
さて、残る委員会は二つ。『保健委員会』『美化委員会』。どちらに行くかは僕のテンション次第です。
それでは、お楽しみに！

感想、誤字脱字の指摘、ここをもっとこうしたら面白くなるよ！などのご意見をお待ちしております！

予告（委員会邂逅編が終わり次第予定）

1.

「礼！こっちも面白そうだぞ！！」
「ひ、引っ張るな！黒神！！」
「礼？」
「め、めだか……」
「うむ！」

それは誰もが予想だにしなかったデート。球磨川に嫉妬の嵐が訪

れる。
『生徒会長と補佐のお出かけ』

2.

「あ！久しぶりじゃねーか礼君！私を忘れたなんて言わせないぜ？」
「お久しぶりです。お元気そうで何より」
「久しぶりの反対の反対！」
「わー！戦挙以来だねー。元気してた？（棒読み）」
「お久しぶりだねー。カラオケ行こうよ」
「どうですか？カラオケでも」

夏休み、それは再会の一ページ。
『裏の六人＋1はカラオケへ行く』

3.

「バイトだー！！！」
「む、礼ではないか」
「おっす！」
「やあ、鳴神くん！」
「礼君、バイト？日当いくら？」
「『やあ！』『奇遇だね礼君！』」
「……畜生」

夏休み、礼は戦挙の時の念願を叶えるが。
『海は祭りだ戦争だ！』

本当に未定の話

「お前……！！」

「……何？」

「お前のせいで！お前のせいで俺たちの学校は！！」

「……入学したての俺を殺そうとしたくせに」

「ぐっ！」

「……俺は悪いか？いいや、俺のは『正当』防衛だ」

礼、過負荷時代。

『版劫逝謎（デットライン）はかく語りき』

未定ですのであしからず。

第七十二箱　「君って……こういうの好き？」

「さてと、校内美化だ」
「夏休みはなかなか出来なかったからな」
「鳴神くん、人吉クン、君たちは屋上から順に降りる形で掃除を。俺と喜界島さんは下から上で」
「「「了解！」」」

本日も、委員会からの貸し出しはなかった。
しかしながら、夏休みは誰も掃除をしないのが祟ったか埃があちらこちらに落ちているのが目に付く。
箒、ちりとり、窓拭き用の雑巾。清掃道具は一通りそろえている。
黒神に球磨川？あの二人はだって？
それが……。

「あ～ん！礼君と一緒に掃除したい～！」
「言うな球磨川！私も皆と掃除がしたいのだ！！しかし、しかし……！」
「……真黒ちゃんと名瀬ちゃん二人からの呼び出しなら仕方ないよね。私が行く意味がわからないけど」
「私一人では、変態（アニキ）を止めることなど不可能だ。顔見知り、しかも仲がよかった貴様なら、と思ったのだ」
「人にお願いする言葉じゃないよね？それ」
「た、助けてくれ！今回だけは本当に一人では危険だ！！」
「き、鬼気迫ってるね……。いいよ。そこまで言われちゃあ先輩としての名が廃っちゃうしね」

と、こんな感じだ。どれだけ自分の兄に会いたくないんだあいつは。

「カッ！それにしても、校内美化も生徒会の仕事なら『美化委員会』は必要ないんじゃねえか？」

「善吉。よく考えてみろ。俺たち生徒会に課せられた掃除場所は？」

「さっきも言ったじゃねえか。『校内』……おいおい、まさか」

「そういうことだ。生徒会が『校内』ならば美化委員会は『校外』。つまり、この広い敷地面積一帯だ」

故に、生徒会は校内しか掃除をする仕事が課せられていない。流石に、校内にまでは人手が回らなかったので前生徒会長である日之影先輩が美化委員会に申し出たのだ。

「なるほどなぁ」

「さて、俺たちに課せられたのは屋上の掃除だが」

「？」

「善吉、美化委員長にだけは出会うなよ」

「なんで？」

「語るも涙、言うは恥」

「どうした礼！？」

善吉が俺の肩をゆすってくる。

しかし、俺のネガティブオーラは拡大を止める気配を見せない。

「おい！礼！気をしっかり保て！！」

「ははっ！やめてくれ！！お願いだ！！それだけは！それだけは！！」

「礼が壊れたーーーー！！！」

「やめろぉ……やめてよぉ……」
「礼が、礼がかつてないほどに壊れている……！！」
あはは、思い出される惨劇は、俺の目頭を熱くさせる。

「礼、美化委員会室へ行くぞ」
「どうしてまた」
「実はだな、美化委員会の清掃範囲があまりにも酷でな。生徒会がせめて校内は手伝うことを言いに行くんだ」
「了解です。……それにしても、この面積を清掃するなんて凄いですね」
「だろう？しかしだな『流石に猫の手も借りたい』と美化委員会の一人が相談に来た。俺も手伝えることがあれば手伝いたい」
「先輩らしいですね」
「そう言ってくれると助かるよ。それじゃ、行くか！」
「はい」

これが、惨劇の始まりだと知らずに礼は歩みを進めるのであった。

「廻栖野（めぐすの）うずめ美化委員長はいるか？」
「はい、ここに」
現れたのは、魔女の格好をした女性とが立っていた。
……コスプレ？

「生徒会長の」
「知っていますよ。いえ、先ほどまで忘れていた、というべきでしょうか」
「なら話は早いな。生徒会が『校内美化』の全権を得て手伝おうと思ってそれを相談しに来たのだが」
「それは本当にありがたいです。私たちはこの学校を掃除するのに精一杯で……。敷地だけでも手が回らないというのに……」
「なら、成立だな。ところで、コスプレは控えておけよ？風紀委員会が五月蝿いぜ」
「そうなんですけどねぇ………」
「んあ？どうした」
「ひ、日之影生徒会長。そちらの人は？」
「新入生の鳴神礼だ。いろいろ、手伝ってもらってる」
「は、初めまして」
「――――――――――――！！」
「！？」

廻栖野の顔が嬉しそうになる。いや、もし感情の高ぶりに比例して放たれるロケットがあるならば、今にもつきへと向かいそうな勢いだった。
それほどまでに、礼を見た瞬間に廻栖野の感情は高ぶっていた。

「君って……こういうの好き？」

示されるのは後ろにおいてある服。どれもコスプレ用の服である。

「（い、いかん！礼！答えたら駄目だ！どんな返答でも！）」
「そうですね……着てみたい、と思うのは確かにありますが」

無論、礼が着てみたいと思ったのは執事服や改造制服（男子生徒

用）である。その作りこみは廻栖野が持つ肩書き『魔女』と『ファッションリーダー』の維持とプライドにかけて作られている。
故に、本当に一着の燕尾服やコスプレ用のではないしっかりとした執事服が揃っていた。
理事長の家にいるとき、礼には執事がいた。それは、仕事も出来て何よりも格好よかったのを覚えているらしく、それを着てみたいという衝動に駆られていたそうだ。
しかし、廻栖野はそれを知らない。

「（あっちゃ～～～～）」

日之影が顔をしかめる。対照的に、廻栖野は大喜び。

「そ、そう!?それじゃ早速着てみよう!!」
「え、ちょっ!」

礼の袖を女性とは思えない力で引っ張り、試着室（美化委員会専用）へと消えてゆく。

『これとか、これとか、これとか!!』
『ちょ、待って!どれも女物!!』
『だって似合いそうなんですもの!!カツラは、髪の色とあわせてこれね!』
『うわっ!た、助けーーーーーーーー!!』
「礼、諦めろ。そうなったら俺でも止められねえ」

ドレスアップ、終了。

「はい！一着目はこれ！！」
「……チャイナ服」
「なんでそんなものを……。スリットも深いし」
「似合うでしょう！？可愛いですよね！！私の作った服がここまで似合う人はいなかったもの！！」
「……ちなみに、後何着ほど？」
「えっとね、五十「失礼しました！！」逃がさないわよ！！！」
「早い！一瞬で回りこまれた！？」
「諦めろ。廻栖野は基本普通（ノーマル）だがスイッチが入ると十三組（アブノーマル）と対抗できる」
「なんだって！？」
「つっかまっえた！」
「せ、先輩！日之影先輩！！」
「悪い。こうなったら俺でも勝てない」
「そ、そんな……！」

礼の顔が青ざめる。つまり、脱出不可能状態（コスプレパーティー）。
状況も打破できない。逃げようにも振りほどけない上に引きずりまわされる始末。

「さあ！どんどん行くわよー！！」
「いやあああああああああああああああああああああ！！！」
「……こういう言葉をかけるのは酷かもしれないが、似合っているだけましだと思ったほうがいいぞ」
「女物が似合うのはもっと嫌あああああああああああああああ！！」

それから、メイド服に婦警、ウエイトレスにシスターナースに巫女服、箱庭学園女生徒用セーラー服（改造系も含め約２０着）、ありとあらゆるコスプレ服を着せられた気分になる礼だった。

ちなみに、止めたのは美化委員会の人間（女生徒）と、礼のぐったりした姿を見て焦った日之影空洞であった。

男子はどうしたって？礼のコスプレに拍手を送るほどだった。

こうして、嬉しそうに礼を見る廻栖野は、ひょんなことで邂逅した。

礼の委員会邂逅はハプニングばかりだったが、礼曰く「一番疲れた」事件だったという。

「……礼」

善吉は泣いていた。珍しく、ハンカチまで用意して。

「……言うな。俺も涙が出る」

「そうだな。早く掃除して（グスン）飯食いに行こうぜ」

「ああ」

「発見！！！！！！！！！！！」

この声はまさか……！！

「礼君見っけたあああああああああああああああ！！」

陸上部顔負けの速さで走ってくる廻栖野先輩の姿が、見えた。

瞬間、トラウマリターンズ。

「いやあああああああああああああああああああああ！！」

俺も、逃げました。追いつかれないように必死で。

だけど、捕獲されましたよ。教室二つ分の距離を一瞬で詰められた。

この人本当に普通科でいいの！？世界狙えるよ！？

「逃げないで！！今日は執事服もあるから！！」

肩を捕まれて迫ってくる美化委員長。今日はコスプレをしていないらしく、普通の規定どおりセーラー服を着ている。

そんなことはどうでもいい。今聞き捨てならない言葉を聞いた。

「『も』でしょうが！！大半女物の服でしょ？！」

「そ、そんなこと……ないよ～？」

「目を見ていってください目を見て！」

「え。照れちゃうじゃない。礼ちゃん」

「女扱い！？善吉！助け「あら、そっちの男の子は黒い服の下にジャージ着たほうが似合うじゃない」なんだって！？」

「ま、マジですか……！？」

「マジよマジ。反骨精神の塊らしくて最高よ！」

「俺の時代きたーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！」

「善吉が、落ちた……」

確かに、反骨精神の塊らしくて似合っていない、といえば嘘にはなっていたが。

まさか、『魔女』とまで言われ、さらにはそのファッションセンスから『箱庭学園のファッションリーダー』とまで言われる廻栖野

先輩に指摘されるなんて。
善吉の時代、到来!?

「それじゃ、掃除終わったら美化委員会室へ来てね」
「了解っす!!礼も行くぞ!!」
「嫌、やだ、お願い、善吉……」
「そんな小動物の目で見られてもなぁ……」
「いいわぁ……」
「委員長!れ、礼さん……」
「た、助け……」
「すみません、私たちではもう、無理です……」

俺は、その場に泣き崩れるしかなかった。

その後、騒ぎを聞きつけた喜界島と阿久根先輩の力添えにより、なんとか掃除をこなしました。

「大変だね、礼君」
「……いつでも、頼ってくれ」
「二人とも……」

地味に俺のなかで二人への好感度が高まった。

場所は変わって美化委員会室。

「やっぱりいいわね！！」
「でしょう！？ジャージをこの制服の下に着るという反骨精神！」
「でもねぇ、もう少し手を加えてあげたい！」
「失礼する！礼、善吉！貴様等二人とも何を……」
「く、黒神！助けて！！」
「礼、そんな、そんなメイド服に猫耳など、なんて可愛い格好を！私もしたいぞ！！」
「え！？」
「あ、黒神ちゃんもやる？もう一着、あるけど」
「する！」
「めだかちゃん！俺の時代が来るみたいだ！！」
「ほう、その格好か。しかし、それをやってしまっては風紀委員会に全校生徒取り締められてしまうぞ」
「くっ！やっぱり、わからないのか……、俺のセンスは……」
「残念ね……」

善吉ブーム、到来ならず。風紀委員会、大喜び。
その後、俺と黒神のメイド服（猫耳装備）と善吉の執事服姿の写真を撮り、幼なじみ同士でそれを写真立てに入れて自分の部屋に飾っています。ある意味いい思い出？俺も執事服がよかった！男物の服を着たかった！！

しかし、この話はまだ終わらない。帰宅してすぐの話。

「礼君！可愛い格好をしていると聞いて参上したよ！参加できなかったから来たよ」

「やっぱりか！！！！」

「あ、禊いらっしゃい！礼に今メイド服着せてるところよ」

「零華！久しぶりだね！！そしてグッジョブ！」

「ただいま～……礼、それは俺に奉仕してくれるという意思の表れか？」

「違う！姉さんに無理矢理着せられたんだ！！」

「私の大勝利！！」

「おめでとう零華！そして礼君可愛い！ご奉仕してご奉仕して！」

「俺にも頼む！」

変態双子＋一人。もしここに、この双子が崇めているとされる変態がいたら。

礼はそう思うと背筋に寒気を感じた。

家に帰っても、メイド服を着せられた礼でした。

「……なんで俺は今日はこんなにアウェーなんだあああああああああ！！」

夜は、長かったです。

第七十二箱　「君って……こういうの好き？」（後書き）

一人だけ異質な邂逅をしてしまった。
反省はしていない。むしろ本望。

いや～、だって『コスプレ』なんて言われたらこんな話を書きたくなるのは僕のなかでは当たり前なのですよ！
礼がかなりアウェーでしたが、まあいいよね☆

そして、残る委員会は皆様お待たせしました！
あのカバー裏を飾りました『保健委員長』です！

……ハードルを上げたつもりはありません。いえ、あがってしまったのならお許しいただきたいぐらいに僕は今低姿勢です。
最後の委員長ということで、テンションがあがった僕を許してください……。
頑張りますのでよろしくお願いします！！

感想、誤字脱字の指摘、もっとこうしたら面白いよ！などのご意見をお待ちしております！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5468r/

箱庭での学園生活

2011年12月29日01時58分発行